

古墳から見た甲斐の地域社会

小林 健二

目 次

序章 甲斐の地理的環境と古墳時代	1
第1節 甲斐の地理的環境と古墳時代	2
第2節 本論の目的	5
第1章 甲斐における古墳時代の土器様相	7
第1節 S字甕の定着	8
第2節 東海系土器の波及と定着	16
第3節 古式土師器の成立	24
第4節 北陸系土器の様相	33
第5節 畿内系叩き甕の様相	41
第6節 中期・後期・終末期の土器編年	44
第7節 土器編年と墳墓の変遷	51
第2章 甲斐銚子塚古墳出現の背景	56
第1節 甲斐天神山古墳の位置付け	57
第2節 大丸山古墳の埋葬施設	61
第3節 甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品	67
第4節 甲斐銚子塚古墳出土の壺形埴輪	72
第5節 甲斐銚子塚古墳出土の円筒埴輪	79
第6節 甲斐銚子塚古墳出土の木製品	87
第7節 中道古墳群の歴史的意義	95
第3章 甲斐の方墳とその周辺	102
第1節 古墳時代の周溝墓	103
第2節 竜塚古墳出現の背景	106
第4章 甲斐の横穴式石室	111
第1節 無袖石室の様相	112
第2節 積石塚と渡来人	120
終章 律令社会への展望	122
第1節 終末期古墳の変遷	123
第2節 古墳の終焉	128

図版目次

第 1 図	S字甕の分類と変遷	132
第 2 図	拡張口縁をもつS字甕	133
第 3 図	S字甕A類の分布	134
第 4 図	IV類S字甕	134
第 5 図	弥生時代終末期～古墳時代前期土器の主要出土遺跡分布図	135
第 6 図	米倉山B遺跡・後田遺跡・大塚遺跡出土土器	136
第 7 図	大塚遺跡出土土器	137
第 8 図	大塚遺跡・坂井南遺跡出土土器	138
第 9 図	坂井南遺跡出土土器	139
第 10 図	村前東A遺跡出土土器	140
第 11 図	村前東A遺跡出土土器	141
第 12 図	村前東A遺跡・寺部村附第6遺跡出土土器	142
第 13 図	久保屋敷遺跡・俣ノ下遺跡・西田遺跡出土土器	143
第 14 図	東海の土器編年との対比とS字甕の様相	144
第 15 図	弥生終末期(「新潟シンボ編年」2a期)の土器(1)	145
第 16 図	弥生終末期(「新潟シンボ編年」2a期)の土器(2)	146
第 17 図	弥生終末期(「新潟シンボ編年」2a期)の土器(3)	147
第 18 図	弥生時代終末期～古墳時代前期の主要器種変遷図(1)	148
第 19 図	弥生時代終末期～古墳時代前期の主要器種変遷図(2)	149
第 20 図	方形周溝墓出土壺・高杯(1)	150
第 21 図	方形周溝墓出土壺・高杯(2)	151
第 22 図	古墳時代前期土器編年	152
第 23 図	坂井南遺跡出土土器	154
第 24 図	坂井南遺跡出土土器	155
第 25 図	坂井南遺跡出土土器	156
第 26 図	坂井南遺跡・長田口遺跡・村前東A遺跡出土土器	157
第 27 図	榎田遺跡出土土器	158
第 28 図	塩部遺跡出土土器	159
第 29 図	上野遺跡・身洗沢遺跡出土土器	160
第 30 図	東山北遺跡・二之宮遺跡出土土器	161
第 31 図	二之宮遺跡・ケカチ遺跡・西田遺跡・足原田遺跡・曲田遺跡・滝沢遺跡出土土器	162
第 32 図	塩部遺跡調査地点	163
第 33 図	塩部遺跡C地区24号溝出土土器	164
第 34 図	塩部遺跡C地区24号溝出土木製品	165
第 35 図	塩部遺跡C地区1号方形周溝墓出土土器	165
第 36 図	塩部遺跡C地区1号方形周溝墓出土木製品	166
第 37 図	村前東A遺跡・西一条遺跡・滝沢遺跡出土叩き甕	167

第38図	弥生時代後期～古墳時代前期の土器様相	167
第39図	古墳時代中期土器編年	168
第40図	古墳時代後期・終末期土器編年	169
第41図	甲斐地域における墳墓の変遷	170
第42図	伊勢型二重口縁壺の変遷	171
第43図	土器と墳墓の編年	172
第44図	大丸山古墳と周辺の遺跡位置図（弥生・古墳時代）	173
第45図	大丸山古墳墳丘実測図	173
第46図	大丸山古墳石室・石棺実測図	174
第47図	調査区実測図と断面図	175
第48図	竪穴式石室・組合式石棺実測図・展開図	176
第49図	甲斐銚子塚古墳出土車輪石	177
第50図	甲斐銚子塚古墳出土石釧	178
第51図	甲斐銚子塚古墳出土貝釧	178
第52図	甲斐銚子塚古墳全体図とトレンチ配置図	179
第53図	壺形埴輪部位名称図	179
第54図	甲斐銚子塚古墳出土壺形埴輪（1）	180
第55図	甲斐銚子塚古墳出土壺形埴輪（2）	181
第56図	甲斐銚子塚古墳出土壺形埴輪（3）	182
第57図	甲斐銚子塚古墳出土朝顔形埴輪	182
第58図	壺形埴輪の変遷	183
第59図	長胴の体部をもつ壺形埴輪	184
第60図	円筒形埴輪・朝顔形埴輪部位名称図	184
第61図	甲斐銚子塚古墳出土円筒形埴輪（1）	185
第62図	甲斐銚子塚古墳出土円筒形埴輪（2）	186
第63図	甲斐銚子塚古墳出土朝顔形埴輪	187
第64図	円筒形埴輪の口縁部・凸帯断面図	188
第65図	朝顔形埴輪の口縁部・凸帯断面図	188
第66図	岡銚子塚古墳出土円筒形埴輪・朝顔形埴輪	189
第67図	甲斐地域における古墳時代前期～中期初頭の埴輪の変遷	190
第68図	甲斐銚子塚古墳出土木製品（1）木柱と出土状況	191
第69図	甲斐銚子塚古墳出土木製品（2）笠形木製品	191
第70図	甲斐銚子塚古墳出土木製品（3）円盤形木製品・蕨手形木製品	192
第71図	甲斐銚子塚古墳出土木製品（4）棒状木製品	193
第72図	甲斐銚子塚古墳出土木製品（5）その他の木製品	194
第73図	坂靖氏による笠形立物（木製品）の分類	195
第74図	円盤形・蕨手形・棒状木製品の復元イメージ	196
第75図	東殿塚古墳出土鱗付き楕円筒埴輪の線刻絵画	196
第76図	中道古墳群の前期古墳	197
第77図	岡銚子塚古墳	198

第78図	ヤマトタケルの東征ルート	198
第79図	中道古墳群（東山・米倉山地域）の墳墓の分布	198
第80図	大型方形周溝墓	199
第81図	東山南遺跡遺構配置図	200
第82図	竜塚古墳平面図	201
第83図	竜塚古墳出土土器	201
第84図	後期古墳分布図	202
第85図	甲府盆地南東部地域の無袖石室	202
第86図	甲府盆地東部地域の無袖石室（1）	203
第87図	甲府盆地東部地域の無袖石室（2）	204
第88図	甲府盆地北東部地域の無袖石室（1）	205
第89図	甲府盆地北東部地域の無袖石室（2）	206
第90図	甲府盆地北縁部地域の無袖石室	207
第91図	甲府盆地北西部地域の無袖石室（1）	208
第92図	甲府盆地北西部地域の無袖石室（2）	209
第93図	無袖石室の変遷	210
第94図	古墳出土の7世紀末～8世紀前葉の須恵器・土師器（1）	211
第95図	古墳出土の7世紀末～8世紀前葉の須恵器・土師器（2）	212
第96図	古墳出土の7世紀末～8世紀前葉の須恵器・土師器（3）	213
第97図	甲斐地域の6世紀末～8世紀初頭の須恵器の消長	214

表 目 次

第1表	甲斐編年と基準資料	153
第2表	修正・補正の経緯（弥生時代後期～古墳時代中期前葉）	153
第3表	畿内・東海・北陸との併行関係（弥生時代終末期～古墳時代中期）	153

序章

甲斐の地理的環境と古墳時代

第1節 甲斐の地理的環境と古墳時代

1. 地理的環境

日本列島のほぼ中央部に位置する山梨県は、長野県とともに内陸にあり、中部高地と呼ばれる。このうち山梨県は、南に富士山、西に赤石山脈（南アルプス）、北に八ヶ岳、東に奥秩父山地など、標高2,000mを超す山々に囲まれており、内陸的な気候は四季が明瞭で夏の暑さと冬の寒さが厳しい。

県名の「山梨」は古代律令制下の甲斐四郡（山梨郡・巨摩郡・八代郡・都留郡）の一つである山梨郡に由来し、県域は中西部の甲府盆地を中心とする国中（くになか＝山梨郡・巨摩郡・八代郡）と、東部の相模川と多摩川の上流域および富士山北麓からなる郡内（ぐんない＝都留郡）に大きく分けられる。甲府盆地は東西約25km、南北約15km、やや東西に長い逆三角形の構造盆地であり、北西から釜無川、北東から笛吹川が流れ、盆地の南端で合流し、日本三大急流の一つとして知られる富士川となり太平洋へ注ぐが、県南部の富士川流域は河内（かわうち）とも呼ばれる。

ところで、山梨の旧国名である甲斐国が成立したのは、広域行政区画の成立とともに国境が確定した7世紀末のこととされる。『山梨県史 資料編3』によると、「甲斐（カヒ）」の語源については、本居宣長が甲斐国在住で『甲斐名勝志』の著者である萩原元克の説に拠って「甲斐、名義山の峽（かひ）なる由なりと云説宜し、加比は間（あひ）と同じ」（『古事記伝』27）と述べている通り、山と山との狭間を意味する「峽＝賀比、可比」であるというのが通説であった⁽¹⁾。しかし、「上代特殊仮名遣」により学問的には成立し難いこととなり、その後、他界と現世が交叉する境界である「甲斐＝交ひ」説が提示されたが⁽²⁾、東国全体の国名の在り方からも、現在では行政的視点から「交わり行き交う国」をあらわす「交ひ」とするのが有力である。この地域が、信濃－東山道－日本海側と、駿河・相模－東海道－太平洋側との結節点にあたり、まさに交通の要衝であったこと、その役割こそが「交ひ」つまり甲斐国の原義であると考えられている⁽³⁾。

甲斐は山々に囲まれた地域ではあるが、時代を遡って見れば縄文時代は造形美豊かな土器文化が栄え、特に中期は我が国を代表するものとなっている。弥生時代の後半には中部高地型櫛描文土器と駿河・相模の土器が分布し、両者が混在する状況が見られるように、甲府盆地と周辺地域との交流ルートが既に機能していたことは明らかである。

2. 甲斐の古墳時代の遺跡

『山梨県史 資料編1』によると、県内で古墳と集落遺跡を合わせた古墳時代の遺跡は1,300箇所余りとされており⁽⁴⁾、そのほとんどは甲府盆地に集中している。

前期から中期にかけては、盆地南東部の東西12kmにかけて連なる曽根丘陵上に多くの古墳が分布しているが、その前面の北側を流れる笛吹川に架かる複数の橋の橋脚工事の際、地表下7～11mほどからS字状口縁台付甕など古墳時代の土師器が発見されている⁽⁵⁾。笛吹川の支流である甲府市の濁川沿いでは前期初頭の方形周溝墓や水田跡が発見されており⁽⁶⁾、最近では両河川の合流地点付近で行われた発掘調査において、地表下4～5mで前期・中期の遺構・遺物が発見されている⁽⁷⁾。しかし、旧中道町に所在する甲斐天神山古墳や大丸山古墳、そして甲斐鉾子塚古墳が営まれた段階の集落遺跡は未だ周辺で確認されていないことから、笛吹川の自然堤防上に多くの集落が発達していたことが考えられ、これらは度重なる氾濫によって埋没したものと見られる。

一方、台地上の古墳や集落を除き、かつては遺跡の存在しない地域とされていた盆地西部の釜無川右岸では、1990年代以降の大型道路建設に伴い、御勅使川扇状地の扇央部から扇端部に位置する現在の南アルプス市域において、前期の大規模な集落遺跡や埋没した中期古墳、周溝墓⁽⁸⁾が発見されるようになった。また、盆地北西部の

韮崎市から北杜市にかけての地域や盆地北東部の甲州市（旧塩山市）においても、前期を中心に集落遺跡の広がりが発掘調査により確認されている⁽⁹⁾。

後期から終末期にかけては、盆地東部から北縁部・北西部にかけての笛吹市・甲府市・甲斐市において数多くの古墳が営まれているが、笛吹市、甲府市ではいずれも前期から後期・終末期に至る拠点的な集落遺跡も発掘調査で明らかになっている⁽¹⁰⁾。

一方、県東部地域（郡内）では、前期・中期の遺跡の存在は確認されておらず、後期古墳がわずかに存在するのみである。これまでの研究からも主要な古墳は甲府盆地に分布していることは明らかであり、県中西部地域（国中）と東部地域を結ぶルートは機能していなかったと考えられている⁽¹¹⁾。

このように、古墳時代の甲斐は、富士川（釜無川）・笛吹川によって形成された甲府盆地を一つの大きなまとまりとして捉えることができ、本論で取り上げるほとんどの古墳や集落遺跡もこの中に分布している。

3. 甲斐の古墳研究

甲斐の古墳は、上記のように甲府盆地内の各小地域に分布する古墳群についての長年にわたる分布調査、発掘調査の成果により、その変遷が明らかにされてきた。

江戸時代には既に『甲斐名勝誌』や『甲斐国志』において、岡銚子塚古墳（現笛吹市）や甲斐銚子塚古墳・丸山塚古墳・加牟那塚古墳（現甲府市）に関する記述が見られる。その後、1894年（明治27）に鳥居原狐塚古墳（現市川三郷町）が、1907年（明治40）に丸山塚古墳が発掘され、出土した鏡などが伝わっている。さらに1928年（昭和3）と翌1929年（昭和4）に甲斐銚子塚古墳、大丸山古墳（現甲府市）が相次いで発掘され、埋葬施設から多くの副葬品が発見された。これらの成果は『史学雑誌』、『考古学雑誌』において紹介され、以後学界で広く知られるようになった⁽¹²⁾。また、1930年（昭和5）には甲斐地域で唯一の合掌形石室を持つ王塚古墳（現中央市）が発掘されるなど⁽¹³⁾、戦前は曾根丘陵において重要な古墳の実態が既に明らかにされていた。

戦後は山本寿々雄氏による基礎的研究⁽¹⁴⁾を経て、1970年代にそれを引き継いだ坂本美夫氏による古墳出土遺物を中心とした成果⁽¹⁵⁾と、小林広和・里村晃一両氏による古墳や横穴式石室の測量調査を基にした成果⁽¹⁶⁾があげられ、現在の流れを作っている。

なお、前期古墳に関わる研究史については、宮澤公雄氏の文献が、後期古墳については山梨県考古学協会による2018年度研究集会資料集が詳しい⁽¹⁷⁾。

註

- (1) 磯貝正義 2001「総説」『山梨県史』資料編3 原始・古代3 考古 文献・文字資料 山梨県
- (2) 西宮一民 1979『古事記』新潮日本古典集成 新潮社
西宮一民 1984『万葉集全注』巻第3 有斐閣
- (3) 平川南 2008「古代日本の交通と甲斐国」『山梨県立博物館 調査・研究報告2 古代の交易と道 研究報告書』山梨県立博物館
平川南 2014『律令国郡里制の実像』上巻 吉川弘文館
- (4) 末木健 1998「序章 山梨県の自然環境と遺跡分布 2 遺跡の分布」『山梨県史』資料編1 原始・古代1 考古（遺跡）山梨県
- (5) 山本寿々雄 1960「笛吹川・川床出土の土器（Ⅰ）―特に甲府盆地周辺の弥生末期～土師器を考える上の一―」『富士国立公園博物館研究報告』第4号 富士国立公園博物館
- (6) 志村憲一・望月秀和 2003『ヂクヤ遺跡』甲府市教育委員会
信藤祐仁 1998「二又遺跡」『山梨県史』資料編1 原始・古代1 考古（遺跡）山梨県

- (7) 御山亮濟他 2020「北畑南遺跡」『年報』36 山梨県埋蔵文化財センター
- (8) 三田村美彦 1999『村前東A遺跡』山梨県教育委員会ほか
保坂和博 1997『大師東丹保IV区』山梨県教育委員会ほか
宮澤公雄 2004『寺部村附第6遺跡』南アルプス市教育委員会ほか
- (9) 山下孝司 1984『坂井南遺跡』韮崎市教育委員会
山下孝司 1988『坂井南』韮崎市教育委員会
山下孝司・伊藤正彦 1997『坂井南遺跡Ⅲ』韮崎市教育委員会
佐野隆 1994『神取』明野村教育委員会ほか
村松佳幸 2001『龍角西遺跡』長坂町教育委員会ほか
坂本美夫 1997『西田遺跡―第2次発掘調査報告書―』山梨県教育委員会 など
- (10) 坂本美夫ほか 1987『二之宮遺跡』山梨県教育委員会ほか
末木健ほか 1987『姥塚遺跡・姥塚無名墳』山梨県教育委員会ほか
佐々木満 2004『塩部遺跡Ⅰ』甲府市教育委員会ほか
佐々木満 2005『塩部遺跡Ⅱ』甲府市教育委員会ほか
高野高潔・泉英樹 2019『塩部遺跡Ⅲ』甲府市教育委員会他 など
- (11) 宮澤公雄 2004「古墳と古代の交通路」『山梨考古学論集Ⅴ』山梨県考古学協会
- (12) 上田三平 1928「銚子塚を通して観たる上代文化の一考察」『史学雑誌』第39編第9号 史学会
上田三平 1942「大丸山古墳主体部構造の特異性」『考古学雑誌』第32巻第9号 日本考古学会
- (13) 山梨県 1931『山梨県史蹟名勝天然記念物調査報告』第5輯
- (14) 山本寿々雄 1956『甲斐国古墳文化資料綜覧(全)』
山本寿々雄 1968『山梨県の考古学』吉川弘文館
- (15) 坂本美夫 1972「狐塚古墳(春日居町) 稲荷塚古墳(一宮町) 葉舞場古墳(御坂町) 出土遺物の集成」『甲斐考古』9の2 山梨県考古学会
坂本美夫 1972「莊塚古墳、無名墳(山梨市)、稲荷塚古墳(同)、古塚古墳、住村塚古墳出土遺物集成図」『甲斐考古』10の1 山梨県考古学会
坂本美夫 1973「山梨県内各地古墳出土遺物集成図」『甲斐考古』10の3 山梨県考古学会
坂本美夫 1978「山梨県・曾根丘陵周辺地域の前期古墳」『甲斐考古』別冊2号 山梨県考古学会
- (16) 小林広和・里村晃一 1975「甲斐国分寺周辺における後期古墳の様相」『古代学研究』第77号 古代学会
会
小林広和・里村晃一 1975「山梨県の大規模横穴式石室墳」『信濃』第27巻第4号 信濃史学会
小林広和・里村晃一 1978「甲斐小平沢古墳の墳形と編年の位置」『信濃』第30巻第2号 信濃史学会
なお、姥塚古墳については1964年(昭和39)に、甲斐銚子塚古墳については1966年(昭和41)に明治大学考古学研究室が墳丘・石室の測量調査を実施している。
大塚初重 1966「山梨県姥塚古墳について」『富士国立公園博物館研究報告』第16号 富士国立公園博物館
中道町 1975『中道町史』上巻
- (17) 宮澤公雄 2014「甲斐の前期古墳をめぐる研究史」『古代東国と畿内王権―甲斐中道古墳群の検討から―』
山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター・甲府市教育委員会
熊谷晋祐編 2019「付編 山梨県の横穴式石室集成」『横穴式石室と用石技法』山梨県考古学協会

第2節 本論の目的

1. 甲斐地域における古墳時代の土器様相の検討と編年の構築

まず、甲斐の古墳時代前期の土器様相として、甲府盆地で数多く出土している外来系土器のひとつであるS字状口縁台付甕の定着について検討する。そして、その変遷を基軸として東海系土器の波及と定着を中心に、弥生時代終末期から古墳時代前期の土器編年を提示し、古式土師器の成立を捉える。また、東海系以外の外来系土器として北陸系土器・畿内系土器（叩き調整甕）についても取り上げ、甲斐の前期土器様相の中に位置づける。

さらに中期から後期、終末期にかけての土器編年を設定し、甲斐の古墳時代を通した時間軸を構築する。その上に墳墓の変遷を位置づけるとともに、発掘調査による新たな発見や研究をもとに先学の成果を見直し、前期を中心に以下の各期古墳の諸相について検討を行う。

2. 甲斐鉾子塚古墳出現の背景

発掘調査や研究の進展によって、古墳時代前期の甲斐は甲府盆地南部の中道古墳群に3基の大型前方後円墳が相次いで営まれたことが明らかになっている。中でも、それまで可能性として考えられていた甲斐天神山古墳の前期古墳への遡上が発掘調査により確定したことは大きな成果であり、改めて時間軸の中へ位置づける。また、古くから学界で知られている大丸山古墳については、「特異な主体部構造」について検討を行い、実態を明らかにする。そして、前期では東日本最大級の規模を誇り、最も発掘調査が進んでいる甲斐鉾子古墳について、出土品を中心にその成果を再検討することにより、出現の背景と東日本の中での甲斐の位置づけ、これらが営まれた歴史的意義について考える。

3. 甲斐の方墳とその周辺

隆盛を見せた前期から一変し、中期の甲斐は大型前方後円墳がなくなり、中・小規模の墳墓が数多く築かれる時代へと移る。ここでは弥生時代以来の甲府盆地の伝統的な墓制である周溝墓の様相と古墳との関係について取り上げ、甲斐の中期古墳を象徴する方墳である竜塚古墳出現の背景について検討する。

4. 甲斐の横穴式石室

甲府盆地への横穴式石室の導入については、まず小規模な古墳へ無袖石室が導入され、後期・終末期にかけて各古墳群の中で変遷することが明らかになっている。やがて有袖の大型横穴式石室を持つ古墳が甲府盆地東西に出現する中で、無袖石室の構造や系譜、階層性について見ていく。

また、甲斐の古墳時代において重要な存在である積石塚について、渡来人・馬との関わりとともに他地域と比較し、研究の現状から後期古墳の実像について考える。

5. 律令社会への展望

最後に、甲斐の終末期古墳の様相を概観した上で、後期・終末期古墳から出土する律令制成立期（7世紀末～8世紀前葉）の土器に注目し、古墳の終焉について考える。律令支配の整備拡大とともにこれらの土器が甲府盆地へ波及し、甲府盆地内各古墳群において共通して見られることは、新しい社会への移行を示していると考えられる。

以上のように本論の目的は、古墳から見た甲斐の地域社会の一端を明らかにすることである。一方で、現在の

視点から見れば、これらは甲斐の古墳時代史の再検討とでもいうべきものである。

筆者が考古学を始めて以降、発掘調査や研究の進展により、列島各地域において古墳時代の様相はかなり異なることが明らかになり、かつてのような古墳時代像は既に大きく見直されている。このような流れの中で、甲斐の古墳時代の地域社会が多様な在り方をしていたことを明らかにしていきたい。

第1章

甲斐における古墳時代の土器様相

第1節 S字甕の定着

1. はじめに

S字状口縁台付甕（以下「S字甕」とする）は、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて東海地域で生産された多様な甕のうち、伊勢湾沿岸部の濃尾平野低地部と伊勢南部地域（雲出川下流域）の関わりの中で誕生したと考えられている⁽¹⁾。やがて東海を中心に畿内、東国など列島の各地に広範囲に分布し、体部外面に粗く強いハケメが羽状に施され、器壁が非常に薄いという特色と、それに加えて古墳の出現とともに各地で出土することから、長きにわたりこれまで多くの研究者の関心を集めてきたことは周知の通りである。

S字甕の大きな特徴は、その形態的特徴もさることながら、各地域に搬入され、模倣され、さらには独自の解釈のもとに受容され、広く定着する地域が存在することである。その中でも甲府盆地を中心とする甲斐地域は、隣接する駿河（駿河湾東部地域）や上野（北関東西部地域）とともにS字甕が多数出土しており、これらの地域はS字甕が定着した地域として知られている。この中で筆者は、甲斐の3・4世紀代の時間軸の大きな柱としてS字甕を取り上げ、その後の古墳時代地域社会研究の基礎となっている。

東海で製作されたS字甕が当該地域へどのように搬入され、受容され、定着していったのかについて、筆者が最初にS字甕を取り上げてから30年が経過するが⁽²⁾、当初、甲府盆地内での分布状況から想定した定着の様相は、その後の出土例の増加により、いくつか再検討が必要になっている。そこでまず本節では、これまでのS字甕研究を振り返りながら、甲斐におけるS字甕の定着について、改めて考えてみたいと思う。

2. S字甕の研究史

S字甕の研究史については、2000年（平成12）に開催されたシンポジウム「S字甕を考える」において加納俊介氏が論じた「S字甕の分類を考える」⁽³⁾に詳しいが、ここでは筆者のこれまでの小史も踏まえ整理しておく。

既に1950年代後半に注目されていたS字甕は⁽⁴⁾、1960年代前半にかけて弥生土器と土師器の境界の中で議論された⁽⁵⁾。その後、大参義一氏はS字甕の型式分類、編年を最初に行い、尾張・三河の出土例をもとに弥生時代終末～古墳時代初頭にかけての土器に対し、山中期一欠山期一元屋敷期一石塚期という編年を確立した⁽⁶⁾。その中でS字甕は山中期にその祖形が認められ、欠山期に一応の形態が生まれ、元屋敷期をもってS字甕が出現するとし、a・b・cの3類に型式分類を行った。そしてb類において定型化したS字甕は、畿内から関東・東北の一部に分布する点をあげ、さらに古墳の伝播・国家統一の前史にあたる時期に、東海地域が他地域に及ぼした影響を考慮しなければならないことを指摘した。まさに今日に至るS字甕研究の基礎となる研究成果であった。また伊勢・大和の出土例をもとに安達厚三氏は、S字甕をⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴの5類に型式分類を行い、Ⅲ類においてS字甕は定型化し、各地へ広く分布すると述べた⁽⁷⁾。

S字甕は以後この2つの型式分類をもとにして、各地域での対比が行われていった。しかし当時、S字甕は北関東では主体的であるが南関東では客体的であることなど、各地域での定着の仕方についてはほとんど考慮されていなかった。また安達氏の分類は概括的でこれまでも多くの地域で対比されてきたが、基準とする資料が搬入品・模倣品と考えられる伊勢・大和出土のものであったことは大きな欠点であった。

また、加納俊介氏・田口一郎氏は、駿河・上野では体部外面にヘラケズリを採用する独自の型式変化が進行することを指摘し⁽⁸⁾、この違いに対し赤塚次郎氏は濃尾平野にはA系統、駿河（厳密には東駿河）・上野にはB系統があるとした⁽⁹⁾。

こうした中で、東海では、発表からほとんど修正されることなく踏襲されてきた大参氏の編年、特に欠山式・

元屋敷式に対し、次第にいくつかの問題が指摘されるようになり⁽⁴⁰⁾、それらを踏まえた赤塚氏は、S字甕の型式をA・B・C・Dの4類に大別した上で⁽⁴¹⁾、1990年（平成2）に愛知県西春日井郡清洲町（現清洲市）廻間遺跡出土の土器を中心に、濃尾平野低地帯における古墳時代初頭の土器様式を、0（ゼロ）類を加えたS字甕の分類を基準に新たに「廻間式土器」として設定し⁽⁴²⁾、さらに後続する様式として松河戸式が設定された⁽⁴³⁾。これ以後、廻間・松河戸編年とともに赤塚分類が広く指標とされることとなった。

S字甕の誕生に関わって、0類についてはその後検討が行われ⁽⁴⁴⁾、さらに赤塚氏は雲出川流域の砂粒混和材が使用されていることから、0類を「雲出型甕」として提唱した⁽⁴⁵⁾。その後も、1987年（昭和62）に立ち上げられた庄内式土器研究会においても取り上げられ⁽⁴⁶⁾、その後外来系土器の様相や広域編年の構築を目指す同会の企画の中で筆者も参加する機会を与えられた⁽⁴⁷⁾。

一方、筆者が甲斐のS字甕に注目し、卒業論文を書こうとする頃、東海では上記のとおり赤塚氏によって「廻間式土器」編年が発表され、大参編年以来の大きな転期を迎えようとしていた。それに伴い、S字甕をめぐる周辺の状況も活発になり、呼応するように甲斐のS字甕の出土は増加し続けた。

筆者が甲斐のS字甕に注目した理由は2つある。ひとつは、甲斐で出土するS字甕そのものの出土が既に目立っていたことであり、もうひとつは、中山誠二氏が1986年（昭和61）に発表した論考「甲府盆地における古墳出現期の土器様相」⁽⁴⁸⁾の中にあった。当該地域の弥生時代後期から古墳時代前期において初めて様式の設定を行い、汎東日本的な位置づけをしたものとして高く評価できるものである。この中で中山氏は、S字甕の分類を編年の基軸としたが、その型式変化に関して、「大和地方や東海西部地域、さらに上野地域などと大まかに軌を一にしている事実」と述べているが、甲斐のS字甕には在地化し変容したものが多く、大参分類、安達分類に対比させることに疑問を感じた。赤塚氏が濃尾平野のS字甕にA系統、上野・駿河のものにはB系統という型式変化の違いを明らかにしていたように、単なる「横のつながり」で考えることは難しく、甲斐のS字甕について詳細な検討が必要と考えた。

後に卒業論文をもとに整理し⁽⁴⁹⁾、その後別稿では編年を試みたが、不必要な型式の設定とその細分ばかりに終始してしまった⁽⁵⁰⁾。特に、甲斐のS字甕を強調すべく提唱した「甲斐型S字甕」は、筆者自身の中で混乱を来し、結果的には東海地域の編年にすりあわせただけのものとなり、1993年（平成5）の日本考古学協会新潟大会「東日本における古墳出現過程の再検討」に提示した土器編年—いわゆる「新潟シンボ編年」—の山梨編年⁽⁵¹⁾、上記の庄内式土器研究会の発表を含め、整合性がつかないものとなってしまう、その後検証することもなくしばらく滞ってしまった。この間、甲府盆地では村前東A遺跡、大塚遺跡（いずれも現南アルプス市）の発掘調査が行われ、特に赤塚分類A類に相当する資料が多く出土し、しかも短期間のうちに定着していることが窺え、東日本でも特異な地域となっていた。

このような中で、1997年（平成9）に『山梨県考古学協会誌』で「異系統を考える」をテーマに特集を組むことになり、課題として残された部分を再度検証すべく、東海系土器の波及・定着・変容について取り上げた⁽⁵²⁾。そして翌1998年（平成10）夏の庄内式土器研究会を経て⁽⁵³⁾、「新潟シンボ編年」も再検討した上で、後述する新たな土器編年を設定した⁽⁵⁴⁾。これらの中で、甲斐で出土するS字甕については、東日本での最も早いA類（相当）の出現を大きな画期としながらも、定着する過程において「駿河型」・「上野型」と共通の製作技法の交流があったことを想定し、甲斐で出土するS字甕に対し、駿河・上野での独自の型式変化に対し提唱された「駿河型」・「上野型」とは別に、改めて「甲斐型」を提唱した⁽⁵⁵⁾。しかし、庄内式土器研究会において、それぞれの地域のS字甕の「違い」を明確にすることを求められたように、これら「地域型S字甕」⁽⁵⁶⁾の提唱については厳しい批判を受けることとなった⁽⁵⁷⁾。

その後もS字甕の動向は注目され続け、2000年（平成12）1月にはそれまでの総括的なシンポジウムとして第7回東海考古学フォーラム三重大会「S字甕を考える」が開催され、S字甕の成立と拡散、波及と定着、解体

までが議論された。筆者はこの中で、「甲斐のS字甕を考える」として、甲斐での波及と定着について次説以降で取り上げるように再検討し、上記の古墳時代前期土器編年の小画期を一部再編した⁽³⁸⁾。

このように、S字甕は東海と中部・関東の併行関係ばかりでなく、畿内と東国の併行関係を捉える上で重要な土器であるがゆえ、各地の土器編年の基軸としてばかりでなく、古墳出現の時期とも重なり、東日本の古墳時代像に与えている影響はあまりにも大きく、現在においても変わりはない。

3. 甲斐のS字甕の分類と変遷

上記のとおり、これまで甲斐出土のS字甕についてはいくつかの分析を試み、駿河、上野とは異なる地域色を強調しようとした。その変遷については、大きくⅠ類～Ⅴ類に分類したものの、赤塚分類から逸脱しバラティーに富むものをいたずらにa、b、c…などと際限なく分けてしまい、かえって特徴を見出せないままの型式分類となってしまった。これらの反省を踏まえた上で、シンポジウム「S字甕を考える」の中で改めて甲斐のS字甕をⅠ類～Ⅴ類に型式分類した。Ⅰ類は赤塚A類の搬入品と忠実な模倣品（以下「忠実品」とする）と、それ以外に模倣が進み独自の変化を辿り定着・変容し、赤塚分類に対比できない「独自品」とし、Ⅱ類・Ⅲ類は赤塚分類B類・C類の忠実品・独自品にそれぞれおおむね相当するもの、Ⅳ類・Ⅴ類は独自品からさらに型式変化したものである。D類の忠実品は現在も確認されておらず、20年後の現在も基本的な部分は変わらないが、ここではS字甕を規定する属性をもとに分類を確認しておく（第1図）。

Ⅰ類は口縁部外面に刺突を施したもので、赤塚分類A類に相当し、1980年代までは韮崎市の坂井南遺跡⁽³⁹⁾と後田遺跡⁽⁴⁰⁾のわずか2遺跡であったが、その後発掘調査の増加とともに甲府盆地内の遺跡から多数の出土が確認されるようになった。忠実品として甲府市（旧東八代郡中道町）の米倉山B遺跡⁽⁴¹⁾8号住居跡上層、後田遺跡C区5号住居跡、南アルプス市（若草町・櫛形町）村前東A遺跡⁽⁴²⁾Ⅳa区92号住居が代表例であるが、米倉山B遺跡出土のものは、体部長胴の形態と内面のハケメ調整から古い傾向が残っており、甲斐では最も早く波及したS字甕と見られる。

一方、同じ南アルプス市（旧八田村）の大塚遺跡⁽⁴³⁾A区4号・9号住居跡では、破片資料を含め多くの出土が確認されているが、頸部から口縁部にかけての屈曲が弱く、端部の面取りがなく丸くおさめるもの、頸部の窄まりが小さく口径と体部最大径がほぼ等しいものなどがあり、大塚遺跡のものは過去に実見していただいた結果からも忠実品とはいえず、独自品として既に製作を始めていることが窺える。村前東A遺跡や韮崎市坂井南遺跡などでも多くの独自品がある。

Ⅱ類は口縁部外面の刺突を省略したもので、B類古段階・中段階に相当する忠実品が村前東A遺跡や坂井南遺跡、甲州市（旧塩山市）西田遺跡第2次調査⁽⁴⁴⁾で出土している。坂井南遺跡、村前東A遺跡ではそれまで少ないと思われていたB類の搬入品・忠実品がまとまって出土している一方で、長胴のもの、脚台のない平底のものなど独自品が一定量存在する。

Ⅲ類は頸部内面のハケメ調整を省略したもので、B類新段階～C類古段階に対比できる忠実品が甲府市榎田遺跡⁽⁴⁵⁾2号方形周溝墓、韮崎市久保屋敷遺跡⁽⁴⁶⁾1号住居跡、南アルプス市（旧若草町）寺部村附第6遺跡⁽⁴⁷⁾1号住居跡においてみられる。頸部調整が施されていないものの、それ以外の技法を見ると、きわめてオリジナルに近いものである。村前東A遺跡では、久保屋敷遺跡のものほど忠実ではないが、B類に引き続きC類の影響を受けているものがある。しかし、坂井南遺跡3次39号住居跡出土例のように口縁部の屈曲が小さくあまり外反せず、屈曲が不明瞭であり、肩部が強く張らず立ち気味になる独自品がある。また、C類段階に相当する山陰系とされる拡張口縁をもつ大型品（E類）⁽⁴⁸⁾が登場し、これをⅢb類とするが、坂井南遺跡3次28号住居跡出土例は忠実品とされるが、村前東A遺跡Ⅳ区13号住居跡出土例はさらに大きくなり変容しており、同様のものが村前東A遺跡や寺部村附第6遺跡、西田遺跡第2次調査、山梨市足原田遺跡⁽⁴⁹⁾などで複数出土している（第2

図)。濃尾平野では山陰系口縁の融合したものとして一定の数量を占めているようで、大型品に限定されるようであり⁽⁴³⁾、甲斐出土のものについても同様に大型であるが、外反しながら開くもの、内彎するもの、直線的に開くものが存在する。しかし、これらのうち山陰系といえるのは坂井南遺跡出土のものだけで、それ以外の村前東A遺跡・西田遺跡・足原田遺跡のものはさらに幅の広く、かなり変容した形態となっており、上野でも以前からその出土が知られている⁽⁴⁴⁾。

Ⅳ類は肩部外面の横ハケを省略したものであるが、村前東A遺跡Ⅳa区58号住出土例は、体部がC類と同様に球胴であり、共伴関係からも肩が下がった長胴のものよりは明らかに古い形態を留めており、D類と対比することは出来ない独自品であり、笛吹市八代町の俣ノ下遺跡⁽⁴⁵⁾1号土坑出土例は、体部は球胴であるが外面にヘラケズリが認められる。既に触れたように、駿河・上野でも同様な変化が認められており、これをⅣb類とする。そして甲府市（旧東八代郡中道町）甲斐銚子塚古墳⁽⁴⁶⁾出土例、西田遺跡B区2号住居跡⁽⁴⁷⁾出土例のように体部外面のヘラケズリとともに長胴化し、さらに脚台部のナナメハケを省略したものをⅣc類とする。

V類は甲斐における最後のS字甕と考えられるものである。体部は肩の張りがさらに弱く、ケズリが明瞭になり、ハケメも少なくなる。中央市（旧豊富村）宮の下遺跡⁽⁴⁸⁾のものは、肩の張りもなくなりハケメは装飾的なものになる。現在においてもこのタイプはこれ以外にはなく、甲斐におけるS字甕終焉に関しては依然として不明な部分がある。

このように、甲斐のS字甕には波及の当初であるⅠ類・Ⅱ類において独自の形態・製作技法が見られる。そしてⅢ類を経てⅣ類以降はさらに変容ぶりが顕著になる。これらは「異所的変異」として、既に加納氏が指摘しているものである⁽⁴⁹⁾。

一方で、肩部外面の横ハケの消失する時期は、上野では甲斐とほぼ同じC類新段階併行（廻間Ⅲ式後半）以降と考えられているが、駿河ではB類新段階併行（廻間Ⅱ式4段階）以降とさらに早いと考えられている⁽⁵⁰⁾。しかし、製作技法上での口縁部横ナデの採用段階、俣ノ下遺跡出土例のように横ハケ消失段階での頸部内面のハケメ調整、体部外面のヘラケズリなど、いくつか共通の製作技法の存在を指摘することが出来、それぞれの地域が交流し互いに影響を受けながら定着し、さらに変容していった様子が窺える。このことについては後述する。

4. 波及ルートと「地域型」の形成について

甲斐出土のS字甕については、忠実品は非常に少なく、そのほとんどは甲府盆地内で生産されたものであろう。それら多くは地域性をもって在地化した独自品であり、これらは駿河、上野においてもみられる現象のようである。さらに甲斐と南に隣接する駿河（東駿河）のS字甕とを比較してみると、形態・製作技法においてきわめてよく似ていることはすでに指摘したとおりである⁽⁴⁹⁾。加納氏が指摘しているように、駿河（東駿河）では搬入品とみられるものはごく僅かであり、ほとんどは在地品で占められている⁽⁴⁹⁾。沼津市藤井原遺跡⁽⁵¹⁾、富士市三新田遺跡⁽⁵²⁾、富士宮市月の輪平遺跡⁽⁵³⁾では、いずれも体部が長胴化を志向しており、肩部のヨコハケの省略が早く、口縁部の屈曲も弱い。

筆者は当初、甲斐のS字甕の分布状況から、Ⅰ類からⅡ類については信濃松本平の塩尻市上木戸遺跡⁽⁵⁴⁾において、在来の集団ではまねできないほどのA類忠実品が出土していることから、原（古）東山道ルートにより諏訪から甲府盆地北西部へもたらされ（第3図）、新しいタイプであるⅣ類は原（古）東海道ルートによる駿河の影響を受け、定着したものが盆地南部から東部へ波及し、盆地内でも地域差があると考えていた⁽⁵⁵⁾。これについて橋本文氏は、甲斐のS字甕は他地域（おそらく駿河や上野）の場合と同様に、その新段階では非常に個性・地域性をもって在地化するのに対し、古段階では胎土は在地のものであるが、淵源地のものと区別がつかないほどよく似ており、また搬入品とするには数が多すぎることから、東海地方西部からの人間の移住を想定し、甲府盆地内で生産された可能性が強いことを既に指摘していた⁽⁵⁶⁾。さらに筆者は、甲府盆地にS字甕が出現す

る前段階の弥生時代後期前半には中部高地系土器の影響が強かったのに対し、後半から終末期になると駿河・西相模の影響が強くなり、やがて両者が接触し、混在していくという地理的背景の影響とともに、大廓式土器の影響が大きいと考えていた。

その後、駿河での分析が進むにつれて、A類からD類まで継続的搬入が考えられ⁽⁶³⁾、駿河のものはB類を元にして製作されているらしいことが検証され⁽⁶⁴⁾、甲斐に比べて体部形態の変化の幅は少ないことも明らかにされている。一方、甲斐ではA類（相当）が増加し、米倉山B遺跡での出土以降、状況が大きく変わった。それは波及してまもない段階から、独自の解釈のもとに作られ始めていることが想定されるようになったからである。さらにA類（相当）は駿河や上野、信濃では上木戸遺跡や中野盆地⁽⁶⁵⁾などでも出土しているものの、出土量の多さと形態・技法の変化のパラエティーに富む点で最もインパクトをもっているのは、現在でも甲斐において他に見られない。村前東A遺跡では高杯やパレススタイル壺、ヒサゴ壺など他の東海系の器種も見られ、A類からB類段階までの継続的な人の移動が考えられ、その後甲斐の古式土師器の成立に関わっていくものとみられる。

したがって、甲斐へのS字甕は、「東海系トレース」の第1次拡散期⁽⁶⁶⁾の中で、原（古）東山道から信濃を経由するルートと、原（古）東海道から駿河を経由するルートから、同時期にA類が波及したことが想定される。甲府盆地は周囲を山々に囲まれた内陸部という地理的環境にあり、原（古）東海道・東山道両ルートに挟まれ、どちらの搬入経路上にも直接位置していないが、両ルートをつなぐ重要な地域であり、このことが、結果的に甲斐の古墳文化を形成する大きな要因となった。このような環境の下で、S字甕は波及してまもなく甲府盆地内での生産が開始され、以後急速に盆地内へ定着していったことが考えられる。

その後、駿河では肩部外面横ハケを省略する時期や体部外面をヘラケズリによって器壁を薄くするような製作技法の共有には未だ疑問が残るが、西相模との交流を含め「駿河型」は甲斐に含めて考えるべきである（ただし西駿河では忠実品がかなりあり、そのあり方は東駿河とは異なるようである）。また、その後の変化の方向については、第2次拡散期の影響はあるものの、前方後方墳から前方後円墳への交替が象徴するように、S字甕製作に関する情報も次第に欠落していき、独自の変化が進行していく。筆者分類IV類の西田遺跡や姥塚遺跡で見られるような肩が下がった長胴のタイプのものが、長野県茅野市下蟹河原遺跡や岡谷市新井南遺跡⁽⁶⁷⁾などにおいても確認できる（第4図）が、これらについても、甲斐からの影響が考慮される。その背景には、第2章で取り上げる前期の大型前方後円墳が相次いで築造される甲府盆地の状況からも想定できる可能性が大きく、甲斐産の水晶など他の文物とともに甲斐から拡散したものと想定しておきたい⁽⁶⁸⁾が、「上野型」については甕の基本形態を越えた定着に象徴しているように、甲斐とは違うインパクトがあった⁽⁶⁹⁾。

6. おわりに

最後に「地域型」の区別について。東海の「オリジナル品」と駿河・上野・甲斐の独自品との違いは、色調や胎土を含めて比較的容易に判断がつく。しかし問題は駿河・上野と甲斐との違いである。それぞれのS字甕を「駿河型」・「上野型」・「甲斐型」と提唱したことについては、加納氏の「濃尾平野のS字甕との相違だけではなく、地域相互の違いもちゃんと説明しなければ、説得力に欠けるし、いたずらに混乱を招くことにもなるのではないか。」という批判がある⁽⁷⁰⁾。確かにこれらが混在して出土すると、実際はほとんど区別できないであろう。

「伊勢湾（東海）地方との諸属性の分離と独自化を『定着』と捉え」⁽⁷¹⁾、口径、胴部径、器高などの法量を比較・分析することにより、その違いが検証されている一方で、口縁部の形態等について詳細なデータを提示しているものもあるが⁽⁷²⁾、独自品に対してそれが有効かどうかはわからない。確かに口縁部の製作技法を見ても、それぞれ微妙な違いのようなものは認められ、ひとつのメルクマールとなるかもしれない。だがそういったレベルでの違いは、決定的な特徴といえるものではなく、体部の破片では識別することは実際には難しい。また加納氏が指摘するように、これらの地域以外の西相模、南信濃、西駿河、さらに東京低地⁽⁷³⁾でもS字甕は数多

く出土しており、これらの地域のものとはどう区別するのか。

しかし、甲斐をひとつの拠点として、その後これらの地域へS字甕とともに、水晶など他の文物を伴ったさらなる「2次の拡散」⁶⁷⁾が想定されるとすれば、当該地域に定着したS字甕については、その先進性をもって「甲斐型」と呼ぶこととしたい。

註

- (1) S字甕胎土研究会 1998「S字甕の混和材を考える」『考古学フォーラム』9
赤塚次郎 2000「雲出型甕の提唱と伊勢湾の台付甕」『第7回東海考古学フォーラム S字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会実行委員会
- (2) 小林健二 1991「甲府盆地におけるS字甕の定着について」『古文化談叢』第26集 九州古文化研究会
- (3) 加納俊介 2000「S字甕の分類を考える」『第7回東海考古学フォーラム S字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会実行委員会
- (4) 増井義巳 1958「いわゆる古式土師器の問題」『考古学手帖』5
向坂綱二 1959「遠江における古式土師器」『考古学手帖』8
- (5) 金井塚良一・小出義治ほか 1971「特集 シンポジウム五領式土器について」『台地研究』No.19 台地研究会
- (6) 大参義一 1968「弥生式土器から土師器へ—東海地方西部の場合—」『名古屋大学文学部研究論集』XVII
- (7) 安達厚三・木下正史 1974「飛鳥地域の古式土師器」『考古学雑誌』第60巻第2号 日本考古学会
- (8) 加納俊介 1981「2出土土器の編年の位置（1）月の輪新について」『月の輪遺跡群』富士宮市教育委員会
田口一郎 1981「S字状口縁台付甕の分類と編年」『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会
- (9) 赤塚次郎 1986「S字甕について」『第3回東海埋蔵文化財研究会 欠山式土器とその前後』同実行委員会
- (10) 赤塚次郎 1987「逍遙する土器」『欠山式土器とその前後 研究・報告編』愛知考古学談話会
- (11) 赤塚次郎 1986『「S字甕」覚書' 85』『年報 昭和60年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- (12) 赤塚次郎 1990「V考察」『廻間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- (13) 赤塚次郎 1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- (14) 早野浩二 1996『「S字甕0類」をめぐって—研究の現状—』『第4回東海考古学フォーラム 鍋と甕 そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- (15) 註（1）に同じ。
- (16) 赤塚次郎 1992「廻間Ⅰ式覚書92」『庄内式土器研究』Ⅰ 庄内式土器研究会
赤塚次郎 1992「S字甕とカメ」『庄内式土器研究』Ⅱ 庄内式土器研究会
原田幹 1994「S字甕の拡散からみた東海系土器の移動」『庄内式土器研究』Ⅴ 庄内式土器研究会
- (17) 小林健二 1994「甲府盆地の外來系土器」『庄内式土器研究』Ⅴ 庄内式土器研究会
小林健二 1994「甲斐における庄内式併行期の土器編年」『庄内式土器研究』Ⅶ 庄内式土器研究会
- (18) 中山誠二 1986「甲府盆地における古墳出現期の土器様相」『山梨考古学論集Ⅰ』 山梨県考古学協会
- (19) 註（2）に同じ。
- (20) 小林健二 1994「外來系から在來系へ—甲斐のS字甕の変遷—」『研究紀要』9 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- (21) 小林健二 1993「山梨県域の土器様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- (22) 小林健二 1998「山梨県出土の東海系土器—波及と定着と変容—」『山梨県考古学協会誌』第10号 山梨

県考古学協会

- (23) 小林健二 1998「甲斐における土器群の画期と交流―東海系を中心に―」『庄内式土器研究』XVI 庄内式土器研究会
- (24) 小林健二 1998「甲斐における古式土師器の成立―3・4世紀の土器編年と墳墓」『専修考古学』第7号 専修大学考古学会
- (25) 小林健二 1998「豊富村宮の下遺跡出土のS字甕」『森和敏氏退職記念 山梨県考古学資料集I』森和敏氏退職記念刊行委員会
- (26) 原田幹 1996「S字甕の分布と地域型」『第4回東海考古学フォーラム 鍋と甕 そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- (27) 加納俊介 1998「S字甕の波及と定着」『静岡の考古学 植松章八先生還暦記念論文集』同編集委員会
加納俊介 1999「古式土師器の構造論的研究序説」『三河考古』第12号 三河考古学談話会
- (28) 小林健二 2000「甲斐のS字甕を考える」『第7回東海考古学フォーラム S字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会実行委員会
- (29) 山下孝司 1988『坂井南』韮崎市教育委員会ほか
- (30) 山下孝司 1989『後田遺跡』韮崎市教育委員会ほか
- (31) 坂本美夫 1999『米倉山B遺跡』山梨県教育委員会ほか
- (32) 三田村美彦 1999『村前東A遺跡』山梨県教育委員会ほか
- (33) 新津健 1997『大塚遺跡』山梨県教育委員会ほか
- (34) 坂本美夫 1997『西田遺跡―第2次発掘調査報告書』山梨県教育委員会
- (35) 高野玄明 1995『榎田遺跡』山梨県教育委員会ほか
- (36) 米田明訓・保坂康夫 1984『久保屋敷遺跡』山梨県教育委員会
- (37) 宮澤公雄 2004『寺部村附第6遺跡』南アルプス市教育委員会ほか
- (38) 原田幹 2000「S字甕の波及と定着をめぐる問題」『第7回東海考古学フォーラム S字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会実行委員会
- (39) 山本茂樹・石神孝子 2005『足原田遺跡I』山梨県教育委員会ほか
- (40) 註(12)に同じ。
- (41) 註(8)に同じ。
- (42) 渡辺礼一 1984「Ⅲ区下遺跡」『石橋条里制遺構・蔵福遺跡・俣ノ下遺跡』山梨県教育委員会ほか
- (43) 笠原みゆき他 2008『銚子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県教育委員会
- (44) 山崎金夫他 1978『西田遺跡―第1次発掘調査報告書―』山梨県教育委員会
小林健二 1999「塩山市西田遺跡B区2号住居跡出土土器の再整理」『研究紀要』15 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- (45) 註(25)に同じ。
- (46) 加納俊介 1990「S字甕とS字甕もどき」『マージナル』No.10 愛知考古学談話会
- (47) 渡井英誉 2000「東駿河のS字甕」『第7回東海考古学フォーラム S字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会実行委員会
- (48) 註(2)に同じ。
- (49) 註(46)に同じ。
- (50) 瀬川裕市郎・鈴木裕篤・杉山治夫 1978『藤井原遺跡発掘調査報告書I 遺構編』沼津市教育委員会
- (51) 平林将信 1983『三新田遺跡発掘調査報告書』富士市教育委員会

- (52) 渡井一信・湯川悦夫・加納俊介 1981『月の輪遺跡群』富士宮市教育委員会 1981 及び 1982『月の輪遺跡群Ⅲ』富士宮市教育委員会
- (53) 宇賀神誠司 1988「弥生後期後半の土器について（上木戸遺跡）」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2』（財）長野県埋蔵文化財センター
- (54) 註（2）に同じ。
- (55) 橋本博文 1984「甲府盆地の古墳時代における政治過程」『甲府盆地—その歴史と地域性—』雄山閣
- (56) 註（27）に同じ。
- (57) 渡井英誉 1996「東駿河における布留式併行期の様相（前）—土器編年の設定—」『静岡県考古学研究』No. 28 静岡県考古学会
- (58) 赤塩仁 1994「第7節弥生時代後期から古墳時代初頭の土器様相」『県道中野豊野線バイパス・志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書』（財）長野県埋蔵文化財センター
- (59) 赤塚次郎 1992「東海系のトレースー3・4世紀の伊勢湾沿岸地域」『古代文化』第44巻第6号（財）古代学協会
- (60) 長野県史刊行会 1988『長野県史考古資料編 4遺構・遺物』
- (61) 一之瀬敬一・金井拓人 2021「古墳時代における山梨県産水晶の利用」『研究紀要』37 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- (62) 若狭徹 2018「古墳時代前期の地域開発と古墳の被葬者像—上毛野と北武蔵の比較を通じて—」『野本将軍塚古墳と東国の前期古墳』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所
- (63) 註（27）に同じ。
- (64) 田ロー一郎 2000「北関東西部におけるS字口縁甕の波及と定着」『第7回東海考古学フォーラム S字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会実行委員会
- (65) 高橋浩二 1999「S字状口縁台付甕の伝播とその評価」「国家形成期の考古学」大阪大学考古学研究室
- (66) 牛山英昭 1998「東京低地周辺域における土器群の画期と交流」「庄内式土器研究」XIV庄内式土器研究会
- (67) 註（26）に同じ。

第1図出典（濃尾平野のS字甕）

- 赤塚次郎編 1990『廻間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 松原隆治編 1992『岩倉城遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 宮腰健司編 1994『朝日遺跡Ⅴ（土器編・総論編）』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 樋上昇編 1994『貴生町遺跡Ⅰ・Ⅲ 月縄手遺跡Ⅱ』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎編 1997『西上免遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター

第3図出典

- 赤塚次郎 1996「前方後方墳の定着—東海系文化の波及と葛藤—」『考古学研究』第43巻第2号 考古学研究会

第2節 東海系土器の波及と定着

1. はじめに

土器の移動は縄文時代以来見られる現象である。それは土器そのものの搬入や製作技法の模倣といったレベルの問題にとどまらず、人の移動、さらにはその背景にある政治的・社会的変革など、様々な要因のもとに起こる。土器を含む外来の文化は時にセンセーショナルであり、在来の文化そのものに多大な影響を与えることもある。

古墳出現期に見られる土器の移動に関しては、その背後に弥生土器と土師器の境界という大きな問題が常に控えていることはいうまでもなく、東日本においては外来系土器の存在が大きく関わっている。その中でも特に東日本に多くの影響を与えているのが東海系土器である。既に多くの論考が世に送り出され、各地域の様相が明らかになり、土器編年も整備されてきた。甲斐においても1990年代以降出土例は増加し、筆者自身もS字甕に代表される東海系土器の動向には絶えず注目してきたことは前節で述べた通りである。

研究史的には、当該地域において東海系土器の実測図が見られるようになるのは1960年代からであり、いくつかの資料が紹介されている⁽¹⁾。その後、1970年代になっても資料は散見されるが目立った動きはなく、編年も提示されることはなかった。そんな中であって南関東では、加納氏により東海系土器についての意義が既に指摘されていたことは重要である⁽²⁾。

1984年(昭和59)、末木健・坂本美夫両氏によって、本県古墳時代前期の一括資料による土器編年が提示された⁽³⁾。資料的にはまだ少ないものの、当該期の土器の変遷が初めて時間軸の中に位置づけられたことは高く評価される。しかしそれは、S字甕が古墳時代前期の指標となる土器であったことは明確であるにもかかわらず、依然として「S字甕＝五領式土器」という当時の編年観に捕らわれていたものであった。

一方東海では、前節で触れたように大参編年以来編年の研究は停滞していたが、1980年代後半から全国的な土器の交流が注目されるようになり、東海系土器をめぐる研究は活発化し、「廻間式土器」編年へと至り、東日本の土器編年に広く浸透していった。

東日本に大きな影響を与えるようになった廻間編年に対し加納氏は、赤塚氏の様式と画期の設定に問題を投げかけ、自らの編年を提示した⁽⁴⁾。さらに1997年(平成9)には「元屋敷式の復権」を提唱した⁽⁵⁾が、「新潟シンボ編年」以降、畿内と東国をつなぐ廻間編年の普遍的ともいえる影響は大きく、現在に至っている。

このような背景のもと本節では、前節を踏まえ、甲斐における古墳時代前期の土器様相を、東海系土器を中心に整理することを目的とし、検討を行いたい。

2. 各遺跡の様相

甲斐出土の主な東海系土器について、前節で分類したS字甕の変遷を基軸とし、新たな資料も交えていくことにする。それぞれの器種についてここで改めて分類することはせず、各期の基準となる遺跡の資料を提示する。併行関係については赤塚氏の一連の研究成果に基づくものとし、廻間編年・松河戸編年にそれぞれ対比させる。これらについては前述の通り画期の設定等において重要な問題を含んでいるが(次節)、「新潟シンボ編年」以降、甲斐編年設定の中心となったものであるため、ここでも対比していきたい。

(1) 米倉山B遺跡(甲府市：第5図19、第6図)⁽⁶⁾

甲府盆地南部の曾根丘陵上に立地し、弥生時代後期から古墳時代前期を中心とする遺跡であり、52軒の住居跡や方形周溝墓2基などが発見されている。このうち、8号住居跡覆土上層から出土した筆者分類Ⅰ類のS字甕は、公表当時から注目を集めた資料である。これまでも7個体分を取り上げてきたが、調査報告書にはそれ以外

の破片資料も多く掲載されている。1・4は体部の形態は長胴を呈し、2・3・5はやや肩が張る。これらは口縁部外面の刺突は粗く、体部内面のハケメ調整を指ナデにより消す手法がみられることから、A類新段階に相当するものである。ただし1・4は古い形態を残しており、特に1は内面ハケメ調整がほぼ全体に残っており、当該地域において最も早い段階に波及したものと考えられる。また、この同じ覆土上層からは他に有段高杯とみられる破片(8・9)も出土している。

(2) 後田遺跡(韮崎市:第5図5、第6図)⁽⁷⁾

盆地北西部の藤井平と呼ばれる微高地上で発見された遺跡である。古墳時代の2軒の住居跡のうち、C区5号住居跡からI類S字甕(14)と椀形高杯(20)が、単純口縁・有刻口縁の台付甕(10~13)、形骸化した中部高地系の平底甕(15~19)などととも出土している。

(3) 大塚遺跡(南アルプス市:第5図7、第6~8図)⁽⁸⁾

盆地西部の御勅使川右岸の微高地上にある遺跡で、発見された古墳時代の住居跡6軒のうち、5軒から多数の東海系土器が出土している。S字甕はI類(29・30・32・37~39・64・66・68~75・90~98・100~102)、B類古~中段階に相当するII類(31・63・67・99)、有段高杯(41・42・60・61・80~83)、椀形高杯(35・55~59)、頸部突帯と体部に櫛描文を施した東海系の加飾広口壺(23~27・47・79)と二重口縁壺(22)⁽⁹⁾、ヒサゴ壺(51・52)、手焙形土器(33)を含む良好な資料が出土している。S字甕は脚台部に折り返しをもつものもある。出土状況からこれらは一括遺物とみてよいであろう⁽¹⁰⁾。有段高杯については、杯部が大きく直線的に外傾し脚部も直線化したものがあるが、端部が内彎したものもあり、古い段階の形態を留めている。在地化したものかもしれないが、あるいは内彎志向を有しない地域からの波及かもしれない⁽¹¹⁾。S字甕以外の甕類がほとんど見られないのも特徴である。

(3) 坂井南遺跡(韮崎市:第5図4、第8・9図)⁽¹²⁾

盆地北西部の七里岩と呼ばれる台地上に位置し、1983年(昭和58)の第1次調査以降、これまで8次にわたる調査が行われており、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての100軒を超える住居跡、方形周溝墓12基などが発見され、この地域の拠点的な集落遺跡として知られている。

このうち、第3次調査19号住居跡では、II類のS字甕(109・110)、廻間II式3段階の特徴をもつ、杯部が大きく外反し始める有段高杯(113)、小型器台(114)が出土しており、二重口縁壺(103)、単純口縁台付甕(106)、有刻口縁台付甕(107)などが共伴している。同じく第3次調査35号住居跡では、新段階のIVb類のS字甕(130~135・141)に小型丸底鉢(127)、外曲口縁の小型器台(139・140)などが見られ、前期後半の様相を示している。同39号住居跡ではIII類S字甕(148~150)が、同44号住居跡ではIVb類S字甕(141)・椀形高杯(147)が見られ、単純口縁台付甕などと共伴している。この他、図は掲載していないが、第3次調査57号住居跡ではI類S字甕が出土しており、これらはいずれも前期土器様相の画期を示す基準資料である。

(4) 村前東A遺跡(南アルプス市:第5図6、第10~12図)⁽¹³⁾

盆地西部の釜無川右岸、御勅使川扇状地の扇端部に位置する遺跡で、1990年(平成2)と1993年(平成5)から1996年(平成8)にかけて古墳時代前期を中心とする住居跡150軒などが調査され、坂井南遺跡と同様にこの地域の拠点的な集落となっている。

IV区13号住居跡でIII類S字甕(199・200)、拡張口縁をもつIIIb類S字甕(204)、IV類S字甕(201)、有段高杯(203)が、IVa区58号住居跡ではIII類S字甕(181・182・184・187)、IV類S字甕(183・185・186・188~192)、

有段高杯(171)、椀形高杯(172)がみられる。IVa区68号住居跡では、Ⅱ類S字甕(221・223～226)、Ⅲ類S字甕(227)、杯部が大きく外反し始め、脚部が内彎する有段高杯(231)、加飾広口壺(205)、ヒサゴ壺(210)が出土している。IVa区92号住居跡では、Ⅰ類S字甕(246)、Ⅱ類S字甕(247～249)をはじめとして、脚部内彎の有段高杯(250)が、同106号住居跡ではⅡ類S字甕が、同139号住居跡では有段高杯(261)とS字甕A類の技法・形態を模倣した東海系手焙形土器(262)がそれぞれ出土している。特に有段高杯は脚部の内彎が圧縮され、杯部と脚部の高さの比率がほぼ1/1となっている。廻間Ⅱ式1段階の特徴を備えており、濃尾平野のものとそっくりである。本遺跡ではI区6号溝他からも多量の東海系土器が出土しており、S字甕、有段高杯以外にもパレススタイル壺など、ほとんどの器種がみられるが、小型器台・小型高杯については散見出来るが、上野で定着するような東海系器台⁽¹⁴⁾の波及は少ないようである。

(5) 寺部村附第6遺跡(南アルプス市:第5図11、第12図)⁽¹⁵⁾

村前東A遺跡の東方約1kmに位置し、古墳時代前期の住居跡21軒、中期の円形周溝墓3基などが発見され、良好な資料が多く出土している。このうち、1号住居跡のⅢ類S字甕(276～286)はB類新段階～C類古段階の忠実品を含み、有段高杯(273～275)とともに定着した様相を見せている。269・270は北陸系の壺・甕である。12号住居跡では新段階のIVb類S字甕(291～295)が小型丸底鉢(290)と共伴するなど、こちらは前期後半の様相である。

(6) 久保屋敷遺跡(葦崎市:第5図3、第13図)⁽¹⁶⁾

盆地北西部、釜無川右岸の段丘上に立地する遺跡で、1号住居跡出土土器は良好な一括資料である。Ⅲ類S字甕のうち309はB類新段階の忠実品であり、306～308・310・311は口縁部が大きく外反し二段端部に沈線を巡らし肩の張りも強く、C類古段階の忠実品である。有段高杯(312・314)とともに第2次拡散期の資料であり、壺類(296～301)、単純口縁台付甕(302～304)、有刻口縁台付甕(305)、小型高杯(313)もあり、基準資料として重要である。

(7) 俣ノ下遺跡(笛吹市:第5図25:第13図)⁽¹⁷⁾

盆地南東部の笛吹川左岸の浅川扇状地の扇端部に位置する遺跡で、1号土坑出土のS字甕はIVb類の基準資料としたもので、肩が強く張るものの肩部外面の横ハケがなくなり、さらに体部外面をヘラケズリによって器壁を薄くし、その上から羽状ハケを施している(324～326・328)。定着が進んだ前期後半の一括資料であり、有段高杯とみられる脚部(321)があるが東海系の影響はさらに少なくなり、小型丸底鉢(320)が新たな器種として加わる。

(8) 西田遺跡(甲州市:第5図31、第13図)⁽¹⁸⁾

盆地北東部、重川によって形成された扇状地上に立地する古墳時代前期を中心とした遺跡で、これまで3回にわたる調査が行われ、住居跡60軒以上、方形周溝墓5基、溝状遺構5条などが発見されている。

B区2号住居跡出土土器では、東海系は脚台部のナナメハケが消失したS字甕IVc類(346)のみであるが、小型丸底鉢(339・340)、外曲口縁の小型器台(341)の共伴など、前期後半の特徴を持つものである。

そして、東海系に替わる重要な指標となるのが屈折脚高杯(352～355)である。有段をもつ杯部の形態や太く短い脚部の特徴は、各地で見られるものとは大きく違うものであり、裾端部の成形等についても、これらには村木誠氏が検証したような「初現的な特徴」⁽¹⁹⁾を見いだすことは難しい。しかし、筆者が再検討した結果、脚部の形態は共伴しているそれまでの主流であった開脚のもの(350・351)とは明らかに違うことから、やはり甲斐に

おける屈折脚高杯の初現のものである²⁰⁾。また杯部と脚部の接合は、脚頂部の側面に粘土を貼り付け成形していく付加法²¹⁾であり、杯部の横ミガキと、脚部柱状部に縦ミガキを施した後に上端と下端に横ミガキが施されていることが確認できることから、これらを考慮すれば、すべてが畿内系のものかどうか疑問が残るが、おそらく布留式(2式期)²²⁾の製作技法²³⁾の影響のもとに甲斐で作られたものと考えられる。なお杯部については、有段(屈曲)口縁鉢の変容したものと考えられるが、甲斐ではこの種の鉢の出土例がなく、引き続き今後の検討課題としておきたい。ところで、高杯の杯部を鉢に置き換えたような例は、盆地南部の甲府市(旧中道町)東山北遺跡²⁴⁾2号方形周溝墓出土の高杯があり、こちらは小型丸底鉢に脚をつけたものと思われる。また、52号住居跡出土の高杯(362)は有段高杯より脚部が長いものであるが、共伴関係から屈折脚高杯に併行する段階のものと考えられる。

小型丸底鉢についても畿内の製作技法の影響が見られ、口縁部が外曲する小型器台の系譜ははっきりしないが、この時期の東日本で多く見られるものである。この他二重口縁壺(329)については、伊勢地域に系譜をもつものであり²⁵⁾、単純口縁の台付甕(335~338)は、弥生時代後期から在来の器種として残存するものである。

このように、本遺構出土の土器群は、屈折脚高杯の形態自体はきわめてイレギュラーなものであるが、在来化が進んだS字甕・小型丸底鉢・小型高杯・小型器台を含む器種構成であり、同一時期のものとしてとらえることが出来る。そして年代的には従来通り古墳時代前期後葉に位置づけられるものである。それは甲斐銚子塚古墳の出現前後の、東海系の土器群が甲斐において変容し、替わって畿内の影響が波及してくる中で生まれたものと理解される。

3. 画期と問題点

以上のように、甲斐の古墳時代前期の土器様相について、東海系土器を中心に概観してきたが、S字甕の変遷を基軸にしてこの中にはいくつかの画期が存在する。これについてもう一度整理してみたい。

まず、東海系土器の第1次拡散期(廻間Ⅰ式3段階~Ⅱ式1段階)・新潟シンボ編年の第1の画期(4期)について、新たな器種であるS字甕A類(筆者分類Ⅰ類)の出現を最大の特色とし、ここに画期を置く。ここまで述べてきたように、数量的にも非常に多く²⁶⁾、東日本では特異な状況を示しており、この状況は現在においても変わらないであろう。住居の形態も、それまでは小判形であったものが、これ以降は隅丸方形プランに変わる²⁷⁾。

一方で、村前東A遺跡や大塚遺跡などで東海系土器が主体となる新たな資料が相次いで発見され、ここまで見てきたようにS字甕A類相当とともに有段高杯や加飾壺、パレススタイル壺、ヒサゴ壺など、東海系土器の多くの器種が出土している。高杯の型式を考慮すれば、これらは廻間Ⅱ式前半を中心に対比できるものであり²⁸⁾、廻間Ⅰ式まで遡るものは見られないことから、廻間Ⅱ式前半期に併行することとなる。しかし、米倉山B遺跡出土のS字甕は、甲斐へのS字甕の波及が廻間Ⅰ式後半期に遡る可能性を残している。

ところで、これらの土器については、森岡秀氏が提示した類型²⁹⁾のうち、移動距離による類別の大地域間移動、移動形態による類別の複数器種移動であり、住居形態の変化を考えると様式システム移動、生活関連システム移動の可能性もある。また移動方式による類別の直接型移動、移動時間による類別の小様式内併行移動も含まれる。しかし、それぞれの遺跡の全個体数が把握出来ないので、正確な移動量による類別は難しい。

このような状況をどう理解するか。移動目的による類別の移住型移動、歴史的意義づけによる類別の政治的背景として考えるならば、これらの現象は赤塚氏の言う畿内と東海の政治的な対立、つまり「3世紀第2四半期に勃発したとされる邪馬台国と狗奴国の抗争」³⁰⁾を契機とする人々の動きであることが想起される。村前東A遺跡での状況を考慮すると、東海系土器波及とともに人々の移動があったことは明らかである。また米倉山B遺跡・大塚遺跡での土器の出土状況、被火災住居の増加³¹⁾には、在来と外来の集団間にも大きな緊張関係があったことが窺える。一方墳墓のあり方は単発的で問題はあるが、赤塚氏は「その後の各地の東海系文物の動向は多様であ

って、一貫した系列・系統性は認めにくい。そうした点を総合すると移民的状況というよりも一過性の難民的な様相が強いものであった」と述べている⁶²⁾。時間的には、東日本の中では最も早い段階に表面化することになる。「難民」という言葉には躊躇してしまうが、汎東日本の視野に立てば、その後の東日本の古墳時代の基盤づくりを担った人々であったとも言えるのではないだろうか。

その後も引き続き、S字甕B類（筆者分類Ⅱ類）を含む東海系土器群が波及する。当初B類相当については少なかったが、村前東A遺跡ではかなり出土例が確認できる。有段高杯やパレススタイル壺、ヒサゴ壺も継続して見られ、第1次拡散期を契機に、新しく受け入れる体制のようなものが出来上がったと考えられる。緊張関係を最終的に軍事的な意味だけで考えるのはあまりにも短絡的であるが、そこには「人々が故郷を追われ新天地に向かって漂泊し、やがてそれぞれの地で、先住の人々と交渉しながら定着していく」⁶³⁾状況が作られたのであろう。そしてこの時期の東海系土器をベースにして次第に甲斐の土器様式が作られていく。もちろん全てが東海系に置き替わってしまうわけではなく、台付甕など在来の系譜を引くものが前期を通じて存在する。

筆者はかつて、甲府盆地においては定着するのはS字甕のみであると言及した⁶⁴⁾。しかし上記の調査成果を見ると、パレススタイル壺・ヒサゴ壺も確実に存在することから、それまでの移動類型が引き続き想定されよう。また、有段高杯については第1次拡散期からの波及があり、以後広く定着していく「斉一性」の器種⁶⁵⁾であることを考えると、S字甕のみを取り上げることにについては問題が出てくるが、次節で取り上げる内容を考慮し、S字甕を優秀な「薄い甕」として、移動目的による類別の交易・商品型商圏内移動、歴史的意義づけによる類別の経済的背景も含めておきたい。

次の画期は、S字甕B類新段階・C類古段階（筆者分類Ⅲ類）の波及に始まる段階にあたる。3世紀後半～末、「濃尾平野の政治的なまとまり自体がむしろ主体的な動きとして近畿地域を中心とする政治的勢力の再編成の企画に参画した」⁶⁶⁾時期である。前半期は東海系土器の第2次拡散期、新潟シンガ編年の第2の画期にあたるが、C類の分布の中心が畿内に変わる中で⁶⁷⁾、久保屋敷遺跡ではオリジナルに忠実な模倣品が見られ、淵源地から依然として製作技法が波及していたことが窺える。A類ほどの強い影響はないものの、東海との交流は依然として続いていたようである。しかし定着が進み、駿河・上野と同様、C類併行の段階で体部外面の横ハケはなくなる（筆者分類Ⅳ類）。

それと並行して、有段高杯も甲府盆地内に広く定着していく。パレススタイル壺については、今のところ上野ほどの強い定着は認められないものの一定の形態を保持したものも見られることから、甲斐の様式の中に取り込まれていることは確かなようである。

いわゆる小型精製土器群については、小型器台・小型高杯はS字甕の出現とともに見られるが、それほど目立つ存在ではなく、依然として明確ではない。小型丸底鉢を含め、次の画期以降に盛行するようである。後半期になると東海系の影響は少なくなり、それは定着した在来系としてのS字甕に顕著に現れるようになる。

最後は、新潟シンガ編年の第3の画期にあたる段階である。S字甕の体部外面にヘラケズリが採用され（筆者分類Ⅳb類）、外曲口縁器台・小型丸底鉢が普遍的に見られるようになる。そして屈折脚高杯の出現がある。甲斐に隣接する駿河の編年では⁶⁸⁾、併行関係を見てみると、屈折脚高杯の出現は当初廻間Ⅲ式4段階併行の大廓Ⅲ式期（中見代Ⅰ式期）であった⁶⁹⁾。ところが最新の編年では松河戸Ⅰ式に併行しており、東海と同時期になっている。渡井英誉氏はその中で屈折脚高杯について、「出現当初から多彩な形のものが入り入れられ」、「そして、搬入された早い段階から在地化が始まっていたようで」と述べている。もしそうであるとすれば、西田遺跡B区2号住居跡出土のもの（第13図352～356）についても示唆的な意見である。しかしそれを「初源的な布留系」と述べているが、畿内が中心になって各地に波及したとしても、そのすべてが畿内系のものかどうかは依然として判然としないのであり、疑問は残る。多彩な形態が存在するのであれば、受け入れる地域によってその受け止め方も異なり、出現する時期は地域によっては幅があり、時間差が生じるのではないだろうか。

一方この第3の画期について、加納氏は自らが設定した編年⁽⁴³⁾と赤塚氏の設定した松河戸様式との、画期の捉え方の食い違いを指摘する⁽⁴⁴⁾。赤塚氏は廻間Ⅲ式から松河戸Ⅰ式の変化に、S字甕D類と屈折脚高杯の出現、小型器台・小型丸底鉢の粗雑化に画期を求める。これは加納氏の編年の塔の越期から西北出期への変化に対応する。そして加納氏は、小型器台・小型丸底鉢がなくなり新たに口径と胴径がほぼ等しい小型壺の波及に見られる器種構成の違いを重視し、西北出期と松河戸期の間にもう一つの画期を置く。赤塚氏の編年では松河戸Ⅰ式1段階と2段階の間にそれを求めることになる。この変化は歴史的意義づけによる分類の、政治的背景による中期への画期であり、「機能の転換を伴った形式の転換」⁽⁴⁵⁾であることから、西北出期から松河戸期への変化は重要な画期として捉えられるのである。

これらをもとに甲斐の状況に戻ると、は赤塚氏の編年の廻間Ⅲ式4段階から松河戸Ⅰ式1段階に、そして加納氏の編年の塔の越期新相から西北出期にそれぞれ併行する。しかしその後、中期にかけては資料が急激に少なくなる。そのような中で注目されるのが南アルプス市（旧甲西町）村内遺跡⁽⁴⁶⁾1号住居跡出土の資料で、屈折脚高杯と小型壺を含むきわめて良好なものである。また体部をヘラケズリしたままの台付甕がある松本塚ノ越遺跡（笛吹市石和町）⁽⁴⁷⁾土器集中区出土土器も指標となろう。問題はS字甕が出土していないことであり、その存続である。これらの資料のみから判断することは難しいが、S字甕の変遷から見ても、前期から中期へのこれらの資料の時間的連続を認めることは困難と思われ、V類とした甲斐最後のS字甕の残存と終焉に関しては、現在でも問題が残っている。

4. 東海系土器の波及と定着、変容

古墳時代前期における甲斐出土の東海系土器について、東海の土器編年の対比とともに、ここまで取り上げてきた各遺跡でのS字甕の様相についてまとめてみた（第14図）。大きく見れば、古墳時代前期は出現期、波及期、定着期、そして変容期ということになる。しかし波及と定着は並行しながら断続的に前期中頃まで続く。東海系土器が甲斐の古墳時代前期の土器様式の核となっていたことを、改めて理解することが出来る。

東海系土器は各地へ一方通行的に移動する性格を持つことから、甲斐出土のものはS字甕を中心に「疑似移動土器はあくまで異質な形質で満ちあふれた外来土器であり、その変容は在地品を志向した同化の過程」であり、「移動土器や疑似移動土器の模倣を在来人が積極的に」行った結果として、「地場在地化のプロセスを取り込むこと」⁽⁴⁸⁾となったのである。これらの様相はやはりS字甕の型式変化に象徴されよう。それは時間を追っての変化（タテの変化）のみならず、定着・変容については同一時期内でほぼ同時に見られる現象であり（ヨコの変化）、短時間のうちに在地化（在来化とすべきか）してしまう性格を持っているものと考ええる。しかし搬入品の存在や忠実な模倣品としたものについてもこれらを見極めることは実際には難しい。

S字甕の様相にみる主な遺跡のうち、坂井南遺跡・村前東A遺跡は古墳時代前期を通じて営まれた集落であるが、坂井南遺跡ではヨコの変化は前期中頃まではあくまでも定着の域を出ることなく、終焉を迎える。一方村前東A遺跡では出現当初からヨコの変化に変容ぶりが見られる。甲斐のS字甕を特徴づける、ある意味では特異な遺跡といえる。また西田遺跡・姥塚遺跡はこれらの遺跡から枝分かれするように始まり、変容していく。

これらの動きは、畿内と東海の政治的背景を反映しているものであり、その結果として巻き起こる人の動きであることを、大筋で認めたい。この現象は関東をはじめ各地域でも認められるが⁽⁴⁹⁾、甲斐については東海系土器の出現期に、東日本の中でも最も早く表面化するものと見られ、それはS字甕A類（相当）の出土量の多さからも明らかである。これは前方後円墳に先駆けた前方後方墳の出現を前提とした最大の画期であり、筆者はここに弥生土器と土師器の境界を置く。この問題については、次節でさらに詳しく取り上げる。

註

- (1) 山本寿々雄 1963「山梨県における弥生式末期～古式土師器の資料―東八代郡中道町善藤小字西原出土の例概報―」『富士国立公園博物館研究報告』第9号
 山本寿々雄・秋山重信 1966「西八代郡三珠町大塚遺跡出土の弥生式土器集成 1927～1962」『富士国立公園博物館研究報告』第15号
 山本寿々雄 1968『山梨県の考古学』吉川弘文館
- (2) 湯川悦夫・加納俊介 1972「南関東出土の東海系土器とその問題」『小田原考古学研究会会報』5 小田原考古学研究会
- (3) 末木健・坂本美夫 1984「IX山梨県」『古墳時代土器の研究』古墳時代土器研究会
- (4) 加納俊介 1991「土師器の編年：東海」『古墳時代の研究6 土師器と須恵器』雄山閣出版
- (5) 加納俊介 1997「廻開式か元屋敷式か―東国から見た弥生土器と土師器の境界―」『西相模考古』第6号 西相模考古学研究会
- (6) 坂本美夫 1999『米倉山B遺跡』山梨県教育委員会ほか
- (7) 山下孝司 1989『後田遺跡』韮崎市教育委員会ほか
- (8) 新津健 1997『大塚遺跡』山梨県教育委員会ほか
- (9) 赤塚次郎 1995「壺を加飾する」『考古学フォーラム』7 考古学フォーラム 大塚遺跡出土の加飾広口壺については、伊勢地域で出土するものに系譜が求められる。また、伊勢地域で成立したと見られる二重口縁壺は畿内系がベースになっていると考えられるが(田口一郎 1981「(2) 二重口縁壺の系譜の検討」『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会・比田井克仁 1995「二重口縁壺の東国波及」『古代』第100号 早稲田大学考古学会)、二重口縁壺自体に様々な型式が存在し、パレススタイル壺、加飾壺を含め検討・整理されている(田嶋明人 2014「二重口縁壺にみる推移と変革(上)」『東生』第3号 東日本古墳確立期土器検討会)。よって加飾壺に含まれるもの除き、東海系とは一応区別しておきたい。
- (10) 調査を担当された新津健氏によると、大塚遺跡の住居跡出土のこれらの土器は、それぞれの住居で使用されたものではなく、明らかに一括廃棄されたような状態で出土しているという。特に4号住居跡・9号住居跡での出土状況をみると、1軒での1時期の甕にしては個体数が多すぎることから、集落単位での廃棄行為ではないかと考えている。これは米倉山B遺跡出土のS字甕にも共通するものである。
- (11) 赤塚次郎 1997「2 廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- (12) 山下孝司 1988『坂井南』韮崎市教育委員会ほか
- (13) 三田村美彦 1999『村前東A遺跡』山梨県教育委員会ほか
- (14) 赤塚次郎 1993「東海系器台覚書」『庄内式土器研究』Ⅳ 庄内式土器研究会
- (15) 宮澤公雄 2004『寺部村附第6遺跡』南アルプス市教育委員会ほか
- (16) 米田明訓・保坂康夫 1984『久保屋敷遺跡』山梨県教育委員会
- (17) 渡辺礼一 1984「Ⅲ俣ノ下遺跡」『石橋条里制遺構・蔵福遺跡・俣ノ下遺跡』山梨県教育委員会ほか
- (18) 山崎金夫他 1978『西田遺跡―第1次発掘調査報告書―』山梨県教育委員会ほか
 中山誠二・飯島 泉 1996「14 西田遺跡」『塩山市史』史料編第1巻 原始・古代・中世 塩山市
 坂本美夫 1997『西田遺跡―第2次発掘調査報告書―』山梨県教育委員会
 坂本美夫 1998「245 西田遺跡」『山梨県史』資料編1 原始・古代1 考古(遺跡) 山梨県
- (19) 村木誠 1996「付篇1、名古屋市域の土師器について」『埋蔵文化財調査報告書 24 伊勢山中学校遺跡(第5次)』名古屋市教育委員会
- (20) 小林健二 1999「塩山市西田遺跡B区2号住居跡出土土器の再整理」『研究紀要』15 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

- (21) 寺沢 薫 1980「弥生土器の形式分類」『六条山遺跡』奈良県教育委員会
- (22) 寺沢 薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県教育委員会
- (23) 次山 淳 1993「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』第40巻第2号 考古学研究会
- (24) 末木健ほか 1993『東山北遺跡』山梨県教育委員会
- (25) 註(9)に同じ。
- (26) 小林健二 1993「弥生土器・古式土師器について」『東山北遺跡』山梨県教育委員会
- (27) 中山誠二 1993「Ⅲ山梨県域における集落・墳墓の概要」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- (28) 赤塚次郎 2006「甲斐銚子塚古墳と東海系文化」山梨県立考古博物館第24回特別展講演会資料
赤塚次郎 2014「2・3世紀の甲・信と東海地域」『邪馬台国時代の甲・信と大和』香芝市二上山博物館友の会
- (29) 森岡秀人 1993「土器移動の諸類系とその意味」『転機』4号—第8回東海埋蔵文化財研究会論考編—
- (30) 赤塚次郎 1996「前方後方墳の定着—東海系文化の波及と葛藤—」『考古学研究』第43巻第2号(通巻170号) 考古学研究会
- (31) 註(27)に同じ。
- (32) 註(30)に同じ。
- (33) 赤塚次郎 1992「東海系のトレース—3・4世紀の伊勢湾沿岸地域—」『古代文化』44巻第6号(財)古代学協会
- (34) 小林健二 1991「甲府盆地におけるS字甕の定着について」『古文化談叢』第26集 九州古文化研究会
- (35) 原田幹 1994「S字甕の拡散からみた東海系土器の動向」『庄内式土器研究』Ⅴ 庄内式土器研究会
- (36) 註(30)に同じ。
- (37) 註(35)に同じ。
- (38) 渡井英誉 1996「東駿河における布留式併行期の様相(前)—土器編年の設定—」『静岡県考古学研究』No. 28 静岡県考古学会
渡井英誉 1997「東駿河における布留式併行期の様相(後)—跡の動向—」『静岡県考古学研究』No. 29 静岡県考古学会
- (39) 渡井英誉 1994「東駿河における庄内式期の様相」『庄内式土器研究』Ⅶ 庄内式土器研究会
- (40) 註(4)に同じ。
- (41) 註(5)に同じ。
- (42) 田嶋明人 1995「土器と『古墳時代』」『北陸古代土器研究』第5号 北陸古代土器研究会
- (43) 広瀬和弘 1997『村内遺跡』甲西町教育委員会
- (44) 瀬田正明・中山千恵 1990『松本塚ノ越遺跡』石和町教育委員会
- (45) 註(29)に同じ。
- (46) 比田井克仁 1997「定型化古墳出現前における濃尾、畿内と関東の確執」『考古学研究』第44巻第2号(通巻174号) 考古学研究会

第3節 古式土師器の成立

1. はじめに

第1節・第2節では、甲斐のS字甕とそれに代表される東海系土器を中心に当該地域への波及と定着について述べてきた。これを踏まえ本節では、古式土師器の成立について改めて考えることとする。

繰り返しになるが、その前提となるのは1986年（昭和61）に発表された中山誠二氏による編年⁽¹⁾をベースに、1993年（平成5）に提示した「新潟シンボ編年」における「山梨県域の土器様相」であり、そこでは弥生時代後期から古墳時代前期の土器様相を1期から5期に設定した⁽²⁾。この中で、前節で検討したS字甕A類に代表される東海系土器の波及を大きな画期「出現期」とし、それ以前を「弥生終末期」としたが、これは「新潟シンボ編年」設定時には同時期内の土器様相の違いから「2a期」、「2b期」とし、本地域の大きな特徴としていたものである。

本節ではこの部分に立ち返り、弥生時代後期後半の土器様相から見ていくこととし、その上で前節で確認した画期の設定に基づき、甲斐の古墳時代前期の土器編年を改めて設定する。

2. 「新潟シンボ編年」2期から5期の土器様相

「新潟シンボ編年」は、加賀の漆町編年⁽³⁾や東海の廻間編年⁽⁴⁾などを参考に畿内V様式から布留2式までの間を10区分したもので、これと各地域の土器編年を対比した時間軸に集落・墳墓の消長を当てはめたものである。この中で、「山梨編年」は1期から5期に区分し、さらに2期については2a期と2b期の区分とした。併行関係については、甲斐での編年1期はV様式後半—山中式後期—漆町1群、2期は庄内式（古）—廻間Ⅰ式—漆町2～4群、3期は庄内式（新）—廻間Ⅱ式—漆町5・6群、4期は布留式（古）—廻間Ⅲ式（前半）—漆町7・8群、5期は布留式（新）—廻間Ⅲ式（後半）—漆町9・10群であった（当時）。

2a期は前節で「弥生終末期」としたもので、前段階の1期（弥生後期中頃～後半）で東遠江菊川式、西遠江山中式の影響が強かったのに対し、代わって駿河～西相模の影響が顕著になる。また、それまで多く見られていた中部高地系が減少し始める。南アルプス市（旧櫛形町）六科丘遺跡⁽⁵⁾（第15図）では、単純口縁・折り返し口縁の壺の他に、短頸の広口壺（372・373）もあり、これらは古墳前期を通じて存在する。台付甕には単純口縁・有刻口縁・折り返し口縁を持つものが多く見られ、わずかに平底甕（389）もある。

南巨摩郡富士川町（旧増穂町）平野遺跡⁽⁶⁾（第16図）では、駿河系の縦列沈線文（395～397）を施した壺も多く、韮崎市下横屋遺跡⁽⁷⁾（第16図）では、中部高地系の土器群（426・428～・432・434）と駿河系の棒状浮文を施した幅広の複合口縁を持つ壺（425・427）が混在している。

韮崎市坂井南遺跡第6次調査⁽⁸⁾、甲府市塩部遺跡⁽⁹⁾（第17図）では、甕の中心は台付甕であるが、諏訪湖南地域から甲府盆地にかけて分布する中部高地系のハケ調整の平底甕（448・469・470）⁽¹⁰⁾が見られるのを一つの指標とする。

以下、前節において甲府盆地内の各遺跡の土器様相とその変遷を示した上で、2b期は「出現期」、3期は「波及期」、4期は「定着期」、5期は「変容期」と区分した。

3. 古式土師器の成立

「新潟シンボ編年」における甲斐編年を一瞥したが、この中で本地域の大きな特徴としてきた2a期と2b期の在り方について、ここで改めて考えてみる必要がある。

2a期と2b期の違いは土器様相の違いであるが、それは言い換えれば、それまで主体であった中部高地系と

駿河・西相模の影響を受けた土器をもつ集団(2a)と、伊勢湾系土器をもつ集団(2b)との違いである。これは中山誠二氏の研究成果に基づいているが、氏がかつて提示した弥生土器編年の後期には2つの地域の土器様相が存在するとし、A相・B相として説明している⁽¹¹⁾。その中で、終末期の編年6期に「東部東海系」と「中部高地系」が混在した様相であるA相と、「西部東海系」をもつ様相であるB相が存在するとしている。6期A相はここでいう2a期、B相は2b期にほぼ相当する。そして中山氏は、「A相は、B相の出現以降にも継続的に認められ、一定期間土器様相を異にした集団が並行存在した可能性が高い」と述べている。これについては当初、新潟シンポ資料作成時に筆者も一致した見解として提示したところである。さらに中山氏は「A相、B相と表現してきた土器群は、決して同一様式内の地域差では表現できない差異を持っており、地域色というよりもむしろ大域圏の接触がこの地域で認められると考えたほうが理解しやすいと思う。」とも述べている。確かに2a期に関しては、中部高地系土器分布圏と駿河・西相模系土器分布圏に挟まれた地理的な環境を考慮すれば、当時の資料からもこのような現象も納得出来た。しかしその後の資料の増加に伴い、2b期の設定に関しては問題を残すこととなった。

筆者も新潟シンポ編年資料作成時には両者を「在来の集団」と「外来の集団」とも言い換えており、以後しばらくはそう理解していた⁽¹²⁾。しかし、その前提として駿河・西相模系、中部高地系土器が「在地」・「在来」の土器なのかという問題があり、結果として東海系は「在来の集団」に対する新しい「外来の集団」となってしまった。他地域の系譜をもつことを考えれば、少なくとも前者は周辺の土器様式の交流によって生まれた「在来(地)化した集団」とすべきであった。

また、2a期以前には、南アルプス市(旧甲西町)住吉遺跡⁽¹³⁾にみられるような東遠江菊川様式との接触があったが、2b期の場合はどうか。その後の資料の出土傾向から見れば、東海系土器はそれまで存在した土器分布圏の境界線を見捨てるかのように急激に甲斐に波及し、特にS字甕はきわめて短期間のうちに定着していったとみられる⁽¹⁴⁾。住居の形態も小半形から隅丸方形プランに変わるなど、2b期の東海系土器の動きは、その後の甲斐の生活様式そのものを大きく変えていったのであり、大塚遺跡・村前東A遺跡では、東海系土器が主体となる住居がある。S字甕A類の出現はそれだけ大きなインパクトがあった⁽¹⁵⁾。

一方、この間に新資料が相次いで確認され、ここまで明らかにしてきたように、東海系土器については、甲斐では出現の当初から型式変化の方向が東海のものとは異なり、特にS字甕は短期間のうちに定着していく。「古墳出現期の全国的な土器交流の始まり」⁽¹⁶⁾を背景に、前節で検討した様々な移動類別⁽¹⁷⁾が考えられるが、強いインパクトをもった東海系の拡散の中で、搬入品・忠実品の存在から継続的な人の動きがあったとはいえ、両集団が一定期間並存していたことは考えにくく、それまでの集団が東海系を積極的に受け入れたものと理解した方がよいのではないだろうか。したがって、中山氏の言うような「これら2つの系譜を持つ土器群は、次期になってようやく一体となって、甲斐の古式土器の地域色を作り出していく。」⁽¹⁸⁾のではなく、その前段階において東海系文化の定着は始まっていたのである。

中山氏が編年試案を発表した時点では、村前東A遺跡や後田遺跡でA類S字甕の出土が確認され始めた頃であり、その後の資料急増により評価が変わったことは、ここまで述べてきたとおりである。また6期B相に関しての併行関係は廻間Ⅰ式の中で捉えていたが、現状では廻間Ⅱ式前半の中で捉えられている。

これらのことから、2a期と2b期を同時期内の様相の違いとしてではなく、2b期の特徴を評価し、2a期と2b期の間に弥生土器と土器の境界を置き、これまでの2a期を弥生終末期とし、新たに2b期以降を古墳時代とすべきと結論づけた⁽¹⁹⁾。

六科丘遺跡と村前東A遺跡、両遺跡は直線距離にして約3km、お互いを望むことができる。この時期の被災火災住居の多さを考慮に入れ⁽²⁰⁾、両遺跡があたかも並存し、対峙するような緊張関係も想定できるが、明確にA相・B相が並存していたことを証明することはできない⁽²¹⁾。また村前東A遺跡の北に接する十五所遺跡の住居・

方形周溝墓出土の弥生土器は、編年的には中山編年の5期～6期のものであるが、これらを含めA相・B相としてとらえられるかどうかも疑問である。時代の流れとして受け止め、ひとつの大きな画期とすべきである。

両遺跡は甲斐地域の古式土師器の成立、さらには古墳時代の幕開けを告げる重要な遺跡であることに変わりはない。それは繰り返すまでもないが、S字甕A類に相当する資料が卓越していることであり、六科丘遺跡から村前車A遺跡への変化は、やはり大きな画期として評価しなければならない。そして村前東A遺跡は当該期のひとつの核になる集落であることは疑いなく、同じ頃に盆地内では大塚遺跡、坂井南遺跡、米倉山B遺跡が現れ、その後甲府盆地全域、峡北（現北杜市）地域へ、さらには当初の見解とは逆に駿河、信濃諏訪地域へ拡散し、後の甲斐銚子塚古墳出現の基盤を作り上げていったものと見られる。

したがって、前節で述べた通りS字甕A類の出現を最大の画期とし、2a期と2b期の間に弥生土器と土師器の境界を置く⁽²²⁾。そして「新潟シンガ編年」での2a期を弥生終末期とし、以降2b期を古墳時代Ⅰ期、3期をⅡ期、4期をⅢ期、5期をⅣ期とする。

ところで、村前東A遺跡Ⅳ区13号住、Ⅳa区58号住や西田遺跡第2次調査の例を見ると、これまではすべてⅣ期からと考えていたS字甕の肩部外面横ハケの消失段階については、Ⅲ期に遡ることは確実となっている。横ハケは消失しているものの、体部球胴であり（Ⅳ類）、次のⅣ期に出てくる肩が下がった長胴のもの（Ⅳb類）よりは明らかに古い形態である。以上の検討から、Ⅲ期をさらに古段階と新段階に分け、肩部外面横ハケの消失する段階を新段階とし、Ⅳ期まで両者は共存するものと思われる⁽²³⁾。新段階は独自品で占められ、さらに変容していくことは既に述べたとおりである。

以上、古式土師器の成立について、第18・19図で弥生終末期から古墳前期の主要な器種の変遷を示し、各期の基準となる資料を第1表にまとめた。

4. 方形周溝墓出土の土器

弥生後期から古墳前期にかけての甲府盆地の墓制については、上の平遺跡方形周溝墓群から小平沢古墳、大丸山古墳、甲斐銚子塚古墳の出現に至る過程について、既に多くの論考が用意されている。しかし、前方後方墳である小平沢古墳については、墳丘採集のS字甕以外に正確な出現時期を割り出すことが出来ないため、甲斐の古墳出現期の基盤をなす弥生時代期から連続と続く墓制である方形周溝墓出土の土器を整理しておく必要がある。上記土器編年を最初に設定した以降、良好な資料を出土する方形周溝墓も多く発見されており、弥生土器と土師器の境界の問題を考えると、方形周溝墓出土の土器も重要であることは明らかである。

甲斐の方形周溝墓については中山氏の一連の研究があるが⁽²⁴⁾、出土土器については良好な資料がさらに増加し、再度整理しておく必要があろう。ここでは特に壺・高杯について取り上げ、前述の編年に即して考えてみたい（第20・21図）。

まず、盆地東南部の曽根丘陵であるが、125基の方形周溝墓が発見されたことで知られる甲府市（旧中道町）上の平遺跡⁽²⁵⁾では、幅広の複合口縁部に棒状浮文を貼付したもの、縦列沈線文を施したもの、折り返し口縁のもの、肩部に結節縄文を施し、さらに円形浮文を貼付したもの、単純目縁の小型壺など、駿河から西相模の影響が強いことがわかるが、高杯は中部高地系である。直口縁の壺は内・外面に丁寧なミガキが施されている。

上の平遺跡の南に隣接する宮の上遺跡⁽²⁶⁾では、1980・81年度（昭和55・56）の調査で発見された9基の方形周溝墓のうち、9号墓はB1型墳⁽²⁷⁾で、出土した壺は拡張垂下口縁に棒状浮文を貼付した下膨れの体部で伊勢湾系のパレススタイル壺の模倣とみられるが、体部外面はミガキ調整のみで文様は施されていない。

曽根丘陵西端に位置する西八代郡市川三郷町（旧三珠町）上野遺跡⁽²⁸⁾のB1型墳である1号方形周溝墓は、複数の系譜をもつ壺が出土したことで知られる。畿内系とみられる頸部が直立する二重口縁壺、東海系加飾壺、駿河系の折り返し口縁のもの、大塚式系、北陸系と多彩である。

曾根丘陵中央部では、甲斐最古級のS字甕が出土した米倉山B遺跡で、単独で存在する1号方形周溝墓から二重口縁壺が出土している。直立する頸部から大きく開く二重口縁で、球形の体部をもつ。甲府市(旧中道町)東山北遺跡²⁹ 2号方形周溝墓は県内では最大の規模をもつもので、伊勢型二重口縁壺³⁰、複合口縁の壺、折り返し口縁の壺、碗形の杯部に脚部が大きく開く高杯、小型丸底鉢に脚をつけたとみられる高杯が出土している。他に筆者分類S字甕IVb類もある。笛吹市(旧東八代郡旧境川村)諏訪尻遺跡³¹で確認された方形周溝墓からは広口壺が出土している。

次に盆地東部地域であるが、西田遺跡では発見された5基の方形周溝墓のうち、A区1号墓では単純口縁の壺、屈折脚高杯、小型高杯が出土している。同じ甲州市(旧塩山市)の下西畑遺跡³²では4基の方形周溝墓が発見されたが、そのうちの3・4号墓がBⅠ型墳である。4号墓からは短頸壺、二重口縁壺が出土しており、これらの他に肩部外面の横ハケが消失したIVb類S字甕が共伴している。山梨市の武家遺跡³³では 基の方形周溝墓が発見され、肩部に縄文を施した駿河系の折り返し口縁壺が出土している。

盆地中心部に目を向けてみると、甲府市内では塩部遺跡³⁴ではこれまで13基の方形周溝墓が確認され、C地区1号墓では在地系の壺や東海系加飾壺、SY03では直口壺や東海系有段高杯などが出土している。榎田遺跡³⁵では、4基の方形周溝墓から良好な資料が多数出土した。1号墓(BⅠ型墳)から二重口縁壺、単純口縁壺、直口縁壺、東海系の有段高杯などがある。2号墓からは底部穿孔の二重口縁壺、有段する口縁をもつ壺、短頸壺などが、4号墓からは直立する頸部から大きく開く口縁部に球形の体部に籠目の隆帯を貼付した壺など、他にも多数の土器がある。桜井畑遺跡³⁶では3基の方形周溝墓が発見され、1号墓からは米倉山B遺跡1号墓同様の二重口縁壺が、2号墓からは二重口縁壺、直口壺、単純口縁の壺がそれぞれ出土している。ヂクヤ遺跡³⁷の方形周溝墓からは、在来系の壺、肩部に縄文を施した駿河系の壺、パレススタイル壺など多くの土器が出土しており、Ⅱ類のS字甕もある。

甲斐市(旧敷島町)松ノ尾遺跡³⁸では、方形周溝墓6基が発見され、6号墓からは上の平遺跡出土例を超える高さ84cmの大型赤彩壺が出土している。

盆地北西部では坂井南(大原)遺跡(韭崎市)³⁹1号方形周溝墓からパレススタイル壺が出土している。口縁部の垂下が消失したもので、擬凹線文も少ない。廻間Ⅱ式後半に併行するものとみられる。この他、BⅠ型の2号方形周溝墓もある。北杜市(旧長坂町)北村遺跡⁴⁰は、北巨摩地域では貴重な6基の方形周溝墓が発見され、しかも墳丘が残るもので、造墓当時の景観が偲ばれる。1号墓・2号墓・3号墓の墳頂からは小型壺・高杯がまとまって出土し、2号墓の周溝からは二重口縁壺などが、3号墓からは頸部に櫛描文を施した壺も出土している。同市(旧明野村)大日川原遺跡⁴¹では 基の方形周溝墓12基などが発見され、4号墓から大廓式の壺などが出土している。

以上、方形周溝墓出土の壺・高杯について見てきたが、次に築造時期について確認しておく。

まず弥生終末期に始まる上の平方形周溝墓群の造墓であるが、その期間について37号墓の直口壺から、造墓活動は従来通りⅡ期をもって終焉する。宮の上遺跡9号墓も同時期である、また、上野遺跡1号墓は「新潟シンボ編年」ではⅢ期(4期)に位置付けていたが、赤塚次郎氏による加飾壺の検討から⁴²Ⅱ期に上がる。

盆地北東部では、西田遺跡A区1号墓、下西畑4号墓はⅣ期、武家遺跡1号墓はⅢ期新段階、盆地中央部では塩部遺跡C地区1号墓はⅠ期、ヂクヤ遺跡はⅡ期、塩部遺跡SY03はⅢ期新段階、松ノ尾遺跡6号墓はⅠ期となる。

盆地北西部では、坂井南(大原)遺跡1号墓はⅡ期の終わり頃と考えられ、北村遺跡1号墓・3号墓の高杯については中部高地系の系譜を引くものと考えられ、また小型壺の形態からも、報告にもある通りⅡ期あるいはⅠ期まで遡る可能性もあるが、高杯については信濃では古墳時代初頭まで残存していることから、Ⅲ期の範疇で考えておく。逆に2号墓については東海系高杯、二重口縁壺の形態からⅣ期まで下げる必要はなく、Ⅲ期の中に収

まるであろう。大日川原遺跡4号墓はIV期となる。

この他、榎田遺跡2号墓はII期、米倉山B遺跡1号墓・塩部遺跡SY03・桜井畑1号墓・榎田遺跡1・4号墓はIII期古段階、東山北遺跡2号墓・桜井畑遺跡2号墓はIV期であり、従来の編年観と変わることはない。

これらの方形周溝墓の傾向として、東海地域に起源を持つBⅠ型墳が少しずつ存在することあげられる。II期からIV期までであるが、I期においてS字甕A類相当が多く出土しているながら、墳墓にその影響が見られないことも特徴である。

上の平遺跡での造墓が終わるII期になると、盆地東部・中央部・北西部といった他の地域でも造墓活動が行われ、弥生時代にも増して活発になる。集落の様相とは少し遅れて駿河・西相模系に代わって、II期には東海系の影響が見え始める。そして次のIII期には新しい流れを受けて古墳が出現する。

以上、集落遺跡出土土器と墳墓出土土器を第22図にまとめた。

5. 併行関係と補正

ここまでの土器様相について、「新潟シンボ編年」との対応関係を第2表に、さらに畿内⁽⁴³⁾・北陸⁽⁴⁴⁾・東海⁽⁴⁵⁾との現在の併行関係とともに第3表に示した⁽⁴⁶⁾。

ここまで見てきたとおり、甲斐の古墳前期土器編年については、繰り返すまでもなく東海系土器の波及と定着を重要な画期とし、基本的には廻間編年、松河戸（Ⅰ式）編年に対比させながら今日に至っているが、前期後半から中期初頭にかけては、後述するように未だ不安定な部分がある。さらに実年代については、理化学的年代測定法が高精度な体系になったことにより、これを積極的に取り入れた廻間編年の実年代観はそれまでより50年ほど引き上げられた⁽⁴⁷⁾。一方、庄内式の年代は現在も揺れ動いているとのことであるが⁽⁴⁸⁾、布留式は3世紀後半から4世紀後半にかけての期間が有力と考えられている⁽⁴⁹⁾。これらを考慮すると、筆者編年の最大の画期とした古墳Ⅰ期からの時代区分や年代観にも見直しが必要であることを痛感するに至った⁽⁵⁰⁾。

第2・3表を見てもわかるように、筆者による甲斐の古墳時代土器編年については、1993年（平成5）の「新潟シンボ編年」での設定を見直し1998年（平成10）に改めたものを、2007年（平成19）以降⁽⁵¹⁾段階的に引き下げている。それは画期の変更を意味しているが、その背景には資料の増加に伴い周辺地域の動向を検討した結果によるものである。

まず、古式土師器の成立時期について。当初筆者は、2b期（現在の古墳Ⅰ期）を廻間Ⅰ式3・4段階併行（1994年には廻間Ⅰ式3・4段～廻間Ⅱ式1段階併行に補正）とし、「新潟シンボ編年」の第1の画期（4期—中画期）⁽⁵²⁾、「東海系土器の第1次拡散期」（赤塚1990）に対応するものとしていた。米倉山B遺跡出土のS字甕A類に、長胴で体部内面をハケ調整した古相を呈するものがあつたことを指標としており、東日本でいち早くS字甕が波及した地域と考えていた。その後、甲府盆地西部において村前東A遺跡や大塚遺跡などで新たな資料が相次いで発見され、これらの遺跡ではS字甕A類とともに有段高杯や加飾壺、ヒサゴ壺など、東海系土器の多くの器種が出土したが、高杯の型式を考慮すれば、これらは廻間Ⅱ式前半を中心に対比できるものであり⁽⁵³⁾、廻間Ⅰ式まで遡るものは見られないことから、2007年以降は古墳Ⅰ期を廻間Ⅱ式前半併行—「新潟シンボ編年」5期—に引き下げ、修正した。

また4期（現在の古墳Ⅲ期）は、「新潟シンボ編年」の第2の画期（7期—小画期）にあたるが、1994年（平成6）の段階で「東海系土器の第2次拡散期」に呼応させる形で、廻間Ⅲ式1～3段階併行としていたものを、廻間Ⅱ式4段階～廻間Ⅲ式3段階併行と補正した。その後、1999年には古段階と新段階に細分し、2007年（平成19）以降はこれらを廻間Ⅲ式併行に引き下げた。これらの間にある3期（現在の古墳Ⅱ期）は廻間Ⅱ式併行からⅡ式2・3段階併行に、現在はⅡ式後半併行となっている。

さらに5期（現在の古墳Ⅳ期）は「新潟シンボ編年」の第3の画期（9期—中画期）にあたるが、廻間Ⅲ式4

段階～松河戸Ⅰ式Ⅰ段階併行としていたものを、2007年以降は松河戸Ⅰ式前半期併行とし、2014年（平成26）11月に開催されたシンポジウム「古代東国と畿内王権―甲斐中道古墳群の検討から―」（以下、「山梨古墳シンポ」とする）⁶⁴では松河戸Ⅰ併行とさらに引き下げた。

これら一連の「引き下げ」には、廻間編年が広域編年において古くなっているという指摘⁶⁵の影響もある。しかしながら、古墳Ⅰ期の成立が廻間Ⅰ式後半併行に遡る可能性を全く否定している訳ではなく、「新潟シンポ編年」の4期の画期は重要なものと考えているが、古墳Ⅱ期、古墳Ⅲ期古段階までは東海系の影響が強いことも揺るがない。Ⅲ期新段階での小型精製土器群の動きは依然としてはつきりせず、布留式中段階新相併行にならないと見えてこない。その併行期にあたる松河戸Ⅰ式Ⅰ段階からⅡ段階への変化は、漆町編年10群（10期）から11群（11期）への大画期⁶⁶であり、加納編年でも「重大な器種構成の変化」⁶⁷をもとに西北出期から松河戸期への重要な画期として位置付けている。赤塚編年は田嶋編年、加納編年と画期が異なることは既に指摘されているが、前期から中期への移行期にあたるこの画期を巡っての批判は特に強い⁶⁸。松河戸様式と甲斐古墳Ⅳ期との併行関係については、筆者も当初この画期を重視していたが、2014年の「山梨古墳シンポ」では松河戸Ⅰ式2～4段階を含めて甲斐Ⅳ期併行とし、併行関係も誤った理解により、次の甲斐Ⅴ期との関係を含め曖昧なものとなり、この画期については再度改めることとした。そして、筆者が2000年（平成12）まで提示していた廻間Ⅲ式4段階から松河戸Ⅰ式Ⅰ段階に併行に再度修正する方向でいたが、現在の古墳Ⅲ期新段階では依然として小型精製土器群、あるいは屈折脚高杯等畿内系の存在が明確ではないことから、2015年（平成27）には廻間Ⅲ式後半段階は含めず、松河戸Ⅰ式Ⅰ段階・布留式中段階新相併行とした⁶⁹。ただし、今後の状況によっては、古墳Ⅲ期新段階を含めた同一時期としてさらに再編される可能性も残されている。

実年代観であるが、これまでの研究成果から廻間Ⅱ式後半と漆町6～7群、庄内式新段階～布留式古段階、布留0式が概ね併行し、この時期が3世紀中頃と考えられている。甲斐では古墳Ⅱ期の段階であるが、全体を四半期ほど引き上げる。これにより、甲斐編年の古墳Ⅰ期、廻間Ⅱ式前半、漆町5群（5期）は3世紀前半、古墳Ⅱ期は3世紀中頃となり、古墳Ⅲ期、廻間Ⅲ式、漆町7～9群は3世紀第4四半期～4世紀第1四半期頃となる。なお、古墳Ⅰ期はこれまで通り、古式土師器の成立段階として最も重要な画期であるが、さらに時代性を重視し「出現期」とする⁷⁰。

一方、前期の後半について、これまで定点として4世紀後半（第3四半期）としてきた古墳Ⅳ期はもう1段階、4世紀第2四半期まで遡ることとなり、古墳Ⅴ期が4世紀後半となる。併行する漆町10群から11群への画期は、小型精製土器群がなくなり、新たに小型丸底壺の出現等を指標とする「機能を反映したBタイプの画期」⁷¹であり、筆者もこの段階に前期から中期への画期を求めたい。

註

- (1) 中山誠二 1986「甲府盆地における古墳出現期の土器様相」『山梨考古学論集Ⅰ』山梨県考古学協会
- (2) 小林健二 1993「山梨県域の土器様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- (3) 田嶋明人 1986「Ⅳ考察―漆町遺跡出土土器の編年の考察―」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
- (4) 赤塚次郎 1990「考察」『廻間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- (5) 関根孝夫ほか 1985『六科丘遺跡』櫛形町教育委員会ほか
- (6) 保坂康夫 1993『平野遺跡』山梨県教育委員会
- (7) 山下孝司 1991『下横屋遺跡』韮崎市教育委員会ほか
- (8) 山下孝司・伊藤正彦 1997『坂井南遺跡Ⅲ』韮崎市教育委員会ほか
- (9) 佐々木満 2005『塩部遺跡Ⅱ』甲府市教育委員会ほか

- (10) 小池岳史 2001「諏訪地方湖南地域の後期弥生土器―茅野市家下遺跡の甕形土器からみた箱清水式土器文化圏の小地域と地域差」『長野県考古学会誌』93・94号 長野県考古学会
小池岳史 2010「諏訪湖南地域の後期弥生土器―長野から山梨に広がる『家下・金の尾』型土器を考える―」『中部高地南部における櫛形文系土器の拡散 資料集』山梨県考古学協会
- (11) 中山誠二 1993「甲斐弥生土器編年の現状と課題―時間軸の設定―」『研究紀要』9 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- (12) 註(2)に同じ。
- (13) 新津健 1981「住吉遺跡」甲西町教育委員会 これをもって「住吉式」というような後期のある段階の典型として様式名とすることには問題がある。
- (14) 小林健二 1998「山梨県出土の東海系土器―波及と定着と変容―」『山梨県考古学協会誌』第10号 山梨県考古学協会
- (15) 筆者はS字甕A類の波及ルートについては、信濃を経由するルートと駿河から富士山麓を経由するルートを検証し、当初駿河経由は信濃経由より遅れることを想定したが、米倉山B遺跡8号住居跡上層出土のS字甕A類を見ると、実際には時間差はなく、むしろ早いことが考えられる。
- (16) 加納俊介 1991「2土師器の編年 4 東海」『古墳時代の研究6 土師器と須恵器』雄山閣出版
- (17) 森岡秀人 1993「土器移動の諸類系とその意味」『転機』4号―第8回東海埋蔵文化財研究会論考編―
- (18) 註(11)に同じ。
- (19) 小林健二 1998「甲斐における古式土師器の成立―3・4世紀の土器編年と墳墓―」『専修考古学』第7号 専修大学考古学会
- (20) 中山誠二 1993「Ⅲ山梨県域における集落・墳墓の概要」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- (21) 小林健二 2000「六科丘から村前東へ―甲斐における古式土師器の成立・補考―」『山梨県考古学協会誌』第11号 山梨県考古学協会
- (22) 稲垣自由 2013「甲斐における4期の画期」『東生』第2号 東日本古墳確立期土器検討会
稲垣氏は、土器系統の継続性から把握できる土器分布圏の変動、外来系土器出現時期の把握、主要器種構成が変化する時期の確認に注目し、画期を検討している。
- (23) 小林健二 2000「甲斐のS字甕を考える」『第8回東海考古学フォーラム S字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会実行委員会
- (24) 中山誠二 1987「弥生時代終末における上の平遺跡の集落構造」『研究紀要』4 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
中山誠二 1989「甲斐盆地の方(円)形低墳墓」『シンポジウム古墳出現の謎―3～5世紀の日本列島と甲斐―』山梨県考古学協会
中山誠二 1989「中部・関東地方における弥生集団墓の構成について」『山梨考古学論集 Jn 山梨県考古学協会』
中山誠二 1989「甲府盆地における方形低墳墓残存に関する一考察」『甲斐の成立と地方的展開』角川書店
中山誠二他 1990『桜井畑遺跡A・C地区』山梨県教育委員会
中山誠二 1992「甲斐の方形周溝墓と前期古墳」『シンポジウム西相模の3・4世紀―方形周溝墓をめぐる―』東海大学校地内遺跡調査団
- (25) 中山誠二 1987『上の平遺跡(第4・5次調査)』山梨県教育委員会
小林広和・里村晃一 1991『上の平遺跡(第1・2・3次調査)』山梨県教育委員会

- (26) 小林広和ほか 1996『立石・宮の上遺跡』山梨県教育委員会
- (27) 赤塚次郎 1992「東海のB型墳」『シンポジウム西相模の3・4世紀—方形周溝墓をめぐって—』東海大学校地内遺跡調査団
赤塚次郎 1992「東海系のトレース—3・4世紀の伊勢湾沿岸地域—」『古代文化』44 巻第6号 (財) 古代学協会
- (28) 堀ノ内泉 1989『上野遺跡』三珠町教育委員会
- (29) 末木健ほか 1993『東山北遺跡』山梨県教育委員会
- (30) 田口一郎 1981「(2) 二重口縁壺の系譜の検討」『元島名將軍塚古墳』高崎市教育委員会
- (31) 坂本美夫・野代恵子 2000『諏訪尻遺跡』山梨県教育委員会ほか
- (32) 石神孝子 2002『下西畑遺跡・西畑遺跡・影井遺跡・保坂家屋敷墓』山梨県教育委員会ほか
- (33) 長沢宏昌ほか 2004『中沢遺跡・武家遺跡』山梨県教育委員会ほか
- (34) 村石眞澄 1996『塩部遺跡』山梨県教育委員会
佐々木満 2005『塩部遺跡Ⅱ』甲府市教育委員会ほか
- (35) 高野玄明 1995『榎田遺跡』山梨県教育委員会ほか
- (36) 註 (24) 1990に同じ。
- (37) 志村憲一・望月秀和 2003『デクヤ遺跡』甲府市教育委員会
- (38) 長谷川哲也 2016『松ノ尾遺跡 15』甲斐市教育委員会ほか
- (39) 山下孝司 1995『坂井南(大原)遺跡』韮崎市教育委員会
- (40) 小宮山隆 1996『北村遺跡』長坂町教育委員会ほか
- (41) 高田賢治・内藤かおり 2001『大日川原遺跡』明野村教育委員会ほか
- (42) 赤塚次郎 1995「壺を加飾する」『考古学フォーラム』7 考古学フォーラム
赤塚次郎 1997「2 廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』(財) 愛知県埋蔵文化財センター
- (43) 森岡秀人・西村歩 2006「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題—最新年代学を基礎として」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
西村歩 2008「中河内地域の古式土師器編年と諸問題」『邪馬台国時代の摂津・河内・和泉と大和』香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館
西村歩 2011「土師器の編年 ③近畿」『古墳時代の考古学1 古墳時代史の枠組み』同成社
- (44) 註 (3) 及び
田嶋明人 2008「古墳確立期土器の広域編年 東日本を対象とした検討(その1)」『石川県埋蔵文化財情報』第20号 財団法人石川県埋蔵文化財センター
田嶋明人 2009「古墳確立期土器の広域編年 東日本を対象とした検討(その2)」『石川県埋蔵文化財情報』第21号 財団法人石川県埋蔵文化財センター
- (45) 註 (4) (16) (42) 及び
赤塚次郎 1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎・早野浩二 2001「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第2号 愛知県埋蔵文化財センター
早野浩二 2011「土師器の編年 ④東海」『古墳時代の考古学1 古墳時代史の枠組み』同成者
加納俊介 1991「土師器の編年 4 東海」『古墳時代の研究 6 土師器と須恵器』雄山閣
早野浩二 2013「『庄内式』の成立、『漆町4群』の画期と東海の土器編年」『東生』第2号 東日本古墳確立期土器検討会
- (46) 小林健二 2015「甲斐の古墳時代と土器—編年と移動を考える—」『山梨県考古学協会誌』第23号 山梨

県考古学協会

- (47) 赤塚次郎 2006a 「東海系土器と東日本の墳丘墓」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
- (48) 森岡秀人 2014 「巻頭言 近年の庄内式期暦年代観の変容をめぐっての雑感」『古墳出現期土器研究』第2号 古墳出現期土器研究会
- (49) 註 (43) 西村 2011 に同じ。
- (50) 小林健二 2014 「2・3世紀、甲斐の集落と墳墓」『邪馬台国時代の甲・信と大和』香芝市二上山博物館友の会
- (51) 小林健二 2007 「大陸中央—甲斐地域を中心に—」『月刊考古学ジャーナル』No.554 ニューサイエンス社
- (52) 田嶋明人 2013 「4期の画期をめぐって」『東生』第2号 東日本古墳確立期土器検討会
- (53) 赤塚次郎 2006 「甲斐銚子塚古墳と東海系文化」山梨県立考古博物館第24回特別展講演会資料
赤塚次郎 2014 「2・3世紀の甲・信と東海地域」『邪馬台国時代の甲・信と大和』香芝市二上山博物館友の会
- (54) 小林健二 2014 「甲斐の前期古墳をめぐる検討課題—土器編年から見た中道古墳群の位置付け—」『古代東国と畿内王権—甲斐中道古墳群の検討から—』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター・甲府市教育委員会
- (55) 北島大輔 2000 「古墳出現期の広域編年—尾張低地部編年の提示、近畿・北陸地方との併行関係を中心に—」『S字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会事務局
- (56) 註 (44) 田嶋 2008 に同じ。
- (57) 註 (45) 加納 1991 に同じ。
- (58) 加納俊介 1997 「廻間式か元屋敷式か—東国から見た弥生土器と土師器の境界—」『西相模考古』第6号 西相模考古学研究会 及び
註 (44) 田嶋 2009 に同じ。
- (59) 註 46 に同じ。
- (60) 田中新史 1984 「出現期古墳の理解と展望—東国神門五号墳の調査と関連して」『古代』第77号 早稲田大学考古学会 実年代観は異なるが、田中新史氏の5期区分を参考としたい。
- (61) 田嶋明人 1995 「土器と『古墳時代』」『北陸古代土器研究』第5号 北陸古代土器研究会

第4節 北陸系土器の様相

1. はじめに

前節まで、S字甕に代表される東海系土器の波及・定着・変容という流れのもとに時間軸を設定し、古式土師器の成立について検討してきた。

一方、東海系土器にやや隠れた存在なのが北陸系土器である。南関東地域では比田井克仁氏が早くから注目しており⁽¹⁾、長野県中野市七瀬遺跡では、東海系土器ばかりではなく、北陸系土器が主体的に流入する段階があることが指摘されている⁽²⁾。その後上野や東海をはじめ、各地その存在が注目されるようになった⁽³⁾。

甲斐では中山誠二氏に取り上げ⁽⁴⁾、筆者も取り上げたことがある⁽⁵⁾。しかし個々の資料の提示にとどまり、あくまでも東海系・畿内系に次ぐ存在としてしか捉えてこなかった。この間各地でも資料は増え続け、そして何よりも発信源である北陸地域での研究が進み、細かな地域ごとの編年網が構築されていった。

本節では、甲斐地域出土の北陸系土器について改めて取り上げ、当該地域の古墳出現期土器のもう一つの様相を探ることとする。

2. 甲斐の北陸系土器

甲斐の北陸系土器は、甲府盆地（国中地域）を中心に16遺跡ほどで確認できる。以下、盆地北西部・西部・中心部・南部・東部・北東部の順で見えていくことにする。共伴の土器も提示するように努めたが、遺構外出土や溝出土のもの、同じ遺構であっても明らかに時期の異なるものについては、北陸系のみを取り上げた。

ところで、淵源地である北陸の土器様相、特に甕の特徴から大きく南西部（越前東部・加賀南部）と北東部（加賀北部・越中・越後）の2地域に分けられる。しかし器種構成においては、両地域共有の型式も多いことが指摘されており⁽⁶⁾、移動先で単体で出土したものについては「南西部系」か「北東部系」かの判別は困難である。よって詳細な系譜に関しては、大まかな傾向として捉えざるをえないものが多い。なお、編年の位置関係については、南西部系は田嶋明人氏の加賀漆町編年⁽⁷⁾に、北東部系は坂井秀弥氏・川村浩司氏の越後編年⁽⁸⁾に、そして甲斐編年にそれぞれ対比させる。

（1）坂井南遺跡（韮崎市：第5図4、第9・23～26図）⁽⁹⁾

前節まで既に多くの土器を取り上げてきたが、北陸系に注目して見ていく。

第1次調査4号住居跡で有段口縁甕（6）が出土している。共伴している土器は、筆者分類Ⅱ類・Ⅲ類のS字甕（7・8）、台付甕（9～11）、小型器台（7）、蓋（13）、有孔鉢（4・5）、壺類（1～3）であり、時期的には漆町6・7群期Ⅱ-2期-古墳Ⅱ期である。

第3次調査5号住居跡からは、有段口縁甕（43）が出土している。42は北東部系くの字口縁甕（以下千種甕）の影響を受けた可能性がある。他には畿内系を模倣したとみられる甕（46）、小型手捏ね土器（45）、単純口縁壺（41）、高杯（44）が共伴している。時期は同じく漆町6～7群期Ⅱ-2期-甲斐Ⅱ期とみられる。

11号住居跡からの出土土器は47の器台1点のみである。有透装飾器台の省略形と考えられているもので（18）、器受部底部で屈曲し、大きく外反する口縁をもち、端部はつまみ上げてある。下半には透かし孔を巡らす。時期的には漆町6～7群期Ⅱ-2期-甲斐Ⅱ期であろうか。

26号住居跡からは、口縁部が器受部底部から屈曲せず外傾する小型器台（51）が確認されている。北東部系に類似するものがあるが、詳細は不明である。他の土器を含めいずれも覆土中から出土の破片であるため、時期の比定は難しいが、漆町6～7群期Ⅱ-2期-古墳Ⅱ期であろうか。また27号住居跡の一括資料の中にも、同様

な小型器台(59)がみられる。

既に取り上げた 39 号住居跡(第9図)からは、器受部の途中で屈曲・外反し、中程や口縁外反部に透かし孔が空けられた器台(156、以下本論では多孔器台と呼ぶ)が出土している。装飾器台がさらに省略化され、波及した地域で定着した器種と考えられ、古墳時代前期の中頃から後半にかけて各地で散見できる。筆者分類のS字甕Ⅲ類(148～151)や、台付甕(152)、蓋(154)、小型高杯(155)、大型の鉢(153)が共伴している。時期的には漆町7～8群期―Ⅲ期―甲斐Ⅲ期古段階に比定される。

41 号住居跡では多くの土器が出土し、一括資料として報告されている。これらの中に多孔器台(38)が確認できる。共伴の器種には筆者分類S字甕Ⅳ類(29)、甕類(22・23・27・28・30・)、蓋(24・26)、鉢類(32・34・36・37)、外曲口縁小型器台(39・40)、中部高地系とみられる高杯(35)、壺類(14～21)があり、漆町10群期―Ⅳ期―古墳Ⅳ期のものである。

54 号住居跡では、有段口縁の甕(61)が出土している。漆町6～7群期―Ⅱ-2期―甲斐Ⅱ期のものであろうか。

6次調査では、22 号住で外曲口縁器台(68)が、7 号溝から有段口縁甕(73)が出土しており、漆町6～7群期―Ⅱ-2期―甲斐Ⅱ期のものとみられる。

4号方形周溝墓からは壺類(87～108)、甕類(109～162)、高杯(163～176)、器台(177・178)、鉢類(179～182)など多量の土器が出土しているが、このうち北陸系は壺(102・103)、有段口縁甕(131・132・134・135・137・138)が確認できる。S字甕(147～162)は平底のもの(158・159)を含め筆者分類Ⅰ類～Ⅲ類があり、住居など重複する遺構のものが混在している可能性があるが、漆町6～7群期―Ⅱ-2期―古墳Ⅱ期に収まるものと見られる。

大原1号方形周溝墓からも、有段口縁甕の破片(185)が出土している。前節でも取り上げた共伴するパレススタイル壺(183)は、赤塚編年廻間Ⅱ式期後半―加納編年廻間期新相に比定され、漆町6～7群期―Ⅱ-2期―古墳Ⅱ期に併行する。

(2) 長田口遺跡(南アルプス市:第5図8、第26図)⁽⁹⁰⁾

弥生時代終末期から古墳時代初頭の住居跡6軒が発見されているが、4号住居跡で有段口縁の鉢(188)の出土が知られている。共伴する土器には有段口縁甕と受口状口縁に刺突を施した甕があり、併行関係からすると、漆町5群期―Ⅱ-1期―古墳Ⅰ期になる可能性もあろう。

(3) 村前東A遺跡(南アルプス市:第5図10、第10・11・26図)⁽⁹¹⁾

坂井南遺跡とともに、古墳時代前期を通じて営まれた大規模集落である。

北陸系土器については、第2節で取り上げたⅣa区58号住居跡から多孔器台が出土しており(第10図178～180)、時期は漆町9群期―Ⅱ-3～3期―甲斐Ⅲ期新段階である。また、Ⅳa区68号住居跡では千種甕とみられるもの(211・212・220)があり、こちらは漆町6～7群期―Ⅱ-2期―甲斐Ⅱ期のものである。

Ⅰ区6号溝では有段口縁甕(189)、南西部系を象徴する有段擬凹線甕(190～193、以下月影甕)、多孔器台(194)が、Ⅰb区9号溝からは有段口縁鉢(200)が見られるが、他は遺構外からの出土である。月影甕(195～199・204・205・206・207)と有孔鉢(202)、有段口縁鉢(208)、壺(208)があり、時期は漆町5～6群期―Ⅱ-1～2期―古墳Ⅰ～Ⅱ期である。中でも207は器形がわかる貴重なものである。体部外面はハケ調整で、肩部外面に列点文が施されているが、内面はヘラケズリではなく指ナデであり、在地で製作されたものである。

(4) 寺部村附第6遺跡(南アルプス市:第5図11、第12図)⁽⁹²⁾

1号住居跡において千種甕(270)、器台(269)が多く、筆者分類Ⅲ類S字甕(276~286)や東海系高杯(274・275)、在地系の壺(263・264)、二重口縁壺(265)などと共伴しており、漆町7~8群期-Ⅱ-3期-古墳Ⅲ期古段階のものである。

(5) 榎田遺跡(甲府市:第5図14、第27図)⁽¹³⁾

前節でも取り上げたが、古墳時代前期の方形周溝墓4基から良好な土器が多数出土している。このうちBⅠ型墳⁽¹⁴⁾の1号方形周溝墓では、周溝から出土した64点の土器が報告されているが、ここでは主なものを取り上げておく。北陸系は有透装飾器台(232・233)がある。232は口縁部が短くくの字に開いており、北陸のものとは異質な感じを受ける。また214の口縁部が直立する壺は、石川県小松市漆町遺跡⁽¹⁵⁾白江ネンブツドウ地区7号溝下層や、北陸系が多数出土している群馬県渋川市有馬遺跡⁽¹⁶⁾234号住居跡などに類似品がある。その他は筆者分類Ⅱ~Ⅲ類のS字甕(219~222)、鉢(227~229)、台付甕(25~218)、中部高地系の高杯(223・226)、東海系の高杯(225)、小型器台(230・231)、二重口縁壺(211・212)、壺(209・210・213)などがある。漆町6~7群期-Ⅱ-2期-古墳Ⅱ期に位置づけられよう。

さらに遺構外からは、赤彩された有透装飾器台(234)が出土している。かなり忠実に模倣されたもので、漆町6~7群期-Ⅱ-2期-古墳Ⅱ期であろうか。また北陸北東部や東北南部⁽¹⁷⁾でみられる、外反口縁小型器台に類似するもの(235)がある。器受部底部が小さく貫通孔があり、むしろ外曲口縁器台に近い。

(6) 塩部遺跡(甲府市:第5図15・第28図)⁽¹⁸⁾

古墳時代前期の13基の方形周溝墓のうち、3基から北陸系土器が出土している。

SY03は、周溝内からウマの歯が出土し、注目を集めた⁽¹⁹⁾。出土土器のうち239は千種甕の影響が窺え、243の鉢は有段口縁状になっている。248は器台とみられる脚部であり、249は多孔器台である。他には台付甕(240・241)、直口縁の壺(236~238)、東海系の高杯(243~245)などが出土している。

SY04では、下膨れの壺(254)、北東部系の大型高杯に類似した器台(267)、多孔器台(266)が出土している。筆者分類Ⅲ類S字甕(255~259)、台付甕(260・261)、高杯類(262~265)、二重口縁壺(250)、複合口縁壺(251)、直口縁壺(253)、小型器台(268~270)なども同時期のものであろう。

SY06では有段口縁甕(278)があり、276の甕・279の高杯(器台か)も北陸系の可能性がある。

これらの土器群にはやや時間幅があるように見受けられるが、おおむね漆町9群期-Ⅲ期-甲斐Ⅲ期新段階に位置づけられよう。

一方、C地区14号竪穴建物跡では、有段口縁甕(281・282)が筆者分類S字甕Ⅰ類(283)、台付甕(280・284)、蓋(286・287)とともに出土しており、16号溝では高杯(288)が出土している。これらは漆町5群期-Ⅱ-1期-古墳Ⅰ期のものである。

(7) 上野遺跡(市川三郷町:第5図18、第29図)⁽²⁰⁾

BⅠ型墳である1号方形周溝墓からは、北陸系では有段口縁の小型壺(295)があり、他に畿内系とみられる頸部が直立する二重口縁壺(289~291)、東海系加飾壺(292)⁽²¹⁾、駿河系の折り返し口縁のもの(294・297)、大廓式系(293)と多彩である。時期は漆町6~7群期-Ⅱ-2期-古墳Ⅱ期である。

(8) 東山北遺跡(甲府市:第5図20、第30図)⁽²²⁾

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての住居跡27軒、方形周溝墓2基、溝などが調査されている。

27号住居跡では、覆土中から多くの北陸系土器片が出土している。月影甕(321)、有段口縁甕(322・324~

328)、小型鉢(323)、千種甕(330・331)がある。329は山陰系かもしれない。在来系の台付甕(333・335)、折り返し口縁の壺(315・316)、蓋(332)などが共伴する。

2号方形周溝墓は、甲斐では最大クラスの規模をもつもので、前節で見たとおり築造時期は甲斐Ⅳ期である。27号住居跡を含む弥生時代後期から古墳時代初頭頃の住居跡が埋没後に築造されたとみられ、北陸系土器を含む当該期の土器片も多く出土しているが、ここでは北陸系のみを取り上げた。月影甕(336～343)、千種甕(346・348・349・351)、口縁端部をつまみ上げ、擬凹線を施した甕(345・347)、有段口縁甕(350) 壺(344)、器台(352)などがある。

9号溝出土の小型鉢(353)は、有段擬凹線の口縁部を持ち、赤彩されている。

これらの土器は、甕において南西部系と北東部系が混在しており、出土状況からも時期比定は難しいが、2号方形周溝墓からは搬入品と思われるS字甕B類古段階のS字甕が出土しており²³⁾、これを参考にすれば、漆町6～7群期Ⅱ-2-古墳Ⅱ期に中心を置くものであろう。ただし、352の器台はもう少し遡るものと思われる。

(9) 身洗沢遺跡(笛吹市八代町：第5図24、第29図)²⁴⁾

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての住居跡・水田跡などが検出された低湿地の遺跡である。1区谷部から、底部から屈曲する高杯(298)が、2区谷部からは有段口縁の鉢(299)が、3区から千種甕(301)が出土している。299は体部が扁平な球胴を呈し、北陸系とは趣を異にしている。300は口縁部内面強く押さえられた有段口縁の甕で、北陸系の影響あろうか。また赤彩された小型器台(302)は、榎田遺跡出土例同様、北東部系のものに類似している。

4区では溝状遺構出土土器の中に、千種甕(303・308)、口縁部中程が膨らんだ有段口縁甕(305・306)、壺(304)、脚部下半に段をもつ赤彩された高杯(309)などが認められる。307はS字甕と思われるが、口縁部が直立気味の有段口縁に近い。遺構外からは千種甕(310・312)、有透装飾器台(313・314)が出土している。311の甕は口縁部が「くの字」に強く外反しており、在来の甕の中では異質な感じを受ける。

以上の土器は北東部系の影響が強く、おおむね漆町5群期Ⅱ-1期-古墳Ⅰ期に比定されるものであろう。

(10) 二之宮遺跡(笛吹市御坂町：第5図26、第30・31図)²⁵⁾

隣接する姥塚遺跡と本来は一つの遺跡である。古墳時代では157軒の住居跡が発見されたが、中期から後期のものが中心である。したがって北陸系土器はあまり目立つ存在ではない。

13号住居跡からは、千種甕(360・361)、有透装飾器台(372)が出土している。装飾器台は口縁部が短く、榎田遺跡1号方形周溝墓のものに類似している。また373の鉢、有段口縁部に縦列沈線を施した壺(355)や、小さな底部の甕(359)も北陸系の可能性がある。S字甕(363・364、筆者分類Ⅲ類か)、高杯類(365～370)や外曲口縁小型器台(371)、蓋(374)なども報告されているが、出土遺物に時間的な幅があり、北陸系については比定が難しいが、漆町6～8群期Ⅱ-2～3期-古墳Ⅱ～Ⅲ期古段階とみられる。

68号住居跡では、体部に擬凹線の突帯をもつ台付装飾壺とみられる破片(380)が出土している。378は千種甕の可能性がある。筆者分類Ⅳ類のS字甕(377)、高杯(382)、小型高杯(383)などは甲斐Ⅳ期と思われるが、30については漆町5群期Ⅱ-1期-古墳Ⅰ期あたりかもしれない。

さらに遺構外からは月影甕(384)、有段口縁甕(385～392)が出土している。390は台付装飾壺に見える。いずれも小破片であるが、漆町5～6群期Ⅱ-1～2-古墳Ⅰ～Ⅱ期のものであろう。

(11) 姥塚遺跡(笛吹市御坂町：第5図27、第31図)²⁶⁾

古墳時代では前期から後期にかけての住居跡115軒の他、溝、水路などが調査された。

85 号住居跡から有透装飾器台(398)が出土している。S字甕 (393・394、筆者分類Ⅱ類か)、高杯脚部(397)、小型壺 (395・39) が相伴している。

1 号水路跡出土の小型の鉢 (399) は、口縁部がS字状に屈曲し、体部が球胴であるが、北陸系の影響も考慮した方が良さそうである。また5号溝からは、擬凹線が口縁部下半にしか施されていない月影甕 (400)、北陸系かもしれない赤彩された高杯 (401) が出土している。

これら北陸系土器は二之宮遺跡同様、漆町6～7群期－Ⅱ-2期－古墳Ⅱ期に位置づけられよう。

(12) 足原田遺跡 (山梨市：第5図29、第30図) ⁽⁷⁾

古墳時代前期の谷跡と、そこに投げ込まれた古墳Ⅳ期を中心とする大量の土器が発見された。器受部が突出した416は、装飾器台の影響を受けたものと見られ⁽⁸⁾、他の多くの土器からも漆町10群期－Ⅳ期－古墳Ⅳ期に比定される。

(13) 曲田遺跡 (山梨市：第5図30、第30図) ⁽⁹⁾

古墳時代では前期の住居跡13軒が確認されている。これらのうち、14号住居跡から高杯(2)と多孔器台(3)が出土している。出土状況など詳細は不明であるが、筆者分類Ⅲ類S字甕(1)と器台は漆町9群期－Ⅲ期－古墳Ⅲ期新段階とみられるが、高杯については漆町6群期まで遡る可能性がある。

(14) 西田遺跡 (甲州市：第5図31、第30図) ⁽¹⁰⁾

第2次調査5号溝から高杯(412)、足原田遺跡と同じ装飾器台(413)、多孔器台(441・415)が出土しており、相伴する他の土器と同様に漆町10群期－Ⅳ期－古墳Ⅳ期のものである。

(15) ケカチ遺跡 (甲州市：第5図32、第30図) ⁽¹¹⁾

平安時代の遺跡として知られているが、B1型墳である方形周溝墓SZ1が発見され、壺(402・407・408)、甕(403～406)、高杯(409・410)とともに多孔器台(411)が出土しており、漆町10群期－Ⅳ期－古墳Ⅳ期に比定される。

(16) 滝沢遺跡 (富士河口湖町：第5図34、第30図) ⁽¹²⁾

甲府盆地以外で古式土師器の出土が多い遺跡であり、一帯は西相模との交流ルート上に位置している。第5次調査で遺構外から千種甕(420)が出土している。時期の特定は難しいが、漆町6～7群期－Ⅱ-2－古墳Ⅱ期頃と見られる。

3. 併行関係と流入時期

以上、本県出土の北陸系土器を概観してきた。ここでもう一度、甲斐編年と北陸系との併行関係を振り返っておく。

前章で述べてきたように、北陸系土器は古墳Ⅱ期(漆町6・7群期－Ⅱ-2期)に波及の中心を置く。さらに村前東A遺跡や長田口遺跡でのあり方を考慮すると、その前段階、つまり古墳Ⅰ期(漆町5群期－Ⅱ-1期)には既に始まっていたようである。これはS字甕A類の出現と同じ動きであり、従来の指摘と基本的に変わるものではない⁽¹³⁾。そして波及は古墳Ⅱ期で終息すると見られるが、その後有透装飾器台が古墳Ⅲ期古段階(漆町7・8群期－Ⅱ-3期)までは存在するようである。北陸地域では前段階でみられなくなるが、本県での出土は決して多くはないものの、他の器種を含めこの時期まで残ることが考えられ、一定期間製作されたものとみられる。

さらに新段階からは各地で多孔器台に代わり、次のⅣ期にかけて定着する。

また、口縁部が外反する小型器台（第26図235・第28図302）については、各地で変容していることが考えられ、系譜・出現時期を求めることはなかなか難しいが、口縁部が器受部底部から屈曲せず外傾する小型器台（第23図51・59）を含め、その系譜をこれまで通り北陸北東部から東北南部のあたりに求めておきたい。しかし、加納俊氏が指摘した外曲口縁器台との問題⁹⁴がある。前者から後者へ型式的に連続するものかどうかは、さらに検討が必要である。

波及ルートについては、比田井氏によって太平洋側と日本海側の2つの経路が提示されているが⁹⁵、甲斐への波及は地理的環境から考えると、南西部系は駿河を経由するルート、北東部系は信濃を経由するルートが想定されよう。また詳細な系譜については、当初月影甕に代表される南西部系の影響が大きいと考えていたが、千種甕やわずかではあるが台付装飾壺も存在し、北東部系についても一定の量が認められる。しかしはじめにも述べたが、依然として南西部系、北東部系のどちらかわからないものもある。

4. 甲斐における北陸系土器出土の意義

古墳出現期の土器様相には、大きく3つの画期が存在する⁹⁶。前節までに述べてきた繰り返しになるが、北陸系の動向を踏まえ、甲斐の様相を再度一瞥しておく。

まず弥生終末期、それまでの東西遠江地域の影響に代わって、駿河～西相模地域の影響が顕著であった。またそれまで多く見られていた中部高地系が減少し始める。それが古墳Ⅰ期になると大きな変化が起こる。筆者は、S字甕A類の出現に象徴される東海系土器の動きを、単にそれまで（弥生終末期）の同時期内の様相の違いとしてではなく別の段階として理解してきた。そしてその後の甲斐の土器様式・生活様式そのものに大きく影響を与えたことを改めて評価し、これを最大の画期とし弥生土器と土師器の境界を置いている。各地での状況を考慮すると、北陸系土器の波及もこの段階に始まっていたと考えられる。

次の古墳Ⅱ期はS字甕B類古・中段階相当を中心に、引き続き東海系土器群が波及してくる段階である。古墳Ⅰ期とこの時期の東海系土器をベースにして、台付甕など従来の系譜を引くものを残しながら甲斐の土器様式が作られていく。古墳Ⅰ期に始まる北陸系土器の波及は、東海系に比べるとインパクトは弱い⁹⁷が、この時期に大きなピークを迎える。

古墳Ⅲ期古段階はS字甕B類新段階・C類古段階の波及する、東海系土器の第2次拡散期にあたる。Ⅰ期・Ⅱ期ほどの強い影響はないものの、古段階までは東海からの波及は続いていたようである。それと並行して、S字甕・杯部が大きく開く有段高杯は甲府盆地内に広く定着していく。いわゆる小型精製土器群については、小型器台・小型高杯は依然としてそれほど目につく存在ではなく、小型丸底鉢を含め、Ⅲ期よりむしろⅣ期に中心を置くようである。それが新段階になると東海系の影響は少なくなり、二重口縁壺が多く見られるようになる。一方北陸系は、有透装飾器台が古段階までは存在し、新段階以降は変容しながら存続し、多孔器台も加わる。

古墳Ⅳ期になると東海系の影響はさらに少なくなり、定着したS字甕のみが存続し、さらに変容していく。北陸系定着の装飾器台・多孔器台はこの時期まで残存し、口縁部が外曲する小型器台、小型丸底鉢が盛行する。そして屈折脚をもつ高杯が出現する。

このように、甲斐の北陸系土器は、波及する段階は東海系とほぼ同時期であるが、様式そのものに影響を与えることはなかった。しかし、少なからず残存する有透装飾器台や、住居・方形周溝墓からともに出土する多孔器台の定着に、「祭りの土器」として一定の役割を果たしたことが窺える。

註

- (1) 比田井克仁 1987「南関東出土の北陸系土器について」『古代』第83号 早稲田大学考古学会

- (2) 赤塩仁 1994「第7節 弥生時代後期から古墳時代初頭の土器様相」『栗林遺跡・七瀬遺跡』(財)長野県埋蔵文化財センター
- (3) 川村浩司 1998「土器の交流から見る北陸地方と群馬県地域」『第2回特別展 人が動く、土器も動く』かみつけの里博物館
原田幹 1998「東海出土の北陸系土器～古墳時代初頭前後における広域土器交流の様相」『考古学フォーラム』10 考古学フォーラム
- (4) 中山誠二 1991「身洗沢遺跡における外来系土師器の諸例」『研究紀要』7 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- (5) 小林健二 1993「山梨県域の土器様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
小林健二 1993「弥生土器・古式土師器について」『東山北遺跡』山梨県教育委員会
小林健二 1994「甲府盆地の外来系土器」『庄内式土器研究』Ⅳ 庄内式土器研究会
- (6) 川村浩司 1994「関東南部における北陸系土器の様相について」『庄内式土器研究』Ⅵ 庄内式土器研究会
- (7) 田嶋明人 1986「Ⅳ考察一漆町遺跡出土土器の編年の考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
- (8) 坂井秀弥・川村浩司 1993「古墳出現前後における越後の土器様相一越後・会津・能登一」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』研究者グループ
- (9) 山下孝司 1984『坂井南遺跡』蕨崎市教育委員会
山下孝司 1988『坂井南』蕨崎市教育委員会
山下孝司 1995『坂井南(大原)遺跡』
山下孝司・伊藤正彦 1997『坂井南遺跡Ⅲ』蕨崎市教育委員会ほか
- (10) 中山誠二・小林健二 1991「山梨県」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』東海埋蔵文化財研究会
- (11) 三田村美彦 1999『村前東A遺跡』山梨県教育委員会ほか
- (12) 宮澤公雄 2004『寺部村附第6遺跡』南アルプス市教育委員会ほか
- (13) 高野玄明 1995『榎田遺跡』山梨県教育委員会ほか
- (14) 赤塚次郎 1992「東海系のトレースー3・4世紀の伊勢湾沿岸地域一」『古代文化』Vol. 44 No. 6 (財)古代学協会
赤塚次郎 1992「東海のB型墳」『シンポジウム西相模の3・4世紀一方形周溝墓をめぐって一』東海大学校地内遺跡調査団
- (15) 註(7)に同じ
- (16) 佐藤明人 1990『有馬遺跡Ⅱ』群馬県教育委員会
- (17) 辻秀人 1994「東北南部における古墳出現期の土器編年一その1 会津盆地一」『東北学院大学論集』歴史学・地理学第26号 東北学院大学
- (18) 村石眞澄 1996『塩部遺跡』山梨県教育委員会
- (19) 村石眞澄 1998「甲斐の馬生産の起源一塩部遺跡SY3方形周溝墓出土のウマ歯から一」『動物考古学』第10号 動物考古学研究会
- (20) 堀ノ内泉 1989『上野遺跡』三珠町教育委員会
- (21) 赤塚次郎 1995「壺を加飾する」『考古学フォーラム』7 考古学フォーラム
- (22) 末木健ほか 1993『東山北遺跡』山梨県教育委員会
- (23) 小林健二 1993「外来系から在来系へ一甲斐のS字甕の変遷一」『研究紀要』9 山梨県立考古博物館・山

梨県埋蔵文化財センター

- (24) 中山誠二・今福利恵 1990「身洗沢遺跡」『身洗沢遺跡・一丁五反遺跡』山梨県教育委員会
- (25) 坂本美夫ほか 1987『二之宮遺跡』山梨県教育委員会ほか
- (26) 末木健ほか 1987『姥塚遺跡・姥塚無名墳』山梨県教育委員会ほか
- (27) 山本茂樹・石神孝子 2005『足原田遺跡Ⅰ』山梨県教育委員会ほか
- (28) 滝沢規朗 2005「新潟県における古墳出現前後に盛行する装飾器台・結合器台について」『新潟考古』第16号 新潟県考古学会

- (29) 大崎文裕 1998「246 曲田遺跡」『山梨県史』資料編1 原始・古代1 考古(遺跡) 山梨県
- (30) 坂本美夫 1997『西田遺跡―第2次発掘調査報告書―』山梨県教育委員会
- (31) 泉英樹 2017『后畑西・ケカチ遺跡』甲州市教育委員会ほか
- (32) 杉本悠樹 2017『滝沢遺跡(第5次)』富士河口湖町教育委員会ほか
- (33) 小林健二 1993「弥生土器・古式土師器について」『東山北遺跡』山梨県教育委員会
- (34) 加納俊介 1997「廻開式か元屋敷式か―東国から見た弥生土器と土師器の境界―」『西相模考古』第6号 西相模考古学研究会

なお、筆者が「新潟シンポ編年」で提示した変遷について、3期(現在のⅡ期)の基準資料とした坂井南遺跡3次55号住居跡出土土器は外曲口縁器台を含むが、出土状況から一括性に問題があり、2つの時期に分けられそうである。

- (35) 註(1)及び

比田井克仁 1993「東国における外来土器の展開」『翔古論聚』真陽社

比田井克仁 1994「南関東における庄内式併行期前後の土器移動」『庄内式土器研究』Ⅴ 庄内式土器研究

- (36) 甘粕 健・春日真実編 1994『東日本の古墳の出現』山川出版社

第5節 畿内系叩き甕の様相

1. はじめに

弥生時代後期～古墳時代前期の土器様相については、その移動の背景―古墳の出現の問題―を中心に、1980年代後半から90年代にかけて非常に活発になった。さらに、続く古墳時代中期の土器についても各地の様相が明らかにされた⁽¹⁾。筆者もこの流れの中で、ここまで取り上げてきたように、山梨県における古式土師器の成立について追求し、S字甕を中心とした東海系の東日本でのいち早い波及と定着を軸に、北陸・畿内の影響をも踏まえ述べてきた経緯がある。

このような動きも21世紀に入りやや落ち着いた感があったものの、各地で引き続き精力的に続けられた。そんな中、甲府市の中心部から畿内系の叩き甕がまとまって出土し、興味深い状況が確認された。それは以前から筆者が気にかけていた問題の一つであり、関東ではこれまでかなり多く出土しているにもかかわらず、当該地域では出土例がほとんどなかったものである。

本節では、甲府市塩部遺跡で発掘された資料を取り上げ、甲斐地域出土の畿内系叩き甕について考えてみたい。

2. 塩部遺跡の概要

塩部遺跡は、現在のJR甲府駅の西約1km先に位置し、甲府市中央部を南流する相川によって形成された扇状地の扇端部に立地しており、東西約500m、南北約700mの広範囲に及ぶ遺跡として台帳に登録されている。市街地にある遺跡ということもあり、大小様々な開発に伴う調査が行われているが（第32図）、この中で大規模な調査としては、1995年（平成7）に県立甲府工業高校校舎建替工事に伴い山梨県教育委員会が行ったもの（以下、甲府工業高校地区）⁽²⁾、2001年～2004年（平成13～16）にかけて都市計画道路改良工事に伴い甲府市教育委員会が行ったものがある（以下、A～D地区）⁽³⁾。さらに近年では、2016・2017年度（平成28・29）に駿台甲府中学校建設に伴い調査が実施されている（以下、駿台甲府中学校地区）⁽⁴⁾。

甲府工業高校地区では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての方形周溝墓11基・溝3条、弥生時代後期の住居跡1軒、奈良・平安時代の住居跡8軒・水路・旧河道跡などが発掘され、古墳時代前期中葉の方形周溝墓からは最古のウマの歯が出土し、注目を集めた。

甲府工業高校地区の南に隣接するA地区においても、方形周溝墓の続きや同時期の遺構が確認されている。

B地区では弥生時代後期から古墳時代後期にかけての堅穴建物跡20棟、平地建物跡3棟、掘立柱建物跡22棟、溝17条、古墳時代前期の方形周溝墓2基などが、C・D地区では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての堅穴建物跡23棟、平地建物跡5棟、掘立柱建物跡5棟、方形周溝墓2基、溝43条などが発見されている。

そして駿台甲府中学校地区では、古墳時代前期から後期にかけての堅穴建物44棟、平地建物跡6棟、掘立柱建物跡2棟、溝・流路33条などが検出されている。

このように、塩部遺跡は甲府市内のこの地域の弥生時代後期から古墳時代にかけての拠点的な集落であり、特に古墳時代中期・後期は古墳の分布とともに、集落が拡大していったことを窺わせている。また、掘立柱建物跡が多いこともこの遺跡の特徴である。

3. 塩部遺跡出土の畿内系叩き甕

本節で取り上げる畿内系の叩き甕は、C地区の24号溝及び1号方形周溝墓から出土している。

24号溝はこの集落の環濠とみられ、検出された長さは約23.5m、幅約2.4m、深さ約1mで、溝中位には土器や木製品を含む炭化物層（5層）が溝内全面に確認されている。この層は周囲に存在した建物などの「火災処理」

に伴うものと考えられており、出土した土器・木製品の多くは2次的に焼けていた。

土器（第33図）には壺類（1～10）・甕類（20～46）・高杯類（14・16～19）・器台類（15）・鉢類（12・13）があり、この中で20～32が叩き甕である。平底で口縁部は丸く収められ内面はハケ調整である。なお、45は台付甕であるが、脚台部に叩き目が確認できる。共伴資料を見ると、筆者分類Ⅰ類のS字甕A類相当（35）があり、時期決定の決め手となる。また手焙形土器（11）は、扁平な鉢部は時期的にはやや下る感じがするが、同時期の東海系の影響を受けたものであろう。

木製品（第34図）は多くが建築部材とみられるが、47・48は機織部材であろう。

方形周溝墓はC地区では2基発見されているが、1号方形周溝墓は南北約17m、東西約19mの規模で南西隅のコーナーに1ヶ所ブリッジをもつタイプである。

出土土器（第35図）には、甕類（65～75）、壺類（63・64）、小型土器（60～62）がある。このうち65が叩き甕の体部下半部で、やはりS字甕A類相当の脚台部（75）、東海系加飾壺（64）⁽⁵⁾が目を引く。

さらに木製品を見てみると（第36図）、東海系曲柄鋏（76）⁽⁶⁾や、鋤の柄の部分と見られるもの（77）や、孔があけられた板状のもの（92・94）、それに組み合わせて使用できそうな棒状のもの（90・97～104）などがある。

調査担当者が述べている通り、これらの土器や木製品には焼けた痕跡は見られず、方形周溝墓の被葬者や葬送儀礼に関わるような土器・木製品が多数出土していることは大いに注目される。

4. その他の出土例

これらの他に県内で確認されている叩き甕は、甲府盆地西部の拠点集落である村前東A遺跡（南アルプス市）⁽⁷⁾で、口縁部から頸部上部にかけての破片が1点（第37図105）ある。口縁端部は丸く、体部内面にはナデが確認できる。

さらにそれ以前から知られていた叩き甕といえば、富士山西麓の西一条遺跡（富士河口湖町）⁽⁸⁾で道路工事中に発見されたほぼ完形品（同図106）が知られている。これも塩部遺跡出土のものと同様、口縁端部は丸く平底で、体部内面上半は粗いハケ、下半はミガキ調整されている。

新しい出土例としては、同じく富士河口湖町の滝沢遺跡第2次調査⁽⁹⁾において、口縁部から体部上半にかけての破片資料がある（同図107）。こちらは口縁部が立ち気味で、叩き目もやや粗い。

5. 畿内系叩き甕出土の意義

はじめにも述べたが、塩部遺跡で出土した畿内系叩き甕は、甲府盆地内でまとまって出土した例として初めてのものである。共伴資料から24号溝と1号方形周溝墓の編年的位置を確認してみると、他にも東海系、北陸系が多数出土しており、報告されている通り、筆者編年古墳Ⅰ期（庄内式併行期）である。

また形態的な特徴から、これらはいずれもV様式系の甕であり、庄内式のものではない。併行関係からも畿内のものではなく、V様式系の甕の伝統が残る畿内周辺の地域に系譜を持つものである。これは関東においても同じ状況であることは既に指摘されているところである⁽¹⁰⁾。胎土分析の結果も搬入品ではないことから、東海系の文物を介してもたらされた技法であろう。であるから、その系譜が分布状況から既に言われているような西三河・矢作川流域⁽¹¹⁾とは限らないと思われる。そして、畿内の影響が実際に現れるのは、筆者編年古墳Ⅳ期を待たなければならない。

しかし、東海系のS字甕、北陸系の甕とともに直接的ではないが、畿内の甕の情報がこの段階で甲斐にももたらされていたことは大きな意義がある。東海系の影響はもちろん強いものであったが、すべてが東海系ではないこと⁽¹²⁾は各地の状況を見ても明らかである。

一方、1号方形周溝墓から出土した棒状・板状の木製品も重要な意義を持つ⁽¹³⁾。折しもC地区の調査の後、

2004年（平成16）の秋から2005年（平成17）の冬にかけて、甲斐鉾子塚古墳の周溝内から木柱や木製品が多数出土するなど、新たな発見があったところである⁴⁰。両墳墓の造営時期には約1世紀の時間差があり、直ちに結びつけることには問題があるが、少なくとも1号方形周溝墓での在り方はその後の葬送儀礼に影響を与えている可能性は高い。

いずれにしても、これらの出来事は甲斐鉾子塚古墳が出現する前段階の、甲斐の状況の一端を示すものである。最後に、前期の土器様相を中心にまとめ、第38図に示しておく。

註

- (1) 東国土器研究会 1999『東国土器研究』第5号 東国土器研究会
- (2) 村石眞澄 1996『塩部遺跡』山梨県教育委員会
- (3) 佐々木満 2004『塩部遺跡Ⅰ』甲府市教育委員会ほか
佐々木満 2005『塩部遺跡Ⅱ』甲府市教育委員会ほか
- (4) 高野高潔・泉英樹 2019『塩部遺跡Ⅲ』甲府市教育委員会ほか
- (5) 赤塚次郎 1995「壺を加飾する」『考古学フォーラム』7 考古学フォーラム
- (6) 樋上昇 1993「木製農耕具研究の一視点—ナスビ形農耕具の出現から消滅まで—」『考古学フォーラム』3 考古学フォーラム
なお、後に樋上氏は東海形曲柄鍬のうち伊勢湾周辺に分布しているものを「伊勢湾型曲柄鍬」と細分しているが、これに従えば「伊勢湾型曲柄二又鍬Ⅰ類」ということになる（樋上昇 2000「東海形曲柄鍬再論」『考古学フォーラム』12 考古学フォーラム）。
- (7) 三田村美彦 1999『村前東A遺跡』山梨県教育委員会ほか
- (8) 中山誠二 1985「西一条遺跡」『上九一色村誌』上九一色村誌編纂委員会
なお、この資料は現在山梨県立考古博物館で寄託を受け保管している。また、西八代郡上九一色村は2006年（平成18）3月1日に北部は甲府市と、南部は南都留郡富士河口湖町とそれぞれ合併している。
- (9) 小林健二 2012『滝沢遺跡（第2次）』山梨県教育委員会 なお、第4次調査では近江系受け口状口縁甕が出土している。
御山亮済 2015『滝沢遺跡（第3・4次）』山梨県教育委員会
- (10) 比田井克仁 1993「東国における外来土器の展開」『翔古論集』久保哲三先生追悼論文集刊行会
西川修一 1992「関東における畿内系の甕について」『庄内式土器研究』Ⅱ 庄内式土器研究会
- (11) 早野浩二 1996「弥生時代終末期～古墳時代前期の東海地方における畿内系の甕について」『第4回東海考古学フォーラム 鍋と甕そのデザイン』考古学フォーラム
- (12) 赤塚次郎 2005「廻間Ⅱ式の時代」『東日本における古墳の出現』東北・関東前方後円墳研究会編
- (13) 駿台甲府中学校地区でも木製品が出土しているが、これらは古墳時代後期を中心としたものである。
- (14) 森原明廣 2005『甲斐鉾子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県教育委員会

第6節 中期・後期・終末期の土器編年

1. はじめに

中期・後期・終末期の土器編年については、前期を含め笛吹市二之宮遺跡・姥塚遺跡⁽¹⁾の調査資料を受けて発表された末木健・坂本美夫両氏によるもの⁽²⁾を嚆矢とする。そして1990年（平成2）以降、前期の土器研究が活発となる中、東国土器研究会による作業も進められ、後期については森原明廣氏により、中期については石神孝子氏により編年案（以下「森原編年」「石神編年」）⁽³⁾が示された。特に、資料が少なかった中期であるが、円形周溝墓などの調査により初期（古式）須恵器が増加したことから、それらの年代的位置づけなども試みられている⁽⁴⁾。そして、これら増加した資料と二之宮・姥塚遺跡の資料をもとに、坂本氏は改めて『山梨県史』の中で、古墳時代を通じた編年を提示している⁽⁵⁾（以下「坂本県史編年」）。

以上の成果を踏まえ、本節では集落出土資料と墳墓出土資料を中心に古墳時代中期、後期・終末期をそれぞれ4期に設定し、各時期・各段階について見ていくこととする。なお、ここではあくまでも時間軸の設定に重点を置くものであり、個々の器種の分類など基礎的な作業は既に上記先学により行われており、本節の目的ではない。器種の消長や併行関係、政治的・社会的背景により画期を求めるものである。

2. 中期の土器編年（第39図）

中期から後期・終末期にかけては、二之宮遺跡・姥塚遺跡の出土資料がこれまでも基準資料となってきた。250軒を超える古墳時代の住居跡や墳墓群から出土した大量の土器群は、当該期の須恵器を伴った良好なもので、編年の基軸として現在でもこれらの情報量を越える資料はない。しかし1990年代以降、甲府盆地内各地域での資料増加により、特に5世紀代の墳墓出土の初期（古式）須恵器が見られるようになった。ここでは、陶邑編年⁽⁶⁾を基軸に、さらに遡る須恵器窯の型式を加え⁽⁷⁾、4段階に設定する。古墳Ⅴ期はTG232・231型式～ON231型式に、古墳Ⅵ期はTK73～216型式に、古墳Ⅶ期はTK208型式に、古墳Ⅷ期はTK23～TK47型式にそれぞれ比定される。また、Ⅴ期は東海の松河戸Ⅰ式2～4段階・松河戸Ⅱ式、畿内布留式新段階にそれぞれ併行する。

<古墳Ⅴ期>

この段階は資料的制約が大きく、南アルプス市村内遺跡⁽⁸⁾1号住居跡、甲府市桜井畑遺跡⁽⁹⁾3号方形周溝墓以外良好な資料に恵まれていない。坂本県史編年では、この段階に対応する「Ⅳ期」において二之宮遺跡238号住居跡も標識資料としているが、十分な資料とはいえない。このような中、米倉山B遺跡10号土坑で出土したON231型式の須恵器大甕は、甲斐地域最古の須恵器として注目される⁽¹⁰⁾。年代的には5世紀初頭頃に位置づけられる。

古墳Ⅳ期に続く様式として、壺・甕・高杯類などで構成されているが、口径と体部の径がほぼ等しい小型丸底壺が加わり、新たな指標となる。そして村内遺跡では、畿内系屈折脚高杯とともに、杯部が直線的に開くもの、外反するもの、有段のものなど、脚部は緩やかに外反するもの大きく八の字に開くものがあり、在地的な要素⁽¹¹⁾を含め複数の系譜の存在が考えられる。石神編年では、布留式屈折脚高杯と他の型式とで2段階に分けているが、筆者は小型丸底壺や有段口縁壺など、中期初頭の特徴をもつ一括資料と評価した⁽¹²⁾。しかしその後、現在に至っても資料には恵まれていないが、現時点では高杯の型式からは2段階に分けられる可能性が高いものと考えている。よってⅤ期は古段階・新段階として再編し⁽¹³⁾、古段階が松河戸Ⅰ式2～4段階・布留式新段階古相に、新段階が松河戸Ⅱ式・布留式新段階新相にそれぞれ併行関係を持ち、古墳Ⅴ期新段階に須恵器が波及する

ことになることから、本期は第3節で触れたとおり4世紀後半から5世紀初頭頃となる。

一方、S字甕は、中央市宮の下遺跡⁽¹⁴⁾出土のものを甲斐地域での最終型式(V類)と考えているが、依然として明確ではない。

<古墳VI期>

二之宮遺跡西75号住居跡・259号住居跡を基準に、笛吹市松本塚ノ越遺跡⁽¹⁵⁾土器集中区、北杜市龍角西遺跡⁽¹⁶⁾A区6号・9号住居跡、南アルプス市(旧甲西町)大師東丹保遺跡⁽¹⁷⁾土器集中区出土資料などがある。このうち須恵器では、TK73~216型式の製品として二之宮遺跡259号住居跡で大甕が、西75号住居跡で大型の把手付椀が確認されている。龍角西遺跡A区9号住居跡では甕が出土しており、墳墓では甲府市東山南(B)遺跡⁽¹⁸⁾2号円形周溝墓出土の樽形甕・大型甕・壺があり、これらはTK216型式であることから、本期は5世紀第1四半期後半から第2四半期後半頃に位置づけられる。

台付甕が残り、甕が主体となり、炉から竈への転換期であることが窺える。同時に杯類が豊富になり、以後単純口縁のもの、口縁端部が外反するもの、丸底、平底に細分される。壺類は甕を模倣したもの、短頸壺、小型丸底壺がみられ、高杯は村内遺跡1号住居跡からのバリエーションを引き継ぎ、丁寧なミガキが施される。他に鉢形の甕がある。また、甲府市青沼遺跡SD08出土の資料も紹介されており⁽¹⁹⁾、この段階のものと考えられる。

最近の資料では、塩部遺跡駿台甲府中学校地区⁽²⁰⁾のSI17、SI33、SI34から良好な資料が出土している。

<古墳VII期>

この段階になると、集落・墳墓ともにTK208型式(ON46号窯段階・TK208号窯段階)の須恵器の波及が増え、年代的には5世紀第2四半期末から第3四半期頃となる。基準となる二之宮遺跡西46号住居跡・西71号住居跡で甕が出土しており、西71号住居跡ではこれを模倣した土師器の甕がある。塩部遺跡B地区⁽²¹⁾7号竪穴建物跡では、甕・無蓋高杯とともに良好な資料が確認されており、同遺跡駿台甲府中学校地区SI37出土例も本期に該当する。北杜市龍角遺跡⁽²²⁾1号住居跡でも須恵器甕を伴う資料が報告されている。東山南(B)遺跡1号円形周溝墓では把手付椀が、南アルプス市寺部村附第6遺跡⁽²³⁾1号円形周溝墓では甕と樽形甕が出土しており、円形周溝墓には初期(古式)須恵器が伴うというスタイルが確立されている。その他、石・土製模造品が大量に出土した笛吹市石和町大蔵経寺前遺跡⁽²⁴⁾2号墳からも杯・甕などの須恵器が確認されている。

坂本県史編年「VI期」で述べられている通り、土師器杯の形態には前段階とほとんど変化は見られないが、高杯は短脚になり、台付甕は見られなくなる。

<古墳VIII期>

姥塚遺跡8号・102号・131号住居跡、二之宮遺跡82号住居跡などを基準とする。近年では塩部遺跡駿台甲府中学校地区SI27も本期に含まれる。TK23、47型式の須恵器が伴う段階で、5世紀第4四半期にあたる。

姥塚遺跡131号住居跡ではTK23型式の杯蓋とともにそれを模倣した杯が出土している。甕の長胴化が始まり、大型甕が見られるようになる。高杯はさらに短脚化が進む。墳墓出土の須恵器では、東山南(A)遺跡⁽²⁵⁾K-4号方形周溝墓ではTK23型式把手付椀が土師器の「駿豆型高杯」⁽²⁶⁾と共伴しており、南アルプス市六科丘古墳⁽²⁷⁾の壺もある。また、採集品である宮の下遺跡出土の樽形甕⁽²⁸⁾は、東山南(B)2号円形周溝墓出土品と同様胴部中央が膨らむ形態であるが、櫛描波状文の振幅が緩く、文様帯の構成も簡略化されていることから、TK208~23型式の間に収まるものであろう。同様に中央市(旧豊富村)高部宇山平遺跡⁽²⁹⁾円形周溝墓出土の甕についても、頸部の径が増し、やや形骸化した櫛描文からも甲府市(旧中道町)岩清水遺跡⁽³⁰⁾1号円形周溝

墓出土須恵器と同様TK23型式のものであろう。

姥塚遺跡102号住居跡では、TK47型式期の杯と高杯があり、この段階になると土師器の杯は模倣杯の口縁がさらに屈曲した形態となり、以後主体になっていく。他には北杜市柳坪遺跡A地区⁽³¹⁾14号住居跡などがある。

3. 後期・終末期の土器編年（第40図）

6・7世紀も須恵器の型式を指標に大きく4段階に設定する。これ以降、湖西産など陶邑産以外の須恵器が見られるようになり、古墳にも多くされていく。そして、6世紀末にようやく甲斐での生産も始まる。

当該期も須恵器（陶邑編年）を指標に二之宮・姥塚遺跡出土資料を中心とし、2010年（平成22）の段階では古墳IX期はMT15～TK10型式に、古墳X期はTK43～209型式に、古墳XI期はTK217型式（古・新）に、古墳XII期はTK46～TK48型式にそれぞれ比定させ、各期を設定した⁽³²⁾。湖西地域の須恵器編年⁽³³⁾では、古墳IX期は遠江II期～III期前葉、古墳X期は遠江III期中葉～後葉、古墳XI期は遠江III期末葉～IV期前半、古墳XII期は遠江IV期後半～末葉にそれぞれ併行する。

陶邑編年では、TK10型式とTK43型式との間に当初から空白の型式があり⁽³⁴⁾、その後これを埋める形でTK10型式の中に「MT85号窯段階」が設定され⁽³⁵⁾、やがて「陶器山85号窯式」として分離され用いられるようになる⁽³⁶⁾。その一方で、TK43型式からTK209型式への変化が必ずしも整理されておらず、湖西編年ではTK43型式併行期以降は地域色が強くなり、陶邑編年との整合性を図ることは難しいとの指摘もある⁽³⁷⁾。また、TK217型式への変化は、須恵器の編年上最大の画期⁽³⁸⁾とされるが、それは畿内での特徴であり、新古2段階に分離されるなど問題点も早くから指摘されており⁽³⁹⁾、以降は飛鳥編年⁽⁴⁰⁾が多く使われているのは周知のとおりである。

これらの実年代について筆者は、TK209型式を6世紀第4四半期頃とし、後続するTK217型式は新古2段階に対比させ7世紀前半代としてきたが、既にTK209型式の古段階は7世紀初頭前後であることが妥当とされており⁽⁴¹⁾、現在ではTK43型式との境界は600年頃となっている。

したがって、これらを踏まえ古墳IX期はこれまでどおり6世紀前半とし、古墳X期前半（6世紀第3四半期）をMT85型式併行に、後半（6世紀第4四半期）をTK43型式併行とし、古墳XI期前半（7世紀第1四半期）をTK209型式併行に、後半（7世紀第2四半期）を新古に分けずTK217型式併行として再編し、改めて古墳IX期・古墳X期を後期、古墳XI期・古墳XII期を終末期とする。なお、後期と終末期の境界について、陶邑編年では上述のとおりTK209型式とTK217型式との間に様式上の大画期があるが、それは畿内において群集墳の新たな築造が衰退し古墳祭祀の在り方に変化が起こる段階であり、葬送儀礼用から実用品としての役割を重視した転換と考えられている⁽⁴²⁾。地方では群集墳の造営がさらに続く地域があり、後述するが甲斐では7世紀初頭の段階から新たに群集墳が営まれる地域があり、一部では7世紀末まで続く。土師器の器種構成においても、古墳XI期前半のTK209型式併行段階と後半のTK217型式併行段階ではそれほど変化は無く、大きな画期として捉えにくい。それよりも、畿内で前方後円墳の築造を停止するのは6世紀第4四半期（TK43型式段階）であり、関東では7世紀初頭（TK209型式古段階）と少し遅れるが、これ以降も古墳の築造が続く時代を終末期としてとらえる⁽⁴³⁾という時期区分に立てば、後期はTK43型式までとなることから、TK209型式以降を終末期とする。

<古墳IX期>

姥塚遺跡24号・107号住居跡、二之宮遺跡2号・10号・64号住居跡などが基軸となる。塩部遺跡駿台甲府中学校地区S I 39などもこの時期である。古墳では、横穴式石室が導入される時期であり、6世紀前半代にあたる。前半のMT15型式併行段階（6世紀第1四半期）では、姥塚遺跡107号住居跡・二之宮遺跡2号住居跡で須

恵器の杯があり、米倉山無名墳で採集された杯片⁽⁴⁶⁾もある。後半のTK10 型式併行段階（6世紀第2四半期）になると、二之宮遺跡 10 号・64 号住居跡の須恵器の杯蓋・杯身があり、笛吹市八代町莊塚古墳出土須恵器⁽⁴⁵⁾でも確認されている。積石塚古墳である同市石和町大蔵経寺山 15 号墳⁽⁴⁶⁾出土の甕もこの段階になる。

土師器の杯は扁平になり、赤彩されたものが多くなる。黒色処理されたものも見られる。鉢形の中型品もセットになり、次期まで続く。甕は長胴化が確立し、大型甕と組み合う球胴の甕も見られるようになる。二之宮・姥塚遺跡を中心とした東部地域の限定された集団により製作・使用されたと考えられている筒形土製品⁽⁴⁷⁾は、二之宮遺跡 2 号住居跡出土のものが初現となる。

<古墳X期>

前半（6世紀第3四半期）はMT85 型式併行段階となるが、MT85 型式からTK43 型式への変化は杯蓋の器高以外ではやはり捉えにくい。よって、本期は幅を持たせておく必要があるが、1989 年（平成元）と 2011 年（平成 23）に発掘調査が行われた笛吹市御坂町の長田 1 号墳⁽⁴⁸⁾出土の須恵器には、長脚 2 段透かしの無蓋高杯があり、これは脚部が長大化する前段階のMT85 型式のものと考えられる。また、半環状の耳をもつ提瓶も同時期のものと見られ、さらに遡る可能性もあるが、これらを基準資料に加える。長田 1 号墳ではこの他、TK43 型式の杯蓋と有蓋脚付長頸壺、TK209 型式の杯身と甕、TK217 型式段階のかえりをもつ杯蓋と平瓶がある。

TK43 型式併行段階の後半（6世紀第4四半期）は、二之宮遺跡 69 号・128 号住居跡、姥塚遺跡 4 号・93 号住居跡などの良好な資料に加え、南アルプス市（旧若草町）新居道下遺跡⁽⁴⁹⁾ 44・46 号住居跡を中心となる。土師器は把手付の大型甕が最も多くなり、杯に施された赤彩は高杯にも見られるようになり、長脚の高杯が再び登場する。他に甲府市榎田遺跡⁽⁵⁰⁾ 1 号・5 号・24 号住居跡、北杜市（旧明野村）腰巻遺跡⁽⁵¹⁾ 8 号住居跡なども該当する。後期古墳の築造が活発になる中、甲府市加牟那塚古墳⁽⁵²⁾、笛吹市春日居古墳群の平林 2 号墳⁽⁵³⁾、甲府市（旧中道）稻荷塚古墳⁽⁵⁴⁾などが築造されており、これらから杯蓋・杯身・短頸壺・甕などが出土している。

<古墳XI期>

2010 年まで古墳X期後半としていた二之宮遺跡 69 号住居跡・姥塚遺跡 64 号住居跡、同じく笛吹市一宮町国分築地 1 号墳⁽⁵⁵⁾の平瓶、当該地域最古の須恵器窯である笛吹市境川町下向窯跡の杯や長脚 2 段透しの有蓋高杯⁽⁵⁶⁾は、TK209 型式に併行する古墳XI期前半（7世紀第1四半期）の基準資料となる。そして、TK217 型式古段階・新段階併行としていた春日居古墳群の狐塚古墳⁽⁵⁷⁾・甲斐市（旧竜王町）の竜王 3 号墳⁽⁵⁸⁾・旧双葉町の二ツ塚 1 号墳⁽⁵⁹⁾を除く笛吹市石和町の松本塚ノ越遺跡 1 号住、二之宮遺跡 256 号・西 10 号住居跡、姥塚遺跡 62 号住居跡、松本塚ノ越遺跡 1 号住居跡、笛吹市境川町牛居沢窯跡⁽⁶⁰⁾、榎田遺跡 20 号住、腰巻遺跡 10 号住居跡は、新古 2 型式を改めTK217 型式併行として古墳XI期後半（7世紀第2四半期）の資料となる。

土師器の構成では、前半は土師器では把手付大型甕が普及し、後半は前半とそれほど変化はないが、模倣杯はこの段階で終焉し、丸底の杯が再び見られるようになる。榎田遺跡 20 号住居跡には大型の鉢がある。杯蓋・杯身は口径が小さくなり、椀形の杯蓋と受部を持つ杯身のセットから摘まみを持ちかえりのある杯蓋と椀形の杯身のセットに変わる。

古墳では、盆地内各地で小規模な群集墳が築かれ、須恵器も多くの器種が見られる。春日居狐塚古墳からはTK209～217 古段階に併行する長脚 2 段透しの有蓋高杯、提瓶、短頸壺などが出土しており、竜王 3 号墳では甕、脚付長頸壺、有蓋高杯などが、同二ツ塚 1 号墳では甕、提瓶など、TK217 段階の須恵器が確認できる。

<古墳XII期>

TK46～48 型式（飛鳥Ⅲ・Ⅳ）併行の段階で、7世紀第3四半期・第4四半期にあたる。笛吹市一宮町鞍掛遺跡⁶¹ 11号住居跡、二之宮遺跡西16号・94号住居跡、笛吹市一宮町北堀遺跡⁶² 52号住居跡、腰巻遺跡12号住居跡などがあげられ、山梨学院川田運動場遺跡群⁶³ 3次調査SB26・31でも当該期の資料が確認できる。土師器の杯には丸底のもの、平底のもの、盤状のものがあり、腰巻遺跡では短頸壺が見られるなど、奈良時代に近い構成になる。

須恵器では、二之宮遺跡西16号住居跡や米倉山のくちやあ塚古墳⁶⁴などでTK46型式併行の摘みを有する返り蓋が見られるが、この時期の中で消滅し、腰巻遺跡12号住居跡のような摘み蓋になる。二之宮遺跡西16号住居跡には長頸壺もある。瓦陶兼業窯である甲斐市（旧敷島町）天狗沢瓦窯跡⁶⁵で焼かれた須恵器群には、大甕や杯、高杯、甗、短頸壺など豊富な器種が見られる。

5. おわりに

前期の土器に続き、中期から終末期に至る土器編年を設定した。これにより、甲斐の古墳時代の400年余りの時間軸をすべて示すことができた。さらにこの時間軸をもとに、次章では甲斐の古墳時代の墳墓の変遷を概観する（第41図）。

註

- (1) 坂本美夫ほか 1987『二之宮遺跡』山梨県教育委員会ほか
末木健ほか 1987『姥塚遺跡・姥塚無名墳』山梨県教育委員会ほか
- (2) 末木健・坂本美夫 1984「IX 山梨県」『古墳時代土器の研究』古墳時代土器研究会
- (3) 森原明廣 1995「山梨県域における古墳時代後期の土器様相」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会
石神孝子・笠原みゆき 1999「甲斐における古墳時代中期の土器様相」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会
- (4) 岡野秀典 1997「山梨県の初期須恵器」『山梨県考古学協会誌』第8号 山梨県考古学協会
石神孝子 1999「甲斐における初期須恵器の展開」『山梨県考古学論集Ⅳ』山梨県考古学協会
- (5) 坂本美夫 1999「第2章 山梨県の考古学編年・4 古墳時代の編年」『山梨県史』資料編2 原始・古代
2 考古（遺構・遺物） 山梨県
- (6) 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- (7) 西口陽一 1994『野々井西遺跡・ON231号窯跡』大阪府教育委員会ほか
岡戸哲紀他 1995『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』大阪府教育委員会ほか
- (8) 広瀬和弘 1997『村内遺跡』甲西町教育委員会
- (9) 中山誠二ほか 1990『桜井畑遺跡A・C地区』山梨県教育委員会ほか
- (10) 石神孝子 1999「甲斐における初期須恵器の展開」『山梨県考古学論集Ⅳ』山梨県考古学協会
- (11) 坂野和信 1999「東日本における古墳時代中期の土器（1）—土器の系譜と交流関係—」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会
- (12) 小林健二 2010「古墳時代における甲斐の地域社会—土器編年と墳墓の変遷—」『山梨県考古学協会誌』第19号 山梨県考古学協会
- (13) 小林健二 2015「甲斐の古墳時代と土器—編年と移動を考える—」『山梨県考古学協会誌』第23号 山梨県考古学協会
- (14) 小林健二 1998「豊富村宮の下遺跡出土のS字甕」『森和敏氏退職記念 山梨県考古学資料集Ⅰ』同刊行委員会

- (15) 瀬田正明・中山千恵 1990『松本塚ノ越遺跡』石和町教育委員会ほか
- (16) 村松佳幸 2001『龍角西遺跡』長坂町教育委員会ほか
- (17) 保坂和博 1997『大師東丹保遺跡Ⅳ区』山梨県教育委員会ほか
- (18) 末木健 1991『東山南（B）遺跡』山梨県教育委員会
- (19) 石神孝子 2008「甲府市青沼遺跡出土の古墳時代中期の土器について」『山梨県考古学協会誌』第 18 号
山梨県考古学協会
- (20) 高野高潔・泉英樹 2019『塩部遺跡Ⅲ』甲府市教育委員会ほか
- (21) 佐々木満 2004『塩部遺跡Ⅰ』甲府市教育委員会ほか
- (22) 村松佳幸 2001「長坂町龍角遺跡出土の古墳時代中期の土器」『八ヶ岳考古 平成 12 年度年報』北巨摩市
町村文化財担当者会
- (23) 宮澤公雄 2004『寺部村附第 6 遺跡』南アルプス市教育委員会ほか
- (24) 櫛原功一 2012『大蔵経寺前遺跡・寺の前古墳群』笛吹市教育委員会ほか
- (25) 小林広和・里村晃一 1993『東山南（A）遺跡』山梨県教育委員会
- (26) 池谷初恵 1999「駿河伊豆型平底坏について」『東国土器研究』第 5 号 東国土器研究会
- (27) 関根孝夫他 1985『六科丘遺跡』櫛形町教育委員会ほか
- (28) 岡野秀典 1993「豊富村宮の下遺跡出土の樽形埴」『山梨県考古学協会誌』第 6 号 山梨県考古学協会
- (29) 岡野秀典 1995『高部宇山平遺跡Ⅱ・浅利氏館跡・三枝氏館跡』豊富村教育委員会
- (30) 坂本美夫・石神孝子 2000『岩清水遺跡』山梨県教育委員会
- (31) 末木健 1975『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―北巨摩郡長坂・明野・韮崎地内―』山梨
県教育委員会ほか
- (32) 註（12）に同じ。
- (33) 鈴木敏則 2001「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築『須恵器生産の出現から消滅』第 5 分冊 東海の土
器研究会
- (34) 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
- (35) 註（6）に同じ。
- (36) 山田邦和 1998『須恵器生産の研究』学生社
- (37) 鈴木敏則 2011「2 年代の物差しと併行関係 須恵器の編年②東日本」『古墳時代の考古学 古墳時代史の
枠組み』同成社
- (38) 山田邦和 2011「2 年代の物差しと併行関係 須恵器の編年①西日本」『古墳時代の考古学 古墳時代史の
枠組み』同成社
- (39) 菱田哲郎 2011「3 古墳時代の実年代 ②後期・終末期の実年代」『古墳時代の考古学 古墳時代史の枠組
み』同成社
- (40) 西弘海 1982「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会
- (41) 白石太一郎 1982「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 1 集（『古墳と古墳群の
研究』塙書房、2000 所収）
白石太一郎 2006「第 3 章 須恵器の暦年代」『年代のものさし―陶邑の須恵器―』大阪府立近つ飛鳥博物
館
- (42) 註（38）に同じ。
- (43) 註（41）白石 2006 に同じ。
- (44) 坂本美夫 1986「大蔵経寺山無名墳の提起する問題」『山梨考古学論集Ⅰ』山梨県考古学協会

- (45) 坂本美夫 1972 「莊塚古墳、無名墳（山梨市）、稻荷塚古墳（同）、古塚古墳、住村塚古墳出土遺物集成図」『甲斐考古』10の1 山梨県考古学会
- (46) 田代孝ほか 1984『大蔵経寺山第15号墳』石和町教育委員会ほか
- (47) 宮澤公雄 2009「筒形土製品について」『山梨考古学論集VI』 山梨県考古学協会
- (48) 宮澤公雄 2014『長田1号墳』笛吹市教育委員会ほか
- (49) 米田明訓 1998『新居道下遺跡』山梨県教育委員会ほか
- (50) 高野玄明 1995『榎田遺跡』山梨県教育委員会ほか
- (51) 佐野隆 2004『腰巻遺跡（第1～3次調査）』明野村教育委員会ほか
- (52) 坂本美夫 1973「山梨県内各地古墳出土遺物集成図」『甲斐考古』10の3 山梨県考古学会
- (53) 吉岡弘樹 2000『平林2号墳』山梨県教育委員会ほか
- (54) 末木健 1988『稻荷塚古墳』山梨県教育委員会
- (55) 志村美千子・渡辺孝子編 1974『国分築地一号墳——宮町群集墳の調査——』山梨県教育委員会
- (56) 橋本博文 1979「甲斐の須恵器（その1）甲斐における須恵器生産」『丘陵』第6号 甲斐丘陵考古学研究会
 会 なお、甲斐の須恵器についてはこれまで、6世紀代は陶邑以外の湖西産などの県外産であり、甲斐での生産は7世紀初頭からと考えられてきたが、近年韮崎市の御座田遺跡でこれを遡る6世紀後半代の窯の存在が明らかとなっており、甲斐における須恵器生産については今後再検討の必要がある。
- (57) 坂本美夫 1972「狐塚古墳（春日居町）稲荷塚（一宮町）及び葉舞場古墳（御坂町）出土遺物の集成」9の2 山梨県考古学会
- (58) 末木健 1979『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—北巨摩郡双葉町地内2・中巨摩郡竜王町地内—』 山梨県教育委員会ほか
- (59) 末木健 1978『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—北巨摩郡双葉町地内1—』山梨県教育委員会ほか
- (60) 末木健 1990『山梨県生産遺跡分布調査報告書（窯業遺跡）』山梨県教育委員会
- (61) 猪股喜彦 1982「一宮町鞍掛遺跡発掘調査概報(1)円筒形土器を出土した鬼高期の住居址」『丘陵』第9号 甲斐丘陵考古学研究会
- (62) 長沢宏昌 1985『北堀遺跡』山梨県教育委員会他
- (63) 平塚洋一・平野修 2008『山梨学院川田運動場遺跡群（桜井畑遺跡・亀田遺跡・川田久保田遺跡）』甲府市教育委員会ほか
- (64) 坂本美夫 1999『米倉山B遺跡』山梨県教育委員会ほか
- (65) 末木健他 1990『天狗沢瓦窯跡発掘調査報告書』敷島町教育委員会

第7節 土器編年と墳墓の変遷

1. 弥生から古墳へ

3世紀前半、S字甕の波及とともに甲斐の古墳時代は幕を開ける。出現期である古墳Ⅰ期、駿河では前方後方墳である沼津市高尾山古墳（62m）⁽¹⁾が、やや遅れて信濃で弘法山古墳（63m）⁽²⁾が出現する。次の古墳Ⅱ期にかけて、甲斐ではこの段階の古墳は見られず、中道地域で2世紀末から120基を越える方形周溝墓の造墓活動が続いた上の平遺跡において、最大規模の1号方形周溝墓の造営でピークを迎える。

その上の平遺跡も、古墳Ⅱ期のうちに終焉となり、新しい段階に入る。東海系加飾壺を模倣した壺が出土した甲府市宮の上遺跡9号方形周溝墓もこの段階のものである。

古墳Ⅲ期の3世紀後半、東海系土器を生活スタイルとした集落を基盤として、中道地域に前方後方墳の小平沢古墳（45m）が出現する。再三述べてきたように、甲斐はS字甕を中心に東海系土器が卓越する地域であるにもかかわらず、前方後方形の周溝墓（墳丘墓）や古い段階の前方後方墳が依然として確認されていないが、この背景には、弥生時代後期以来の伝統的な方形周溝墓に固執した地域性が考えられ、この現象は中期まで大きな影響を与えることになる。

その後、4世紀前半の古墳Ⅳ期にかけて、甲斐天神山古墳（132m）、大丸山古墳（120m）、そして甲斐銚子塚古墳（169m）と相次いで3代の大型前方後円墳が築造される。甲府市教育委員会による発掘調査で天神山古墳の築造時期は確定し⁽³⁾、ヤマト王権との強い結び付きがより明確となった。甲斐銚子塚古墳の発掘調査ではS字甕が出土しており、従来の年代観を補強することとなった⁽⁴⁾。

また同じ頃には、八代地域に前方後円墳、岡銚子塚古墳（92m）も出現する⁽⁵⁾。墳形や出土した龍鏡・埴輪などから甲斐銚子塚古墳との関係が注目されてきたが、墳丘規模や埋葬施設からも格差があることは明らかであり、甲斐銚子塚古墳を畿内の王墓とするならば、岡銚子塚古墳は在地的な中位の首長墓であろう。

なお、御坂地域にある墳形不明の亀甲塚古墳は従来、5世紀前半の年代観が与えられていたが、副葬品は前期の様相であり⁽⁶⁾、筆者は遅くとも古墳Ⅲ期古段階の墳墓である可能性を考えている⁽⁷⁾。

この他、盆地内各地では弥生時代後期以来の伝統的な墓制である方形周溝墓が引き続き造営されている。

2. 前期から中期へ

大型前方後円墳が続いた前期から、中期になるとその様相は一変する。古墳Ⅴ期、中道地域において甲斐銚子塚古墳に続く4世紀後半の王墓は隣接する円墳の丸山塚古墳（直径72m）となる。この段階の前方後円墳は、甲府盆地西部の楡形地域（南アルプス市）の物見塚古墳⁽⁸⁾のみであるが、墳丘長は48mと前期の前方後円墳に比べはるかに小規模である。同じ盆地西部の甲西地域の低湿地には、直径36mの円墳の大師東丹保古墳が築かれる。壺形埴輪を巡らせており、これらの関係が注目される。

その一方で、弥生時代以来の伝統的な墓制である方形周溝墓が、5世紀後半代まで営まれていることも、発掘調査により明らかにされている。これらの中には上の平遺跡1号方形周溝墓⁽⁹⁾（30×24m）、東山北遺跡⁽¹⁰⁾2号方形周溝墓（36×31m、いずれも中道地域）、甲府中心部の桜井畑遺跡3号方形周溝墓（33×27m）のように、一辺30mを超える大型の方形周溝墓が存在する。

続く古墳Ⅵ期には、甲斐最大の方墳である笛吹市八代町竜塚古墳（一辺55m）⁽¹¹⁾が出現する。甲斐の中期を最も特徴づける墳墓であり、詳細は第3章で取り上げる。曾根丘陵の西端、三珠地域（現市川三郷町）にある赤鳥元年銘鏡の出土で知られる鳥居原塚古墳⁽¹²⁾も同時期の方墳とされている。

続く5世紀後半の古墳Ⅶ期、中道地域にはかんかん塚（茶塚）古墳⁽¹³⁾が築造されるが、初期の馬具や甲冑を

はじめとする豊富な副葬品が見られるものの、規模はさらに縮小される。一方では、周辺にある東山南遺跡・岩清水遺跡などにおいて、初期（古式）須恵器を伴う直径 25m 前後の円形周溝墓が出現・展開する。東山南（B）遺跡2号円形周溝墓（TK216 型式期）、同1号円形周溝墓（TK208 型式期・ON46 号窯段階）、岩清水遺跡1号円形周溝墓（ともにTK23 型式期）と集中して営まれる。朝日無名墳も樽形甕が出土しており同時期である⁹⁹。この間、TK23 型式の須恵器把手付碗が出土した東山南（A）遺跡K-1号方形周溝墓を最後に造られなくなるが、豊富地域の高部宇山平遺跡円形周溝墓、三珠地域の上野遺跡¹⁰⁰ 円形周溝墓、若草地域の寺部内附第6遺跡¹⁰¹ 1号円形周溝墓など、円形周溝墓は新しい身分秩序を現した墓制として造営され盆地内の周辺地域へ拡がりを見せる。さらにこの時期は、豊富地域の王塚古墳¹⁰²、三珠地域の大塚古墳¹⁰³ など、中・小規模な前方後円墳や帆立貝式古墳も造営されており、様々な型式の墳墓が中道地域周辺へ展開する様相を見せる。

そして5世紀末の古墳Ⅷ期、境川地域の墳丘長 60mの馬乗山2号墳¹⁰⁴ を最後に前方後円墳は消滅し、帆立貝式古墳も次の古墳Ⅸ期、関東の諸地域より約1世紀早い6世紀初めには築造が停止する。

3. 中期から後期・終末期へ

前期から中期へ、そして後期へと、甲斐の古墳分布は甲府盆地内のほぼ全域へと展開し、前方後円墳消滅後の古墳Ⅸ期の6世紀初頃になると、甲府盆地の北と南において小規模な円墳に横穴式石室が導入される。現在、中道地域の米倉山無名墳（県番号 18070）がその最古と考えられており、中道地域では考古博物館構内古墳¹⁰⁵ と、小規模な円墳が造られる。また、甲府盆地北東部から北縁部にかけては、春日居地域の春日居古墳群（41基）や石和地域の大蔵経寺山古墳群（20基）、横根・桜井積石塚古墳群（145基）の甲府市横根支群 39号墳¹⁰⁶ などの積石塚古墳で発掘調査が行われているが、このうち大蔵経寺山 15号墳と横根・桜井の横根支群 39号墳は、須恵器他の出土遺物から6世紀前半の甲斐Ⅸ期に位置づけられる。これら2基の積石塚古墳の横穴式石室の形態はいずれも無袖であることから、さらには先行する米倉山無名墳も狭長の無袖横穴式石室をもつ可能性が指摘されている¹⁰⁷ がこれについては第4章で取り上げる。

積石塚古墳の出現年代については、他地域では5世紀中葉から後半に遡るものがあり、甲斐でも横根・桜井積石塚古墳群の桜井支群B号墳から出土した珠文鏡と勾玉の型式が5世紀代に遡る可能性が指摘されているが¹⁰⁸、どこまで遡るかは明確ではなく、この積石塚含め 145基という甲斐の積石塚の主体をなす横根・桜井積石塚古墳群については、今後の調査に期待するところが大きい。さらに、甲斐の積石塚古墳からは、信濃大室古墳群のような渡来系遺物の出土はなく、渡来人の移住が後の郡名の由来だといわれる巨摩郡（巨摩郡）と積石塚を結びつける根拠も乏しく、その系譜・被葬者は未だはっきりせず、初現（下限）年代を含め未解決な問題が多いが、その後積石塚の内部主体は有袖、竪穴系も混在しながら、7世紀前半の古墳Ⅺ期には造墓が終了すると見られる。

古墳Ⅸ期も6世紀前半から中頃になると、有袖横穴式石室をもつ古墳が見られるようになる。八代地域の笛吹市莊塚古墳¹⁰⁹ は墳形・石室構造はともに不明であるが、周囲の状況から埋葬施設は横穴式石室であり、甲斐Ⅸ期の須恵器や馬具、埴輪などが確認されている。盆地北西部地域の甲府市万寿森古墳（直径 38m）は、小振りな自然石を用いた全長 14.2mの狭長な両袖横穴式石室である。範囲確認調査では周溝が確認され、TK10 型式併行期の須恵器が出土したことにより、従来から考えられていた築造年代が甲斐Ⅸ期に確定した¹¹⁰。これらを経て、6世紀後半の古墳Ⅹ期には、全長 16.75mの大型の左片袖横穴式石室をもつ甲府市加牟那塚古墳（直径 45m）¹¹¹ へと続く。荒川を挟み右岸の甲斐市（旧敷島町）では規模は小さいが大塚古墳¹¹²、新たに発見された大庭古墳¹¹³ などがある。ほぼ同じ頃、盆地東部の一宮・御坂一帯（現笛吹市）は、笛吹川支流の金川・京戸川扇状地を舞台に古墳の築造が活発になり、東日本屈指の全長約 17.5mの大型左片袖横穴式石室を誇る姥塚古墳（直径 40m）¹¹⁴ を盟主墳とする錦生古墳群を中心して、長田古墳群（35基）¹¹⁵、四ツ塚古墳群（27基）¹¹⁶ などの群集墳が形成される。この中で、錦生古墳群の東端にある井之上無名墳からは、甲斐では唯一の陶棺が出

土している。吉備や畿内のものとは製作技法が異なり、屋根の三角文の検討などから東国の形象埴輪との関連が指摘されている⁽³²⁾。周囲の古墳分布の状況から、6世紀後半から7世紀前半の中に位置付けられることは間違いないが、特定は難しい。また、金川を挟んで右岸の楽音寺古墳群にある稲荷塚古墳では、人物埴輪・器財埴輪の出土が知られているが⁽³³⁾、最近では新たな埴輪片も確認され、その特徴からやはり東国（毛野）の埴輪工人との関係が考察されている⁽³⁴⁾。

これらは甲斐の周辺諸地域との交流を窺わせるもので、6世紀の甲斐の主要交通路上に位置する盆地東西の2大勢力といわれている加牟那塚・姥塚両古墳の被葬者像が垣間見える⁽³⁵⁾。

春日居古墳群では、土盛墳27基と積石塚14基が混在しながら造墓が続き、古墳群中最大規模の天神塚古墳（直径35m）や平林2号墳などが築造される。八代地域では地藏塚古墳（直径35m、石室全長10.1m）⁽³⁶⁾、中道では稲荷塚古墳がある。

6世紀末から7世紀初頭の古墳Ⅺ期になると、笛吹市一宮町では国分古墳群（110基）、千米寺・石古墳群（68基）⁽³⁷⁾が造墓を開始し、長田・四ツ塚古墳群とともに7世紀後半にかけてさらに群集墳密集地帯が拡大する。両古墳群ともに、直径20m以下の小円墳で占められているが、調査した古墳はわずかであり、全容は未だ不明である。

国分古墳群では国分築地1号墳をはじめ6基の調査が行われている。無袖と両袖の横穴式石室が見られ、7世紀後半まで続く。4号墳からは金銅製毛彫馬具が出土している（型式は未確認）。千米寺・石古墳群ではこれまでに大塚古墳と釈迦堂1号墳の調査が行われている⁽³⁸⁾。いずれも両袖横穴式石室で、7世紀中葉から末にかけての須恵器の他、鉄鏃などが出土している。大塚古墳の築造は7世紀中葉、釈迦堂1号墳は7世紀初頭の築造とされているが、須恵器の様相から釈迦堂1号墳は7世紀末に下る可能性もある。

四ツ塚古墳群と金川を挟んで対岸にある経塚古墳⁽³⁹⁾は、7世紀前半築造の八角墳として復元整備されている。墳丘構築の過程において基底部の石室開口部側は八角形を意識していることも考えられるが、背面は円形であり、なお疑問が残る。

春日居古墳群では、7世紀中葉にかけて馬具や銅鏡を副葬する狐塚古墳・寺の前古墳⁽⁴⁰⁾の他、笹原塚3号墳（積石塚）⁽⁴¹⁾などが続く。盆地北東部の山梨市では新たな勢力として岩下古墳群において無袖横穴式石室の牧洞寺古墳（石室全長10.55m）・天神塚古墳⁽⁴²⁾などが築造されるが、7世紀前半のうちに終了する。

八代地域では、7世紀中葉にかけて古柳塚古墳⁽⁴³⁾に透彫金銅製馬具の優品が、御崎古墳⁽⁴⁴⁾に金銅製毛彫馬具（道上型毛彫馬具Ⅲ期）⁽⁴⁵⁾が副葬され、最近調査が行われた竹居1号墳からは象嵌鏝が出土している⁽⁴⁶⁾。中道地域では稲荷塚古墳で銅鏡をはじめ豊富な副葬品が追葬され続けている。

盆地北西部の甲斐市竜王・双葉地域では赤坂台古墳群の造墓が始まり、二ツ塚1号墳、往生塚古墳⁽⁴⁷⁾、双葉2号墳、中秣塚古墳⁽⁴⁸⁾、竜王2・3号墳など、古墳Ⅻ期の7世紀末まで続く。無袖石室が多く、消滅したものを含めかつては50基ほど存在したとされ、竜王2号墳の金銅製毛彫馬具（道上型毛彫馬具Ⅳ期）をはじめ、春日居古墳群に次いで馬具の出土が多い⁽⁴⁹⁾。

現状では、赤坂台古墳群での造墓を最後に、甲斐の古墳築造は終焉を迎える。

4. おわりに

以上をまとめると、巨視的には、前期はヤマト王権との強力なパートナーシップを築いていたことを示すかのような大型前方後円墳の時代、中期は帆立貝式古墳をはじめとする中・小規模な墳墓の時代、そして後期は大型横穴式石室墳と群集墳の時代、という流れを見ることができる。

この編年をもとに、次章からは甲斐の古墳時代各時期について検討する。

註

- (1) 池谷信之ほか 2012『高尾山古墳発掘調査報告書』沼津市教育委員会
- (2) 斎藤忠ほか 1978『弘法山古墳』松本市
- (3) 平塚洋一 2015『天神山古墳』甲府市教育委員会
- (4) 森原明廣・森屋文子 2005『国指定史跡 銚子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県教育委員会
笠原みゆきほか 2008『国指定史跡 銚子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県教育委員会
- (5) 伊藤修二 1995『山梨県指定史跡 岡銚子塚古墳一保存整備報告書一』八代町教育委員会
- (6) 石神孝子 2006『笛吹市御坂町亀甲塚古墳出土管玉の再整理』『研究紀要』22 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- (7) 2017・2019 年度（平成 28・30）に行われた調査で出土した土器は、この段階に収まるものであり、前期古墳の可能性が高くなった。
櫛原功一 2020「山梨県笛吹市亀甲塚古墳の研究—2017・2019 年度の調査成果—」『帝京大学文化財研究所研究報告』第 19 集
- (8) 松浦有一郎 1983『物見塚』櫛形町教育委員会
田中大輔 2007『山梨県指定史跡 物見塚古墳』南アルプス市教育委員会
- (9) 小林広和・里村晃一 1991『上の平遺跡（第 1・2・3 次調査）』山梨県教育委員会
- (10) 末木健ほか 1993『東山北遺跡』山梨県教育委員会
- (11) 伊藤修二 2004『竜塚古墳』八代町教育委員会
小林健二 2004「甲斐の方墳とその周辺—山梨県八代町竜塚古墳の調査から—」『専修考古学』第 10 号 専修大学考古学会
小林健二 2008「方形周溝墓と方墳—竜塚古墳出現の背景—」『山梨県考古学協会誌』第 18 号 山梨県考古学協会
- (12) 山梨県 1998『山梨県史』資料編 1 原始・古代 1 考古（遺跡）
- (13) 小林広和・里村晃一 1979『甲斐茶塚古墳』山梨県教育委員会
- (14) 岡野秀典 1997「山梨県の初期須恵器」『山梨県考古学協会誌』第 8 号 山梨県考古学協会
- (15) 堀ノ内泉 1989『上野遺跡』三珠町教育委員会
- (16) 宮澤公雄 2004『寺部村附第 6 遺跡』南アルプス市教育委員会ほか
- (17) 合掌形石室を埋葬施設にもつ古墳として知られている王塚古墳であるが、末木健氏が述べているように（末木健 2008「王塚古墳出土衝角付冑について—岩下貞男氏による発見場所の確定—」『山梨県考古学協会誌』第 18 号 山梨県考古学協会）、墳形は測量図等から帆立貝式古墳ではなく、前方後円墳とするのが妥当である。
- (18) 保坂和博 2001『大塚古墳』山梨県教育委員会
- (19) 坂本美夫・米田明訓 1985『八乙女塚古墳（馬乗山 1 号・2 号墳）・口開遺跡』春日居町教育委員会ほか
- (20) 坂本美夫 1987『岩清水遺跡・考古博物館構内古墳』山梨県教育委員会
- (21) 横根・桜井積石塚古墳群整備活用計画策定委員会 1991『横根・桜井積石塚古墳群調査報告書—分布調査報告、横根支群 39 号墳・桜井内山支群 9 号墳発掘調査報告—』甲府市教育委員会ほか
- (22) 坂本美夫 1986『「大蔵経寺山無名墳の提起する問題」』『山梨考古学論集 I』山梨県考古学協会
- (23) 橋本博文 1984「甲府盆地の古墳時代における政治過程」『甲府盆地—その歴史と地域性—』雄山閣
- (24) 坂本美夫 1972「荘塚古墳、無名墳（山梨市）、稲荷塚古墳（同）、古塚古墳、住村塚古墳出土遺物集成図」『甲斐考古』10 の 1 山梨県考古学会

- (25) 平塚洋一 2006「万寿森古墳」『山梨考古』第102号 山梨県考古学協会
- (26) 註(12)に同じ。
- (27) 末木健 1986『大塚古墳』敷島町教育委員会
- (28) 大寫正之 2016「大庭遺跡」『山梨考古』第139号 山梨県考古学協会
- (29) 大塚初重 1966「山梨県姥塚古墳について」『富士国立公園博物館研究報告』第16号 富士国立公園博物館
- (30) 註(12)及び
宮澤公雄 2014『長田1号墳』笛吹市教育委員会ほか
- (31) 小林広和・里村晃一 1985『四ツ塚古墳群』山梨県教育委員会他
石神孝子 1999『南西田遺跡・西林遺跡・四ツ塚古墳群』山梨県教育委員会ほか
- (32) 小野正文 1999「御坂町井之上の陶棺」『國學院大學考古学資料館紀要』第15輯 國學院大學考古学資料館
小野正文 1999「御坂町井之上の陶棺」『山梨県史』資料編2 原始・古代2 考古(遺構・遺物) 山梨県
小林健二ほか 2017『ひつぎのヒミツー棺から読み解く古墳時代ー』山梨県立考古博物館
- (33) 坂本美夫 1972「狐塚古墳(春日居町) 稲荷塚(一宮町) 及び葉舞場古墳(御坂町) 出土遺物の集成」9
の2 山梨県考古学会
- (34) 熊谷晋祐 2016「笛吹市楽音寺古墳群の新資料から」『山梨県考古学協会誌』第24号 山梨県考古学協会
- (35) 大隅清陽 2009「酒折宮伝承と甲斐の古代」『第37回古代史サマーセミナー公開シンポジウム資料集 ヤ
マトタケル東征伝承を考える』同実行委員会
- (36) 註(12)に同じ。
- (37) 註(12)に同じ。
- (38) 山梨大学考古学研究会 1982「大塚古墳調査報告」『丘陵』第9号 甲斐丘陵考古学研究会
小野正文他 1986『釈迦堂Ⅰ』山梨県教育委員会ほか
- (39) 吉岡弘樹 1995『経塚古墳』山梨県教育委員会ほか
- (40) 坂本美夫 1971「寺の前古墳出土遺物集成図」『甲斐考古』8の1 山梨県考古学会
- (41) 野沢昌康・坂本美夫 1979『笹原塚3号墳ー積石塚の調査ー』春日居町教育委員会
- (42) 小林広和・里村晃一 1975「山梨県の大型横穴式石室墳」『信濃』第27巻第4号 信濃史学会
- (43) 古柳塚古墳研究会 2004「古柳塚古墳の研究」『帝京大学山梨文化財研究所 研究報告』第12集
- (44) 坂本美夫 1979「毛彫り馬具の予察ー特に御崎古墳出土品を中心としてー」『甲斐考古』16の2 山梨県考
古学会
- (45) 白石太一郎・白井久美子・萩原恭一 2002『印旛郡栄町浅間山古墳発掘調査報告書』千葉県史料研究財団
白井久美子 2013「関東の後期・終末期古墳」小林三郎・佐々木憲一編『古墳から寺院へー関東の7世紀
を考えるー』六一書房
- (46) 宮澤公雄 2016『竹居古墳群』笛吹市教育委員会ほか
- (47) 註(12)に同じ。
- (48) 皆川洋 1997『赤坂ソフトパーク内遺跡群・四ツ石遺跡・中秣塚古墳』竜王町教育委員会
- (49) 毛彫馬具はこの他、四ツ塚古墳群の4号墳でも1点出土している。

第2章

甲斐銚子塚古墳出現の背景

第1節 甲斐天神山古墳の位置付け

1. はじめに

甲斐地域の古墳時代については、甲府盆地内での変遷を中心にその動向が捉えられてきた。この中で、盆地南部の曾根丘陵の一角にある旧中道町（現甲府市）一帯は、弥生時代後期から古墳時代にかけての墳墓関連遺跡が集中する地域であり、東日本屈指の規模を誇る甲斐銚子塚古墳を筆頭に全長 100m を超える大型前方後円墳を抱える中道古墳群―東山古墳群と米倉山古墳群・金沢古墳群ほか旧中道町にある古墳群の総称―を舞台に、それぞれの立地から変遷に至る過程や歴史的背景などについて、これまで様々な検討・解釈・位置付けが行われてきた経緯がある。

一方、甲斐周辺地域に目を向けてみると、隣国駿河にある出現期の前方後円墳、高尾山古墳の発掘調査が行われ、築造時期をめぐってさまざまな議論が交わされてきたが⁽¹⁾、甲斐においても甲斐銚子塚古墳の第2次整備事業に伴う発掘調査成果⁽²⁾は未だ記憶に新しく、その後の大丸山古墳の史跡指定、そして甲斐天神山古墳⁽³⁾の発掘調査など、中道古墳群の動向に再び注目が集まっている。

新たな調査研究成果は、その地域に強大な権力が存在（誕生）したことを明らかにするだけでなく、当該地域社会の様々な実態を明らかにすることにも繋がることは言うまでもない。それは同時に、これまでの成果を見直すことも必要とされる。

本節では、甲斐の前期古墳をめぐる検討課題について考えるにあたり、前章で設定した時間軸となる古墳時代前期の土器編年をもとに、まず甲斐天神山古墳の位置付けを確認しておきたい。

2. 土器編年から見た甲斐天神山古墳の位置付け

甲斐天神山古墳は、当該地域第2位の規模を持つ前方後円墳で、以前はくびれ部から出土したとされる土師器から、長らく中期の前方後円墳と位置づけられてきたが⁽⁴⁾、1990年代になり底部穿孔二重口縁壺の破片が採集されたことや古墳の立地から、前期に遡る前方後円墳の可能性が指摘されるようになった⁽⁵⁾。その後、田中新史氏は自ら採集した二重口縁壺等の破片資料の実測図を紹介し、壺の型式が前期でも古い段階のものであることを各地の資料との比較から検証し、甲斐の古墳前期首長墓を小平沢古墳→甲斐天神山古墳→大丸山古墳→甲斐銚子塚古墳という変遷とともに、甲斐天神山古墳を凡東国の中に位置付けた⁽⁶⁾。そして、2012年（平成24）と2014（平成26）年の甲府市教育委員会による発掘調査において、前方部、後円部に設定したトレンチから底部穿孔の二重口縁壺が出土したことにより、正式な手続きを経てようやく前期古墳として位置付けられることとなった⁽⁷⁾。

出土（採集）した二重口縁壺は「伊勢型二重口縁壺」⁽⁸⁾の系譜にあるもので、甲斐では坂井南遺跡や西田遺跡などの集落遺跡からは散見されていたが、墳墓からの出土はほとんど例がない。ここで、他地域出土の伊勢型二重口縁壺といくつか比較しながら見てみたい（第42図）。まず、奈良県東殿塚古墳⁽⁹⁾出土例は頸部が長く、田嶋分類ではⅡB-5（e）類になり⁽¹⁰⁾、廻間Ⅲ式1段階に併行する資料である。頸部からの外反がやや強い。これに続くのは静岡県小深田西遺跡1号墳⁽¹¹⁾出土例で、廻間Ⅲ式2段階に併行する。三重県前田町屋遺跡2号墳⁽¹²⁾などもこの段階のものである。さらに三重県深長古墳⁽¹³⁾からは175点もの出土が報告されており、廻間Ⅲ式後半に併行する⁽¹⁴⁾。同時期では栃木県藤本観音山古墳出土例などもある⁽¹⁵⁾。これに対し、群馬県元島名將軍塚古墳⁽¹⁶⁾出土例は頸部が短いもので田嶋分類ではⅡ3-1（e）類となっているが、これは頸部が長く型式変化しないタイプと想定されている。深長古墳や元島名將軍塚古墳の二重口縁壺はいずれも焼成後穿孔の規格品で、墳丘に圍繞配列されていたとみられる⁽¹⁷⁾。

甲斐天神山古墳出土の二重口縁壺は小破片資料が多いが、田嶋分類ⅡB-5（e）類に分類されるもので、底部は

焼成前の孔穿である。しかし、実見したところ、田中新史氏も指摘しているように、口縁端部の処理や色調にはバラツキがあり、深長古墳のものよりも1段階古いことが想定される。よって、廻間Ⅲ式2段階、下っても3段階のものであろう。これは、筆者の甲斐編年古墳Ⅲ期の中頃にあたる時期となる⁽¹⁸⁾。

3. 土器編年から見た中道古墳群の位置付け

甲斐天神山古墳出土の二重口縁壺が編年的に位置付けられたところで、もう少し時期・地域を広げた中で中道古墳群を位置付けてみたい(第43図)。土器編年には前章でも対比した東海⁽¹⁹⁾のほか畿内⁽²⁰⁾、北陸⁽²¹⁾、隣国駿河⁽²²⁾との併行関係を示し、古墳では前方後円墳集成編年⁽²³⁾、大賀克彦氏の広域編年⁽²⁴⁾や岸本直文氏の畿内編年⁽²⁵⁾を参考にした。

そして、前章で検討し第41図にも提示しておいたが、新たな年代観で甲斐の中道古墳群を改めて見ると、小平沢古墳は3世紀後半、甲斐天神山古墳は3世紀末～4世紀初め頃、大丸山古墳は4世紀第1四半期、甲斐鉾子塚古墳は4世紀第2四半期、そして丸山塚古墳は4世紀第3四半期となる。これにより、4世紀後半から5世紀初めにかけての様相がより鮮明になったといえるが、甲斐鉾子塚古墳から丸山塚古墳への首長墓の変遷と、当該期の埴輪を含む土器資料の希薄さとは無関係ではないように思える。

註

- (1) 池谷信之ほか 2012『高尾山古墳発掘調査報告書』沼津市教育委員会
池谷信之 2012『高尾山古墳ガイドブック スルガの王 大いに塚を造る』沼津市教育委員会
田中裕 2013「出現期古墳の広域編年と東西関係に関する覚書き」『西相模考古』第22号 西相模考古学研究会
北條芳隆 2013「高尾山古墳と墳丘築造企画論」『西相模考古』第22号 西相模考古学研究会
西川修一 2013「列島東部の古墳出現に関する視角—高塚古墳の出現は発展・進歩か—」『西相模考古』第22号 西相模考古学研究会
高尾山古墳の調査成果が突きつけた問題は大きく、新聞報道発表等から聞く築造実年代には「驚異的な古さ」を感じてしまう。一方で、土器編年と副葬品の不整合の問題や甲斐鉾子塚古墳との築造企画の問題等も指摘されており、依然として検討課題は多い。
- (2) 森原明廣・森屋文子 2005『国指定史跡 鉾子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県教育委員会
- (3) 北関東にはほぼ同時期の前橋天神山がある。東日本的視野をもって、「甲斐天神山古墳」とする。
- (4) 山本寿々雄 1960「甲斐天神山古墳出土の甕について」『富士国立公園博物館研究報告』第3号 富士国立公園博物館
坂本美夫 1978「山梨県・曾根丘陵周辺地域の前期古墳等について」『甲斐考古』別冊第2号 山梨県考古学会
- (5) 車崎正彦 1993「甕龍鏡考」『翔古論集』久保哲三先生追悼論文集
宮澤公雄 1994「甲斐曾根丘陵における古墳時代前半期の様相—東山・米倉山地域の再検討を通して—」『山梨考古学論集Ⅲ』山梨県考古学協会
- (6) 田中新史 2002「有段口縁壺の成立と展開—特化への道程・類別と2地域の分析—」『土筆』第6号 土筆舎
- (7) 平塚洋一 2015『天神山古墳—第1次・第2次発掘調査報告書—』甲府市教育委員会
- (8) 田口一郎ほか 1981『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会
- (9) 泉武他ほか 2000『西殿塚古墳・東殿塚古墳』天理市教育委員会

- (10) 田嶋明人 2014「二重口縁壺にみる推移と変革(上)」『東生』第3号 東日本古墳確立期土器検討会
- (11) 山口和夫 1984「小深田西遺跡」『焼津市埋蔵文化財調査概報』Ⅲ 焼津市教育委員会
佐藤祐樹 2014「駿河における二重口縁壺の位置づけ」『東生』第3号 東日本古墳確立期土器検討会
- (12) 新名強 1999『前田町屋遺跡(2次)』三重県埋蔵文化財センター
- (13) 増田安生 1989「深長古墳」『埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』三重県埋蔵文化財調査報告 79
- (14) 赤塚次郎 2001「壺形埴輪の復権」『史跡青塚古墳発掘調査報告書』犬山市教育委員会
- (15) 小出紳夫 2002「藤本観音山古墳採集の有段口縁壺」『土筆』第6号 土筆舎
大澤伸啓ほか 2005『藤本観音山古墳発掘調査報告書Ⅰ』足利市教育委員会
- (16) 註(8)に同じ。
- (17) 古屋紀之 2007『古墳の成立と葬送祭祀』雄山閣
- (18) 2016年(平成28)3月、山梨県立考古博物館に「山本寿々雄考古資料コレクション」が寄贈された。この中に、小平沢古墳の墳丘から採集されたS字甕の破片や、甲斐天神山古墳では礎とともに、「天神山」の注記があるS字甕の口縁部破片があることが確認された。断面の屈曲から古墳Ⅳ期まで下るものではなく、古墳Ⅲ期中頃の資料である。
- (19) 赤塚次郎 1990「考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎 1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎 1997「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎・早野浩二 2001「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第2号 愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎 2006「東海系土器と東日本の墳丘墓」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
北島大輔 2000「古墳出現期の広域編年—尾張低地部編年の提示、近畿・北陸地方との併行関係を中心に—」『S字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会事務局
早野浩二 2011「土師器の編年 ④東海」『古墳時代の考古学1 古墳時代史の枠組み』同成社
- (20) 寺沢薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立柏原考古学研究所
寺沢薫 2002「布留0式土器の新・古と二・三の問題」『箸墓古墳周辺の調査』奈良県立柏原考古学研究所
米田敏幸 1991「土師器の編年Ⅰ近畿」『古墳時代の研究』6 雄山閣
森岡秀人・西村歩 2006「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題—最新年代学を基礎として」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
西村歩 2008「中河内地域の古式土師器編年と諸問題」『邪馬台国時代の摂津・河内・和泉と大和』香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館
西村歩 2011「土師器の編年 ③近畿」『古墳時代の考古学1 古墳時代史の枠組み』同成社
- (21) 田嶋明人 1986「漆町遺跡出土の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県埋蔵文化財センター
田嶋明人 2008「古墳確立期土器の広域編年 東日本を対象とした検討(その1)」『石川県埋蔵文化財情報』第20号 財団法人石川県埋蔵文化財センター
田嶋明人 2009a「古墳確立期土器の広域編年 東日本を対象とした検討(その2)」『石川県埋蔵文化財情報』第21号 財団法人石川県埋蔵文化財センター
田嶋明人 2009b「古墳確立期土器の広域編年 東日本を対象とした検討(その3)」『石川県埋蔵文化財情報』第22号 財団法人石川県埋蔵文化財センター
田嶋明人 2011「古墳確立期土器の広域編年 東日本を対象とした検討(その4)」『西相模考古』第20号 西相模考古学研究会
田嶋明人 2013「4期の画期をめぐって」『東生』2号 東日本古墳確立期土器検討会

- (22) 渡井英誉 1998「大廓式土器小考―大廓式の画期とその展開―」『庄内式土器研究』XVI 庄内式土器研究会
渡井英誉 1999「中見代式土器小考―大廓式土器から中見代式土器へ―」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会
- (23) 広瀬和雄 1992「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成 近畿編』山川出版社
- (24) 大賀克彦 2002「凡例・古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』清水町教育委員会
大賀克彦・堀大介 2003「凡例」『風巻神山古墳群』清水町教育委員会
- (25) 岸本直文 2011「古墳時代史の枠組み③ 古墳編年と時期区分」『古墳時代の考古学1 古墳時代史の枠組み』同成社

第2節 大丸山古墳の埋葬施設

1. はじめに

甲斐地域の古墳時代は、4世紀に入ると旧中道地域（現甲府市）に前方後方墳の小平沢古墳が出現し、以後甲斐天神山古墳、大丸山古墳、甲斐銚子塚古墳と大型前方後円墳が相次いで築造される。この中で、東日本屈指の169mの規模を誇る前方後円墳、甲斐銚子塚古墳については、近年行われた第2次史跡整備事業に伴う発掘調査において、後円部北側に東日本の前期古墳では初となる「突出部」や、周溝内に「区画堤」とも考えられる遺構が確認された。また、後円部西側の墳端では埋設された木柱が、周濠からは円盤形・蕨手形の木製品が複数個体発見され、北側では笠形木製品の祖型とも考えられるものなど、儀礼に関わる木製品が多数出土した⁽¹⁾。埋葬施設に割竹形木棺を伴わないものの⁽²⁾、これら墳丘・周溝の構造、出土品から、甲斐銚子塚古墳が極めて畿内的な古墳であることが再確認され、年輪年代測定や炭素14測定など理化学的な分析結果も報告されている⁽³⁾。

さらに甲斐天神山古墳については、甲府市教育委員会による発掘調査により底部穿孔の二重口縁壺が出土し⁽⁴⁾、前節で検討したとおり前期古墳として位置付けられた。

一方、甲斐地域最古の古墳である小平沢古墳については、基礎的なデータを得るための発掘調査が行われておらず、墳丘測量と採集された土器が年代決定の根拠となっているにすぎない⁽⁵⁾。

そしてもう1基、「二重構造の特異な埋葬施設」をもつ前方後円墳として、多くの出土品とともに古くから学界で知られている大丸山古墳であるが、2007年（平成19）9月、墳丘測量と埋葬施設の調査報告書『甲斐大丸山古墳―埋葬施設の調査―』（以下「報告書」とする）が調査から40年近い時を経て刊行された⁽⁶⁾。調査の概要は既に『中道町史』に掲載されていたが⁽⁷⁾、この報告書の刊行によって、特に埋葬施設の調査成果が明らかになるとともに、この古墳の重要性が改めて問われることとなったのである。

本節では、この報告書の成果を通して、大丸山古墳の埋葬施設の構造について改めて検証してみたいと思う。

2. 大丸山古墳に関する研究史・調査経過について

大丸山古墳は、甲府盆地南東部縁に連なる曽根丘陵上にある中道古墳群のうち、標高340mの東山台地一帯に分布する東山古墳群の中核をなす古墳で、東山から北東方向に張り出した尾根の鞍部、標高310m付近に立地している（第44図）。はじめにも触れたように、この一帯は大型前方後円墳をはじめとして、弥生時代から古墳時代にかけての墳墓関連遺跡が集中しており、この地が甲斐における古墳出現の舞台となった重要な地域として広く知られているのは周知のとおりである⁽⁸⁾。

1928年（昭和3）3月、偶然の機会に発見された甲斐銚子塚古墳の後円部の埋葬施設から多くの副葬品が出土した翌1929年（昭和4）3月、大丸山古墳の後円部の埋葬施設も地元住民らによって発掘され、その後埋葬施設が「上下二段の構造」になっていることが初めて報告された（第46図上段）⁽⁹⁾。「下段」の組合式石棺から成人男女2体の遺骸とともに、花崗岩製の石枕、三角縁三神三獣鏡、画文帯環状乳三神三獣鏡、素文帯四乳八禽鏡、ガラス小玉などが、「上段」の竪穴式石室内からは鉄製柄付手斧、竪矧板皮綴短甲、鉄斧、鉋、鑿、鋸、刀子、鎌、鉄剣、鉄刀などの豊富な副葬品が出土した。そしてこれらの大部分は甲斐銚子塚古墳の出土品とともに東京国立博物館に所蔵され、さらに上田三平氏により『考古学雑誌』において主体部構造の特異性が紹介され（第46図下段）⁽¹⁰⁾、以後広く学界に知られるようになった。

一方、墳形についての記録はほとんどなかったが、1975年（昭和50）に発行された『中道町史』編纂事業の中で墳丘測量調査と主体部の精査が行われることとなった。そして、第1次調査として墳丘の測量調査が1969年（昭和44）3月28日から4月4日まで、第2次調査として埋葬施設の発掘調査が1971年（昭和46）12月20日

から1972年(昭和47)1月7日まで行われた⁽¹¹⁾。この成果の概要が出土品とともに『中道町史』に掲載されたが、このあたりの調査に至る経緯や経過については、今回の報告書に調査日誌とともに詳しく記載されている。年度末や年末年始の厳しいスケジュールの中で行われた調査であったが、調査日誌からは現場での緊張感が伝わってくるとともに、写真図版を見ると、40年ほど前の大丸山古墳周辺の風景や、甲斐銚子塚古墳、天神山古墳の近景など貴重なものも含まれている。

なお、築造時期について、埋葬施設の調査で出土した土師器はいずれも細片であり、埴輪もまったく確認されておらず築造年代を決定づけるような資料ではなかったが、墳丘の型式が古い特徴を示していること、副葬品のうち鉄製柄付手斧、堅矧板皮綴短甲が最古型式のものであることから⁽¹²⁾、筆者の編年では古墳Ⅲ期新段階(4世紀第1四半期)であり、甲斐銚子塚古墳に先行するものの、それほど時期を置かないことが考えられている。

3. 墳丘測量調査について

墳丘は、自然地形に加工を加えたもので、主軸を等高線にほぼ沿った東西方向に取り、前方部を西に向けている。規模については、墳丘裾部の調査が行われていないため確定されていないが、『中道町史』では、後円部墳頂部から測量して自然地形の加工面の標高307.8mまでを墳丘裾とすると全長99m、後円部径47m、前方部幅34mとなり、古墳の立地を勘案すると標高304.8mでは全長120m、前方部幅49mとなることが考えられ、葺石の認められる地点も考慮した上で、墳丘構築の過程として、120mの上に99mの前方後円墳を2段築成で構築したと考えられている。

一方、報告書では『中道町史』より詳細なコンターが図示されており(第45図)、コンターが周回する-9m(標高307.8m)で全長104.5m、後円部東西径45.2m、南北径48m、前方部幅35mを計測している。さらに、南側に造出し状に突出する遺構や空濠が想定されている。そして、-12m(標高304.8m)では全長122.5m、後円部東西径51.8m、前方部幅48.8mとした上で、墳丘として測量調査を行った-14m(標高302.8m)での全長132m、後円部径60.8m、前方部幅57.2mをとりあえずの墳丘規模として報告している。

4. 埋葬施設の調査について

埋葬施設の実態を確認するため行われた第2次調査であるが、1929年(昭和4)に発掘されたこの埋葬施設は、後円部墳頂部の中心から南西に構築されており(第45図)、調査はまずこの部分の清掃を行うことから始めている。その結果、仁科報告、上田文献とも実測図では天井石が2枚になっているが、実際には西側3分の1が割られ本来は1枚であることが確認された。埋葬施設中央から西側は表土からすり鉢状に落ち込み攪乱を受けていたが、東側は旧状を保ち、厚さ20cmほどの被覆粘土も残されていた。この結果をもとに、東西南北の被覆粘土の状況を断面観察できるように調査区が設定され、調査の進捗に応じて拡張されていった(第47図)。

埋葬施設東西の断面(北面)では東側で墓壇の切り込み面が確認されたが、西側(前方部側)での墓壇の切り込み面は確認できていない。南北の断面(東面)では両側で墓壇の切り込みが確認されている。これらから、墓壇は上段で南北6.5m、東西7.6mほどの隅丸長方形プランが想定される。

そして、被覆粘土、その下の礫層を除去し、南北幅1.2m、東西長さ2.1m(復元長2.9m)の花崗岩製の天井石の状態を記録し、取り除いた(第48図上段)。安山岩の板石で構築された「上面堅穴式石室」について、報告書では「石室は石棺蓋石(長さ2.55m、幅1.35m、厚さ南側20cm、北側10cm)の上面に東西底部2.65m、幅東70cm・中央部70cm・西80cmの規模で南壁はやや外開きに8段、北壁は垂直に9段ほど小口積みで積まれていた。」とあり、西側側壁が石棺内に侵入する際撤去されていたと見られている。さらに「しかしこの石室は組合式石棺に伴う石室とは明確に分離されており、石棺蓋石上に構築されていた事は事実である。」と続いている。

さらに調査は進み、「上面堅穴式石室」を解体し、石棺蓋石を取り除くことが可能な範囲の板石を除去した後、

東西2.6m、東端1.49m、中央部1.4m、西端1m、厚さ10～15cmの不整長方形で表面の剥離が残る花崗岩の1枚岩の蓋石を検出した(第48図中段)。実測後取り除くと、花崗岩の組合式石棺内面は全面に赤色顔料が塗布されていたが、「上面竪穴式」から見えていた西側短側石⁽¹³⁾が石室西側側壁とともに外され、反転させて西側の側壁部分に放置されていた(第48図下段)。底面幅72cm、上面幅83cm、高さ50～52cm、厚さ12cmほどである。東側短側石は底面幅72cm、上面幅85cm、高さ55cm、厚さ20cmほどであり、南側長側石は底面・上面とも長さ255cm、高さは東端で55cm、中央部で52cm、西端で47cm、厚さ17cmほどを測る。北側長側石は底面で長さ250cm、上面長235cm、高さは東端・中央部で52cm、西端で53cm、厚さ東側下場20cm、上場13cm、西側下場20cm、上場5cmほどである。北側・南長側石とも両端に短側石をはめ込むための溝⁽¹⁴⁾が切られている。短側石、長側石とも東側が厚く、東側を主(頭位)として組まれていることがわかる。床石には加工痕はなく、西壁と外された石棺西側短側石の下を掘り下げたところ、墓壇底に礫を敷き詰めていることが確認されている。石棺の内法は、底面で185cm、上面で212cm、幅は東底面で74cm、上面98cm、西底面74cm、上面92cm、高さ東端・中央部・西端いずれも52cmを測る。

5. 「二重構造」をめぐる

さて、ここまで報告書に記載された墳丘測量、埋葬施設の調査経過を見てきたが、ここで問題としたいのは、大丸山古墳の埋葬施設が本当に「二重構造」なのか、ということである。この点について改めて整理してみたい。

報告書では、断面図(第47図)の観察の結果を受け「石室を組み花崗岩による組合式石棺を安置後、蓋石上に竪穴式石室を積んで天井石を載せ礫で充填した後に全体を粘土で被覆して、墓壇との間に拳大の河原石を排水施設のため溝状に置き、粘土面までを埋めて完成させている。」とし、さらに「墓壇中央部に深さ60cm程度の竪穴式石室を設け、花崗岩の切石で組合式石棺を組んで2体を埋葬し、蓋石を覆った後に上部に竪穴式石室を構築して礫層で覆い粘土を外被している事が理解される。その場合に下層石棺の外護の石室は墓壇壁までしっかりと裏込めを補強しており、上段の石室とは別構造に構築されている。」と報告されている。この後、「下段は竪穴式石室内に花崗岩の切石を組み合わせた石棺と、その蓋石上に安山岩の板石で組み立てられた竪穴式石室状の施設である。」「この(上面の)石室は組合式石棺に伴う石室と明確に分離されており、石棺蓋石上に構築されていたことは事実である。」とも繰り返し記載がある。これについては、既に『中道町史』にも「この石棺の側壁外側は安山岩の板石の小口積で、竪穴式石室状に裏込めで固められていた。」とある。

問題となるのは組合式石棺外側の構造である。仁科報告以来、大丸山古墳の竪穴式石室は上下2室に分かれ、組合式石棺自体が「下の石室」としてとらえられ、石棺外側の構造については確認できなかった。上田文献を含め、この「特異性」が大きな影響を与えることとなった。その後、埋葬施設の調査においては、上記のように石棺外側は「竪穴式石室状の施設」であることを確認し、1971年(昭和46)12月28日の調査日誌には、「(上面石室の)小口積みはこの石棺の蓋石の下まで続くらしく、以前の実測図とは大きく食い違う。小口積みの外側に大きな川原石をならべている。南側、西側では小口積みは2列であるが、北側、東側ではさらに外にのび、川原石の位置も石室から離れている。」と書かれているにもかかわらず、今回の報告書では二重構造であることを強調している。

報告書の断面図(第47図)では、組合式石棺の蓋石の上に狭く割石を積んで別構造のようにとらえられるかもしれない。しかし、竪穴式石室の構造について立ち返ってみたとき、それは「棺を土壌内に納めた後、この棺を被覆する施設として構築されたもの」⁽¹⁵⁾であり、石棺を納めた竪穴式石室については、かつて早くに小林行雄氏によって分類されている⁽¹⁶⁾。大丸山古墳の調査では、墓壇下半の構造が十分に把握できていないものの、かつて取り除かれた西側側壁の実測図(第48図)や写真図版を見る限り、石棺の周りに割石を積み上げた壁体構造が確認できる。

つまり、構築順からいえば、掘込墓壇の中央部に礫を敷き、組合式石棺の底石を設置し長側石と短側石で4辺を組み、周囲に板石による「石槨」⁽¹⁷⁾を構築したと考えるべきである⁽¹⁸⁾。そして赤色顔料が塗布され、遺体を石棺に納め副葬品を配し、蓋をする。実測図・写真では蓋石の形状に合わせて割石を積んでいることがわかるが、それは一連の工程としてその後続けて石槨上部を築くためのものにほかならないのである。石棺の蓋石の上に割石が狭く積まれているのは、用意された天井石の幅に合わせ架構するためであり、これが結果的に棺外の副葬品が置かれる空間となり、二重構造のようにになっているのである。

このように見てくると、同じ埋葬施設の構造を持ち古くから類似性が指摘されていた京都府向日市妙見山古墳との比較についても、改めて検証する必要が出てくるかもしれない。両古墳とも花崗岩による組合式石棺蓋石の上に空間が存在することは類似しているものの、妙見山古墳は掘込墓壇ではなく構築墓壇であり⁽¹⁹⁾、墳頂平坦部に浅い凹みを掘り組合式石棺が設置され埋葬施設が築かれていること、石棺両短側石の外側に板石を小口積みして副室を設けているなど、細部の構造は大丸山古墳と大きく異なることから、階層差や地域差も考慮しなければならないだろう。

6. まとめ

大丸山古墳の埋葬施設については、南北6.5m、東西7.6mほどの隅丸長方形プランの掘込墓壇の中央に礫を敷き組合式石棺を組んで石槨下部を築き、遺体を石棺に納め副葬品を配し蓋石をする。「竪穴式石室内に石棺を収めたものには、棺内・棺外ともに遺物を置くことが普通」⁽²⁰⁾であり、短甲や農具類は棺外副葬品として一定の約束のもとに配されたと考えられる。そして、引き続き石槨の上部を築き、最後に天井石を架構し、礫と南北約3.9m、東西約6.8m、厚さ20cmほどの粘土を敷き、墓壇を埋め戻している。これは従来からいわれているような「二重構造」ではなく、一連の工程の中で構築された「組合式石棺を納めた竪穴式石槨」と考えるべきであろう⁽²¹⁾。

7. おわりに

大丸山古墳の埋葬施設について、このほど刊行された調査報告書からその構造について検討してきた。これまで言われていた「二重構造」の埋葬施設については否定することとなったが、これによりこの古墳の学史的意義が失われることは決してないであろう。

それは、石枕とセットになった花崗岩製の組合式石棺や鉄製柄付手斧のような渡来系の工人によってもたらされたと思われる技術や製品⁽²²⁾が、4世紀中葉段階に甲斐へ伝播していたことである⁽²³⁾。このことは、甲斐鉾子塚古墳の前段階において、既に甲斐が駿河・伊豆・信濃・相模を結ぶ流通ネットワークの要衝⁽²⁴⁾であったことにほかならず、豊富な鉄製農具副葬の意義⁽²⁵⁾とともに、甲斐鉾子塚古墳とは異なった埋葬内容をもつ大丸山古墳の重要性が今後改めて問われることになろう。

その意味でも、調査から40年近くの時を経て今回の報告書が刊行された意義はきわめて大きいのである。そして2013年(平成25)年に国史跡に指定されたが、何よりも甲斐鉾子塚古墳とともに甲斐における大型前方後円墳として、1日も早く整備されることを願うものである。

註

- (1) 森原明廣・守屋文子 2005『国指定史跡 鉾子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県教育委員会
- (2) 岩崎卓也 1988「埋葬施設からみた古墳時代の東日本」『考古学叢考』中巻 斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会編 吉川弘文館
- (3) 笠原みゆきほか 2008『国指定史跡 鉾子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県教育委員会
- (4) 平塚洋一 2015『天神山古墳―第1次・第2次発掘調査報告書―』甲府市教育委員会

- (5) 小平沢古墳については、甲府市教育委員会により甲斐天神山古墳とともに新たに墳丘測量調査が行われている。
- (6) 茂木雅博編『甲斐大丸山古墳―埋葬施設の調査―』博古研究会
- (7) 三木文雄 1975「大丸山古墳 新稿」『中道町史』上巻 中道町
- (8) 坂本美夫 1998「大丸山古墳」『山梨県史』資料編1 原始・古代1 山梨県
- (9) 仁科義男 1931「大丸山古墳」『山梨県史蹟名勝天然記念物調査報告』第5輯 山梨県
- (10) 上田三平 1942「大丸山古墳主体部構造の特異性」『考古学雑誌』第32巻第9号 日本考古学会
- (11) さらに第3次調査として墳丘の発掘調査が計画されていたが、実施されていない。また、1976年(昭和51)には山梨県教育委員会による測量調査も行われている。
- (12) 宮澤公雄 1989「鉄製柄付手斧について」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第1集 帝京大学山梨文化財研究所
- (13) 報告書では「妻石」で記載されている。
- (14) 報告書では「柄」と記載されているが、「柄」は本来は一方の端に作った突起のことであり、他方の「柄穴に」差し込むものである。
- (15) 白石太一郎 1985『古墳の知識Ⅰ 墳丘と内部構造』東京美術
- (16) 小林行雄 1941「竪穴式石室構造考」『紀元二千六百年記念史学論文集』京都帝国大学文学部編(1976『古墳文化論考』平凡社に再録)
- (17) 和田晴吾 1989「葬送の変遷」『古代史復元6 古墳時代の王と民衆』講談社
- (18) 「石槨」は棺を収納し、それを保護する施設であり、これに対し出入口を持つ広い空間をもつものが「石室」である。これについては最近、澤田秀実氏により整理されており、ここでは「石槨」と呼ぶのがふさわしいと考える。
- 澤田秀実 2009「竪穴式石槨研究の現状と課題」『季刊考古学』第106号 雄山閣出版
- (19) 山本三郎 1992「2 竪穴系の埋葬施設」『古墳時代の研究』第7巻 古墳Ⅰ 墳丘と内部構造 雄山閣出版
- (20) 註(16)に同じ。
- (21) 小林健二 2009「大丸山古墳の埋葬施設について―調査報告書『甲斐大丸山古墳』から―」『山梨考古学論集Ⅵ』山梨県考古学協会
- (22) 川西宏幸 2004「記念講演 長柄・桜山の時代」『シンポジウム 前期古墳を考える～長柄・桜山の地から～/国史跡指定記念講演会 未来に活かす史跡整備を考える 記録集』逗子市教育委員会・葉山町教育委員会
- (23) 宮澤公雄氏は、畿内の組合式石棺を持つ古墳を詳細に比較検討した上で、大丸山古墳の埋葬施設は二重構造であり、石室西側に小石室の存在を推定した上で、妙見山古墳との類似性を改めて指摘している。さらに、主体部の系譜を中道古墳群の中に求めることはできないとし、大和東南部勢力との関係を想定している。
- 宮澤公雄 2019「甲斐大丸山古墳の再検討(1)―主体部構造の再検討を通して―」『山梨考古学論集Ⅷ』山梨県考古学協会
- 一方でごく最近、河野正訓氏は鉄製柄付手斧(鉄柄斧)の型式学的検討を行い、甲斐の古墳前期の先進的な動向からも大丸山古墳の手斧は加耶との交流を背景に、甲府盆地で生産された可能性があるとする研究成果を発表している。竪矧板皮綴短甲も同様の生産体制を想定しており、十分首肯しうるものである。筆者は、この後取り上げる甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品についても甲斐での製作を想定しているが、これら甲斐の「先進性」や「独自性」については、ヤマト王権(倭王権)と地方の在り方に再考を促すものである。
- 河野正訓 2021「日本列島における古墳時代の鉄柄斧」『考古学雑誌』第103巻第2号 日本考古学会

- (24) 白石太一郎 2006「甲斐銚子塚古墳とヤマト政権」山梨県立考古博物館第24回特別展講演会資料
- (25) 寺沢知子 1979「鉄製農工具副葬の意義」『橿原考古学研究所論集』第4 吉川弘文館

第3節 甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品

1. はじめに

筆者が勤務する山梨県立考古博物館では、2006年（平成18）10月7日から11月26日まで、第24回特別展「甲府盆地から見たヤマトー甲斐銚子塚古墳出現の背景ー」（以下「特別展」とする）を開催した⁽¹⁾。筆者は、この展示会の担当として準備に関わることとなったが、企画した背景には以下のような経緯がある。

特別展の2年前の2004年度（平成16）、国指定史跡である甲斐銚子塚古墳では第2次整備事業に伴う発掘調査が実施されたが、この調査では後円部北側に東日本の古墳では初となる「突出部」が発見され、この部分に取り付き、直交するように周濠内⁽²⁾を横断する「渡り土手」、もしくは水位を調節する「区画堤」とみられる遺構も部分的ではあるが確認された。また、後円部西側の墳端では木柱が、周溝内からは第1次整備事業に伴う発掘調査において出土していた円盤形・蕨手形の木製品が複数個体発見されるなど、儀礼に関わる木製品が多数出土した。当時、笠形木製品の祖型とも考えられたものも含まれ、これら墳丘・周溝の構造、出土品から、それまでに出土した三角縁神獣鏡をはじめとする副葬品及び石室構造から、既に畿内との強い結びつきが指摘されていたがこの古墳が、極めて畿内的な古墳であることが再確認されるに至り⁽³⁾、再び注目されることとなった。

また、第1次整備事業が行われてちょうど20年目でもあり、この間古墳時代の研究は大きく進み、特別展は改めて甲斐銚子塚古墳を紹介する絶好の機会となった。

以上の成果をもとに、特別展では、甲斐銚子塚古墳をはじめ中部・東海・畿内各地域の出土品を通して、甲斐銚子塚古墳出現の背景について再考するとともに、ヤマト政権との関わり及び東日本での位置づけ、さらに「甲斐（甲府盆地）」という東国の一地域から見たヤマト政権について展示を行った。

関係機関の協力により、展示資料については充実した内容となった。そして甲斐銚子塚古墳とともに、1929（昭和4）年に発見され、現在東京国立博物館に所蔵されている大丸山古墳の副葬品のほとんどが「里帰り」し展示され、約2ヶ月の間、間近で見ることができた。そして何よりも、甲斐銚子塚古墳については、旧来より知られていた出土品と最新の出土品を同時に展示できたことは、大いに意義のあることであった。

一方では、当初のテーマ通りの内容で一貫した展示ができたかどうかは別にして、課題が多く残されたことも事実である。

その一つに腕輪形石製品があげられる。鏡とともに前期古墳の代表的な副葬品であり、呪術的でありながら工芸品としても優れた造形美から副葬品の「傑作」ともいわれており⁽⁴⁾、筆者も改めて興味を注がれた。

研究史的には、明治期以来鉄形石を中心に詳細な編年的研究が進められ、成果が蓄積されてきた⁽⁵⁾。そして、畿内を中心に各地に分布する状況から、当然のことながら古墳時代前期の政治動向と密接に関わるものとして扱われてきた⁽⁶⁾。

このような状況を踏まえ、甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品についても、現時点における位置づけが改めて必要と思われる。

本節では、特別展を通じて得られた成果・課題の中で、甲斐銚子塚古墳から出土した副葬品のうち、まず腕輪形石製品を取り上げてみたい。

2. 甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品

東京国立博物館所蔵の甲斐銚子塚古墳出土の副葬品については、発見後すぐに出土の状況及び個々の副葬品について報告・考察され、1930年（昭和5）の国史跡指定とともに学界で広く知られるようになった⁽⁷⁾。その後、1975年（昭和50）に刊行された『中道町史』上巻に、実測図と写真が掲載された⁽⁸⁾。さらに1996年（平成8）

には、山梨県史編纂事業に伴い、改めて出土品の調査と実測が行われ、1999年（平成11）に刊行された『山梨県史』資料編2において実測図が掲載された⁽⁹⁾。しかし、どちらも副葬品個々についての観察の記述はほとんどない。

これらのうち、腕輪形石製品には車輪石6点と石釧5点がある。鍬形石の出土は知られていない。ここでは、『山梨県史』掲載の実測図及び特別展開催時における展示室での観察に基づき見ていくこととする。

なお、各部の名称、型式分類、については、上記の研究成果を参考にしながら進める。

（1）車輪石（第49図）

車輪石はすべて外形・内形ともほぼ正円形である。1点を除き環体幅は小さい。出土時の状況は、石室の中央、木棺内に置かれていたとされる。文献からもわかるとおり、表裏面には多量の赤色顔料が付着しているが、いずれも所々に濃い緑色の光沢が見え、研磨されているのが確認できる。石材は碧玉と思われる。

1は、外径12.1cm、内径6.6～6.9cm、高さ1cmで、外端部がわずかに欠損している。断面は内孔部で厚さ6mm、外端部で4mmを測る。底面は、外端部から環体の中ほどまで平底であるが、内孔に向かって4mmほどの傾斜をもつ。環体幅は2.5～2.6cm。斜面の放射状彫刻は、平面と沈線をもつ凸帯を組み合わせたものである。凸帯との境の屈曲が緩やかなため、実測図からは匙面のようにも見える。鐘方分類のBⅢ型式、蒲原分類のI a型式斜面彫刻4・断面形Dに比定される。

2は、外径10cm、内径6～6.1cm、高さ9mmで、断面は内孔部で厚さ7mm、外端部で1.5mmを測る。底面は、1と同様外端部から環体の中ほどまで平底であるが、内孔に向かって3mmほどの傾斜をもつ。環体幅は1.9～2.1cm。1同様斜面の放射状彫刻は、平面と沈線をもつ凸帯の組み合わせで、鐘方分類のBⅢ型式、蒲原分類のI a型式斜面彫刻4・断面形Dに比定される。

3は、外径9cm、内径6.1cm、高さ8mmで、断面は内孔部で厚さ8mm、外端部で4mmを測る。底面は平底で、環体幅は1.3～1.4cm。斜面の放射状彫刻は、平面に沈線をもつ凸帯の組み合わせであるが、1・2に比べ平面の部分は匙面に近い。鐘方分類のBⅢ型式、蒲原分類のI a型式斜面彫刻4・断面形Fに比定される。

4は、一部が欠損し、さらに4点に割れており、9箇所にも補修孔がある。推定の外径は8.2cm、内径は5.8cm、高さ1cmで、断面は内孔部で厚さ6mmほど、外端部で2mmを測る。底面は内孔側でわずかに上がり底となっている。環体も欠損により幅は1.1～1.4cmとなっている。6点の中では斜面の傾斜がきつく、放射状彫刻は平面に3同様匙面に近い平面に沈線をもつ凸帯を組み合わせている。鐘方分類のBⅢ型式、蒲原分類のI a型式斜面彫刻4・断面形Eに比定される。

5は、外径10.7cm、内径4.6cm、高さ1.1cmで、外端部がわずかに欠損している。断面の厚さは、内孔部で6mm、外端部で5mmを測る。底面は、内孔に向かって5mmほどの傾斜をもつ上がり底で、環体幅は2.5～2.6cm。斜面の放射状彫刻は、平面と凸帯を組み合わせたものであるが、凸帯部は3条の沈線をもつ幅広のものを8箇所配置したもので、さらに外端部側面にも沈線が施されており、他に類例のない、極めて特徴的な彫刻をもつ製品である。したがって、平面の形態は鐘方分類のBⅢ型式、蒲原分類のI b型式に比定されるが、斜面彫刻・断面形は比定できない。

6は、外径8.5cm、内径5.4cm、高さ1.1cmで、表面（上面）と外端部がわずかに欠損している。断面の厚さは、内孔部で1cm、端部で7mmを測り、形状は長方形に近い。底面は平坦で、環体幅は1.2～1.4cm。斜面の放射状彫刻は両面あり、組み合わせは5と同じ平面と3条の沈線をもつ幅広凸帯であるが、こちらは凸帯部が表面に19箇所、裏面に15所と密である。やはり外端部側面にも沈線が施されている。平面形態は鐘方分類のBⅢ型式、蒲原分類のI a型式に比定される。

(2) 石釧 (第50図)

石釧についても、5点のうち1点は約3分の2が欠損しているが、外形・内形ともいずれも正円形である。車輪石同様、多量の赤色顔料が付着しているが、濃緑色と光沢が確認できる。石材も同じく碧玉と思われる。

7は、外径7cm、内径5.6cm、環体高1.2cmを測り、外斜面及び側面に丸い断面をもつ細刻線が施されている。さらに境には沈線を一条巡らせている。断面形は外斜面の傾斜がきつく、内面が内傾している。鐘方分類のAⅠ-a型式、蒲原分類のⅠa類に比定され、石釧の中では多く見られる型式である。

8は、外径7.2cm、内径5.6cm、環体高1.7cmを測る。7と同じく外斜面及び側面に丸い断面をもつ細刻線が施され、境には沈線を一条巡らす。鐘方分類のAⅠ-a型式、蒲原分類のⅠa類に比定され、断面形は外斜面の傾斜がややきつく、内面は内彎しながら内傾している。

9は、外径8cm、内径5.7cm、環体高1.1cmを測る。外端部の一部が欠損している。底面(環体幅)とはほぼ同じことから斜面の傾斜は比較的なだらかで、細刻線はさらに細かい。側面には1段の匙面をもつ。断面形については、内面は稜線が巡るもののほぼ直立し、上端部に平坦な面をもつ。鐘方分類のAⅡ型式、蒲原分類のⅡa類に比定され、7・8とともに多い型式のものである。

10は、上面・下面とも欠損・剥離しているが、側面に施された細刻線から、本来の形状は7・8と同様のものと見られる。推定の外径は6.8cm、内径は5.8cmとなる。現存の高さは1.3cm。

11は、外径7.8cm、内径5.5cm、高さ9mm～1cmを測る。上下面に斜面を有し、上面には7～10とは異なる細い沈線が施されており、あまり明瞭ではないが平坦面の幅のやや広い部分2条が5箇所配置されている。下面には研磨したような平坦面を挟んで、外径部に沈線を、別工程で内径部に6～11本単位で7箇所の沈線を施し、側面にも沈線が巡る。鐘方分類のAⅣ型式、蒲原分類のⅤa類に比定される。

3. 編年の位置づけについて

甲斐鉾子塚古墳出土の車輪石と石釧について見てきたが、ここで形態的特徴をもう一度整理してみよう。

まず車輪石については、平面形はすべて正円である。環体幅は小さいものが多く、斜面彫刻は折面や匙面ではなく、平面中心の構成のものであり、両面装飾のものも含まれている。断面形は上がり底から平底への過渡的な様相が窺える。また、他には見られない型式(第49図5・6)もあるが、これについては後述する。

次に石釧については、内面が内傾しているもの(第50図7・8)と直立しているもの(同9・10)がある。両面装飾のものもある。

以上のような特徴から、先学の研究成果を参考にすれば、甲斐鉾子塚古墳出土の腕輪形石製品は、おおむね前期の新しい段階のものであることは明らかである。

しかし一方で、車輪石・石釧ともに非常にバリエーションが豊富という特徴が存在し、鍬形石のように祖型貝輪からの変遷が辿りにくく、北條芳隆氏も指摘するように⁽¹⁰⁾、両者の型式変遷はわかりにくいのが現状でもある。

ところで、特別展で展示した滋賀県雪野山古墳と愛知県東之宮古墳の出土品については、赤塚次郎氏により濃尾平野の土器編年を基軸とした編年案が提示されている⁽¹¹⁾。

これによると、雪野山古墳は廻間Ⅱ式末に、東之宮古墳は廻間Ⅲ式中頃に位置づけられている。

濃尾平野と甲府盆地との併行関係についても、前章においてS字甕の変遷を中心に検討してきた。そして、甲斐鉾子塚古墳においても、発掘調査において周溝からS字甕(筆者分類Ⅳb類)が出土しており、土器による編年の位置づけでは、松河戸Ⅰ式前半期(1段階)―古墳Ⅳ期という併行関係となっている⁽¹²⁾。

4. 石材・製作技法と製作地

それではここでもう一度、特徴的な車輪石(第48図5・6)の存在について見てみると、斜面彫刻に平面をベ

ースに凸帯と沈線を多用したこの車輪石は、極めて高い技術を窺わせる作品であり、類例を探すのは難しい。特に5については、既に「地元産」ではないかとの指摘がある⁽¹³⁾。これは、北陸または他地域から石材が運ばれ、甲府盆地で製作された「在地での生産」という意味であろうが、筆者も他の車輪石から形式的に変化したというより、独自のデザインのもと他の5点とともに甲府盆地で製作されたものと考えたい。それがどのような体制のもとに生産されたのかを明らかにするのは容易なことではないが、各地で未製品が出土していることも報告されており、製作技法が各地へ伝播している可能性は高いと思われる。

石製品の材質と製作技法に関しては、岡寺良氏による重要な視点がある⁽¹⁴⁾。甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石背品の材質は、濃緑色で硬質の碧玉である可能性は高く、石釧の内面はすべて直立している訳ではないが、外斜面及び側面に丸い断面をもつ細刻線が施されているもの(第50図7・8)がある。そして、三角縁神獣鏡との強い共伴関係にあるということから、これら石製品は岡寺氏のいう「A系統」に属することになる。それが、軟質の緑色凝灰岩製の細かき細刻線が施された石釧をもつような「B系統」との製作工人集団の差が捉えられるとすれば、さらにはその背後にヤマト政権による積極的な施策⁽¹⁵⁾があったとしても、倭鏡も含めた畿内以外の地での積極的な、活発な製作が行われていたことが考えられる⁽¹⁶⁾。

5. 今後に向けて

はじめにも述べたが、特別展を開催するきっかけとなった、甲斐銚子塚古墳の第2次整備に伴う調査において、突出部や周溝の構造、木製品の使用が確認されたことにより、この古墳が前期後半の東日本において、完成された極めて畿内的な古墳であることを改めて示した。

しかし、日常使用する土器をはじめ、古墳時代前期の生活スタイルは濃尾平野に淵源をもつ東海系によって基盤が造られ、中でもS字甕を早くから選択的に取り入れた甲斐(甲府盆地)は東日本では特異な地域であることは、これまでも述べてきたところである。甲斐の古墳時代のはじまりは、このS字甕の波及と定着が大きな画期であり、この基盤の上に、まず前方後方墳の小平沢古墳が造られ、その後天神山古墳・大丸山古墳と前方後円墳が続く。この間に起こる駿河・諏訪を巻き込むS字甕の拡がり、甲府盆地が駿河・伊豆・信濃・相模を結ぶ流通ネットワークの要衝⁽¹⁷⁾として、前期後半にピークを迎える。このような背景のもとに、腕輪形石製品の石材・製作技法が伝播する一方、スズガイ製の貝釧(第51図12~14)のようなものを手に入れるルートも存在したのである。そして、墳丘の型式・構造において、畿内の古墳に忠実な築造技術で造られた甲斐銚子塚古墳が出現する。

甲斐銚子塚古墳の東日本での位置づけについては、従来から畿内政権の東国経営の前線基地的な役割が考えられてきた。甲府盆地内にはヤマトタケルの伝承が多く残されているが⁽¹⁸⁾、それは『古事記』や『日本書紀』に描かれているように、ヤマトタケルに代表されるヤマトの将軍たちによる東征の結果と重なり、前方後円墳や三角縁神獣鏡などの考古学の成果も、こうした歴史観を裏付けるものとして解釈されてきた⁽¹⁹⁾。しかし、前方後方墳の系譜や副葬品個々について研究が進んだ結果、ヤマトからの一方通行であった古墳文化の伝播についての考え方は、現在では大きく見直されている。

本章第6節で取り上げる甲斐銚子塚古墳から出土した木製品は、前期古墳では類例がほとんどなく、筆者が「円板形木製品」と呼ぶものが笠形木製品の祖型になるとすれば、最古のものとなる。しかし、それが甲府盆地で生まれ、ヤマトへ波及したものかという点、三角縁神獣鏡などの分布状況からも難しいが、地方からヤマトへ向けて発信するものがあつたことも考えてみる必要があることを、特別展の最後に述べたところである。

腕輪形石製品についてもまた、同様のことが言えるのではないだろうか⁽²⁰⁾。

註

- (1) 山梨県立考古博物館 2006『甲府盆地から見たヤマトー甲斐銚子塚古墳出現の背景一』

- (2) 厳密には、水をたたえる機能を備えた「ほり」が「周濠」であり、「空ぼり」は「周溝」と区別される(白石 1983)。甲斐銚子塚古墳の「ほり」には木製品が多数遺存していたが、畿内の古墳のように水をたたえていたとまでは言えない。しかし、発掘調査の成果を踏まえ「周濠」を使用している(小林 2014)。
- 白石太一郎 1983「古墳の周濠」『角田文衛博士古稀記念古代学叢論』角田文衛博士古稀記念事業会
- 小林健二 2014「甲斐銚子塚古墳と甲斐の政権」『月刊 歴史読本』2015年1月号(株) KADOKAWA
- (3) 森原明廣・守屋文子 2005『銚子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県教育委員会
- (4) 白石太一郎 2000『古墳の語る古代史』岩波新書
- (5) 小林行雄 1954「鉄形石の研究」『日本考古学協会彙報』別篇2
- 三木文雄・小林行雄 1959「伝統工芸と新興工芸」『世界考古学大系』3 日本Ⅲ 平凡社
- 杉山晋作・八重樫純樹 1986「電算機による石釧・車輪石の類例検索法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第11集
- 蒲原宏行 1987「石釧研究序説」『比較考古学試論』雄山閣出版
- 鐘方正樹 1988「碧玉製腕飾類の研究視点」『網干善教先生華甲記念考古学論集』
- 蒲原宏行 1991「腕輪形石製品」『古墳時代の研究』第8巻 古墳Ⅱ 副葬品 雄山閣出版
- 北條芳隆 1994「鉄形石の型式学的研究」『考古学雑誌』79巻第4号 など
- (6) 小林行雄 1956「前期古墳の副葬品にあらわれた文化の二相」『京都大学文学部五十周年記念論集』 この中で、仿製三角縁神獣鏡の配布と関わり、甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品が取り上げられている。
- 川西宏幸 1981「前期畿内政権論—古墳時代政治史研究—」『史林』64巻第5号 など
- (7) 上田三平 1928「銚子塚を通して観たる上代文化の一考察」『史学雑誌』第39編第9号
- (8) 中道町史編纂委員会 1975『中道町史』上巻
- (9) 山梨県 1999『山梨県史』資料編2 原始・古代2
- (10) 北條芳隆 2002「古墳時代前期の石製品」『考古資料大観』第9巻 弥生・古墳時代 石器・石製品 小学館
- (11) 赤塚次郎 2005「東之宮古墳の編年の位置とその特徴」『史跡東之宮古墳調査報告書』犬山市教育委員会
- (12) 赤塚次郎 2006「甲斐銚子塚古墳と東海系文化」山梨県立考古博物館第24回特別展講演会資料
- (13) 川西宏幸 2004「記念講演 長柄・桜山の時代」『シンポジウム 前期古墳を考える—長柄・桜山の地から—/国史跡指定記念講演会 未来に活かす史跡整備を考える 記録集』逗子市教育委員会・葉山町教育委員会
- (14) 岡寺良 1999「石製品研究の新視点—材質・製作技法に着目した視点—」『考古学ジャーナル』No. 453 ニューサイエンス社
- (15) 河村好光 1986「玉生産の展開と流通」『岩波講座日本考古学』第3巻 岩波書店
- 北條芳隆 1990「腕輪形石製品の成立」『待兼山論叢』24号 史学篇
- (16) 小林健二 2007「甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品について」『専修考古学』第12号
- (17) 白石太一郎 2006「甲斐銚子塚古墳とヤマト政権」山梨県立考古博物館第24回特別展講演会資料
- (18) 末木健 2008「甲斐のヤマトタケル伝承」『研究紀要』24 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- (19) 白石太一郎 1999『古墳とヤマト政権』文春新書
- (20) 小林健二 2015「甲府盆地から見たヤマト(1)—甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品—」『研究紀要』23 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

第4節 甲斐銚子塚古墳出土の壺形埴輪

1. はじめに

本節では、甲斐銚子塚古墳出土の埴輪のうち、特に壺形埴輪について取り上げる。

甲斐銚子塚古墳では、1930（昭和5）年に国史跡に指定される以前から、墳丘一帯に「埴輪円筒」が散在していたことが記載されている⁽¹⁾。

一方で、埴輪研究は、1949年（昭和24）の奈良県桜井茶臼山古墳の発掘調査を契機として、1950年代以降大きく前進したが⁽²⁾、甲斐地域については、全国的な動向の中で橋本博文氏により、甲斐銚子塚古墳・岡銚子塚古墳をはじめとする円筒埴輪をもとに編年が提示された⁽³⁾。また、甲斐の古墳への埴輪導入に関わって、特に甲斐銚子塚古墳については、東日本の古墳や副葬品との比較検討も行われており、その系譜や歴史的意義、解釈は別として⁽⁴⁾、形態的特徴の抽出や編年の位置づけについては、大枠では現在も基本的に変化はない。

そして、甲斐銚子塚古墳では1983～1985年度（昭和58～60）にかけて行われた第1次整備事業に伴う発掘調査⁽⁵⁾において多くの埴輪片が出土し、これらの中に円筒形・朝顔形・壺形などの各種埴輪の存在が確認された。このうち、後円部南側のくびれ部付近に設定した5号トレンチ（5T：第52図）から出土した壺形埴輪が復元され、坂本美夫氏により報告書に先駆けていち早く資料紹介され（第56図35）、以後学界で広く知られるようになった⁽⁶⁾。その後、第2次整備事業に伴い、2001年度（平成13）及び2004年度（平成16）に行われた調査⁽⁷⁾においても、後円部に付随する「突出部」などや特徴的な木製品が注目された一方で、埴輪片も一定量が出土している。

このように、甲斐銚子塚古墳の埴輪については、これまでの発掘調査において相当量が出土しているが、そのほとんどが破片資料であり、遺存状況により磨滅したものが多く。特に円筒形埴輪と朝顔形埴輪については、器壁の厚さや外面のハケ調整、凸帯の形状などを指標としておおまかに区別・分類することが出来、実際には円筒形・朝顔形それぞれに複数の型式が存在することは明らかであるが、これまで完形に復元できたものはない。

一方、壺形埴輪については、上記のように唯一全体の形状がわかる資料があり、この古墳及び当該期の代表的な壺形埴輪となっている。しかし、結果的にこの埴輪のみが「ひとり歩き」している感否めず、その後の第2次整備事業に伴い確認された資料とともに、これらを合わせて再度検討する必要性を強く感じていた。最終的には円筒形埴輪・朝顔形埴輪を含めた中で位置付けなければならないが、本稿ではその嚆矢として、甲斐銚子塚古墳出土の壺形埴輪について改めて検討してみたい。

2. 甲斐銚子塚古墳出土の壺形埴輪

甲斐銚子塚古墳では、これまでの発掘調査において合計 36箇所のトレンチ（本数は45）が設定されている（第52図）。このうち、最も多くの埴輪片が出土した第1次整備事業に伴う調査の未報告資料を中心に実測・再実測を行い、第2次整備事業に伴う調査出土の資料も含め、ここで主な壺形埴輪を概観しておく（第54～56図）。これらは、前方部・後方部の各トレンチから出土しており、坂本氏が報告しているように、円筒形・朝顔形埴輪とともに墳丘を囲繞していたことが改めて推測できる。なお、壺形埴輪の各部位の名称については、先学の研究成果を参考に、ここでは第53図の通りとした⁽⁸⁾。

1は二重口縁となる口頸部上段のやや大型の破片資料である。ほぼまっすぐに外傾し、口縁端部は横ナデにより面を持つ。口縁部径は45.4cmを測る。外面・内面とも磨滅しており、外面には細かな縦ハケによる調整が確認出来るものの、内面は粘土紐の輪積痕跡を指ナデにより調整したと思われるが、ハケ調整を含め確認できない。色調は橙色で、胎土には白色粒子や小石を多く含む。

2も口頸部上段の破片資料であるが、こちらは口縁端部が外反している。口縁部径は47cmで、磨滅が著しく、

外面・内面とも調整は確認できず、口縁端部はわずかに丸みを持つ。器壁は1に比べ薄く、色調は橙色で、1同様白色粒子を多く含む。

3は口頸部上段と段部の3分の1ほどが残存するものと、下段から頸部にかけてこちら3分の1ほどが残っていたものであるが、同一個体と判断し図上で二重口縁に復元した。頸部から下段を経て段部にかけて外反し、上段は1同様直線的に外傾する。上段の高さより下段の高さの方が長い。口縁部径は42.5 cmを測り、口縁端部は面を持つ。段部には下向きに凸帯を貼り付け、横ナデにより仕上げている。頸部を巡る凸帯（頸部凸帯）はない。外面は縦ハケ調整で、内面は指ナデ・ヘラナデにより仕上げている。色調は外面橙色、内面はにぶい橙色で一部に焼けムラが見られる。胎土は1・2と同じである。

4は上段から段部にかけて4分の1ほどが残存し、5は同じ部分の大型の破片、6は上段から下段にかけて残る破片である。4の上段は1・3同様ほぼまっすぐ外傾し、口縁部径44.4 cm、5・6の上段は外反し、口縁部径は5が46.6 cm、6が51 cmを測り、口縁端部はいずれも面を持つ。4より5・6の方が段部の屈曲が明瞭である。5は凸帯が欠損しているが、外面・内面の調整方法、凸帯の貼り付け方は3と同じである。色調はいずれも橙色～にぶい橙色を呈し、胎土には白色粒子を多く含み、4には金色雲母も含まれる。

7～10は口縁端部の破片である。調整方法は1～6と同じで、端部は横ナデにより明瞭な面を持つが、7はやや外反気味で他はほぼまっすぐである。外面に縦ハケ、内面はナデ調整が確認出来る。色調は明橙色～橙色で、胎土には赤色粒子を多く含む。

11～15は段部付近の破片であるが、11・12は3～6に比べると一回りほど小型で、凸帯も小さい。11～14はいずれも外面・内面とも磨滅により調整が不鮮明であるが、凸帯の貼り付け方等、基本的には上記と同様の調整であろう。11には外面に縦ハケ、内面には斜めのハケ調整がわずかに確認出来る。15は口縁端部を欠くが、外反するものと見られ、外面は縦・斜めハケ、上段内面はナデ、下段内面には横・斜めのハケ調整が施されている。また、13には透孔の一部が残っているが、円形か巴形・勾玉形か種類は不明である。色調は11が明黄褐色、他は明橙色～橙色を呈し、赤色・白色粒子を多く含む胎土で、11には金色雲母も含まれる。15には小石も含まれる。また、凸帯に赤彩がわずかに残る。

16は段部から口頸部下段を経て頸部にかけて約3分の2が残っており、段部には一部ではあるが凸帯も接合する。外面は斜め・縦ハケ調整、内面は指ナデ・ヘラナデ調整が見られる。色調は明黄褐色で、胎土には白色粒子が多く含まれる。本資料にも頸部凸帯はない。

17は段部の小破片である。凸帯は欠損している。色調は橙色～にぶい黄褐色で、やはり赤色粒子を多く含む。

18は口頸部下段の破片であるが、3・16より径が大きい。磨滅が著しく外面・内面とも調整は確認出来ず、内面に指ナデ・ヘラナデによる粘土紐の輪積痕跡の調整がわずかに見られる。橙色～明赤褐色の色調で、白色粒子・小石を多く含む胎土である。

19・20・23は口頸部下段の破片、21・22は上段の破片である。外面にはいずれも縦ハケ調整、19・20の内面の下端部と21の内面に横ハケ調整が見られる。色調は橙色～にぶい橙色で、20の内面は灰褐色である。また、20の外面には赤彩が見られる。胎土はいずれも赤色粒子を多く含んでいる。

24はこれまで土師器の壺として報告されてきたものであるが、胎土や焼成は埴輪と同様であることから、新たに壺形埴輪として扱う。口頸部下段の下側から頸部、体部上半（肩部）にかけての破片資料で、口頸部下段がやや外反しており、この資料も二重口縁になるものと思われる。下段外面は縦・斜めのハケ調整で、頸部下にも縦ハケが見られる。体部は球形になると考えられ、肩部外面に綾杉状の刺突文を施す。内面には指ナデによる調整が確認できる。色調はにぶい黄褐色で、胎土には赤色・白色粒子を多く含んでいる。

25～32は頸部から肩部にかけての破片、33・34は体部破片で、このうち28・29・31・32は同一個体である。25・26は磨滅により外面・内面とも調整は不鮮明で、26の内面には指ナデによる粘土紐の輪積痕跡の調整がわず

かに見られる。27も外面・内面ともハケ調整は不鮮明であるが、28・29・31・32は外面に縦ハケ調整、内面は指ナデによる調整が、33は外面斜めハケ、内面は指ナデによる調整、34は外面・内面とも斜めハケ調整がそれぞれ行われている。色調について、25～27は橙色、28・29・31・32は外面にぶい褐色、内面灰褐色、30は外面にぶい橙色、内面明橙色、33・34はにぶい黄褐色である。胎土にはいずれも赤色粒子や金色雲母を含むものが多い。なお、31の外面に赤彩がわずかに確認できる。

35ははじめに触れた通り、出土状況及び唯一全体の形状がわかる資料で、口縁部に三つ巴の透孔を4方向に持つ、甲斐銚子塚古墳を代表する出土品の一つである。観察は既に先の資料紹介において詳細に行われているので⁽⁹⁾、成形・調整方法についてはそちらに譲るとして、ここでは形態的な特徴を中心に、他の壺形埴輪と比較しながら改めて見てみたい。

全体の法量は口縁部径51cm、底部径10.4cm、高さ67cm、体部最大径は41.3cmを測り、口頸部については5・6と同様に上段が外反する二重口縁で、口縁端部には明瞭な強い面を持つ。上段・下段ともに高さは14cm前後であり、3・6・16などと比較すると下段の高さが低い。報告されているように、頸部と体部は完全に接合していないが、頸部と体部の間の2cm前後の空隙を考慮しても低く、外反する上段と下段の高さはほぼ同じになっている。頸部径も3や16に比べるとやや大きい(太い)印象を受ける。頸部凸帯の有無については不明であるが、今回他の資料を見ても貼り付けていないことが確認され、これは当初の予見通りである。体部については中央に最大径をもつ球胴であるが、24～31と比べると肩の張りが弱く、体部下半も窄まりが大きく、後述する40のようなタイプとも異なっている。底部は36～40を含め、すべて焼成前穿孔の平底である⁽¹⁰⁾。

36～40は体部の下端部～底部にかけての破片である。いずれも磨滅により外面・内面の調整は確認できないが、38の内面には横ハケによる調整が残っている。底部径は36が14.8cm、37は10.4cm、38は10.6cm、39は11.6cmをそれぞれ測る。色調について、36は明黄褐色、37・38は橙色、39はにぶい黄褐色を呈する。胎土には白色粒子や金色雲母を多く含む。40は体部下半から底部にかけてのもので、報告書では底部付近のみの実測図であったが、体部の破片資料があり、図上で復元した。磨滅により外面・内面とも調整は不明で、粘土紐の輪積痕跡が見える。体部の最大径は44.8cmを測り、この部分に稜をもち屈曲し、ほぼまっすぐに底部に向かう。底部はすべて焼成前穿孔、平底であり、底部径は10.8cm、色調は明黄褐色、胎土に赤色粒子・小石を含む。

以上が甲斐銚子塚古墳出土の主な壺形埴輪の概要であるが、この他、透孔のある破片についても報告されており、これらは35のように壺形埴輪を特徴づける重要な属性であるが、小破片では巴形・勾玉形であっても、朝顔形埴輪の可能性も比定できないことから、今回はあえて取り上げないことにした。

3. 壺形埴輪の型式分類

それでは、これまで見てきた形態的特徴をもとに、甲斐銚子塚古墳の壺形埴輪を型式分類してみたい。とはいえ、全体の形状を窺える資料は依然として第56図35のみであり、したがって口縁部から頸部・屈曲部にかけての特徴がまず大きな指標ということになる。

その前に、同じ二重口縁を持つ朝顔形埴輪との区別の問題について触れておこう。両者の口縁部・頸部を比較してみると、朝顔形埴輪は頸部から段部をもたずそのまま大きく外反するもの(第57図41)と、明瞭な段部を持ち大きく外反するもの(同42)がある。口頸部の高さを見ると、下段は上段に比べ2割前後高くなっている。これに対し、壺形埴輪も口頸部上段は外反・外傾しているが、朝顔形埴輪より角度は小さい。また、高さは下段が上段よりさらに高くなる傾向にあるようで、二重口縁全体が長く立ち気味である。

さらに、頸部凸帯の有無も大きな指標で、上記のように壺形埴輪は頸部凸帯を持たず、頸部周辺は小破片でも壺形埴輪と判断できる。この他、色調に橙色のものが多いようで、口縁部から頸部・屈曲部まで復元可能な場合、現状ではこれらの点で朝顔形埴輪と区別することができる。

では、これらを踏まえ壺形埴輪を見てみると、まず、口縁部が外反するもの（2・5・6・15・35ほか）と、直線的に開くもの（1・3・4ほか）とに分類される。ここでは前者を口縁部1類、後者を口縁部2類とする。口縁端部にはほとんどのものが面を持つ。

次に、体部であるが、第56図35についてはやや肩の張りが弱い、ほとんどは頸部からの屈曲が強い球胴を呈するものと見られる。これらを体部A類とするが、第56図40は体部下半に稜をもち屈曲するもので、体部上半の形状は想定しにくい、体部全体では長胴で下膨れになるかもしれない。これを体部B類とする。

これら口頸部上段と体部の組み合わせからは、大きくは2型式に、やや詳細に4型式が想定されることになる。つまり、球胴の体部を持ち口頸部上段が外反するものは壺形埴輪A1類、上段がまっすぐ外傾するものが壺形埴輪A2類となる。また下半部が屈曲し下膨れになると考えられる体部に口頸部上段が外反するものを壺形埴輪B1類、上段がまっすぐ外傾するものを壺形埴輪B2類として、ひとまず型式分類しておきたい。

さて、ここでもう一度、口頸部の高さに戻るが、第56図35は外反する口縁部及び球胴の体部から、壺形埴輪A1類に分類される。しかし、前章で概観したとおり、下段の高さが他の壺形埴輪より低く、上段とほぼ同じ高さになっている。これについては坂本氏により、頸部と体部が完全に接合しておらず、第1次調査に伴う発掘調査当時の出土状況等に基づいて復元されたことが述べられている。他に確認出来た資料が少ない状況の中であって、当時としてはきわめて妥当な復元だったといえるだろう。

今回掲載した他の資料を見てみると、壺形埴輪A2類とした第54図3は、復元実測であるが上段の高さは推定で13cm、下段は16.5cmを測る。第55図16は上段を欠損しているが下段は高さ20.6cmある。東日本では、古墳時代前期後半から中期初頭にかけての壺形埴輪は体部が長胴化し、口頸部下段が大きく発達し、全体的に大型化する傾向にあることから、相対的に見ても上段の高さが下段を超えることは考えにくい。

したがって、具体的に上段と下段の高さの比率を表すことは難しいが、新たな資料に基づいて第35図35の口頸部下段の高さを推測すると17～18cmとなり、これまでより4cm前後高くなる可能性があり、全体の高さも70cm前後となることを提示しておきたい。

4. 甲斐における墳墓の変遷と壺形埴輪

甲斐鉾子塚古墳出土の壺形埴輪について、一応整理できたところで、甲斐地域の壺形埴輪について、古墳時代の時間軸の中でもう少し詳しく見ていきたい。

甲斐鉾子塚古墳は、筆者編年の古墳Ⅳ期（4世紀第2四半期）に位置づけられる（第41・43・58図）。土器編年では東海の松河戸Ⅰ式前半期（1段階）、畿内の布留式中段階に併行する時期である。

ところで、壺形埴輪の定義としては、底部穿孔された同じ規格（型式）の壺を多量に使用し、「圍繞配列」⁽¹¹⁾することがまずもってあげられる。古屋紀之氏は全国各地の墳墓における底部穿孔壺の圍繞配列を詳細に分析しているが、東日本の古墳において円筒埴輪が採用される古墳時代前期後半以前には、畿内の影響下のもとで底部穿孔壺による圍繞配列が出現・定着していったと考えている⁽¹²⁾。一方、赤塚次郎氏は、壺をもって墳墓を圍繞する伝統は東海地域に淵源があるとし、壺形埴輪の系譜の一つが東海系にあることを述べている⁽¹³⁾が、両者とも壺が弥生墓制から続く伝統的な道具（祭器）であり、発信する側、受け入れる側の地域性・伝統性を強調している点は重要である。

甲斐での底部穿孔壺の初見は、古墳Ⅱ期（3世紀中頃）の甲府市榎田遺跡⁽¹⁴⁾2号方形周溝墓、市川三郷町上野遺跡⁽¹⁵⁾1号方形周溝墓であり、焼成前穿孔された同じ規格の在地系折り返し口縁壺、二重口縁壺などが2～3点ずつ出土している（第58図）。どちらも周溝中に配置されたと考えられる。

次の古墳Ⅲ期（3世紀後半～4世紀初頭）になると、焼成前底部穿孔の壺が見られるようになる。榎田遺跡4号方形周溝墓、米倉山B遺跡⁽¹⁶⁾1号方形周溝墓、桜井畑遺跡⁽¹⁷⁾1号方形周溝墓（いずれも甲府市）、さらに古墳

IV期の甲州市下西畑遺跡⁽¹⁸⁾ 4号方形周溝墓、桜井畑遺跡2号方形周溝墓へと続く。これらの墳墓においても同規格の壺が2～3点出土している。遺存状況や調査の規模や状況にもよるかもしれないが、これらの壺の出土状況からは北関東や東北部で見られるような囲繞配列といえるものではないだろう。しかし、方形周溝墓から同じ規格の壺が数点出土する状況は、弥生時代後期から見られるようで⁽¹⁹⁾、これは甲斐地域あるいは中部高地における地域性・伝統性ではないかと考えられる。

再び古墳に戻ろう。甲斐の前期古墳において壺形埴輪を持つのは、甲斐IV期の甲斐銚子塚古墳と体部の破片が出土している旧八代地域の笛吹市岡銚子塚古墳⁽²⁰⁾のみであり、甲斐III期新段階に先行する旧中道地域の大丸山古墳では、現在まで埴輪の存在は知られていない。これに先行する甲斐天神山古墳では、第1節で見たとおり底部穿孔の壺形土器が出土しており⁽²¹⁾、円筒埴輪導入以前の壺による囲繞配列になるかもしれない。甲斐地域最古の古墳である前方後方墳の小平沢古墳においては、墳丘で採集されたS字甕以外、壺に関する情報は不明である。

甲斐IV期（4世紀後半～5世紀初頭）では、甲斐銚子塚古墳に隣接する丸山塚古墳から、甲斐銚子塚古墳と同様な円筒埴輪が出土している⁽²²⁾。壺形埴輪が出土したとの報告もあるが、丸山塚古墳に埴輪の囲繞配列があったかどうかを含め、今後さらに検討の余地があると思っている。

その後、壺形埴輪による囲繞配列を受け継いだのは、甲府盆地西部の低湿地に立地する南アルプス市大師東丹保古墳⁽²³⁾である。直径36mほどの円墳と考えられる墳丘裾を壺形埴輪のみで囲繞配列を行っており、当初は古墳周辺からまとまって出土した土師器とともに、古墳VI期（5世紀前半）に編年してきた。

壺形埴輪は、口頸部外面に凸帯状の粘土紐を貼り付け二重口縁部状にしており、粘土紐の形状により2種類が認められ、口頸部上段も端部がわずかに外反するものと大きく外反するものがある。類似する例として、神奈川県逗子市・葉山町の長柄・桜山第1・2号墳⁽²⁴⁾、茨城県岩井市上出島2号墳⁽²⁵⁾からの出土がある（第59図）。体部は長胴で、口頸部の外面・内面と体部外面は縦・斜めのハケ調整で、赤彩を施している。底部は厚みのある平底で、焼成前の底部穿孔である。これらの口頸部や体部の形態・製作技法などから、甲斐銚子塚古墳の壺形埴輪の系譜上にあり、その前段階に各地に普及した伊勢型二重口縁壺⁽²⁶⁾をはじめ、多様な地域型の二重口縁部壺⁽²⁷⁾の影響を受けてきたものと考えられるが、古墳の時期的な位置づけにはやはり問題があると考えていた。

体部の長胴化、口頸部下段の発達化は、古墳時代前期後半から中期初頭にかけて東日本に盛行する形態である。これは「円筒埴輪に近づくための変化」⁽²⁸⁾であり、赤塚氏の言うように、肩が張らない体部が長胴化したものについて、時期を引き下げることはやはり問題がある⁽²⁹⁾。

であるから、大師東丹保古墳の築造年代については、東日本の視野で見ると、古墳V期まで遡上することとなり、4世紀後半⁽³⁰⁾、下っても4世紀末、壺形埴輪の終末期⁽³¹⁾までであろう。

そうすると、同じ盆地西部にある前方後円墳の南アルプス市物見塚古墳⁽³²⁾と同時期となり、両者の関係が問題になってくる。また、八代地域の大型方墳である笛吹市竜塚古墳⁽³³⁾には先行することとなる（第41図）。これらの古墳は立地・墳形はそれぞれ全く異なるが、墳丘には葺石を備えている。しかし、埴輪を樹立したのは大師東丹保古墳だけである。規模は縮小しているが前方後円墳の物見塚古墳、埴輪をもつ大師東丹保古墳、そして竜塚古墳と、いずれもその後の古墳時代中期を予見させる状況であるが、これら中期前半の新たな動向については、次章で改めて考えることにしたい。

5. まとめ

甲斐銚子塚古墳の壺形埴輪については、現状では2種類4型式が想定される。口頸部上段に高さのある形態が特徴で、古墳時代前期では東日本最大級の規模を誇る畿内型的大型前方後円墳を囲繞する壺形埴輪であり、形態には強い規格制が見られる。しかし、副葬品の組み合わせと比較すると畿内の影響は薄く、埴輪製作そのものは周辺地域の二重口縁部壺の影響を受けながら「地域や被葬者の主体的な選択」⁽³⁴⁾により、甲斐地域の中で主体的

に行っていたことが考えられる⁽³⁵⁾。

また、それに先だって、弥生時代以来の伝統的墓制である方形周溝墓においては、底部穿孔壺を使用し、圍繞配列とはいえないまでも、圍繞配列を意識した祭祀が行われていた様子が見受けられ、4世紀前半まで続く。同じ頃、古墳には円筒埴輪の波及とともに壺形埴輪として大型化し古墳に樹立され、4世紀後半まで続く。甲斐ではその後しばらく古墳に埴輪を巡らすことはなく、圍繞配列が見られるようになるのは、やはり5世紀後半まで待たなければならないようである。

註

- (1) 松平定能編 1814『甲斐国志』巻之四十二 古跡部第五 八代郡中郡筋(雄山閣 1970『甲斐国志』第2巻に所収)
上田三平 1928「銚子塚を通して観たる上代文化の一考察」『史学雑誌』第39編第9号
- (2) 上田宏範 1959「埴輪の諸問題」『世界考古学大系』第3巻 日本Ⅲ 平凡社
上田宏範 1961「壺形土器」『桜井茶臼山古墳附櫛山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第19冊
近藤義郎・春成秀爾 1967「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第3号 考古学研究会
近藤喬一・都出比呂志 1971「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」『史林』第54巻第6号 史学研究会
川西宏幸 1978・1979「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2・4号 日本考古学会(1988『古墳時代政治史序説』塙書房に補筆、所収) など
なお、埴輪の研究史については、以下に詳しく記載されている。
車崎正彦 2004「総説 埴輪」『考古資料大観』第4巻 弥生・古墳時代 埴輪 小学館
- (3) 橋本博文 1978「甲斐における在地首長制の成立とその展開」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』24
橋本博文 1980「甲斐の円筒埴輪」『丘陵』第8号 甲斐丘陵考古学研究会
- (4) 高橋克壽 1994「埴輪生産の展開」『考古学研究』第41巻第2号 考古学研究会
- (5) 坂本美夫 1988『銚子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県教育委員会
- (6) 坂本美夫 1987「甲斐銚子塚古墳出土の壺形埴輪」『考古学雑誌』第72巻第4号 日本考古学会
- (7) 吉岡弘樹 2002『銚子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県教育委員会
森原明廣・守屋文子 2005『銚子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県教育委員会
笠原みゆきほか 2008『銚子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県教育委員会
- (8) 置田雅昭 1977「初期の朝顔形埴輪」『考古学雑誌』第63巻第3号 日本考古学会
山根洋子 1992「第5節 出土埴輪」矢島宏雄編『史跡森將軍塚古墳』更埴市教育委員会
廣瀬寛 2001「茶臼山形二重口縁壺と前期古墳の朝顔形埴輪」『立命館大学考古学論集Ⅱ』立命館大学考古学論集刊行会 など
- (9) 註(6)文献に同じ。
- (10) 橋本氏の文献(註5)の中で、甲斐銚子塚古墳出土の壺形埴輪の底部破片2点の実測図が掲載されているが、このうち1点は平底ではなく、下方に突出したものである。また、もう1点は平底であるが底部穿孔は見られないようである。しかし、この2点の資料について筆者は実見していないので、現時点でこれらの存在は保留にしておきたい。
- (11) 古屋紀之 2004「底部穿孔壺による圍繞配列の展開と特質—関東・東北の古墳時代前期の墳墓を中心に—」『土曜考古』第28号 土曜考古学研究会
古屋紀之 2005「土器・埴輪配置から見た東日本の古墳出現」東北・関東前方後円墳研究会編『東日本における古墳の出現』六一書房

- (12) 古屋紀之 2007「第6章 団塊記列」『古墳の成立と葬送祭祀』雄山閣
- (13) 赤塚次郎 2001「壺形埴輪の復権」『史跡青塚古墳発掘調査報告書』犬山市教育委員会
- (14) 高野玄明 1995『榎田遺跡』山梨県教育委員会ほか
- (15) 堀ノ内泉 1989『上野遺跡』三珠町教育委員会
- (16) 坂本美夫ほか 1999『米倉山B遺跡』山梨県教育委員会ほか
- (17) 中山誠二 1990『桜井畑遺跡A・C地区』山梨県教育委員会ほか
- (18) 保坂和博・石神孝子 2002『下西畑遺跡・西畑遺跡・影井遺跡・保坂家屋敷墓』山梨県教育委員会ほか
- (19) 中山誠二 1993「甲斐弥生土器編年の現状と課題—時間軸の設定—」『研究紀要』9 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- (20) 伊藤修二 1995『山梨県指定史跡 岡・鉾子塚古墳』八代町教育委員会
- (21) 平塚洋一 2015『天神山古墳—第1次・第2次発掘調査報告書—』甲府市教育委員会
- (22) 註(3)及び(5)に同じ。
- (23) 保坂和博 1997『大師東丹保遺跡IV区』山梨県教育委員会ほか
- (24) 依田亮一・柏木善治 2001『長柄・桜山第1・2号墳』神奈川県教育委員会・財団法人かながわ考古学財団
- (25) 大森信英ほか 1975『上出島古墳群』岩井市教育委員会
日高慎 1996「6. 上出島2号墳出土遺物の再検討」岩井市史編纂委員会自然考古部会編『岩井市の遺跡Ⅱ 岩井市史遺跡調査報告』第2集
- (26) 田口一郎 1981『元島名將軍塚古墳』高崎市教育委員会
田口一郎 東海系土器の末裔たち『第9回春日井シンポジウム資料集』第9回春日井シンポジウム実行委員会
- (27) 比田井克仁 1995「二重口縁壺の東国波及」『古代』第100号 早稲田大学考古学会
赤塚次郎 2002「総説 土器様式の偏差と古墳文化」『考古資料大観』第2巻 弥生・古墳時代 土器Ⅱ 小学館
- (28) 註(12)に同じ。
- (29) 2000年(平成12)4月に山梨で開催された埴輪研究会において、5世紀前半代の新しい時期に比定される壺形埴輪とされていた。
- (33) 註(23)及び保坂和博 1999「埴輪」『山梨県史』資料編2 原始・古代2 山梨県
- (31) 塩谷修 1992「壺形埴輪の性格」『博古研究』博古研究会
- (32) 松浦有一郎ほか 1983『物見塚』榎形町教育委員会他
田中大輔 2007『山梨県指定史跡 物見塚古墳』南アルプス市教育委員会
- (33) 伊藤修二 2004『竜塚古墳』八代町教育委員会
- (34) 高橋克壽 1998「古墳時代の造形—埴輪」『考古学による日本歴史』12 芸術・学芸とあそび 雄山閣
- (35) 小林健二 2013「甲府盆地から見たヤマト(2)—甲斐鉾子塚古墳出土の壺形埴輪—」『研究紀要』29 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

第5節 甲斐銚子塚古墳出土の円筒埴輪

1. はじめに

前節では、甲斐銚子塚古墳出土の壺形埴輪を取り上げ、それまでの成果に新たな資料を加え、暫定的ではあるが型式分類を行うとともに、甲斐地域での壺形埴輪の変遷や位置づけ、さらにその背景について検討を行った。

本節では朝顔形埴輪を含めた円筒埴輪を取り上げる⁽¹⁾。前稿で若干触れておいたが、埴輪の研究史については筆者がここで詳しく取り上げるまでもなく、他稿を参照していただきたいが⁽²⁾、埴輪の起源や系譜に関する多くの研究を経て⁽³⁾、1978年（昭和53）に発表されたいわゆる「川西編年」⁽⁴⁾により、円筒埴輪の研究は大きく進展し現在に至っている。この中で、甲斐銚子塚古墳出土の円筒埴輪も時間軸に位置付けられたが、以後、東国各地においても円筒埴輪による首長墓編年や生産・流通などについて活発に議論されるようになった。

このような動向の中、東国への埴輪の波及に関わって、甲斐地域の円筒埴輪について本格的に取り上げた橋本博文氏は、「特殊器台系譜の初期円筒埴輪」を持つ甲斐銚子塚古墳と岡銚子塚古墳との間に政治的同盟関係を想定し、さらに駿河の松林山古墳、毛野の朝子塚古墳出土の埴輪との形態的・技法的類似性から、そこに畿内と東国との強い結び付きを読み取ろうとした⁽⁵⁾。同時期の畿内の埴輪との比較や、共伴する埴輪及び副葬品との組み合わせなどから、この解釈は後に見直されることになったが⁽⁶⁾、東国の初期埴輪から古墳時代の政治過程を具体的に論じたものであった。

その後、甲斐銚子塚古墳では2次にわたる史跡整備事業に伴い発掘調査が行われ、周知の通り多くの成果が得られている。これらのうち、埴輪については、後円部南側に設定した4-1号トレンチ（4-1T：第52図）及びくびれ部付近に設定した5号トレンチ（5T）の墳丘テラスでは、基部が樹立された状態で確認された。また、同じ5号トレンチからは円筒形埴輪（第62図19）、朝顔形埴輪（第63図24）、壺形埴輪の大型の破片が出土し、壺形埴輪は全体の形状が、円筒形埴輪・朝顔形埴輪については、口縁部（口頸部）から胴部凸帯（最上段）までが復原された。これらは、甲斐銚子塚古墳、並びに当該地域を代表する埴輪として山梨県立考古博物館に展示されることとなり、後に山梨県指定文化財となっている。

しかし、それ以外の埴輪については、ほとんどが小破片であり、磨滅したものが多いため、唯一全体の形状がわかる壺形埴輪は別にして、その後の資料としての取扱いをより困難なものにさせることとなった。

本節では、甲斐銚子塚古墳出土の円筒埴輪について、これまでの報告成果に基づきその形態的特徴を捉えることを第一の目的とする。その上で型式分類を行い、さらに当該地域における埴輪生産の動向について考えてみたい。

2. 甲斐銚子塚古墳出土の円筒埴輪

前稿同様、まずここでは甲斐銚子塚古墳出土の主な円筒形埴輪・朝顔形埴輪を概観しておく（第61～63図）。甲斐銚子塚古墳で発掘調査が行われた36箇所のトレンチ（本数は45）のうち（第52図）、最も多くの埴輪片が出土した第1次整備事業に伴う調査の報告書掲載資料を中心に再実測を行うとともに、第2次整備事業に伴う調査出土の資料も含め、未報告資料については今回新たに実測を行ったが、もちろん出土資料すべてではなく、あくまでも特徴がわかる資料に限定した。

なお、円筒形埴輪、朝顔形埴輪の各部位の名称については第60図の通りとしたが⁽⁷⁾、胴部の破片資料については、円筒形か朝顔形かの半別が困難であることから、ひとまず円筒形埴輪として取り扱うこととする。また、基部の破片資料も報告されているものの、胴部の段数、凸帯の条数は不明であるため、ここでは取り扱わないこととする。

(1) 円筒形埴輪 (第 61・62 図)

1 は口縁部の破片資料である。単純口縁で緩やかに外反し、口縁端部は横ナデで丸味を持ち、わずかに玉縁状で、口縁部径は 44 cm を測る。外面には斜めのハケ、内面は横・斜めハケによる調整が確認出来るが、内面は磨滅により一部不鮮明である。色調はこぶい黄褐色⁽⁸⁾で、胎土には赤色粒子や金色雲母を多く含む。

2 は口縁部から胴部にかけての 3 分の 1 ほどが残存する大型の破片資料で、最上段の凸帯までが残っている。1 同様緩やかに外反するが、口縁端部は横ナデであるが尖り、内面に平坦な面を持つ。口縁部径は 48.4 cm で、外面は縦ハケ、凸帯から下の胴部外面は細かい縦ハケ調整である。口縁部内面は横ハケ調整であるが 1 部に輪積痕が確認できる。胴部内面は横ハケ後斜めのハケ調整。貼り付けの凸帯は大きな上辺・下辺・が内彎し断面が M 字形を呈するもので、幅 2.7 cm、高さ 1.8 cm を測る。器壁は 1.4 cm 前後で出土埴輪の中でも厚く、色調は明黄褐色で、胎土には赤色・白色粒子、金色雲母を多く含む。

3・4 は口縁部の破片資料である。3 も外反口縁であるが、端部は面を持つ。外面は縦ハケ、内面は磨滅により調整は確認できない。色調は明黄褐色で、赤色・白色粒子、小石を含む胎土である。4 は直線的に開く口縁部で、端部は玉縁状を呈する。外面は磨滅により調整確認不可、内面は横ハケ・ナデによる調整が確認できる。色調はこぶい黄褐色で、胎土には赤色・白色粒子、小石を含む。

5～10 は胴部の破片資料である。5 は磨滅により外面調整は確認できず、内面は横・斜めのハケ、ヘラナデによる調整で一部確認不可。M 字形凸帯は貼り付けで幅 2.6 cm、高さ 0.8 cm で突出度は低い。色調は橙色、白色粒子、小石を多く含む胎土である。

6 も胴部破片である。外面は縦ハケ、内面は横・斜めのハケによる調整で、長方形の透孔を開けているが 1 段あたりの孔数は不明。凸帯は突出度が高く、上辺・下辺が内彎するタイプのもので、貼り付け面の幅 2.8 cm、高さ 1.8 cm を測る。色調はこぶい黄褐色で、胎土には赤色粒子、金色雲母を含む。

7 は磨滅により外面・内面とも調整は確認できない。外面は縦ハケ、内面は横・斜めのハケによる調整で、不整長方形とみられる透孔を開けているが、本資料も 1 段あたりの孔数は不明である。凸帯は 6 同様突出度が高く、上辺・下辺・側面共に内彎しており、幅 3.0 cm、高さ 1.9 cm を測る。色調は黄褐色で、胎土には赤色粒子、金色雲母を含む。

8 も磨滅により外面調整は確認できず、内面は不鮮明であるが横・斜めのハケ調整がわずかに確認できる。凸帯は 6・7 と同様のタイプであるが、幅 1.3 cm、高さ 1.7 cm とやや小さい。色調はこぶい黄褐色を呈し、胎土には赤色粒子、金色雲母を含む。

9 の外面は縦ハケ調整が確認できるが、内面は磨滅しているが指ナデと横ハケ調整がわずかに確認できる。透孔は逆三角形である。凸帯は M 字形の貼り付けで、幅 2.4 cm、高さ 1.3 cm 色調は同じくこぶい黄褐色、赤色粒子、金色雲母を含む胎土である。

10 の外面には斜めのハケ調整が、内面は指ナデ後の横・斜めのハケ調整が確認できるが、いずれも磨滅により不鮮明であり、輪積痕が見られる。凸帯は断面台形で上・下辺の内彎が少なく、幅 2.1 cm、高さ 1.0 cm と小さい。色調は明褐色、胎土には金色雲母、小石を多く含む。

11～18 は口縁部の破片資料である。11 は有段口縁部の破片資料である。口径は 35.2 cm、磨滅を受けているが端部は横ナデにより面を持つ。色調は黄橙色、胎土には白色粒子、金色雲母を含む。

12～14 は端部が大きく外側へ屈曲するタイプで、12 は口径 39.8 cm、端部は面を持つが、横ナデによりやや湾曲している。外面は縦ハケによる調整、内面は横ハケと見られるが磨滅により不鮮明。色調は明褐色、胎土には赤色・白色粒子、小石を含む。13 は口縁端部上面が内彎し端部は丸味を持つ。外面は縦ハケ調整が確認できるが、磨滅により内面の調整は確認できない。色調は橙色で、胎土に白色粒子を含む。14 は口縁部が内傾した後屈曲し

ており、端部には面を持つ。外面は縦・斜めのハケ調整であるが磨滅・剥離により不鮮明、内面は一部に横・斜めのハケ調整が確認出来るのみである。色調は明黄褐色、胎土赤色・白色粒子を多く含む。

15・16の口縁部破片は端部に横ナデによる明瞭な面を持ち、跳ね上げ状を呈する。15は口径48.8cmを測り、外面調整は磨滅により確認不可、内面は輪積痕が見られナデと横ハケがわずかに確認できる。色調は明黄褐色～明褐色で、赤色・白色粒子、金色雲母を多く含む胎土である。16は口径51.6cmを測り、15同様外面調整は磨滅により確認できないが、内面はヘラナデ後横・斜めのハケ調整が確認出来る。色調は橙色で、胎土には赤色粒子、金色雲母、小石を多く含む。

17・18も口縁端部に面を持つ小破片資料であるが、上方には突出せず垂下したタイプで、17は下方がやや厚く、18は尖る。いずれも磨滅により外面・内面の調整は確認できず、18は外面にわずかに縦ハケが残る。色調はいずれも橙色を呈し、胎土には白色粒子を含む。17には金色雲母も見られる。

19は15・16同様の口縁部を持つ大型の破片資料で、最上段の凸帯まで残る資料である。口径は43.7cm、外面は斜めのハケ調整、内面は横・斜めのハケ調整であり、凸帯の下に長方形の透孔がわずかに残っている。凸帯は鐔状に尖る特徴的なタイプで、横ナデにより上辺・下辺がわずかに湾曲しており、貼り付け面の幅2.5cm、高さ2.4cmを測る。色調は明黄褐色～黄褐色、胎土には赤色・白色粒子を含む。

20～23は鐔状凸帯を貼り付けた胴部の破片資料である。20・21は同一固体の可能性があり、20は凸帯から上方がやや内傾している。ともに外面は縦ハケ、内面は指ナデ・オサエによる調整で、凸帯下に長方形もしくは逆三角形の透孔があるが、1段あたりの孔数は不明である。凸帯は19と同様のもので、幅3.1～3.2cmほど、高さ2.3cmを測る。色調は明褐色で、胎土には赤色・白色粒子、小石を含む。

22はやや内傾した胴部破片であるが、磨滅により外面・内面の調整は確認できない。凸帯は19～21に比べ突出度は小さく、幅2.5cm、高さ1.5cmを測る。色調は明褐色で胎土には赤色粒子、金色雲母を多く含む。

23はやや外傾した破片資料で、外面は斜めハケ、内面は指ナデ・オサエの後縦・斜めのハケ調整が見られ、凸帯の上に長方形とみられる透孔がある。凸帯は大型の鐔状のものを貼り付けており、幅2.3cm、高さ3.3cmと突出度が大きく、横ナデにより上辺がやや湾曲している。色調はにぶい黄褐色、内面の一部は橙色を呈し、胎土には赤色粒子、金色雲母を多く含む。

(2) 朝顔形埴輪 (第63図)

24・25は前節でも取り上げた資料である。24は口頸部～胴部にかけて残る破片資料で、口径33.4cm、口頸部は屈曲せずゆるやかに外反し、段部は凸帯により二重口縁状にしている。口縁端部は横ナデにより面を持つ。胴部は肩が張らず細身の胴部になると見られる。器壁は薄く、外面は縦・斜めのハケ、内面は横・斜めのハケ調整で、胴部内面には縦ハケも確認できる。頸部・段部とも断面台形の小型の凸帯を貼り付け、幅1.3～1.6cm、高さ0.8～1.0cmほどを測り、頸部凸帯はやや下がった位置に貼り付けている。色調は明黄褐色～黄褐色、胎土には赤色・白色粒子を含む。

25は口頸部の3分の1ほどが残る破片であるが、24に比べ口頸部の外反が大きく、明瞭な段部を持つ。口縁端部を欠損しているが、口径は推定で37cmほどが考えられる。外面は縦ハケ、内面は斜めのハケ調整が不鮮明ながら確認できる。凸帯は、段部のものは24同様幅1.5cm、高さ0.8cmの小型のものを貼り付けているが、頸部を巡るものは突出度が高く、上辺・下辺・側面共に内彎しており、幅2.3cm、高さ1.9cmを測る。色調はにぶい黄褐色、胎土には赤色・白色粒子、小石を多く含む。

26・27は頸部の破片資料である。磨滅しており、外面調整は縦ハケが確認できる。頸部凸帯は断面M字形で、幅2.3cm、高さ0.9cmと突出度は少ない。色調は外面が橙色、内面はにぶい黄橙色で、胎土に赤色・白色粒子を含む。27は大型品の頸部と見られるが、26と同様磨滅により、調整は外面の縦ハケがわずかに確認できるのみで

ある。器壁は1.2～1.5 cmと厚く、M字形の頸部凸帯も比較的大きく、幅3.0 cm、高さ1.3 cmを測る。色調はにぶい黄橙色で、胎土に赤色粒子、金色雲母を多く含む。

28は頸部凸帯付近の破片資料で、凸帯は剥離により欠損している。外面は凸帯貼り付け部分に縦ハケ後の沈線が確認出来るが、凸帯下の外面調整は確認できない。内面は斜めのハケ調整である。色調は明黄褐色で、白色粒子、小石を含む。なお、透孔があるが形状は不明である。

29・30は胴部（肩部付近）の破片で、29は外面縦ハケ、内面は横ハケと凸帯の裏側は指オサエ・横ナデ、30の外面は縦ハケ、内面は横ハケ後縦ハケによる調整。凸帯はいずれも小さく幅1.7 cm、高さ1～1.2 cm 30は上辺・下辺が内彎している。ともに明黄褐色を呈するが、29は白色粒子が多く、30は赤色粒子が多い。

31・32は頸部凸帯～肩部付近の破片資料と見られる。31の外面は縦ハケ、内面は横ナデによる調整で、凸帯は突出度の大きいもので、貼り付け面の幅2.5 cm、高さ1.9 cmを測る。色調は明黄褐色、赤色・白色粒子を含む胎土である。32は磨滅により外面・内面ともに調整は確認できないが、内面に指ナデ・オサエが見られる。凸帯は幅1.5 cm、高さ1.3 cm、上辺と側面が内彎しているが、下辺はほぼ水平である。色調は同じく明黄褐色、胎土には赤色粒子、金色雲母を多く含む。

3. 円筒埴輪の型式分類

甲斐銚子塚古墳出土の円筒形埴輪と朝顔形埴輪については、器壁の厚さや外面のハケ調整、凸帯の形状などを指標として、おおまかに区別できることは既に報告書にも記載されてきており、実際には円筒形埴輪、朝顔形埴輪それぞれに複数の型式が存在することは明らかである。一方、同じ二重口縁をもつ朝顔形埴輪と壺形埴輪については、口頸部までが復元できる場合において判別できることは、前稿において述べたところである。

それでは、これまで見てきた形態的特徴をもとに、改めて円筒形埴輪、朝顔形埴輪を型式分類してみたい。しかしながら、はじめに述べたとおり、いずれも全体の形状を窺える資料は1点もなく、胴部の段数及び凸帯の条数は不明である。したがって先学の研究成果を参考に⁽⁹⁾、口縁部・口頸部から胴部にかけてと凸帯の特徴をもとに分類してみたい。

(1) 円筒形埴輪の分類（第64図）

まず、口縁部の形状であるが、全体の形状及び端部の調整をもとに、以下の8型式に分類する。

[A類] 胴部から逆八の字状に外反する口縁部。端部の形状をもとに、単純口縁のもの（A1類）、端部が尖るもの（A2類）、端部に面を持つもの（A3類）、端部を跳ね上げ、明瞭な面を持つもの（A4類）とする。さらにA4類は、胴部から緩やかに外反するもの（A4-1類）、大きく外反するもの（A4-2類）に細分する。

[B類] 胴部から直線的に開くもの。

[C類] 端部が大きく外側へ屈曲するもの。面を持つもの（C1類）、上面が内彎し端部は丸味を持つもの（C2類）、口縁部が内傾した端部が屈曲するもの（C3類）に細分する。

[D類] 端部が垂下するもの。

[E類] 有段口縁のもの。

次に、凸帯であるが、断面の形状から大きく4型式に分類する。

[a類] 断面がM字形を呈するもの。突出度が大きいもの（a1類）、小さいもの（a3類）、中間的なもの（a2類）に細分する。

[b類] a類に比べ突出度が大きいもの。上辺・下辺・側面が内彎するものが多い。

[c類] 断面が台形を呈するもの。上辺・下辺が内彎するものがある。

〔d類〕 鐔状に尖るもの。突出度が大きいもの（d1類）、小さいもの（d3類）、中間的なもの（d2類）に細分する。

これらのうち、口縁部A2類とA4-1類については、前章で紹介したとおり、胴部最上段の凸帯までが復元できており、口縁部と凸帯の組み合わせが明らかとなっている（第61図2・第62図19）。つまり、円筒形埴輪A2a1類とA4-1d2類の2点が、まずもって分類される。また、凸帯b類も数量的には多く、a類・b類・d類は円筒形埴輪の凸帯として採用されていると考えてよいであろう。

他の口縁部、凸帯についても、これらの組み合わせにより、複数の円筒形埴輪も型式が想定される。しかし、実際には口縁部の形態を含め個体差が大きく、第3図2のように同一個体においても凸帯を挟んで上下の段で粗いハケと細かいハケでそれぞれ調整をしているものもある。また、器壁の厚いものと薄いものがあり、厚いものは貼り付く凸帯も大きい。胎土（色調）もおおまかには、にぶい黄褐色、明黄褐色、橙色に分けられそうであるが、それをもって円筒形埴輪の指標とすることは、極めて困難と言わざるを得ない。

したがって、現状で判断できる円筒形埴輪A2a1類とA4-1d2類を、それぞれ円筒形埴輪Ⅰ類・Ⅱ類として、ひとまず大分類しておきたい（第67図）。

（2）朝顔形埴輪の分類（第65図）

同様に朝顔形埴輪についても、口頸部まで復元可能な2点（第63図24・25）を基軸にして見てみたい。

〔A類〕 明瞭な段部を持ち、大きく外反する口頸部を持つもの。頸部は屈曲も明瞭である。

〔B類〕 明瞭な段部を持たず、屈曲せずゆるやかに外反する口頸部を持つもの。凸帯により段部及び二重口縁を表現している。胴部にかけても肩が張らず、頸部凸帯の位置も頸部より下に貼り付いている。

凸帯については、円筒形埴輪と同様に分類するが、明確に朝顔形埴輪の頸部、肩部とわかる資料が少ないことから、突出度の大小をまとめて分類しておく。

〔a類〕 断面がM字形を呈するもの。突出度が大きいもの（a1類）、小さいもの（a3類）、中間的なもの（a2類）に細分する。

〔b類〕 a類に比べ突出度が大きいもの。上辺・下辺・側面が内彎する。

〔c類〕 断面が台形を呈する小型のもの。上辺・下辺が内彎するものがある。

なお、第1次整備事業に伴う調査で、側面に刻みのある凸帯が1点出土し報告されているが、断面は台形というより正方形であり、違う印象を受けるが、ひとまずc類に含めておく。

A類とB類では、形態の変遷、貼り付く凸帯から言えば、A類が古く、B類が新しいが、円筒形埴輪同様やはり個体差である。段部凸帯はどちらもc類であるが、これは壺形埴輪にも共通する要素で、頸部凸帯以下のものを指標とすれば、朝顔形埴輪Aa類、Bc類に分類される。b類と組み合う口頸部・胴部は不明であるが、円筒形埴輪に特徴的な鐔状凸帯d類は確認できないことから、a類・b類・c類の凸帯が朝顔形埴輪に採用されていたことが考えられる。

以上から、現状の口頸部及び胴部と凸帯から分類できる朝顔形埴輪Aa類とBc類を、それぞれ朝顔形埴輪Ⅰ類・Ⅱ類と大分類しておく（第67図）。

4. 甲斐の前期古墳と円筒埴輪

甲斐銚子塚古墳出土の円筒埴輪について概観してきたが、ここでは前期古墳の編年とともにもう少し範囲を広げて見てみたい。

円筒埴輪の編年については、現時点でも川西編年の枠組みの中で捉えられており、諸属性の見直しや細分が行われているが⁽⁴⁰⁾、基本的には川西編年は有効であることは、多くの研究者が認めるところである⁽⁴¹⁾。

甲斐銚子塚古墳出土の埴輪は、周知の通り川西編年Ⅱ期（4世紀中葉～後半）に位置づけられており⁽¹²⁾、甲斐編年古墳Ⅳ期が併行する。川西編年は、副葬品の組み合わせなどからも整合性が裏付けられており、本稿で取り上げている内容は、その再確認に過ぎないのかもしれない。

前章及び本章第1節において土器編年を中心に、中道古墳群の前期古墳4基の年代を確認したが（第41・43図）、詳細に見れば、副葬品・土器（S字甕）・埴輪とすべて揃っている甲斐銚子塚古墳、土器が出土している甲斐天神山古墳（二重口縁壺）や小平沢古墳（S字甕）と、埋葬施設の構造や副葬品以外に時期が判断できる資料がない大丸山古墳とでは、根拠にしている年代の「物差し」に違いがあり、問題がない訳ではない。しかし、立地や墳形など、これまでの研究成果も考慮した上での年代観であり、前方後円墳集成編年の2～4期と川西編年のⅠ期とⅡ期の整合に課題があるものの、ここに示した併行関係は、現状では妥当なものと考えている。

これらを踏まえ、再び円筒埴輪に戻るが、はじめに触れたように、橋本氏がかつて取り上げた論考において、甲斐銚子塚古墳と岡銚子塚古墳出土との円筒埴輪の比較検討が行われているが、岡銚子塚古墳ではその後整備事業に伴う発掘調査⁽¹³⁾においても円筒埴輪片が出土している（第66図）。この中では、本稿で分類した口縁部A3類（33・34）、A4類（35・36）、C類（40）、E類（37～39）が見られる。また、胴部破片（41～47）、朝顔形埴輪の頸部破片（48）に貼り付く凸帯については、いずれもa類からc類のものであり⁽¹⁴⁾、外面調整、長方形・逆三角形の透孔をもつことや出土土器からも、川西編年Ⅱ期—古墳Ⅳ期であることが改めて確認出来る。このうち、有段口縁の口縁部E類については、はじめに述べたとおり、従来は「器台系口縁」として「特殊器台系譜」の初期的要素をもつ円筒形埴輪⁽¹⁵⁾として考えられていたが、畿内の埴輪構成との比較などから、現在では「地方的変容と古い要素との混交」として捉えられており⁽¹⁶⁾、埴輪生産の系譜を一元的に畿内に追うことは難しいことも指摘されている⁽¹⁷⁾。その一方で、地方では埴輪の形態的・技術的情報が、古墳築造のたびに「中央直結の回路を通じて更新されるのが実態」であるとの見方もあるが⁽¹⁸⁾、いずれにしてもその背景には、交通路を介したネットワーク⁽¹⁹⁾による中央からの形態的・技術的情報とともに、「古墳の墳丘に埴輪を樹立する」という情報の共有が存在する。そこに周辺地域からの二次的伝播を否定することはできないだろう。

甲斐銚子塚古墳は畿内的な王墓、岡銚子塚古墳は在地的な首長墓であるとすれば⁽²⁰⁾、埴輪製作に関しては、同じ古墳Ⅳ期に「同じ（墳形の）前方後円墳に埴輪を樹立する」という情報の共有のもと、埴輪製作が行われたことが考えられる。

また、甲斐銚子塚古墳に続く中期初頭の甲斐の首長墓である丸山塚古墳（第41・43図）からも、量的には少ないが円筒埴輪が出土している。口縁部の形態はA3類、A4類、E類のものが見られ、凸帯はc類が多い。これらも川西編年Ⅱ期に対比できるものであるが、築造時期は甲斐古墳Ⅴ期古段階（4世紀第3四半期）であり、川西編年Ⅱ期～Ⅲ期の段階である。出土状況からも埴輪の樹立に積極的ではなかった（あるいは樹立されなかった）ことが窺えるが、畿内からの埴輪製作の情報が更新されなかったとすれば、この時期を「地域内埴輪体系の消滅段階」⁽²¹⁾と捉えることができる。さらにこのことは、「埴輪の有無は大和政権との関係を直接指し示す材料にはならない」⁽²²⁾とはいえ、少なからず大型前方後円墳築造停止とも連動するものと考えられ、以後中期前半にかけての円筒埴輪製作の一時的な断絶⁽²³⁾に繋がることになる。

5. まとめ

甲斐銚子塚古墳出土の円筒形埴輪、朝顔形埴輪については、それぞれ大きく2型式に分類される。壺形埴輪に比べ、口縁部（口頸部）、凸帯にはバリエーションが存在し、円筒形埴輪Ⅱ類は鐙状の凸帯を持つ在地的の強いもので、詳細にはさらに複数の型式が存在する。しかし、大局的には川西編年Ⅱ期の枠組みを逸脱するものではない⁽²⁴⁾。

甲斐の古墳前期の円筒埴輪生産においては、中央からの形態的・技術的情報とともに、周辺地域からの情報の

共有などがあり、これらをもとに4世紀中頃(第2四半期～第3四半期)の短期間に、壺形埴輪とともに在地において集中的に生産を行ったことが考えられる。その後、甲斐の円筒埴輪生産は極めて低調になり、丸山塚古墳に残存した後一時的に断絶し、壺形埴輪のみが大師東丹保古墳⁽²⁵⁾へと引き継がれる(第67図)。

註

- (1) 論題の「円筒埴輪」とは、ここでは「円筒埴輪」に「朝顔形埴輪」を含めたものを指しているが、通常両者を区別するために「円筒形埴輪」・「普通円筒埴輪」、「朝顔形円筒埴輪」などと呼ばれている。しかし、胴部の形態は同じであるものの、分類上朝顔形埴輪は壺形埴輪の一形態であることから、ここでは「円筒形埴輪」「朝顔形埴輪」として進め、両者合わせたものを「円筒埴輪」と呼ぶことにする。
赤塚次郎 2001「壺形埴輪の復権」『史跡青塚古墳発掘調査報告書』犬山市教育委員会
車崎正彦 2004「総説 埴輪」『考古資料大観』第4巻 弥生・古墳時代 埴輪 小学館
- (2) 註(1) 車崎文献 など
- (3) 上田宏範 1959「埴輪の諸問題」『世界考古学大系』第3巻 日本Ⅲ 平凡社
近藤義郎・春成秀爾 1967「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第3号 考古学研究会
- (4) 川西宏幸 1978・1979「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2・4号 日本考古学会
川西宏幸 1988『古墳時代政治史序説』塙書房
- (5) 橋本博文 1976「東国への初期円筒埴輪波及の一例とその史的位置づけ」『古代』第59・60合併号 早稲田大学考古学会
橋本博文 1978「甲斐における在地首長制の成立とその展開」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』24
橋本博文 1980「甲斐の円筒埴輪」『丘陵』第8号 甲斐丘陵考古学研究会
橋本博文 1984「甲府盆地の古墳時代における政治過程」『甲府盆地—その歴史と地域性—』地方史研究協議会 雄山閣
- (6) 高橋克壽 1994「埴輪生産の展開」『考古学研究』第41巻第2号 考古学研究会
- (7) 置田雅昭 1977「初期の朝顔形埴輪」『考古学雑誌』第63巻第3号 日本考古学会
山根洋子 1992「第5節 出土埴輪」矢島宏雄編『史跡森將軍塚古墳』更埴市教育委員会
廣瀬寛 2001「茶臼山形二重口縁壺と前期古墳の朝顔形埴輪」『立命館大学考古学論集Ⅱ』立命館大学考古学論集刊行会 など
- (8) 前節を含め、色調については『新版標準土色帖(2006年版)』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修)に基づき表記している。
- (9) 中井正幸 1996「昼飯大塚古墳周辺の埴輪系譜」『美濃の考古学』創刊号 同刊行会 など
- (10) 一瀬和夫 2011「円筒埴輪」『考古資料大観』第4巻 弥生・古墳時代 埴輪 小学館 など
- (11) 廣瀬寛 2011「埴輪の編年②西日本の円筒埴輪」『古墳時代の考古学1 古墳時代史の枠組み』同成社
犬木努 2011「埴輪の編年②東日本の円筒埴輪」『古墳時代の考古学1 古墳時代史の枠組み』同成社 など
- (12) 註(5) 橋本文献(橋本 1980) 及び
保坂和博 1999「埴輪」『山梨県史』資料編2 原始・古代2 山梨県
保坂和博 2001『大塚古墳』山梨県教育委員会
- (13) 伊藤修二 1995『山梨県指定史跡 岡・銚子塚古墳』八代町教育委員会
- (14) 註(5) 橋本文献(橋本 1980) にはd3類の凸帯片も掲載されている。
- (15) 近藤喬一・都出比呂志 1971「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」『史林』第54巻第6号 史学研究会
- (16) 註(6) に同じ。

- (17) 鈴木一有 2011「松林山古墳と遠江の前期古墳」『黄金の世紀』豊橋市美術館 鈴木氏は、器台系口縁には松林山古墳・甲斐銚子塚古墳・昼飯大塚古墳など遠江・甲斐・美濃といった盟主的首長権どうしの繋がりがあること指摘し、「器台系口縁の円筒埴輪に示される『伝統』形態を地域の中で再生産するという変容的な要素が混在している」と指摘している。
- 鈴木一有 2018「愛知県・静岡県の前期古墳」『野本將軍塚古墳と東国の前期古墳』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所 研究論集 第1冊
- (18) 註(11) 犬木文献(犬木2011)に同じ。
- (19) 小林健二 2014「甲斐銚子塚古墳と甲斐の政権」『歴史読本』2015年1月号 株式会社KADOKAWA
- (20) 小林健二 2010「古墳時代における甲斐の地域社会―土器編年と墳墓の変遷―」『山梨県考古学協会誌』第19号
- (21) 風間栄一 2008「中部高地における大型円墳の様相」『前期・中期における大型円墳の位置と意味』東北・関東前方後円墳研究会
- (22) 註(6)に同じ。
- (23) 註(12) 保坂文献(保坂2001)に同じ。
- (24) 小林健二 2015「甲府盆地から見たヤマト(3)―甲斐銚子塚古墳出土の壺形埴輪―」『研究紀要』31 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- (25) 保坂和博 1997『大師東丹保遺跡IV区』山梨県教育委員会ほか

第6節 甲斐鉾子塚古墳出土の木製品

1. はじめに

既に述べてきたように、2004年度（平成16）に行われた甲斐鉾子塚古墳の第2次史跡整備事業に伴う発掘調査では、いくつかの注目すべき発見が相次いだ。中でも最も重要な発見は葬送儀礼に関わると見られる木製品が数多く出土したことであろう。後円部西側の墳端では、木柱⁽¹⁾が埋設され樹立した状態で発見され、近くの周濠内からは、すでに第1次整備事業に伴う発掘調査において出土していた円盤形木製品と蕨手形木製品が、新たに棒状木製品を伴ってさらに複数個体出土した。これにより、過去に想像・復元していたように、これらが組み合わせとなった祭祀具（威儀具）であることが確実となり、その存在意義がより明確になった。さらに、後円部北側の周濠から発見された半円形の木製品は、最古級の木製立物⁽²⁾である「笠形木製品」と推定されるに至った。

ここまで腕輪形石製品と埴輪を取り上げてきたが、本来であればまず、これら木製品を取り上げるべきであるが、1980年代以降畿内の中期・後期古墳を中心に木製品の出土が増加し研究が進んでいたが、東日本の前期古墳では出土例がほとんどないことから、比較検討が難しくさせていた。

その一方で、甲斐鉾子塚古墳出土の笠形木製品と円盤形・蕨手形・棒状を組み合わせた木製品については、注目を集めながらも畿内の古墳出土品とは形式的に繋がらず、現状では系譜関係が説明できないことなどから「最古級」としては捉えられず、これらは甲斐鉾子塚古墳の被葬者が独自に創案したものと評価されている⁽³⁾（坂2007・2009・鈴木2011）。

上記の発掘調査から10年が経過した2014年（平成26）9月、出土した木製品のうち70点が「鉾子塚古墳出土木製祭祀具」として山梨県指定文化財となった。畿内から見れば、既にこれら木製品の評価は定まっていると言えるかもしれないが、東国の古墳における葬送儀礼を考える上で畿内と比較できる資料として、その重要性は現状でも変わらないものと考えられる。

本節では、甲斐鉾子塚古墳出土の木製品について改めて取り上げる。

2. 甲斐鉾子塚古墳出土の木製品

甲斐鉾子塚古墳のこれまでの発掘調査において設定された合計36箇所のトレンチ（本数は45）のうち（第52図）、木製品は1985年度（昭和60）の第1次史跡整備事業に伴う調査での墳丘南側くびれ部（I3T）、2004年度の調査での後円部北東側の第5号ー1トレンチ、北西側の第8号・第9号ー1トレンチ、西側の第10号トレンチから出土している。

なお、出土した木製品には、上記の葬送儀礼に関わるものの他にも農具類の可能性のあるもの、発火具、用途不明のものがあるが、ここでは木柱、笠形木製品、円盤形・蕨手形・棒状木製品、その他の木製品として、調査経過を振り返りながら改めて詳しく見ていくこととする。

（1）木柱（第68図）

第10号トレンチで確認された木柱（1）は、墳端から2mの幅で地山層を平坦に造成した「墳端テラス」の先端近くの周濠寄りから発見された。直径約80cm、深さ約70cmの円形の土坑（柱穴）に直径19～20cm、残存長88cmの木柱が埋設された状態で確認され、木柱と土坑の隙間に砂礫と土を突き固めるように充填しており、土坑上面の墳丘テラス面に盛り上げるように砂礫で埋められ、最後にやや大きな礫が木柱を固定するように配置されていた。

木柱は、スギの巨木の芯を含まない部位から作られている。表面は鉄斧（手斧）で14面から16面に丁寧な面

取り調整され、表面には明瞭な「はつり痕」⁽⁴⁾が確認できる。下端部（底面）は平らに調整されている。上端部は朽ち折れているが、堅固な埋設状況から、当初は現存の3倍ほどの長さの木柱であったことが推定され、後に整備事業の段階で甲斐銚子塚古墳現地に復原されることとなった。なお、トレンチを南側へ拡張したが、この1点以外木柱は確認されなかった。

年輪年代測定の結果、最も外側の年輪は201年であるが、削り取られた辺材の年輪幅を考慮し3世紀中頃以降に伐採したスギ材が使われたと考えられている⁽⁵⁾。また、炭素14年代測定では、AD160～220の年代が得られ⁽⁶⁾、辺材部を約50年としても伐採年代は3世紀代との結果が出ている。古墳の築造年代とおおよそ1世紀のズレがあり、この背景には転用などが考慮されるが、原木の伐採から短期間のうちに荒割し、乾燥が進まないうちに「はつり」の加工しなければ、この木柱のように表面に「はつり痕」を残すのは困難との指摘がある⁽⁷⁾。

（2）笠形木製品（第69図）

第5号トレンチの周濠内から出土した半円形の木製品（2）は、長さ47cm、幅19cm、厚さ3.6cmを測り、凸レンズ状の断面を呈している。木柱と同じスギ材であるがかなり腐朽しており、本来は円形で推定直径は約50cmで、現状より厚さがあつたと見られる。酒井温子氏による劣化状態の分析では、上面で劣化が著しく、この面を上にして長期間野外に置かれていたと考えられている⁽⁸⁾。これらから、筆者が特別展で「円板形木製品」として紹介していたこの木製品は、木柱か棒状木製品と組み合わせて墳丘に立てられていた「笠形木製品」と呼ばれるようになった。

しかし、畿内では円盤形木製品・蕨手形木製品とともに注目される笠形に類似する特異な資料としながらも、畿内と周辺の古墳出土の笠形木製品と同様に下面には抉り状の加工が確認できるものの、特長である側部に見られるような垂直面をもたないなど、畿内のコウヤマキ製の分厚い笠形木製品の祖型となるものではないとされている⁽⁹⁾。

（3）円盤形木製品・蕨手形木製品・棒状木製品（第70・71図）

甲斐銚子塚古墳出土の木製品の中で、最も特徴的な祭祀具として広く知られている資料である。

3～5・11は墳丘南側くびれ部（13T）から出土、6～9・12～26・28は第10号トレンチ、27は第8号トレンチ、10は第5号ー1トレンチからの出土である。これらも樹種はすべてスギで、棒状木製品についてはこれ以外にも小破片が多数ある。樹種同定していない3～5・11についてもスギ材と見られる。

まず円盤形木製品については、5点のうち4点の形状が確認できる⁽¹⁰⁾。直径18～21cmほどの正円形を基本とし、縁辺部は斜めにカットされており、断面は台形状を呈し中央部に一辺2cmほどの方形の孔、縁辺部にやや小さい3方向の方形孔が貫通している。

3は直径18cm、厚さ0.8～1.4cmを測る。縁辺部の方形孔は斜めに開けられ、6・8・9に比べ断面が薄い。6は直径19.2cm、厚さ1.9cmを測り、縁辺部の方形孔1箇所の外側が欠損しているが、4点の中で最も遺存状態が良い。そして、縁辺部の方形孔には斜めに木製の目釘が差し込まれており、3方向のうち1箇所の方形孔には別の部材片が目釘で留められたまま残っていた。

8は火を受け焼け焦げており、縁辺部がかなり欠損している。残存の直径は18.0～18.8cm、厚さ1.3～1.8cmで、こちらは中央の方形孔に別の部材が付いたまま出土している。9は直径21.5cmと4点の中で最も大型であるが、劣化が著しく、3分の1ほどが欠損している。厚さも1.5cm前後と薄くなっている。10はさらに遺りが悪く、小破片となっている。

次に、蕨手形木製品であるが、いずれも円盤形木製品に近接して出土しており、蕨手形木製品4・5は円盤形木製品3に、蕨手形木製品7は円盤形木製品6に伴っている。細い棒状の部分はまっすぐではなく反っており、

上端の「蕨手」部分には小孔が開いているのが基本形である。

4は長さ28.1cm、上端部の「蕨手」部分の幅3.9cm、厚さ1.1～1.8cm、5は長さ27.5cm、蕨手部分の幅3.9cm、厚さ1.1cmを測る。どちらも先端が斜めにカットしてある。

7はやや短く長さ24.0cm、幅2.7cm、厚さ1.1cmで、蕨手部分が半分ほど欠損している。先端部分の加工は4・5と違い角を落とし、端部1箇所を切り取ってある。さらに、その部分に接して目釘が斜めに入ったまま残っている。

棒状木製品は丸棒に加工したものが多く、角棒状のものもあり、径(幅)は1.9～3cm、角棒状のものはさらに薄いものもある。焼け焦げているもの(16～20・22～25・27・28)、上下の部分が折れて欠損しているものが多いが、上端を柄加工したもの(12・17・18)、先端(下端)を尖らせ加工したもの(11・14・23)があり、本来の形状が復元できる。11は3つに割れて出土し、復元した長さは1.5mほどあるが上部を欠いていた。

これに対し、柄加工された12は13・14と接合関係にあり、長さ2.4mとなる。そして、第10号トレンチでの出土状況から、11の柄は円盤形木製品6の中央の孔に合致し組み合わせとなり、さらに外側が欠損した縁辺部方孔に蕨手形木製品7が差し込まれ、目釘で固定されていたことが明らかとなり、これらが高さ2.7mほどの一つの製品となることが確実となったのである。これより前に、くびれ部(13T)から出土していた円盤形木製品3と蕨手形木製品4・5の組み合わせは想定されていたが、中央の方形孔に組み合う部品(棒状木製品)の形状が不明であり、全体の形がわからなかった。しかし、これにより棒状木製品11の上に90cmほどの上端が柄加工された部品が続き、円盤形木製品3と蕨手形木製品4・5が組み合い、セットとなることも改めて検証することが出来た。

他にも、円盤形木製品8では、中央の方形孔に棒状木製品の柄の部分が付いたままとなっており、組み合う状況が確認出来る。

ところで、円盤形木製品と蕨手形木製品の組み合わせを最初に想定したのは石野博信氏である。石野氏は、1989年(平成元)に山梨県埋蔵文化財センターを訪れた際に、「円板」(円盤形木製品)の孔に「蕨手状刀子のような木製品」(蕨手形木製品)を差し入れてみたところ、ぴったり斜めに立った状態を見て、三方向を向いた三羽の鳥(「蕨手」部分の小孔は鳥の眼として)だと考えた。さらに円板の中央の孔に柱が差し込まれた状態も想定し、奈良県桜井市纏向石塚古墳くびれ部出土の木柱・弧文円板⁽¹¹⁾との共通性を指摘した⁽¹²⁾。

2004年度の調査後、特に円盤形木製品と蕨手形木製品については、組み合わせる「向き」が改めて検証された。円盤形木製品の断面の形状はいずれも横長の台形状を呈しているが、円盤形木製品6を観察した結果、台形の下辺側から目釘が打たれ、蕨手形木製品7が固定されていたことが明らかとなった。つまり、台形の上辺が下面、下辺が上面の逆台形の状態で、蕨手形木製品が上から差し込まれ固定されており、さらに目釘の角度と蕨手形木製品下端の切り込みから、蕨手の部分を内側に向けて固定されていたことが確認された。

一方、劣化状態の分析からは、円盤形木製品の上面とした方が下面より劣化していることから、この面が屋外に置かれていたと推測され、蕨手形木製品が円盤形木製品の上に突き出るのではなく、下向きに組み合う姿(蓋のように)が適当ではないかとの指摘がある。しかし、この場合を想定すると、使用中に目釘が抜け落ちる可能性がある。さらに、円盤形木製品6と蕨手形木製品7以外のものには目釘が確認されておらず、特に円盤形木製品3と蕨手形木製品4・5との組み合わせについては、蕨手形木製品を差し込んでいただけの姿が想定され、目釘を使用せずこの方法で固定させるために、蕨手形木製品の先端を斜めにカットし、円盤形木製品の孔の深く挿入する必要があった。蕨手形木製品7より4・5の方が少し長目なのはこのためであろう。

以上のことから、やはり円盤形木製品の上に蕨手形木製品が組み合う姿が妥当といえる。そして、これまであまり注目されていないが、これらの組み合わせ木製品には、円盤形木製品と蕨手形木製品の固定方法から、少なくとも2種類あったことが推測される。劣化の状況については、廃棄された後の経過も考慮すべきと理解しておく

たい。

(4) その他の木製品 (第72図)

以上の祭祀具以外にも木製品が出土している。出土地点については、くびれ部 (13T)、第8号トレンチ (31～34)、第9号トレンチ (35)、第10号トレンチ (36～46) となっている。いずれも何かの道具の一部と見られるが、用途が明らかなのは火鑽板 (32) のみであり、次いで柄状木製品 (31)、柄付付き木製品 (45)、木槌状木製品 (46)、あとは特定できないヘラ状木製品 (29・33・36～40)、板状木製品 (34)、丸棒状木製品 (30)、棒状木製品 (41)、角棒状木製品 (35・42)、杭状木製品 (43)、加工木製品 (44) となっている。樹種についてはシャシヤンポ (32)、スギ (33)、コナラ (36)、モミ (41)、カバノキ科 (31・35)、アカガシ亜属 (34・38・40・43・46)、クヌギ節 (37・39)、コナラ節 (42・44・45)、不明 (29・30) となっている。以下、種類ごとに一瞥しておく。

ヘラ状木製品について、29は長さ20.4cm、幅3.4cm、厚さ1cm、33は長さ17.4cm、幅3.9cm、厚さ0.7cm、36は長さ31.8cm、幅3.5cm、厚さ2.6cm、37は長さ26.1cm、幅5.3cm、厚さ1.8cm、38は長さ19.5cm、幅2.9cm、厚さ0.9cm、39は長さ28.2cm、幅4.5cm、厚さ2cm、40は長さ31.2cm、幅3cm、厚さ1.3cmをそれぞれ測る。これらは又鋏 (三又鋏) の刃先の根元などの可能性が指摘されている。スギ材の33は樹種から見れば祭祀具であり、37は大型の杓子のようにも見える。また、45の柄付き木製品は長さ21.1cm、幅6.4cm、厚さ2.8cmで、こちらは二又鋏の刃の根元と考えられているが、甲府市塩部遺跡⁽¹³⁾出土の東海系曲柄二又鋏⁽¹⁴⁾などと比べると分厚く、棒状の柄であることから、別の道具と見られる。

30の丸棒状木製品は長さ28cm、直径1.2cmで上端が欠損している。下端部が摩耗したように丸くなっており、32の火鑽板の破片 (長さ7.8cm、1.7cm、厚さ1.5cm) とセットになる火鑽棒 (杵) かもしれない。

31の柄状木製品は長さ8.2cm、幅3.6cm、厚さ2.8cmの小型の製品である。

34の板状木製品は長さ37.2cm、幅8.1cm、厚さ1.1cm、角棒状木製品の35は長さ20.5cm、幅3.8cm、厚さ1.9cm、42は長さ28.1cm、幅4.2cm、厚さ2.2cm、41の棒状木製品は長さ45.2cm、幅3.6cm、厚さ2.9cmの断面は楕円形で、小孔が開いている。

43の杭状木製品は長さ11.4cm、幅8.6cm、厚さ5cm、44の加工木製品は長さ14.6cm、幅6cm、厚さ3.2cmで、いずれも加工工具の痕跡が明瞭に残っている。

46の木槌状木製品は長さ25.5cm、幅・厚さ8cmで、木柱の脇 (墳丘側) からの出土である。

これら以外にも多数出土しているが、酒井氏が考察しているように、古墳築造時や祭祀行為に伴い様々な道具類が現地で使用され、壊れたものが周濠へ廃棄されたと見られる。

3. 木製品から見た甲斐鉾子塚古墳

ここまで、甲斐鉾子塚古墳出土の木製品について振り返って見てきた。次に、これらのうちで葬送儀礼に関わる木製品について、他地域の出土例とも比較しながらそれらの意義を考えてみたい。

(1) 大型木柱の意義

甲斐鉾子塚古墳の木柱は、その埋設状況と柱自体の規模から見ても、復元されているように相当高さのあるもので、笠形木製品や鳥形木製品など、木製立物の支柱とは明らかに異なるものである。同様の規模の木柱は、4世紀末の福井県若狭町上ノ塚古墳⁽¹⁵⁾、5世紀中葉の京都府与謝野町鳴谷東1号墳⁽¹⁶⁾、5世紀後半の岡山県赤磐市両宮山古墳⁽¹⁷⁾などで確認されている。これらは埋設された場所や本数はそれぞれ異なり、上ノ塚古墳は後円部西側の墳丘とくびれ部の東側から1本ずつ出土し、鳴谷東1号墳は直径20cm前後の相当大きな柱が墳丘1段目テ

ラスの埴輪列中で8本、埴丘裾4本が深さ76～123cmの柱穴に立てられていたと見られる。両宮山古墳は外堤上に深さ1.15～1.4mの柱穴が3.9mの間隔で2箇所が並んでいた。

さらに先行する例として、先にも触れた出現期の奈良県桜井市纏向石塚古墳の南側のくびれ部から、木柱3本の他弧文円板をはじめ木製品が多数出土した。木柱のうち1本は長さ256cm、直径22cmあり、先端はU字に挟まれ別の部材と組み合わせるようになっている。石野博信氏は、埴丘裾の周濠内にある間隔において木柱が立て並べられていたと推測し、弧文円板は柱の上に飾られたものと考えている⁽¹⁸⁾。

甲斐鉾子塚古墳で確認された木柱は1本のみであり、隣接する木柱は確認されていない。各地の古墳では、円筒埴輪の配列に近い複数の木柱が立てられていた例⁽¹⁹⁾がある一方で、単独で意味を持つ場合もあり、柱の上端構造もつけない（わからない）ものも多い。いずれにしても、甲斐鉾子塚古墳のような規模の大きい木柱は「靈魂の依代」⁽²⁰⁾として樹立されたものあり、畿内をはじめ各地で古墳時代の長い期間にわたって立てられていたことが明らかになっている。

(2) 笠形木製品をめぐる

笠形木製品については、高橋美久二氏による先駆的研究を踏まえ⁽²¹⁾、以後土生田純之氏、一瀬和夫氏、鈴木裕明氏による型式分類と編年が行われてきた⁽²²⁾。

その後、坂靖氏は、奈良県大和郡山市水晶塚古墳の調査報告の中で、笠形立物（木製品）について分類しているが（第73図）、この中で、甲斐鉾子塚古墳出土の円盤形・蕨手形木製品を「笠形立物（木製品）」に加わる可能性があるものとして取り上げている⁽²³⁾。しかし後には、甲斐鉾子塚古墳独特の形状をもつものとして、被葬者が独自創案したものとし、畿内と同質の笠形立物であることを否定した。また、笠形木製品を各地に波及させたのは全国第2位の埴丘規模（420m）を持つ古市古墳群にある5世紀第1四半期の菅田御廟山古墳の被葬者であると考えられており⁽²⁴⁾、甲斐鉾子塚古墳の円板形木製品（ここでは笠形木製品）についても、これらが型的には中期古墳で見られるような笠形木製品には繋がる可能性はないとした⁽²⁵⁾。

鈴木氏も、蕨手形木製品を蓋の立ち飾りの可能性があるものと指摘していたが⁽²⁶⁾、その後前期古墳出土の木製品については、甲斐鉾子塚古墳や奈良県広陵町栗山古墳の出土例を挙げつつも「木製樹物と直接関連付けられる木製品は確認できない」、「木製樹物の樹立はなかったと考えられる」⁽²⁷⁾という見解に至っている。

このように、甲斐鉾子塚古墳の「笠形木製品」としたものは、時期的には畿内に先行する最古級のものであるが、型的に遡るものではなく、厳密には「笠形木製品」ではない。前期古墳の木製立物は奈良盆地の纏向古墳群、大和古墳群や柳本古墳群、佐紀盾列古墳群の中で創案された可能性があり⁽²⁸⁾、埴輪とともに各地へ伝播したものであろう。

したがって、筆者はこれまでの「笠形木製品」を撤回し、今後は当初の名称である「円板形木製品」とするが、この資料が甲斐鉾子塚古墳の被葬者の威儀を示した木製立物であることには変わりない。

(3) 「甲斐鉾子塚型祭祀具」の成立

2004年度の発掘調査を経て、円盤形・蕨手形・棒状木製品の組み合わせが確定した以降、復元された木製品には、5色の吹き流しが付けられた（第74図）。出土状況からは、これを葬送儀礼の際に手に持って参列し、儀礼後一定期間（4～5年）埴丘に立てられた後に焼かれ、周濠へ投げ込んで廃棄されたと考えられている。

山梨県立考古博物館や山梨県埋蔵文化財センターでは、この復元品を用いて、甲斐鉾子塚古墳現地で葬送儀礼を再現したイベントを行っている。吹き流しが風にたなびく光景は往時を彷彿とさせるものであり、発掘調査から14年が経つが、正鵠を得ているものと理解している。

この復元について、坂氏は「笠形の原型というより、（奈良県天理市）東殿塚古墳出土の鱗付埴輪⁽²⁹⁾に描かれ

た船の中央に描かれた幡状のもの（第75図）、あるいは単独で王を示す指物が表現されたものとみなせるかもしれない」とも述べている。

以上を考慮した上で、円盤形・蕨手形・棒状木製品という個別の名称を合わせて「幡状木製品」とし、さらに蕨手形木製品を円盤形木製品に目釘で固定したものを幡状木製品Ⅰ類、目釘を使わないものを幡状木製品Ⅱ類と分類する。Ⅰ類とⅡ類は、埴輪と同様、製作した集団の違いと思われる。

甲斐鉾子塚古墳出土の円板形木製品・幡状木製品は、東国の前期古墳における特徴的な祭祀具であり、被葬者の威儀が強く反映されていると理解される。よって両者を総称として「甲斐鉾子塚型祭祀具」と呼ぶこととする⁽³⁰⁾。

4. おわりに

甲斐鉾子塚古墳出土の木製品について、これまでの成果を整理した上で再検討を行った。

「笠形木製品」としていた立物については、考古学的な解釈を尊重し「円板形木製品」とし、円盤形木製品・蕨手形木製品・棒状木製品を組み合わせた威儀具については、今回新たに「幡状木製品」としてより明快に意義づけた。

これまでも注目され、一定の評価は得られていたこれらの木製品であるが、その意義を改めて考え、見直したことにより、畿内的な墳丘の構造や副葬品とは対照的に、木製品の製作については埴輪製作よりもさらに地域や被葬者の意向が反映されたものであることがうかがえる。今後は円板形木製品・幡状木製品の木取りについても検討を行うなど、さらなる視点での研究が必要である。

註

- (1) 報告書では最終的に「立柱」として報告されているが、基本的に「柱」は垂直に立っているものと理解しており、材質を重視すべきと考え、「木柱」とする。
- (2) 木製樹物について、「樹物」を「たてもの・じゅぶつ」と呼ぶことが多いが（高野 1987・西藤 1992・辻 1994・鈴木 2007）、坂靖氏が述べているように、用語としては適切とはいえない（坂 2006・2007）。よってここでは「木製立物」（高橋 1991）を使用する。
高野学 1987「古墳をめぐる木製樹物」『季刊考古学』第20号 雄山閣出版
高橋美久二 1991「『木製の埴輪』とその起源」『古代の日本と東アジア』小学館
西藤清秀 1992「3木製樹物・石人石馬 1木製樹物」『古墳時代の研究9 古墳Ⅲ 埴輪』雄山閣出版
辻 1994「古墳を飾る木」『季刊考古学』第47号 雄山閣出版
坂靖 2006「2 木製立物の性格」『八条遺跡』奈良県立橿原考古学研究所報告第94冊（のち 2009『古墳時代の遺跡学—ヤマト王権の支配構造と埴輪文化—』雄山閣に所収）
坂靖 2007「古墳と木製立物」『月刊考古学ジャーナル』No.565 ニューサイエンス社
鈴木裕明 2007「総論古墳時代の木製威儀具・樹物」『月刊考古学ジャーナル』No.565 ニューサイエンス社
- (3) 註（2）坂文献（坂 2006・2007）に同じ。
鈴木裕明 2011「1墳丘と外表施設の諸相⑧埴輪樹立と木製樹物」『古墳時代の考古学3 墳墓構造と葬送祭祀』同成社
- (4) 村石眞澄 2008「第6章第2節 立柱の加工痕について」『鉾子塚古墳附丸山塚古墳—平成16年度発掘調査報告書及び平成18・19年度史跡等環境整備報告書—』山梨県教育委員会
- (5) 光谷拓実 2008「第3節 立柱の年輪年代調査」『鉾子塚古墳附丸山塚古墳『鉾子塚古墳附丸山塚古墳—平成16年度発掘調査報告書及び平成18・19年度史跡等環境整備報告書—』山梨県教育委員会』山梨県教

育委員会

- (6) 今村峯雄・小林謙一ほか2007「山梨県銚子塚古墳周溝出土木柱および樹木資料等の炭素年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第137集（のち2008『銚子塚古墳附丸山塚古墳『銚子塚古墳附丸山塚古墳一平成16年度発掘調査報告書及び平成18・19年度史跡等環境整備報告書』山梨県教育委員会』山梨県教育委員会に所収）
- (7) 年輪年代測定法について、ヒノキ標準パターンBC317～AD1984は飛鳥時代で接続に失敗しており、年輪パターンが以ていえるスギも連動し、ともに640年以前の測定値が100年狂っているとの指摘がある。木柱について100年修正すると伐採年は4世紀中頃となり、築造年代と一致する。
- 鷺崎弘朋 2013「年輪年代法の問題点」『日本考古学協会第79回総会 研究発表要旨』
- (8) 酒井温子 2008「第5章第2節 樹種と劣化状態から見た銚子塚古墳出土木製遺物の用途」『銚子塚古墳附丸山塚古墳一平成16年度発掘調査報告書及び平成18・19年度史跡等環境整備報告書』山梨県教育委員会
- (9) 註(2)坂文献(坂2006)に同じ。
- (10) この他、平成13年度の調査(3Tr)においても1点出土している。
- 吉岡弘樹 2002『銚子塚古墳附丸山塚古墳一史跡整備事業に伴う発掘調査報告一』山梨県教育委員会
- (11) 石野博信・関川尚功 1976『纏向』桜井市教育委員会
- (12) 石野博信 2004「神招ぎする土偶と木の埴輪」『山梨県史のしおり』資料編2 原始・古代2 考古(遺構・遺物) 山梨県教育委員会県史編纂室
- (13) 佐々木満 2005『塩部遺跡Ⅱ』甲府市教育委員会
- (14) 樋上昇 2000「3～5世紀の地域間交流ー東海系曲柄鍬の波及と展開ー」『日本考古学』第10号 日本考古学協会（のち2010『木製品から考える地域社会ー弥生から古墳へー』雄山閣に所収）
- (15) 宮崎認 2002「上ノ塚古墳」『続日本古墳大辞典』東京堂出版
- (16) 和田晴吾他 1987『鳴谷東1号墳第1次発掘調査概報』立命館大学文学部
和田晴吾他 1989『鳴谷東1号墳第2次発掘調査概報』立命館大学文学部
和田晴吾他 1992『鳴谷東1号墳第3・4次発掘調査概報』立命館大学文学部
- (17) 河本清 1980「両宮山古墳周堤確認調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』10 岡山県教育委員会
- (18) 石野博信 1988「古墳立柱」斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会編『考古学叢考(下)』吉川弘文館（のち1990『古墳時代史』雄山閣出版に所収）
- (19) 岡林孝作 2011「3考古資料の実態と葬送祭祀①木柱・木柵と葬送祭祀」『古墳時代の考古学3 墳墓構造と葬送祭祀』同成社
- (20) 土生田純之 1991「古墳における儀礼の研究ー木柱をめぐるー」『九州文化史研究所紀要』第36号九州大学文学部（のち1998『黄泉国の成立』学生社に所収）
- (21) 高橋美久二 1985「長岡京市今里車塚古墳の笠形木製品」『山城郷土資料館館報3』京都府立山城郷土資料館
- (22) 土生田純之 1988「菅田八幡宮所蔵の有孔木製品」『網干善教先生華甲記念考古学論集』干善教先生華甲記念会（のち「菅田八幡宮所蔵の笠形木製品」と改題、1998『黄泉国の成立』学生社に所収）
- 一瀬和夫 1989「笠形木製品の出土について」『大木川改修にともなう発掘調査概要・Ⅵ』大阪府教育委員会
- 鈴木裕明 2002「笠形木製品覚書ー四条7号墳出土例を中心としてー」『博古研究』第23号 博古研究会
- 鈴木裕明 2010「第Ⅷ章 遺構・遺物の総括 2) 木製樹物」『四条遺跡Ⅱ』奈良県立橿原考古学研究所報

告第94冊

- (23) 註(2) 坂文献(坂 2006)に同じ。
- (24) 註(22) 鈴木文献(鈴木 2002)に同じ。
- (25) 註(2) 坂文献(坂 2006・2007)に同じ。
- (26) 鈴木裕明 2000『権威の象徴—古墳時代の威儀具—』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- (27) 註(3) 鈴木文献(鈴木 2011)に同じ。
- (28) 註(2) 坂文献(坂 2007)に同じ。
- (29) 泉武・松本洋明・青木勘時 2000『西殿塚古墳・東殿塚古墳』天理市埋蔵文化財調査報告第7集
- (30) 小林健二 2018「甲府盆地から見たヤマト(4) —甲斐銚子塚古墳出土の木製品—」『研究紀要』34 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

第7節 中道古墳群の歴史的意義

1. はじめに

本章では、甲斐の前期古墳を特徴づけている3基の大型前方後円墳である甲斐天神山古墳、大丸山古墳、甲斐銚子塚古墳について、前章で設定した時間軸をもとに出土品や埋葬施設について検討してきた。

そして、第3節から第6節までは甲斐銚子塚古墳出土のうち、腕輪形石製品、壺形埴輪、円筒埴輪、木製品について取り上げてきたが、甲斐銚子塚古墳には上記のほか、鏡5面（内行花文鏡、三角縁神獣車馬鏡、三角縁三神三獣鏡、龍鏡、環状乳神獣鏡）や鉄製武器（鉄剣、鉄刀）・農工具類（鉄斧、鉋）、石製玉類など、古くから知られた副葬品が豊富にある。鏡は前期古墳の副葬品の中でも出土量が多く、ヤマト王権との関係を示す重要な資料である一方、最近では水晶製勾玉5点の副葬に象徴されるように、甲斐産水晶の分析の動向が注目されており⁽¹⁾、当然のことながらこれらについても引き続き再検討を行う必要があることは言うまでもない。

そんな中、2018年（平成30）12月に埼玉県東松山市シンポジウム「野本將軍塚古墳の時代」（東松山市、東松山市教育委員会、早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所、早稲田大学総合研究機構共催）が開催された。これに合わせて刊行された論集『野本將軍塚古墳と東国の前期古墳』⁽²⁾は、「東松山に位置する前方後円墳である野本將軍塚古墳の三次元測量・GPR調査の成果を基にして、同古墳の年代と地域の中における位置、さらには東日本における前期古墳の歴史的意義を考古学的に考究するため」（論集結語より）、東国の前期古墳の近年の研究動向と今後の方向性が集約された内容となっており、この中で筆者には「山梨県の前期古墳」として誌上発表の機会をいただいた。

このような状況を踏まえ、甲斐銚子塚古墳出土の残された副葬品の再検討についてはひとまず先送りし、本節では甲斐銚子塚古墳出現の背景について、上記の成果と近年の動向を改めて整理した上で、甲斐の前期古墳の歴史的意義について考え、本章のまとめとしたい。

1. 中道古墳群の前期古墳

繰り返しになるが、「中道古墳群」は甲府盆地南部の旧中道町（現甲府市）に分布する東山古墳群、米倉山古墳群、金沢古墳群などの総称であるが、現在では特に前期の大型古墳が分布する東山・米倉山地域の墳墓群を指して呼ぶ場合が多く⁽³⁾、2014年（平成26）には甲斐銚子塚古墳の国史跡指定85周年と大丸山古墳の国史跡指定を記念してシンポジウム「古代東国と畿内王権—甲斐中道古墳群の検討から—」（山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター・甲府市教育委員会主催）が開催されている。

一方、筆者は第1章のとおり甲府盆地を大きなまとまりとした土器編年をもとに、甲斐地域の古墳時代の時間軸を設定してきた。S字甕を中心とした東海系土器の波及と定着、画期や交流について検討し、弥生終末期との境界を再評価した上で、前期の土器を古墳Ⅰ期から古墳Ⅳ期に編年した。その後、北陸系土器の波及や畿内系叩き甕の様相にも触れ、東海・北陸・近畿各地域との併行関係をもとに細分・補正を行いながら、Ⅰ期を出現期、Ⅱ期～Ⅳ期を前期として暦年代とともに再編し、さらに中期、後期・終末期の土器を加え、再編しながら古墳Ⅴ期～古墳Ⅺ期の編年も行い、これをもとに甲府盆地の墳墓の変遷をトータルで提示した。墳墓の変遷図については調査・研究成果を踏まえ随時加筆・修正を行っている。

3世紀後半、S字甕の波及とともに甲斐の古墳時代は幕を開ける。古墳Ⅰ期からⅡ期前半頃にかけて、東海～関東各地では前方後方墳・前方後円墳が出現するが、甲府盆地では出現期の古墳は見られず、中道地域では弥生終末期（2世紀後半）から120基を超える方形周溝墓の造墓活動が続いた甲府市上の平遺跡において、最大規模の1号方形周溝墓が造営される。これをピークに、次の古墳Ⅱ期で上の平での造墓は終焉となるが、南に隣接する宮の上遺跡で周溝墓は引き続き古墳Ⅲ期まで営まれる。

その古墳Ⅲ期になると、同じ中道地域の米倉山に東国の諸地域同様、前方後方墳が出現する。以下、中道古墳群の前期古墳を再度概観する（第76図）。

（1）小平沢古墳

米倉山古墳群に位置する小平沢古墳は、1947年（昭和22）に斜縁二神二獣鏡、勾玉、土師器片が発見され、1952年（昭和27）に山梨大学により発掘調査が実施され、S字甕の破片が出土したとされるが、埋葬施設の詳細は不明であった。その後、1978年（昭和53）の測量調査により墳丘長45mの県内唯一の前方後方墳と判断され、県内最古の古墳に位置付けられた⁽⁴⁾。2009年（平成21）に甲斐天神山古墳とともに、甲府市教育委員会による測量調査が行われているが⁽⁵⁾、依然として詳細な発掘調査は行われていない。時期決定の根拠となっているのは、墳丘から採集されたS字甕の破片⁽⁶⁾で、これは古墳Ⅲ期古段階（3世紀第4四半期）を下るものではない。その一方で、甲府盆地はS字甕を中心に東海系土器が卓越する地域であるにもかかわらず、上述のように前方後方形の周溝墓（墳丘墓）や出現期の前方後方墳が依然として確認されていない。筆者はその発見の可能性を抱いてきたが、20年以上経過した現在も確認することはできない。周辺地域より遅れての前期古墳の「第1波」⁽⁷⁾の背景には、弥生時代後期以来の伝統的な方形周溝墓に固執した地域性として捉えることができるが、その後は一転して古墳Ⅳ期にかけて甲斐天神山古墳、大丸山古墳、甲斐銚子塚古墳と、東日本屈指の大型前方後円墳の時代を迎えることになる。

（2）甲斐天神山古墳

甲斐地域第2位の墳丘長（132m）を誇り、金沢古墳群の盟主墳である甲斐天神山古墳は、第1節のとおり発掘調査により古墳Ⅲ期中頃（3世紀末～4世紀初頭）の底部穿孔二重口縁壺が出土したことから、現在では中期ではなく県内最古の前期前方後円墳として位置付けられるようになった。築造時期にはなお慎重な意見もあるが、二重口縁壺や後に確認されたS字甕の型式から、現状では最も妥当な位置付けといえる。なお、調査の結果からは、前方部3段、後円部2段の墳丘構造が想定されているが、これについてはさらに調査が必要である。

（3）大丸山古墳

甲斐銚子塚古墳とともに東山古墳群の中核をなす大丸山古墳は、1929年（昭和4）に地元住民らによって発掘され、「二重構造の特異な埋葬施設」をもつ前方後円墳として、多くの出土品とともに古くから学界で知られている。甲斐銚子塚古墳に先行する古墳Ⅲ期新段階（4世紀第1四半期）に位置付けられる。自然地形を利用した墳丘は2段築成とみられるが、長さについては測量調査により、99m、120m、132mが考えられている。墳丘の発掘調査が行われていないため確定していないが、筆者は測量調査時の葺石の存在を考慮した上で、120mとしている。

そして、埋葬施設について詳細を第2節で述べた通り、従来からいわれているような「二重構造」ではなく、一連の工程の中で構築された「組合式石棺を納めた竪穴式石槨」と結論づけた。これについては反論もあり⁽⁸⁾、墳丘長の確定を含め、結論は今後の調査に委ねられるが、石枕とセットになった花崗岩製の組合式（長持形）石棺や精緻な作りの鉄製柄付手斧のような渡来系の工人によってもたらされたと思われる技術や製品⁽⁹⁾については、塩部遺跡⁽¹⁰⁾や東山北遺跡⁽¹¹⁾での馬骨の出土などからも、甲府盆地が東日本の中でも先進的な地域であり、朝鮮半島南部の加耶との交流を背景に盆地内で製作された可能性が指摘されている⁽¹²⁾。このことは、甲府盆地が東日本の中でも重要な地域であったことをさらに改めて裏付けるものであろう。

（4）甲斐銚子塚古墳

甲斐銚子塚古墳は、甲斐地域の前期古墳の中で発掘調査が最も進んでいる古墳である。1928年（昭和3）に竪穴式石槨から多量の朱とともに多くの副葬品が発見され、これら及び石槨構造、169mという規模とともに畿内との強い結びつきが早くから指摘されていた。その後、2次にわたり史跡整備事業に伴い発掘調査が行われているが、中でも2004年度（平成16）に行われた第2次調査の成果からは、墳丘の構造や付随する施設からそのことを再確認するとともに、周濠内から出土したS字甕は、古墳のこれまでの年代観（古墳Ⅳ期）をさらに補強するものとなった。

そして前節で検討したとおり、多くの木製品のうち、「幡状」、「円板形」とした木製品は東日本の前期古墳における特徴的な祭祀具（威儀具）であり、未だ類例の出土がないことから、両者を総称して「甲斐銚子塚型祭祀具」と呼ぶこととした。

前方部2段、後円部3段の墳丘は葺石で覆われ、円筒形埴輪・朝顔形埴輪・壺形埴輪を圍繞しており、北頭位の板石積竪穴式石槨に割竹形木棺を納めてはいないものの、これら墳丘・周濠の構造や出土品から、甲斐銚子塚古墳が極めて畿内的な前方後円墳であることは、これまでも再三述べてきたところである。しかし、第3節で取り上げた腕輪形石製品には凸帯と沈線を多用した他に類例のない車輪石もあり、木製品同様、こちらも地元で製作された可能性が改めてクローズアップされよう。

（5）中道古墳群以外の前期古墳

中道古墳群以外では、曾根丘陵東端の八代地域と同じ古墳Ⅴ期の前方後円墳、笛吹市岡銚子塚古墳（92m）がある（第77図）。江戸時代の1763年（宝暦13）に発掘され、粘土槨から銅鏡3面（龍鏡・二神二獣鏡・1面は不明）、鉄斧、鑿、鉄剣、鉄刀、勾玉が出土したとされる。旧八代町教育委員会による発掘調査の結果⁽¹³⁾と合わせ、墳形や出土した龍鏡、埴輪の共通などからこれまで甲斐銚子塚古墳との関係が注目されてきた。第5節で触れたとおり、埴輪から見れば岡銚子塚古墳から出土している「特殊器台系譜」の初期的要素をもつ円筒埴輪として考えられていたものは、現在は「地方的変容と古い要素との混交」として捉えられているが⁽¹⁴⁾、一方では「首長権どうしの繋がり」の中で「伝統形態の再生産という変容的な要素が混在している」との指摘もある⁽¹⁵⁾。いずれにしても、埴輪製作については「同じ（墳形の）前方後円墳に埴輪を樹立する」という情報の共有であり、墳丘規模や埋葬施設からも格差があることは明らかである。甲斐銚子塚古墳を畿内的な王墓とするならば、岡銚子塚古墳はその強大な影響下での在地的な中位の首長墳であり、近年の動向から見れば、岡銚子塚古墳は中道とは別の駿河を結ぶ道（若狭路）との関係で捉えた方が理解しやすく、八代勢力が台頭するのは、次章で取り上げる5世紀前半の竜塚古墳の出現を待たなければならぬだろう。

御坂地域の扇状地に築かれた同じく笛吹市の亀甲塚古墳は、現状では直径25mほどの楕円形とされるが⁽¹⁶⁾、かつての墳形は不明である。龍鏡（破砕鏡）・碧玉製管玉・鉄刀・鉄鉾・鉄鏃・鑿などが出土したとされ、従来は5世紀前半（古墳Ⅴ期新段階～古墳Ⅵ期）の年代が与えられていたが、現存する龍鏡は後漢鏡であり、管玉には前期の様相が見られ⁽¹⁷⁾、筆者は遅くとも古墳Ⅲ期古段階の墳墓である可能性を考えている（第41図）。そんな中、2017年度（平成29）・2019年度（令和元）に行われた帝京大学大学院による墳形確認のための試掘調査では、破片資料ではあるが古墳Ⅱ期～Ⅲ期の土器が多く出土している。墳形の確定はできないが前方後円墳の可能性もあり、前期前半の古墳である蓋然性は極めて高くなった⁽¹⁸⁾。今後のさらなる調査が期待される。

2. 中道古墳群の歴史的意義

山梨県の旧国名である甲斐国が成立したのは、広域行政区画の成立とともに国境が確定した7世紀末頃のこととされるが、「甲斐（カヒ）」の語源は以前から山と山との狭間を意味する「峽＝賀比、可比」であるというのが通説であった。その後、他界と現世が交叉する境界である「甲斐＝交ひ」説が提示されたが⁽¹⁹⁾、現在では行政的視点から「交わり行き交う国」をあらわす「交ひ」と考えられている。

古墳時代前期では東国最大級の規模を持つ甲斐銚子塚古墳の位置付けについては、従来からヤマト王権による東国経営の前線基地的な役割が考えられてきた。それは『古事記』や『日本書紀』に描かれているように、ヤマトタケルに代表されるヤマトの将軍たちによる東征の結果と重なり、それまでの前方後円墳や三角縁神獣鏡などの考古学の研究成果も、こうした歴史観を裏付けるものとして解釈されてきた。しかし、前方後円（方）墳の系譜や副葬品個々について研究が進んだ結果、ヤマトからの一方通行であった古墳文化の伝播についての考え方は、現在では大きく見直されている。甲府盆地内にはヤマトタケルの伝承が数多く残されているが⁽²⁰⁾、ヤマトタケル東征伝承は史実を記述したものではなく、記紀の信憑性や資料的価値が疑われている一方で、何らかの史実が反映されていることも認められている。

ヤマトタケルの東征ルートは、『古事記』と『日本書紀』とでは違いがあるが、両書とも甲斐国酒折宮を経由している（第78図）。平川南氏は、二つの大きな特色があることに注目している。一つは往路が海上ルート、復路が足柄坂から酒折宮を経由して東山道に入っていること。これは、海上ルート→原（古）東海道ルートからの蝦夷征討事業に基づく伝承であること、もう一つは、「足柄坂」「科野之坂」などの坂において祭祀が行われている点である。坂の祭祀は坂の神を鎮圧する行為であり、まさに国境を定めることを目的としており、このことがヤマトタケル東征の大きな目的の一つと考えられている。これらは、文献資料から6世紀後半から7世紀前半のこととされるが、酒折宮も、「坂折」の地に祭られた神社であり、文字通り坂に関わる祭祀を執り行う役割を課せられた神社と考えられている⁽²¹⁾。

同様に、甲府市の酒折宮での東征帰路の休息地として歌を詠み交わすという酒折宮伝承も、6世紀の状況を記したものであると検証されている⁽²²⁾。『記紀』では、東征ルートに若干の違いが見られ、いずれも相模→原（古）東海道から甲斐へのルートと考えられるが、ヤマトタケルが原（古）東海道からわざわざ甲斐国の酒折宮に立ち寄って東山道に向かい、最終地の尾張国に戻るとする伝承は、酒折宮が原東海道と原東山道の結節点であり、交通の要衝として描かれたものであることを示したものであり、その役割こそが「交ひ」つまり甲斐国の原義であると理解されている⁽²³⁾。江戸時代の地誌『甲斐国志』巻三八に「本州九筋ヨリ他国に通ズル路九条アリ」、「皆ナ酒折ニ路首ヲ発起ス」とあるように、酒折の地を他国への放射状に延びる道、中世以前の古道であるいわゆる「甲斐の九筋」の起点としていることも同様の解釈である⁽²⁴⁾。

ここまで見てきたように、甲斐地域の主要な前期古墳（首長墳）は、中道古墳群に築造されている。前期には、各地の首長墳造営地がいくつかの地区を移動する場合が多いことがこれまでの研究から指摘されており、中道古墳群では小平沢古墳から甲斐天神山古墳、大丸山古墳、甲斐銚子塚古墳と、古墳群の中では米倉山から東山へと移動しているが、これらは半径600mの中にあり、距離的には指呼の位置である（第79図）。

この地に前期古墳が集中的に営まれる背景として、ヤマト王権がすでに東海地方、中部山岳地帯から、さらに関東を結ぶ物流を抑えていた⁽²⁵⁾ 甲斐の首長の役割を重視して、この地の勢力との関係を強化しようとしたことが考えられる。甲斐の首長もまた、盆地内の支配体制をより強固なものにすべく、ヤマト王権の政策に積極的に関わった。その結果として、曾根丘陵の中道地域を母胎とし、それまでの共同体の規制から抜け出して飛躍した王が東国の内陸の地に誕生し、やがて他地域をしのぐ強大な権力を作り上げた⁽²⁶⁾。3代の大型前方後円墳が相次いで営まれた背景は、まさにここにある。それが最も顕著に現れたのが中道古墳群→甲斐の前期古墳であり、歴史的意義である⁽²⁷⁾。

3. 今後に向けて

東松山市でのシンポジウムでは、野本將軍塚古墳の墳丘築造規格（企画）の系譜がメスリ山古墳にあることが注目され⁽²⁸⁾、東国各地でも畿内の古墳との相似関係が明らかにされている⁽²⁹⁾。

甲斐銚子塚古墳は、極端に狭いくびれ部と前方部の形状が特徴であるが、出現期の前方後方墳である静岡県沼

津市高尾山古墳との墳丘築造規格が時期差を超えて一致することが明らかになっている⁽³⁰⁾。S字甕や大廓式の壺など土器の交流とともに、中道古墳群と東駿河とを最短距離の交通路で結ぶという地理的關係を象徴的に表しているように思われる。

甲斐の前期前方後円墳の墳丘築造規格については、甲斐銚子塚古墳・岡銚子塚古墳を除いて墳丘細部の発掘調査が行われていないため、これまでほとんど分析・整理できていない。したがって、第76・77図に示した復元ラインは測量図からの推定であるが、現況では小平沢古墳と甲斐天神山古墳、岡銚子塚古墳ではくびれ部の狭さは顕著ではなく、大丸山古墳は微妙である。また、甲斐銚子塚古墳・岡銚子塚古墳は調査の結果から前方部正面が剣先状の形態をとっており、測量図から大丸山古墳もその可能性があるが、甲斐天神山古墳はその可能性は低いとみられる。4基の前方後円墳の築造規格が「よく似ている」⁽³¹⁾との指摘もあるが、「地域的な変容や二次的展開、古い要素が残る場合」⁽³²⁾なども考慮した上で、何をもって畿内との「距離」を測るか検討すべきである。

4. おわりに

第2章の総括として小平沢古墳から甲斐天神山古墳、大丸山古墳、甲斐銚子塚古墳と3代にわたる大型前方後円墳が営まれた中道古墳群の歴史的意義について考えてきた。

中道古墳群において、甲斐銚子塚古墳以外では上記のように甲斐天神山古墳で発掘調査が行われ、大きな成果を上げており、今後のさらなる進展が期待される。小平沢古墳については、墳形の築造時期の確定と周辺の調査、大丸山古墳については墳端の確認と墳丘長の確定、埋葬施設の構造など、課題が残されているが、将来的な発掘調査や整備により詳細が明らかになり、出現期古墳の動向も含めた中道古墳群及び甲府盆地の様相がさらに究明されることを期待したい。

註

- (1) 一之瀬敬一・金井拓人 2021「古墳時代における山梨県産水晶の利用」『研究紀要』37 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- (2) 城倉正祥編 2018『野本將軍塚古墳と東国の前期古墳』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所 研究論集 第1冊
- (3) 土生田純之 2011『古墳』吉川弘文館 など
- (4) 小林広和・里村晃一 1978「甲斐小平沢古墳の墳形と編年的位置」『信濃』第30巻第2号 信濃史学会
- (5) 平塚洋一 2015「天神山古墳―第一次・第二次発掘調査報告書―」甲府市教育委員会
- (6) 山本寿々雄 1980「小平沢古墳（前方後方）と近在の方形周溝墓を考える上に」『甲斐考古』17-1 山梨県考古学会
- (7) 水野敏典 2014「畿内から見た甲斐の前期古墳」『古代東国と畿内王権―甲斐中道古墳群の検討から―』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター・甲府市教育委員会
- (8) 宮澤公雄 2019「甲斐大丸山古墳の再検討（1）―主体部構造の再検討を通して―」『山梨考古学論集Ⅷ』山梨県考古学協会
- (9) 川西宏幸 2004「記念講演 長柄・桜山の時代」『シンポジウム 前期古墳を考える～長柄・桜山の地から～／国史跡指定記念講演会 未来に活かす史跡整備を考える 記録集』逗子市教育委員会・葉山町教育委員会
- (10) 村石眞澄 1996『塩部遺跡』山梨県教育委員会
- (11) 末木健ほか 1993『東山北遺跡』山梨県教育委員会
- (12) 河野正訓 2021「日本列島における古墳時代の鉄柄斧」『考古学雑誌』第103巻第2号 日本考古学会

- (13) 伊藤修二 1995『山梨県指定史跡 岡銚子塚古墳―保存整備報告書―』八代町教育委員会
- (14) 高橋克壽 1994「埴輪生産の展開」『考古学研究』第41巻第2号 考古学研究会
- (15) 鈴木一有 2018「愛知県・静岡県の前期末古墳」『野本將軍塚古墳と東国の前期末古墳』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所 研究論集 第1冊
- (16) 出月洋文 1982「御坂町亀甲塚古墳の墳丘実測調査」『丘陵』第9号 甲斐丘陵考古学研究会
- (17) 石神孝子 2006「笛吹市亀甲塚古墳出土管玉の再整理」『研究紀要』22 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- (18) 櫛原功一 2020「山梨県笛吹市亀甲塚古墳の研究―2017・2019年度の調査成果―」『帝京大学文化財研究所 研究報告』第19集 櫛原氏は、亀甲塚古墳の立地や交通路などから、中道地域の勢力とは別に御坂地域に、八代勢力へ繋がる有力首長層の存在についても言及している。
- (19) 西宮一民 1979『古事記』新潮日本古典集成 新潮社
西宮一民 1984『万葉集全注』巻第3 有斐閣
- (20) 末木健 2008「甲斐のヤマトタケル伝承」『研究紀要』24 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- (21) 平川南 2014『律令国郡里制の実像』上巻 吉川弘文館
- (22) 大隅清陽 2004「第4章 古墳時代の甲斐 第6節 ヤマト政権と甲斐」「第5章 律令制と甲斐国の成立 第1節 甲斐の勇者」『山梨県史』通史編1 原始・古代 山梨県
大隅清陽 2008「ヤマトタケル酒折宮伝承の再検討―遠距離交通体系の視角から―」『山梨県立博物館 調査・研究報告2 古代の交易と道 研究報告書』山梨県立博物館（上記2編はのち 2018『古代甲斐国の交通と社会』六一書房に所収）
大隅清陽 2014「文献から見た甲斐の古墳時代」『古代東国と畿内王権―甲斐中道古墳群の検討から―』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター・甲府市教育委員会
- (23) 註(21)及び平川南 2008「古代日本の交通と甲斐国」『山梨県立博物館 調査・研究報告2 古代の交易と道 研究報告書』山梨県立博物館
- (24) 埼玉県東松山市の反町遺跡の玉造工房跡からは、甲州市竹森鉾山産出の水晶が出土しているが、このようなネットワークを通じて運ばれたものであろう。
赤熊浩一ほか 2011『反町遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第380集
- (25) 若狭徹 2018「墳墓と王の職能」『世界の眼でみる古墳文化』国立歴史民俗博物館
若狭徹 2018「古墳時代<東日本>」日本考古学協会編『日本考古学・最前線』雄山閣
- (26) 小林健二 2014「甲斐銚子塚古墳と甲斐の政権」『月刊 歴史読本』2015年1月号(株)KADOKAWA
- (27) 小林健二 2018「山梨県の前期末古墳」『野本將軍塚古墳と東国の前期末古墳』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所 研究論集 第1冊
- (28) 城倉正祥 2018「野本將軍塚古墳の墳丘とその年代」『野本將軍塚古墳と東国の前期末古墳』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所 研究論集 第1冊
- (29) 鈴木一有 2011「松林山古墳と遠江の前期末古墳」『黄金の世紀』豊橋市美術館・飯田市美術館・中日新聞社
滝沢誠 2017「霞ヶ浦沿岸の前期末前方後円墳―土浦市王塚古墳の測量調査―」『先史学・考古学研究』第28号 筑波大学
若狭徹 2018「東国における古墳時代地域経営の諸段階」『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集 国立歴史民俗博物館

- (30) 北條芳隆 2013「高尾山古墳の重要性（墳丘築造企画論への貢献）」『西相模考古』第22号 西相模考古学研究会
- (31) 森和敏 1998「4基の前方後円墳の設計―山梨県における」『研究紀要』14 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- (32) 註(28)に同じ。
- (33) 小林健二 2007「甲府盆地から見たヤマト(5)―中道古墳群の歴史的意義―」『研究紀要』35 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

第79図出典

宮澤公雄 2014「甲府盆地における古墳時代中期の様相」『山梨考古学論集』Ⅶ 山梨県考古学協会

第3章

甲斐の方墳とその周辺

第1節 古墳時代の周溝墓

1. はじめに

第2章で見てきたように、甲斐の古墳時代前期は、前方後円墳の出現は駿河や信濃に比べ遅れるが、中道古墳群において甲斐天神山古墳がそれまでの中期から前期へ遡り、当該地域最古の前方後円墳として位置付けられたことで、以後大丸山古墳、甲斐銚子塚古墳と大型前方後円墳3基が相次いで営まれるという、東日本でも屈指の地域となった。そしてヤマト王権との同盟関係を背景に、内外の物流を掌握することで、強大な権力が作り上げられていった。

一方で見方を変えれば、中期前半に大型前方後円墳がなくなったことにより、前期と中期の政治的支配構造は大きく異なり、その画期はより鮮明になったことを示している。

その背景として、ヤマト王権との関係が相対的に稀薄になった、あるいはヤマト王権が大型前方後円墳の築造を規制した、さらにはヤマト王権による中道勢力の解体が進んだ、などの理由が考えられるかもしれないが、それによりこの地域が前期に比べ衰退してしまったのか。そして、空白となった中期前半の甲斐の政権はどのように推移していったのか。

この章では、甲斐の中期古墳を最も特徴づける（象徴する）方墳について考えるが、その前段として、まずそれ以外の墳墓の様相について検証しておきたい。

2. 前期から中期へ

大型前方後円墳が続いた前期から、中期になるとその様相は一変する。中道地域において古墳Ⅳ期の甲斐銚子塚古墳に続く古墳Ⅴ期古段階、4世紀後半の王墓は、隣接する円墳の丸山塚古墳（直径72m）となる（第41・43図）。この段階の前方後円墳は、甲府盆地西部の楕円形地域（現南アルプス市）の物見塚古墳⁽¹⁾のみであるが、墳丘長は48mと前期前方後円墳に比べはるかに小規模である。また同時期には、東側の甲西地域（同市）の扇状地に直径36mの円墳と考えられる大師東丹保古墳⁽²⁾があり、4世紀後半代では中道地域とともに重要な地域となっている。

ヤマト政権の規制による墳形・規模の縮小という大きな変化・画期が存在する一方で、弥生時代以来の伝統的な墓制である方形周溝墓⁽³⁾が5世紀後半代まで営まれていることも、発掘調査により明らかにされている。これらの中には、古墳Ⅰ期では30×24mの上の平遺跡⁽⁴⁾1号方形周溝墓、古墳Ⅳ期の36×31mの東山北遺跡⁽⁵⁾2号方形周溝墓（いずれも中道地域）、古墳Ⅴ期古段階の33×27mの桜井畑遺跡⁽⁶⁾3号方形周溝墓（甲府市）のように（第80図）、一辺30mを超える大型の方形周溝墓が存在することは注目される。中山誠二氏はこの背景について、前方後円墳を頂点とする階層社会の中に、弥生時代以来の共同体の墓制を組み込んだものと評価している⁽⁷⁾。さらに末木健氏は、これらが共同体からの首長権の独立の過程を示したもので、前方後円（方）墳である王墓の下で実務を執り行った首長の墓と位置づけている⁽⁸⁾。

両氏の見解はともに、新旧の墓制が古墳時代中期まで併存すること、それが一元的ではない重層的な社会構造の現れであることを述べているが、丸山塚古墳に象徴される4世紀後半～5世紀代の甲府盆地の墓制は、さらに複雑な様相を呈している。

中道地域では、続く5世紀後半、古墳Ⅶ期のかんかん塚（茶塚）古墳⁽⁹⁾は、初期の馬具や甲冑をはじめとする豊富な副葬品が見られるものの、25×20mの楕円墳と規模はさらに縮小され、王墓と呼ぶにはあまりにも小さい。さらに、この古墳の周辺では、その前後の古墳Ⅵ期～Ⅶ期に東山南遺跡・岩清水遺跡などにおいて初期（古式）須恵器を伴った直径25m前後の円形周溝墓⁽¹⁰⁾が出現・展開する。古墳Ⅵ期の東山南（B）遺跡（11）2号円形周溝墓（TK216型式期）を最古とし、以後古墳Ⅶ期の同1号円形周溝墓（ON46型式段階）、古墳Ⅷ期の岩清水遺跡⁽¹²⁾

1号円形周溝墓・朝日無名墳⁽¹³⁾（ともにTK23型式期）と5世紀後半まで続く。この間、古墳Ⅶ期のTK208型式期以降になると、豊富地域（現中央市）の高部宇山平遺跡⁽¹⁴⁾円形周溝墓、三珠地域（現市川三郷町）の上野遺跡⁽¹⁵⁾円形周溝墓、若草地域（現南アルプス市）の寺部村附第6遺跡⁽¹⁶⁾1号円形周溝墓など、盆地内の周辺地域へも拡がりを見せる。

ここで注目されるのは、TK23型式の須恵器把手付碗が出土した古墳Ⅶ期の東山南（A）遺跡⁽¹⁷⁾K-4号方形周溝墓である（第39・41図）。8基の円形周溝墓が近接する中にあって、弥生時代のものを除き唯一の方形周溝墓である（第81図）。これを最後に、中道地域では方形周溝墓は営まれなくなる。周辺に目を向けても方形周溝墓はほとんどなく、盆地東部の御坂地域（現笛吹市）の姥塚遺跡⁽¹⁸⁾4号方形周溝墓の在り方からも、5世紀後半をもって方形周溝墓は終焉を迎える。

これらと入れ替わるように、古墳Ⅵ期の5世紀中頃（第2四半期）から円形周溝墓の造営が始まる。坂本美夫氏は、かんかん塚（茶塚）古墳が規模こそ大幅に縮小したものの、竪穴式石室をもち、馬具・甲冑をはじめとする豊富な副葬品が見られるのに対し、これを取り囲むように立地している岩清水遺跡・東山南遺跡の円形周溝墓からは須恵器のみという、副葬品が貧弱であることから、円形周溝墓が古墳に対する従属的な墳墓であると考えている。そして同様の状況が、前方後円墳の王塚古墳⁽¹⁹⁾と高部宇山平遺跡円形周溝墓が近接する豊富地域（現中央市）、諏訪尻遺跡⁽²⁰⁾墳墓群のある境川地域（現笛吹市）にも見られることから、階層制の存在の中での自立した中小首長層の姿であると捉えている⁽²¹⁾。筆者は、丸山塚古墳に始まる前方後円墳から円形墳墓への交替が、ヤマト政権による政策の現れであるとするならば、これら円形周溝墓もヤマト政権のもとで生産された初期（古式）須恵器を伴う、新しい身分秩序を現した墓制であり、この地域への政策の一環であると考えている。これにより、弥生時代以来の伝統的墓制である方形周溝墓の造営が規制される⁽²²⁾。ことに前方後円墳による歴代王墓が営まれた中道地域では、小首長層が営んでいた伝統的な方形周溝墓の造営が規制され、円墳と新たな円形周溝墓を造営することにより、ヤマト政権の身分秩序の中に組み込まれながら盆地内の周辺地域へも拡大していく。その中にあって、東山南（A）遺跡K-4号方形周溝墓は、唯一旧来の伝統を残そうとした様子が窺えるが、既にこの地域での方形墳墓の時代は終わりを迎えていたのである。

その同じ頃、墳丘規模ではほぼ同じかんかん塚（茶塚）古墳と岩清水遺跡1号円形周溝墓が近接して営まれる。岩清水遺跡では他に2基の円形周溝墓とも接しているが、東山南遺跡も同様にこのような光景は、かつての上の平遺跡のような、共同体的な性格をもつ墳墓の時代を思わせる。

したがって、「円墳」と新たに導入された「円形周溝墓」が近接する両者の関係については、副葬品の差こそあれ、4世紀代のような大型前方後円墳を中心とした社会構造の中にはなく、坂本氏が言うような古墳に対する従属的な墳墓というよりも、同じヤマト政権の身分秩序の中に組み込まれた、極めて近い関係であったと考えられる。さらに、盆地内では他にも中・小首長層による前方後円墳や帆立貝式古墳が造営されており、このような様相を見る限り、4世紀後半～5世紀代の中道地域において丸山塚古墳を継いだ王墓をかんかん塚（茶塚）古墳とすることはできないだろう。

3. 小結

4世紀後半に始まる大きな墓制の転換は、ヤマト政権との関係を現していることに変わりはない。これらの背景には、畿内からの主要交通路が、東海道の途中で駿河を抜けて中道地域へ至るルート（後の中道往還）から天竜川を遡上し伊那谷を抜ける道に変わったことなど、畿内との交流が途絶えた結果など⁽²³⁾、他地域の動向とも連動していることを考慮しなければならない。そして、方形周溝墓に替わって5世紀中頃から後半にかけて甲府盆地に営まれる円形周溝墓の多くは曾根丘陵に集中しており、その中心は依然として中道古墳群であったと考えられる。

しかし、弥生時代以来の伝統を持つ方形周溝墓は、方墳として引き継がれる。

註

- (1) 松浦有一郎ほか 1983『物見塚』楡形町教育委員会ほか
田中大輔 2007『山梨県指定史跡 物見塚古墳』南アルプス市教育委員会
- (2) 保坂和博 1997『大師東丹保遺跡Ⅳ区』山梨県教育委員会ほか
- (3) 方形周溝墓の名称については、「方形低墳墓」、「低墳丘墓」「低墳丘古墳」などと呼ばれ、多くの問題が提起されているが、ここでは、弥生時代からの伝統的な墓制であることを重視し、すべて「方形周溝墓」とする。
- (4) 小林広和・里村晃一 1991『上の平遺跡（第1・2・3次調査）』山梨県教育委員会
- (5) 末木健ほか 1993『東山北遺跡』山梨県教育委員会
- (6) 中山誠二 1990『桜井畑遺跡A・C地区』山梨県教育委員会他
- (7) 中山誠二 1989「甲府盆地における方形低墳墓残存に関する一考察」『甲斐の成立と地方的展開』角川書店
- (8) 末木健 1993「古代甲斐国首長権の成立について」『山梨県史研究』創刊号 山梨県
- (9) 小林広和・里村晃一 1979『甲斐茶塚古墳』山梨県教育委員会
- (10) ここでいう円形周溝墓は、弥生時代後期の中部高地系土器を伴うようなものとは別系譜のものであり、白石太郎氏が述べているように、弥生時代のものとは歴史的性格をまったく異にするものであり（白石 1981）、概念上は「古墳」であり、「円墳」と呼ぶべきかもしれない。しかし、その淵源は方形周溝墓と同様、やはり弥生時代のどこかの円形周溝墓に求めることができよう。
白石太郎 1981「群集墳の諸問題」『歴史公論』第7巻2号 雄山閣出版
- (11) 末木健 1991『東山南（B）遺跡』山梨県教育委員会
- (12) 坂本美夫・石神孝子 2000『岩清水遺跡』山梨県教育委員会
- (13) 岡野秀典 1997「山梨県の初期須恵器」『山梨県考古学協会誌』第8号 山梨県考古学協会
- (14) 岡野秀典 1995『高部宇山平遺跡Ⅱ・浅利氏館跡・三枝氏館跡』豊富村教育委員会
- (15) 堀ノ内泉 1989『上野遺跡』三珠町教育委員会
- (16) 宮澤雄雄 2004『寺部村附第6遺跡』南アルプス市教育委員会ほか
- (17) 小林広和・里村晃一 1993『東山南（A）遺跡』山梨県教育委員会
- (18) 末木健ほか 1987『姥塚遺跡・姥塚無名墳』山梨県教育委員会ほか
- (19) 合掌形石室を埋葬施設にもつ古墳として知られている王塚古墳であるが、末木健氏が述べているように、墳形は測量図等から帆立貝式古墳ではなく、前方後円墳とするのが妥当である。
末木健 2008「王塚古墳出土衝角付冑について―岩下貞男氏による発見場所の確定―」『山梨県考古学協会誌』第18号 山梨県考古学協会
- (20) 坂本美夫・野代恵子 2000『諏訪尻遺跡』山梨県教育委員会
- (21) 坂本美夫 2004「第4章 古墳時代の甲斐 第2節 古墳の拡散」『山梨県史』通史編1 原始・古代 山梨県
- 坂本氏は、境川地域の墳墓について触れる中で、諏訪尻遺跡の「低墳丘墓」に5世紀後半の年代観を与えているが、出土土器を見る限り、4世紀後半を下るものではないと考える。
- (22) 白石太郎 2007『東国の古墳と古代史』学生社
- (23) 土生田純之 2008「終章 古墳時代の実像」『古墳時代の実像』吉川弘文館

第2節 竜塚古墳出現の背景

1. はじめに

甲斐鉾子塚古墳の第2次史跡整備事業に伴う発掘調査が行われる3年ほど前の2001年(平成13)2月から2004年(平成16)1月にかけて、笛吹市八代町では一辺約55mの甲斐地域最大の方墳、竜塚古墳の発掘調査が行われた。

この調査により、甲斐の古墳時代中期の墳墓の変遷を考える上で、竜塚古墳の存在がますます重要になったことは言うまでもなく、その後地元笛吹市では、「第1回笛吹市歴史フォーラム 山梨県最大の方墳、竜塚の謎に迫る」(笛吹市教育委員会主催)が開催された。それまで、方墳を取り上げた研究会・シンポジウムはなく、画期的なフォーラムだったといえるが、一方では非常に難しいテーマであり、東西日本各地の様相は実に様々であることが、講演・討論からもより明らかとなった。

本節では、前節で検討した古墳時代中期の墳墓の動向を踏まえ、竜塚古墳出現の背景について改めて取り上げ、筆者の考えを整理しておきたい。

2 竜塚古墳について

竜塚古墳は、笛吹市八代町字米倉地区に所在する。甲府盆地東南部の通称竜安寺山と呼ばれる丘陵上の端に近い標高365m付近に立地しており、甲府盆地を一望できる地にある。

本古墳の所在している地域には、東方の丘陵上に前方後円墳の岡鉾子塚古墳(84m)、円墳の盃塚古墳(23m)、丘陵下の扇状地上に帆立貝式の狐塚古墳(26m)といった4世紀から5世紀にかけて築造された古墳が見られる。その後も引き続き古墳が造営され、中道地域に次ぐ重要な地域であったと考えられている。

本古墳は地元では古くから知られていたが、1964年(昭和39)に刊行された『山梨県遺跡地名表』⁽¹⁾に「龍塚古墳」として記載されて以後、名前が知られるようになった。当時は円墳、下方上円墳と記されていたが、1975年(昭和50)に刊行された『八代町誌』⁽²⁾では一辺52m、高さ7.5mの方墳として測量図も掲載された。これにより、竜塚古墳は一般に方墳として定着するようになった。

しかし、甲府盆地において方墳は特異な形態であり、詳細な規模・構造、築造年代等、実態は不明であり、特に築造年代によっては、古墳時代の甲斐の支配関係に重要な影響を及ぼす古墳となる。

そこで、1996年(平成8)に山梨県史編纂事業の一環として、墳丘の航空測量調査が行われた(第82図)⁽³⁾。その結果、南北の軸が磁北より5度前後東に振れた2段築成の方墳であることが明らかになった。測量での規模は東西・南北とも52m、北に向かって低くなる斜面上に造られているため、墳丘の高さは南側で6m、北側で12mを測る。墳端から10mほど内側に段築とみられる変換点がみられる。また、古墳の裾の東側、南側、西側において、周溝と見られる周囲に比べ低くなった部分があり、規模は東側と南側では11m前後、西側では13m前後であることが推定された。墳頂部はほぼ平坦で中央に石祠が祀られていた。これまでに盗掘や副葬品などの出土の言い伝えはない。

このような中で、地元米倉地区でも関心が高まり、本古墳の保存・活用に関する要望が出されたことから、2000年(平成12)に八代町により「竜塚古墳調査保存整備委員会」が立ち上げられた。そして古墳を将来的に保存し、整備・活用を図ることを視野に入れ、周溝の規模、主体部の確認、築造時期等の基礎的データを得るための発掘調査を実施することとなった。

3 発掘調査について

(1) 調査の概要

発掘調査は、古墳の保存目的のため、遺存状況の確認を主眼に置き、先の測量図をもとに29ヵ所のトレンチを設定し、調査を行った。調査は八代町教育委員会により2001年(平成13)2月から途中農繁期による中断を含め、2004年(平成16)1月まで行われ、3月に調査報告書が刊行された⁽⁴⁾。筆者も当時、委員会における行政サイドの立場から、2003年(平成15)3月まで調査に関わることとなった。

現在の古墳の墳丘及び墳丘の北側の地目は山林、それ以外は果樹畑であり、トレンチの設定に制約を受けた部分があった。また調査をしてみると、墳丘や周溝には畑の土の入れ替え等により削られたり攪乱を受けている部分がかなりあった。

墳端は、各辺周溝の底から墳丘へと立ち上がっていく変換点で確認され、これらから計測すると一辺が55～56mの方墳となる。墳丘斜面にはテラスが1段確認され、幅は3～3.5mと想定できる。葺石はテラスから墳丘上部へ立ち上がる変換点に30～40cmの比較的大型の礫を据え、それより上部の斜面には拳大から40cm前後の礫を葺いている。築造当時はテラスより上部の墳丘斜面全体が葺石で覆われていたと考えられる。テラスより下部の斜面では、葺石は確認されなかった。

周溝は古墳の東側・西側・南側で確認された。墳端から計測した幅は東側で2.5m、他は3.8～4.8m、深さは地表面から70～260cmあったが、北側では明確な周溝は確認されなかった。

墳頂部にみられる複数の礫は、江戸時代に造られた石祠を祀るために構築された土台の石組みを構成する礫であることがわかり、これを除去しながら調査を進めたところ、墳頂地表下30cmの深さで、主体部とみられる墓壇のプランが確認された。隅丸方形で、東西9.2m、南北3.6mの規模を測る。

この墓壇について約125cmまで掘り下げたところ、途中盗掘坑とみられる掘り込みや小動物による攪乱がみられたものの、掘削した土から副葬品等は全く確認されなかったことから、さらに下にある主体部自体は未盗掘である可能性が高くなった。

そして、土層を観察しながらさらに一部掘り下げたところ、墳頂地表下約150cmで、墳丘の盛土を掘り込んでいる土層の変化が確認された。主体部の埋設土と見られ、そしてその中央付近は幅65cmほどの黒褐色土の堆積がみられた。これは棺を埋葬した痕跡である可能性が考えられるが、礫も粘土も検出されていないことから、木棺直葬ではないかと思われる。

(2) 出土遺物(第83図)

調査では、周溝内・墳丘から縄文土器・石器、弥生土器、土師器などが出土しているが、本古墳に関わるものとみられるのは土師器5点である。なお、本古墳の周辺には縄文・弥生時代の遺跡が多く、今回出土した縄文土器・弥生土器はそれらに関わるものと考えられ、逆に古墳時代の遺構・遺物は確認されていないことから、土師器は原位置を留めて出土しているものではないが、本古墳に伴うものとみて良いであろう。

1は墳頂部から出土した二重口縁壺の口縁部片で、外面に一部赤彩がみられる。2は小型丸底壺の体部で、南側の周溝から出土したものである。3～5は墳頂部から出土した高杯で、3は柱状屈折脚の部分、4は脚部下半、5は口縁部から脚部にかけてのものである。

(3) 編年的位置付け

調査は部分的な確認調査であったが、周溝・葺石・主体部の存在が確認され、古墳の基本的な構造は確認できたといえる。しかし、予想以上に出土遺物が少なく、特に周溝内からは祭祀に関わるような土器は確認されなかった。墳端・周溝のコーナーにかかる部分は果樹畑であり、トレンチを設定できず未調査であったことも要因である。とはいえ、小型丸底壺(第83図2)、柱状屈折脚高杯(同図3)は中期の特徴的な器種であり、5の高杯は

杯部が大きく開き、前期の様相を呈しているようにも見えるが、器壁がやや厚く前期のようなシャープさがなく、ことから、やはり中期のもので、S字甕が消失した後のものであり、これらは古墳Ⅵ期にみられる様相である（第39図）。

本古墳の築造年代については、橋本博文氏により、中道地域において前方後方墳の小平沢古墳が前方後円墳に先行する形態であることから、八代地域においても方形墳が先行するとして、本古墳の東側の丘陵にある前方後円墳の岡銚子塚古墳（4世紀後半）より古い年代が提示されており、この地域の最古の古墳と位置づけている⁽⁵⁾。一方坂本美夫氏は、測量調査の結果から、扁平な墳丘の形態から古墳時代後期以前に築造されたものであることを指摘した上で、立地が丘陵の縁辺に位置しておらず、むしろ内側に入った位置にある点を重視し、遡っても岡銚子塚古墳に後続する4世紀後半、さらには5世紀に入るものと考えている。さらに、赤島元年鏡が出土したことで知られる市川三郷町鳥居原狐塚古墳、南アルプス市鋳物師屋古墳がいずれも方墳で、5世紀代の築造であるとしている⁽⁶⁾。

以上の見解と調査の結果とを合わせて考慮すると、本古墳の築造年代は古墳Ⅵ期の5世紀前半となり、一辺が55～56mの方墳は、この時期東日本でも屈指の規模を誇るものである。

4. 竜塚古墳出現の背景

前節でも述べたが、中道地域の前方後円墳である甲斐銚子塚古墳から円墳である丸山塚古墳への変化・規模の縮小は、前期から中期への大きな画期となっているが、前方後円墳から円墳へと切り替わる時期にもかかわらず、八代地域では岡銚子塚古墳に続く竜塚古墳はなぜ方墳なのか。

甲斐地域では、弥生時代以来の方形周溝墓が古墳時代中期後半まであり、古墳の出現に関しては、両者の関係が注目されてきた。であるから、八代地域においても竜塚古墳の出現時期については、地域性・伝統性の強い墳形として、古くする考えがあっても当然であった。

中道地域においては、古墳時代の方形周溝墓は3世紀初頭の上の平遺跡1号方形周溝墓の出現以降、米倉山B遺跡1号方形周溝墓のように独立巨大化しようとする過程が見られ、甲斐銚子塚古墳が出現する4世紀中頃段階には東山北遺跡2号方形周溝墓のような大型の方形墳墓が営まれる。

末木健氏は、甲斐では4世紀初頭以降、大丸山古墳（前方後円墳）と、群集しない大型方形周溝墓（東山北2号墓）が隣接して築かれている点に注目し、甲斐の政治支配においては、前方後円墳（中央政権）と方形周溝墓（地域社会）という、縦系列の階層的様相を想定している⁽⁷⁾。大丸山古墳は古墳Ⅲ期新段階、東山北2号墓は古墳Ⅳ期と、両墳墓の出現時期は異なるが、新旧の墓制のあり方について踏み込んだ点では評価できる。そこには、弥生時代以来の方形周溝墓の伝統を持つ小首長層の存在を無視できないものとなっていたことが窺える。しかし、5世紀になると東山南（A）遺跡K-1号方形周溝墓以外は、方形周溝墓は見られなくなる。このことは、既に円形周溝墓の造営が始まろうとしていた中道地域においては、方形墳墓の造営が許されなかったことが考えられる。

しかし、甲府市東部地域では、桜井畑遺跡3号方形周溝墓のような大型方形墳墓が、5世紀に入っても造営され続けている。方形墳墓に対する根強い「地域的嗜好性」⁽⁸⁾は残されていたのである。そして筆者は、これら大型方形周溝墓の勢力が統合され、最も発展したのが竜塚古墳であると考えている。それは、円形墳墓へ統一されつつあった中道地域での方形墳墓の造営が認められなかったことから、結果として中道に次いで重要な地域である八代地域において実現させることとなったのである。規模こそ劣るものの、三珠地域の鳥居原狐塚古墳も同様の出現背景であろう。

筆者は、古墳出現前後の両墓制の動向を考えたとき、「首長の出自や地域同盟を表示するものとして併存し」⁽⁹⁾、方墳はやはり、弥生時代以来の伝統性の強い墓制である方形周溝墓に系譜を求めるべきと考えている。それは前期までの政治的役割が認められたことにより、方形周溝墓ではなく、方墳として竜塚古墳が築かれたのであり、

決して「突如として出現した」⁽¹⁰⁾ものではない。このような背景に立てば、鳥居原狐塚古墳や鋳物師屋古墳が方墳であることに問題はないであろう。そして甲斐においては、4世紀後半以降大型前方後円墳が築かれなくなるのは、それまでの方形周溝墓の被葬者の活躍が大きく関わっているからではないだろうか⁽¹¹⁾。

そして、竜塚古墳は二段築成の墳丘ではあるが埴輪を持たず、主体部は木棺直葬か粘土郭が推定されていることから、方形周溝墓からの飛躍を遂げた方墳であり、被葬者は橋本博文氏の言うような「王権に隷属する軍事指揮官的な人物」⁽¹²⁾ではなく、中道地域の丸山塚古墳の後を継いだ王墓と考えたい。そう考えることによって、岡銚子塚古墳をはじめとする八代地域の役割が見えてくるのではないだろうか。

宮澤公雄氏は、5世紀代の初期須恵器を伴った墳墓の増加に注目し、その様相について検討しており⁽¹³⁾、さらに先のフォーラムにおいて、墳丘規模の飛躍的格差をもつ古墳と、群集する方（円）形周溝墓（低墳丘古墳）とは、前方後円墳を頂点とした重層的な社会構造の中で分けて理解すべきことを主張しているが⁽¹⁴⁾、まずは円形の「低墳丘古墳」とされる墳墓の、甲斐における系譜についての検討が必要であろう。

このように見えてくると、5世紀前半の甲斐は、ヤマト政権による規制を受けた上位の首長層と、一方では伝統的な方形墳墓の復権を果たそうとした下位の首長層との葛藤の時代であり、5世紀後半にはさらに中・小首長層による前方後円墳や帆立貝式古墳も加わる。このような甲斐の5世紀代の墳墓の様相からは、前方後円墳を頂点とした重層的な社会構造とは到底言いえないのである。

5. おわりに

甲斐銚子塚古墳から丸山塚古墳へという、前期から中期への大きな画期を経て、5世紀前半にかけては墳墓が一時的に減少する。境川地域の諏訪尻1号墳は、これに連動した動きと考えられる。前方後円墳は大きく規模を縮小し、中道地域から他地域へ移る。このような中、前期以来の大型方形周溝墓の流れを受け、竜塚古墳や鳥居原狐塚古墳が出現する。中道地域を離れ、王墓として八代地域に出現した竜塚古墳は、甲斐の古墳時代中期を最も特徴づける墳墓と評価したい。

その後、5世紀中葉前後を境にして、前方後円墳、帆立貝式古墳、円墳、そして円形周溝墓と、様々な型式の中・小規模の墳墓が変遷する。そして現状では、6世紀初頭に前方後円墳は消滅する。

ここで取り上げた墳墓の概念や年代観については、様々な問題点が含まれているが、いずれにしても古墳時代の甲斐という地域社会の一端であることに変わりはない⁽¹⁵⁾。

註

- (1) 山梨県教育委員会 1963『山梨県遺跡地名表』
- (2) 上野晴朗 1975「町の歴史」『八代町誌』八代町
- (3) 坂本美夫 1997「竜塚古墳の測量調査」『山梨県史研究』第5号 山梨県
- (4) 伊藤修二・小坂規恵 2004『竜塚古墳』八代町教育委員会
- (5) 橋本博文 1984「甲府盆地の古墳時代における政治過程」『甲府盆地—その歴史と地域性—』雄山閣
橋本博文・萩原三雄 1985「古墳の編年を総括する—甲斐—」『季刊考古学』第10号 雄山閣
橋本博文・萩原三雄 1995「甲斐」『全国古墳編年集成』石野博信編 雄山閣
- (6) 註(3)に同じ。
- (7) 末木健 2000「山梨の古墳」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』頌寿記念会編 東京堂出版
- (8) 土生田純之 2008「西日本の方墳—竜塚古墳との対比から—」『第1回笛吹市歴史フォーラム 山梨県最大の方墳、竜塚の謎に迫る』笛吹市・笛吹市教育委員会
- (9) 都出比呂志 1992「2古墳の墳丘 1墳丘の型式」『古墳時代の研究』7古墳Ⅰ 墳丘と内部構造 雄山閣

- (10) 宮澤公雄 2003「甲斐の5世紀一丸山塚古墳と竜塚古墳」『山梨考古学ノートー田代孝氏退職記念誌ー』田代孝氏退職記念誌刊行会
- (11) 小林健二 2004「甲斐の方墳とその周辺ー山梨県八代町竜塚古墳の調査からー」『専修考古学』第10号 専修大学考古学会
- (12) 橋本博文 2008「東日本から見た竜塚古墳の歴史的位置付け」『第1回笛吹市歴史フォーラム 山梨県最大の方墳、竜塚の謎に迫る』笛吹市・笛吹市教育委員会
- (13) 宮澤公雄 2003「古墳時代中期における小規模墳の一樣相ー甲府盆地を例としてー」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集 帝京大学山梨文化財研究所
- (14) 宮澤公雄 2008「甲府盆地における古墳の出現と発展」『第1回笛吹市歴史フォーラム 山梨県最大の方墳、竜塚の謎に迫る』笛吹市・笛吹市教育委員会
- (15) 小林健二 2008「方形周溝墓と方墳ー笛吹市八代町竜塚古墳出現の背景」『山梨県考古学協会誌』第18号 山梨県考古学協会

第4章

甲斐の横穴式石室

第1節 無袖石室の様相

1. はじめに

前期から中期へ、そして後期へと、甲斐の古墳分布は甲府盆地内のほぼ全域へと展開する(第41図)。そして、前方後円墳消滅後の6世紀前半代には、甲府盆地の北と南において小規模な円墳に横穴式石室が導入される。

現在、甲斐における横穴式石室の初現は、中道地域の米倉山(甲府市下向山町)にある無名墳(県番号18070)とされている。直径20m前後の円墳であり、発掘調査は行われていないが、採集された須恵器から6世紀初頭の年代が与えられている⁽¹⁾。さらに重要なことは、この無名墳の現況や、相次いで発掘された積石塚古墳が無袖横穴式石室であること、出土遺物からその年代が6世紀前半～中葉に位置づけられることから、年代が遡る米倉山無名墳も無袖の横穴式石室をもつ可能性が指摘されていることである。

甲斐における横穴式石室については、その導入から無袖、片袖、両袖の変遷についてこれまでも研究されてきたが、特に無袖石室について見たとき、その構造や系譜に関してはほとんど取り上げられることはなかった。そんな中、2008年(平成20)1月に静岡県考古学会によるシンポジウム「東国に伝う横穴式石室—駿河東部の無袖式石室を中心に—」が開催された⁽²⁾。駿河東部における特徴的な無袖横穴式石室に焦点を当てたテーマであるが、筆者は甲斐地域の無袖石室について機会をいただいた⁽³⁾。このような状況を踏まえた上で、本節では甲斐における無袖横穴式石室の位置づけについて考えてみたい。

2. 甲斐の無袖石室

前期から中期へ、そして後期へと、甲斐の古墳分布は甲府盆地内のほぼ全域へと展開していくが、後期古墳については特に濃密に分布する地域がある。宮澤公雄氏は、甲府盆地内の主要な後期古墳が分布する地域を5箇所に分け、各地域の内容を分析している(第84図)⁽⁴⁾。その後、発掘調査された後期古墳は増加しているが、分布の状況は現在も変わるものではない。よってここでもこの地域区分に基づき、甲府盆地内の無袖横穴式石室を見ていくこととする。もちろん、石室の実測図が公表されているもののみであり、これ以外にも相当数が存在する。

(1) 甲府盆地南東部地域(第85図)

甲府市南部(旧中道町)、笛吹市境川町(旧境川村)・八代町、中央市(旧豊富村)、市川三郷町(旧三珠町)を中心とした地域である。甲府盆地南東部に連なる曽根丘陵帯には多くの古墳群があり、中でも大丸山古墳、甲斐銚子塚古墳、丸山塚古墳を中核とする中道古墳群(甲府市下曽根町)の一角をなす東山古墳群は、前章まで取り上げてきたとおり甲斐の古墳時代の幕開けとなった舞台である。

一方、東山古墳群の南西に所在する米倉山古墳群(甲府市下向山町)は、甲斐地域最古の古墳である小平沢古墳(前方後方墳)を盟主墳とする前期から後期にかけての古墳群であるが、実質的には南斜面を中心に分布する後期古墳が主体を占める。はじめに触れた無名墳のほか、3基の後期古墳が発掘調査され、地山を掘り込んだ中に横穴式石室が構築されていることが確認された。このうちの1基、地元で「くちやあ塚」と呼ばれている古墳が最も残りが良く、直径10m、高さ3.2m(現状)ほどの周溝をもつ円墳で、南に開口する無袖横穴式石室が確認されている⁽⁵⁾。全長4.15m、玄室長3.12m、奥壁幅0.67m、玄室中央幅1m、羨門幅0.82mを測り、やや胴張状を呈する長方形の石室である。羨道には敷石はなく、閉塞石が羨道部分をすべて充填するように設置されている。また、奥壁より1.8mほどに間仕切り石が設置され、奥壁側の敷石が高く造られている。掘り方内に構築されており、奥壁側で深さ1.2m、中ほどで50cmを測り、正面は斜面下側にあるため自然に消えている。裏込石は全くといっていいほど使われていない。須恵器の蓋杯(TK46—遠江IV期後葉—飛鳥Ⅲ)の出土から、本墳は古

墳Ⅻ期（7世紀後半）の築造が考えられている⁽⁶⁾。

（2）甲府盆地東部地域（第86・87図）

笛吹市一宮町・御坂町一帯を中心とした地域である。笛吹川支流の金川・京戸川扇状地を舞台に6世紀中葉以降に古墳の築造が活発になる地域で、東国屈指の大型片袖横穴式石室を誇る姥塚古墳をはじめとして、千米寺・石古墳群（68基）、国分古墳群（110基）、四ツ塚古墳群（27基）、長田古墳群（35基）などの群集墳が形成され、甲府盆地で最も後期古墳が集中する地域である。

7世紀初頭に築造が開始される国分古墳群（一宮町国分）は、ほとんどが直径20m以内の円墳と考えられ、両袖と無袖の横穴式石室が存在するとされている。これまで6基の古墳の調査が行われているが、このうち国分築地1号墳は無袖石室をもつ古墳である⁽⁷⁾。墳丘は削平されていたが、直径12m以上の円墳と考えられている。周溝はない。南に開口する石室は地山を30cmほど掘り下げた中に構築し、花崗岩の自然石を使用している。全長6.22m、玄室長は5.8m、奥壁幅2.07m、羨門幅1.2mの長台形を呈し、開口部両側壁の延長上に1.5mほど張り出して小型の石を並べ前庭部が構築されている。羨道の敷石の間には、玄室のように小石が詰められていない。鉄鏃、刀子、耳環、玉類、須恵器（TK209—遠江Ⅲ期後葉）・土師器などが出土しており、古墳Ⅺ期（7世紀初頭）の築造と考えられる。

長田古墳群（御坂町下黒駒）は、6世紀中葉から7世紀中葉にかけて造営されたと考えられている。多くの古墳が耕作により墳丘・主体部が破壊されていたが、周溝を巡らすものが多く、ほとんどが円墳と推定されている。直径は最大で約25mのものから、最小で約5m足らずのものまであり、墳丘規模の格差は大きい。

石室は花崗岩の自然石を使用し、有袖と無袖に大別される。初現期は小型の用材による無袖、大型の用材による有袖、最終的には堅穴系横穴式石室へという変遷が考えられている。8mを超える比較的大型のものから2m以下の小型のものまでが存在し、すべてが南ないし南西に開口する。

1号墳は本古墳群中最大の規模を誇り、直径25～26m、天井石も残る現存高約3mで、遺存状態も良好であった⁽⁸⁾。南西に開口する無袖石室は全長8.16m、玄室長7.1m、奥壁幅1.56m、高さは奥壁付近で1.6m、中央部で2.04mを測る。平面形はやや幅の狭い長方形で、羨道部分の側壁は玄室より小さい礫を積み上げている。現地保存されているため墓坑については不明。遺物は人骨、鉄鏃、馬具、銅釧、須恵器が出土しており、須恵器の年代（MT85—遠江Ⅲ期中葉）から古墳Ⅹ期初頭、古墳群の中では最も古い6世紀中葉頃の築造と考えられる。

F-1号墳は微高地状の地山を南北5.8m、東西2.5m、深さ1.6mほどの規模で墓坑を掘り込み、無袖の石室を構築している。天井石及び側壁最上部の石がわずかに露出する程度であったという⁽⁹⁾。全長は5.3m、玄室長4.33m、奥壁部幅1.25m、中央部で1.45mほどを測り、胴張形プランを有し、短い羨道を持つ。直刀、鉄鏃、馬具などが出土しており、古墳Ⅹ期（6世紀後半）の築造と見られている。

四ツ塚古墳群（一宮町国分）も墳丘・主体部とも大半が破壊されていたが⁽¹⁰⁾、確認された円墳は直径15～16m前後のものが最大で、12m前後のものが最も多い。河原石で積み上げた石室は南に開口しており、主体は両袖であるが、無袖のものも10基はあるとされる。平面形は胴張形ないし長方形で、短い羨道に閉塞石が積まれているものが多い。前庭部の付くものもある。墓坑の掘り込みのない平地式とみられ、裏込めには小礫を充填している。遺物は鉄鏃、玉類、須恵器、土師器など量的には少ないが、古墳Ⅹ期から古墳Ⅻ期（6世紀後半から7世紀後半）まで造営されたと見られる。以下は無袖石室を持つ主な古墳のデータである。1号墳は直径約14m、石室全長5.5m、奥壁部幅1.24m、中央部幅1.52m、開口部幅1.3m、平面胴張形。4号墳は直径約12m、石室全長6.1m、奥壁部幅1.4m、中央部幅1.77m、開口部幅1.3m、平面胴張形。10号墳は直径約13m、石室全長4.27m、奥壁部幅1.41m、中央部幅1.67m、開口部幅1m、平面やや胴張形。20号墳は石室全長2.67m、奥壁部幅1.44m、平面長方形。24号墳は直径約9m、石室全長3.1m、奥壁部幅1m、中央部幅1.05m、開口部幅1.20m、平面長

方形。25号墳は長形11m・短形9m、石室全長2.05m、奥壁部幅1.1m、中央部幅1.25m、開口部幅1.1m、平面胴張形。26号墳は直径約18m、石室全長3.5m、奥壁幅1.3m、中央部幅1.35m、開口部幅1.3m、平面長方形。27号墳は直径約7m、石室全長2m、奥壁幅0.9m、中央部幅0.95m、開口部幅1m、平面長方形。

なお、千米寺・石古墳群では両袖石室のみが知られている。

(3) 甲府盆地北東部地域 (第88・89図)

笛吹市春日居町・山梨市を中心とした地域である。一宮町・御坂町と並び北に位置する春日居町にも群集墳が広がっている。

春日居古墳群(春日居町鎮目)は山林を中心に八支群から成り、積石塚と土盛墳が混在し、6世紀前半から末にかけて形成された古墳群で、このうち平林支群にある平林2号墳は、墳丘はかなり削平されていたが、発掘調査の結果、直径約15m前後の円墳と考えられている⁽¹¹⁾。石室は前半部分の残りが悪かったが、安山岩系の割石で構築され、全長8.6m、奥壁幅1.89m、最大幅1.98mを測る南東に開口した無袖石室である。報告では平面形は「極わずかな胴張りプラン」とされているが、やや狭い長台形であろう。開口部分の側壁には小振りの石積みが見られ、この部分が羨道と考えられる。裏込めには大型の礫を置き、壁の安定を図っている。墓坑については、地山を削平して造った面の上に版築を重ねながら墳丘と石積みを同時に構築していったと考えられる。直刀、鉄鏃、馬具、鏡、耳環、玉類、須恵器(TK43一遠江Ⅲ期中葉)、土師器などが豊富に出土しており、古墳X期(6世紀後半)に築造され、8世紀前半まで追葬が行われたと見られる。

このほか、天神塚古墳、御室山古墳、梅沢1・2・3号墳などで無袖石室が構築されている。

春日居古墳群の東に位置する岩下古墳群(山梨市上岩下)は、古墳X期から古墳XI期初頭(6世紀後半から7世紀初頭)に築造が開始され、4基の古墳が現存する⁽¹²⁾。このうちの2基の古墳に無袖石室が採用されている。

牧洞寺古墳は直径約16mの円墳で、河原石を利用した石室は南東に開口した全長10.55m、奥壁部幅1.82m、開口部幅1.5mで、県内第4位の規模を持ち、平面形態はやや胴が張る長方形の無袖である。天井石は5枚遣り、開口部の天井石は欠落している。奥壁部付近の現状高1.85mあり、開口部にかけて徐々に高さを減じている。1996年(平成8)の発掘調査では、開口部を中心に須恵器片、銅製品が出土している⁽¹³⁾。墓坑については不明である。

隣接する天神塚古墳は、直径20m、高さ5mほどの円墳で、河原石による石室は南に開口し、全長9.16m、奥壁部幅2.90m、開口部幅1.8mで、平面長台形の無袖であるが、6枚遣る天井石の奥から6石目、一番前方の天井石を一段下げて玄門を構成している。最高部の高さ2.24m、開口部の高さ1.10mを測る。牧洞寺古墳とともに早くから開口しており、出土遺物は明確ではないが、須恵器片が採集されている。墓坑については不明である。

(4) 甲府盆地北縁部地域 (第90図)

甲府市東部と笛吹市石和町を中心とした地域である。

石和町には大蔵経寺山古墳群(石和町松本)が分布しており、積石塚と盛土墳から成る20基ほどの古墳群である。大蔵経寺裏支群にある積石塚の15号墳は発掘調査が行われ⁽¹⁴⁾、直径約12mの円墳で南西に開口する無袖石室は全長6.2m、玄室長4.7mを測り、奥壁部幅1.5m、中央部幅1.55m、開口部1.45mの長方形プランを呈する。墳丘・石室の用材はすべて複輝石安山岩の割石で、羨道には閉塞石が設置されている。墓坑については不明である。刀子、鉄鏃、耳環、玉類、須恵器(MT15~TK10一遠江Ⅱ期~Ⅲ期前葉)、土師器などが出土しており、古墳IX期(6世紀前半)の築造が考えられている。同じ大蔵経寺山無名墳の出土品⁽¹⁵⁾とともに、甲斐における積石塚の初現を考える上で重要な古墳である。

横根・桜井積石塚古墳群(甲府市横根町・桜井町)は、甲斐の積石塚古墳の主体を成すものであり、145基という甲斐地域最大の規模を誇る。大きくは4支群に分けられ、すべて円墳で直径10m前後の小規模な古墳で、内

部主体は無袖・有袖、竪穴系横穴式などが混在している。6世紀前半以降に築造が開始されたと考えられているが、出現年代を含め依然として未解決な問題は多い。

1983（昭和58）年に行われた横根支群39号墳の発掘調査において⁽¹⁶⁾、この古墳が直径11.2mの比較的大型の円墳であり、等高線に平行するように西南に開口した無袖石室が存在することが確認された。墳丘・石室とも複輝石安山岩を利用して構築されている。石室は全長6.2m、奥壁部幅1m、中央部0.95m、開口部0.85mで、狭長な長方形プランである。玄室と羨道の区別ははっきりせず、墓坑については不明である。鉄鏃、刀子、ガラス玉、土師器片、馬歯などが発見され、大蔵経寺山15号墳と同じ古墳IX期（6世紀前半）の築造が推定される。

（5）甲府盆地北西部地域（第91・92図）

甲府市北西部と甲斐市（旧竜王町・旧敷島町・旧双葉町）を中心とした地域である。甲府市北西部の荒川左岸に広がる扇状地には、石室規模では姥塚古墳に次ぐ大型片袖横穴式石室をもつ加牟那塚古墳、第3位で湯村山古墳群の盟主墳万寿森古墳（両袖）をはじめ、千塚・山宮地区に多くの古墳が分布している。

一方、荒川右岸の旧敷島町域では、古墳数が少なくなるが、旧竜王町から双葉町にかけて展開する赤坂台古墳群には、かつて50基ほどが存在したといわれている。現在は3つの支群からなる30基が確認されており、6世紀後半以降に形成されたものと見られるが、発掘調査により確認された6基の無袖石室をもつ古墳はいずれも7世紀代のものである。

二ツ塚1号墳（甲斐市竜地）⁽¹⁷⁾は、直径約22mの円墳で、南に開口する石室は全長9.1m、玄室長7.12m、奥壁部幅2.48m、中央部幅2.4m、羨門幅2.2mの長方形を呈する。羨道部分の側壁の用材はやや小さく、閉塞石が多量に積まれている。前庭部が長方形に張り出している。小礫地山を若干掘り窪め、安山岩の割石で構築している。裏込め石は多い。直刀、刀子、馬具、耳環、ガラス玉、須恵器（TK209—遠江Ⅲ期後葉）、土師器などが出土しており、古墳XI期初頭（7世紀初頭）の築造と考えられる。

双葉2号墳（甲斐市竜地）⁽¹⁸⁾は、直径15m前後の円墳と考えられ、原地形の小丘を整地し地山を掘り窪め、墳丘を構築している。南に開口する石室は奥壁部分が欠損している。残存の長さ6m、中央部幅1.55m、羨門幅1.46mの長方形のプランを持つ。安山岩の割石で築いている。短い羨道は閉塞石が積まれていた。裏込め石は比較的大きな礫を使用している。遺物には直刀、刀子、鉄鏃、馬具、耳環、玉類、須恵器、土師器などがあり、鉄鏃の型式から7世紀前半の築造とみられる。

中秣塚古墳（甲斐市竜王・下今井）⁽¹⁹⁾は、直径約14mの円墳で、南に開口する石室は地山を整地した上に割石で構築されており、全長6.4m、玄室長約4.3m、奥壁部幅1.4m、中央部幅1.6m、羨門付近の幅約1.5mの胴張形を呈する。羨道部分の側壁にはやや小振りの礫を、裏込めは側壁裏に5～30cmほどの礫を使用している。前庭部は緩やかなV字状を呈する。遺物は直刀、刀子、鉄鏃、耳環、ガラス玉、須恵器（TK217古～新一遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉—飛鳥Ⅰ～Ⅱ）、土師器などが出土しており、古墳XI期（7世紀前半）に築造された古墳である。

往生塚古墳は、直径15m、高さ3.3m前後の円墳で、南西に開口する長台形の無袖石室は全長7.5m、奥壁部幅1.9m、開口部で1.1mほどの規模を持つ。天井石5枚が架かり、ほぼ完全な形を残している⁽²⁰⁾。遺物は全く確認されていないが、赤坂台古墳群などの石室形態の比較から、古墳XI期に造られた古墳と考えられている。

竜王2号墳（甲斐市竜王新町）⁽²¹⁾は、直径約14mの円墳で、地山の上層の旧地表黒色土を敲きしめ整地した上に石室とともに造られている。安山岩と見られる自然石や割石により積まれた南に開口する石室は、全長5.75m、奥壁部幅1.15m、中央部幅1.40m、開口部幅1.3mの長方形を呈する。明確な羨道を持たない無袖石室である。床面には扁平な礫を用いた敷石が、前庭部には粗い敷石がそれぞれ施されている。裏込め石は側壁を中心に径10～30cmほどの礫を詰め込んでいる。遺物は直刀、刀子、鉄鏃、耳環、馬具、須恵器（TK46—遠江Ⅳ期後葉—飛鳥Ⅲ）、土師器などが出土しており、古墳XII期（7世紀後半）に築造された古墳である。

隣接する竜王3号墳⁽²²⁾は、直径10mほどの円墳で、墳丘は地山の上層の旧地表黒色土に盛り上げているが、石室は地山を若干掘り下げ構築している。南東に開口する石室は全長6.1m、玄室長4.2m、奥壁部幅1.90m、中央部幅1.70m、羨門幅1.25mの長台形を呈する。2号墳同様、自然石・割石により造られ、90cmの厚さで閉塞石が羨道いっぱいに積まれている。また、奥壁から1.2mに板状の石を用いた屍床仕切り石が設置され、奥壁側が高くなっている。裏込め石は2号墳と比べかなり多く詰め込まれていた。遺物は直刀、刀子、鉄鏃、馬具、玉類、須恵器（TK217 古～新一遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉―飛鳥Ⅰ～Ⅱ）、土師器などが出土しており、中秣塚古墳と同じ古墳Ⅺ期に築造された古墳である。

双葉無名墳（きつね塚）（甲斐市下今井）⁽²³⁾は、直径10mほどの円墳と考えられている。双葉2号墳同様、自然小丘の頂部を平坦に整地し、安山岩の割石で墳丘を構築している。ただし、地山面よりも若干上層に造られている。南に開口する石室は奥壁部分が欠損している。全長約6.5m、奥壁部及び中央部幅2.3m、閉塞部付近の幅1.8mの長台形のプランを持つ。床面には小礫を敷き詰め、双葉2号墳同様短い羨道を持つ。奥壁から1.5mに板状の石を用いた屍床仕切り石が設置されている。刀子、鉄鏃、耳環、玉類、須恵器（TK217 古～新一遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前半―飛鳥Ⅰ～Ⅱ）、土師器などが出土しており、本墳も古墳Ⅺ期の築造とされる。

一方、県東部地域（大月市・上野原市）でも無袖石室をもつ古墳が確認されているが⁽²⁴⁾、こちらについては、相模との関係が指摘されている。

3. 甲斐の無袖石室の構造・系譜について

これまで見てきた甲斐の無袖石室をもつ古墳について、いくつか検討してみたい。

まず、受容と消長についてであるが、はじめに述べた通り、甲斐における横穴式石室の導入は、積石塚である大蔵経寺山15号墳や横根・桜井39号墳の調査成果から、遅くとも6世紀前半頃とされている⁽²⁵⁾。それは奥壁部と開口部の幅の差がほとんどない無袖石室から始まっている。それまでは両袖からの簡略化によって片袖への変遷が考えられていたが⁽²⁶⁾、坂本美夫氏による出土遺物の検討から、その初源は6世紀初頭まで遡ることとなった。未調査の古墳からの採集資料をもとにした考察ではあるが、須恵器ばかりではなく、馬具・武器などの年代も含めて導き出された年代であり、新資料が確認できない現状では、最も確実な成果であろう。

一方、その終わりはというと、赤坂台古墳群での調査成果から7世紀末頃まで無袖は継続されたことになる。

次に構造について見てみたい。シンポジウムのテーマとなった東駿河では、6世紀後半から7世紀にかけては、開口部に対して玄室床面が一段下がる構造を持つ横穴式石室が盛行し、しかも袖部をもつ石室は皆無に近く、玄室と羨道の区別が見られない狭長な無袖石室で占められるという⁽²⁷⁾。

甲斐においては、無袖石室の導入からやや遅れて有袖石室が見られ、その後はいくつかの古墳群においてはなおまかには無袖と有袖が混在しながら変遷していく。

また、無袖とはいえ、側壁の積み方や敷石の状況から、玄室と羨道を区別できるものがほとんどであり、短い羨道として機能しているものが多い。

さらに、掘り方が確認されているものもあるが、開口部から明瞭な段差を持ち、墓坑内を深く掘り下げて構築するのは、極めて例外的な存在である。また、今回取り上げたように、裏込めに礫を多用することは比較的多く⁽²⁸⁾、間仕切り石を伴うものもあるが、組合式箱形石棺を伴うものは全く確認できない。

このように、東駿河の無袖石室とは導入時期、構造を見ても様相は多くの点で異なるのである。

階層性について。宮澤公雄氏が指摘しているように、6世紀中葉以降に出現する甲斐の初期の大型横穴式石室をもつ甲府市万寿森古墳や笛吹市御坂町弾誓窟古墳などの土盛墳と、これらに先行する積石塚の大蔵経寺山15号墳や横根・桜井39号墳では、墳丘規模・石室用材などに歴然とした差がある⁽²⁹⁾。

しかし、7世紀になると、新興勢力とされる盆地北東部の岩下古墳群のように比較的大型の横穴式石室にも無

袖が採用されており、無袖石室は下位に留まることなく、上位の階層にも受け入れられている傾向がある。このように無袖石室は甲府盆地東部、北東部、北縁部、北西部各地域の中で一定の位置を占めているようであるが、姥塚古墳・加牟那塚古墳のような有袖の大型横穴式石室を持つ古墳とは明らかに一線を画していたと考えられる。

以上見てきたように、甲斐の無袖石室は、特異な形態が展開する駿河との関係は極めて薄いことは明らかであり、出現時期も駿河に先行するものである。甲斐においては渡来系の遺物は見られず、渡来人の存在は明らかではないが、積石塚や馬匹生産との関連から考えると、むしろ信濃（大室古墳群）、上野、三河との関係をも考慮する必要がある、シンポジウムでは無袖石室は6世紀前半に積石塚古墳の出現に伴って各地で同時多発的に出現している可能性が明らかになった。平面形も胴張り形はわずかであるが、長方形、長台形のものが多く、各地域でも見られるように多様性をもつ。

また、時期は下るが、牧洞寺古墳・天神塚古墳に見られる大型の自然石塊を架構した無袖石室は、伊那谷の御猿堂古墳・馬背塚古墳後円部などの「a類」横穴式石室⁽³⁰⁾に類似しており、やはり信濃の影響も考えられる。しかし、甲斐の古墳文化の波及ルートは、駿河を抜けて甲府盆地南部の曾根丘陵でまず開花したことを考慮するならば、駿河からの影響を全く否定することもできないだろう。また、甲府盆地には湖西産ほかの須恵器が多く流入していることから、遠江の影響も視野に入れておく必要がある。

したがって、甲斐の無袖石室について、その系譜は周辺複数地域の影響を受け出現し、その後在地の中で発展したものであることを提示しておきたい。

4. おわりに―無袖石室の変遷―

最後に、甲斐における無袖横穴式石室の変遷について、陶邑・都城・湖西での須恵器編年⁽³¹⁾と甲斐編年との併行関係をもとに整理しておきたい（第93図）。

6世紀初頭から前半にかけて、まず甲府盆地の北と南に小規模な無袖石室が導入される。未調査の米倉山無名墳と考古博物館構内古墳の石室構造に問題が残るが、各地の状況からも、無袖石室は積石塚古墳の出現に伴って出現する可能性がある。そして6世紀後半以降、中・小規模の群集墳の中で拡がり、7世紀初めにかけて、盆地北東部の岩下古墳群のような上位層にも一時的に採用されるが、その後は再び小規模な群集墳において展開し、7世紀末まで継続する。

古墳時代後半期においても、原東山道と原東海道との結節点⁽³²⁾であり、交通の要衝として南北からのさまざまな情報を受け入れ、後期・終末期の古墳文化を形成していったのである。

註

- (1) 坂本美夫 1986「大蔵経寺山無名墳の提起する問題」『山梨考古学論集Ⅰ』 山梨県考古学協会
- (2) 静岡県考古学会 2007年度シンポジウム実行委員会 2008『東国に伝う横穴式石室―駿河東部の無袖式石室を中心に―』静岡県考古学会
- (3) 小林健二 2007「甲斐における無袖式石室」2008『東国に伝う横穴式石室―駿河東部の無袖式石室を中心に―』静岡県考古学会
- (4) 宮澤公雄 1989「後期古墳から見た甲府盆地の様相」『山梨考古学論集Ⅱ』 山梨県考古学協会
宮澤公雄 2014『長田1号墳』笛吹市教育委員会ほか
- (5) 坂本美夫 1999『米倉山B遺跡』山梨県教育委員会ほか
- (6) 東山古墳群の東端に位置する考古博物館構内古墳（6世紀前半代築造の直径15m前後の円墳）について、シンポジウムでは発掘調査報告書に基づき、「無袖」として報告した。しかし、実測図からは右片袖ではないかとの指摘を受けた。調査報告では「閉塞部付近の側壁が若干、また敷石については一部を破壊された程度

でほぼ完全に遺されていた」とされているが、榎石を境に右側壁から羨道部にかけての石の配置から、袖部が存在した可能性がある。したがって、ここでは無袖石室として扱わないこととする。

坂本美夫 1987『岩清水遺跡・考古博物館構内古墳』山梨県教育委員会

(7) 野沢昌康 1974『国分築地一号墳——宮町群集墳の調査——』山梨県教育委員会ほか

(8) 註(4) 宮澤文献(宮澤2014)に同じ。

(9) 宮澤公雄 1991「御坂町長田古墳群の調査」『帝京大学山梨文化財研究所報』第12号 帝京大学山梨文化財研究所

(10) 小林広和・里村晃一 1985『四ツ塚古墳群』山梨県教育委員会ほか

石神孝子 1999『南西田遺跡・西林遺跡・四ツ塚古墳群』山梨県教育委員会ほか

(11) 吉岡弘樹 2000『平林2号墳』山梨県教育委員会ほか

(12) 三澤達也 1997「4. 牧洞寺古墳」『山梨考古』第65号 山梨県考古学協会

(13) 山梨市 2005『山梨市史』資料編 考古・古代

(14) 田代孝他 1984『大蔵経寺山第15号墳——』石和町教育委員会ほか

(15) 註(1)に同じ。

(16) 横根・桜井積石塚古墳群整備活用計画策定委員会 1991『横根・桜井積石塚古墳群調査報告書—分布調査報告、横根支群39号墳・桜井内山支群9号墳発掘調査報告—』甲府市教育委員会ほか

(17) 末木健 1978『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—北巨摩郡双葉町地内1—』山梨県教育委員会ほか

(18) 註(17)に同じ。

(19) 皆川洋 1997『赤坂ソフトパーク内遺跡群・四ツ石遺跡・中秣塚古墳』竜王町教育委員会

(20) 石室実測図は以下の文献から引用した。

熊谷晋祐編 2019「付編 山梨県の横穴式石室集成」『横穴式石室と用石技法』山梨県考古学協会

(21) 末木健 1979『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—北巨摩郡双葉町地内2・中巨摩郡竜王町地内—』山梨県教育委員会ほか

(22) 註(21)に同じ。

(23) 末木健 1987『金の尾遺跡・無名墳(きつね塚)』山梨県教育委員会ほか

(24) 大月市賑岡町にある強瀬子の神古墳は、全長5m、奥壁部幅1.2m、中央部幅1.4mほどの、胴張りの強い無袖石室を内部主体部とする古墳である。上野原市では、大野地区で確認された西ノ原古墳において、全長3.3mほどの胴張りの無袖石室が発見されている。

(25) 註(1)に同じ。

(26) 小林広和・里村晃一 1975「山梨県の大規模横穴式石室墳」『信濃』第27巻第4号 信濃史学会

橋本博文 1984「甲府盆地の古墳時代における政治過程」『甲府盆地—その歴史と地域性』雄山閣

(27) 井鍋誉之 2003「東駿河の横穴式石室」『静岡県横穴式石室』静岡県考古学会

志村博 2003「富士市周辺の特異な石室構造」『静岡県考古学研究』No.35 静岡県考古学会

(28) 裏込めに礫を多用する石室構築技術については、駿河東部との交流が指摘されている。

菊池吉修 2000「横穴式石室の裏込めにみる地域性—駿河の事例—」『研究紀要』第11号 (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所

(29) 註(4) 宮澤文献(宮澤1989)に同じ。

(30) 白石太一郎 1988「伊那谷の横穴式石室(一)(二)」『信濃』第40巻第7・8号 信濃史学会

(31) 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

- 大阪府立近つ飛鳥博物館 2006『年代のものさし—陶邑の須恵器—』
- 鈴木敏則 2001「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』第5分冊 東海の土器研究会
- 鈴木敏則 2011「2 年代の物差しと併行関係 須恵器の編年 ②東日本」『古墳時代の考古学 古墳時代史の枠組み』同成社
- 山田邦和 2011「2 年代の物差しと併行関係 須恵器の編年 ①西日本」『古墳時代の考古学 古墳時代史の枠組み』同成社
- (32) 平川南 2008「古代日本の交通と甲斐国」『古代の交易と道 研究報告書』山梨県立博物館

第2節 積石塚と渡来人

1. 甲斐の古墳時代と積石塚

甲斐の古墳文化を語る上で、積石塚は重要な存在である。前節でも取り上げたように、甲府市の横根・桜井積石塚古墳群を中心に甲府盆地北縁から北東部にかけて数多く分布しており、東日本では早くから知られている存在である。そして、その性格をめぐっては1980年代以降、渡来人説と環境自生説が考えられており、いくつかの解釈がなされてきた。

一方で東日本各地では、長野市大室古墳群や高崎市剣崎長瀬西遺跡などで発掘調査が進み（1）、積石塚の被葬者像が明らかになっている。

このような流れを受け、本地域では2015年（平成27）に「積石塚・渡来人研究会」が設立され、甲斐の積石塚についても渡来人との関係が期待された。

しかし、現在においても渡来系の遺物は未だ確認されておらず、積石塚の出現時期、下限の時期も押さえられていない。発掘調査が進んでいない以上、現状での議論は既に尽くされているといえる。

したがって本説では、甲斐の積石塚の現状と課題を整理するに留めておきたい。

2. 甲斐の積石塚研究の現状と課題

上記のように、甲斐の積石塚については研究史を含め度々整理されているが（2）、その特徴を改めて整理すると以下に集約される。

- ① 盛土墳が平坦地を中心に分布しているのに対し、積石塚の多くは山麓部の斜面に立地している。
- ② 墳丘規模は一部を除いて小さく、主体部は竪穴式石室、箱式石棺状のもの、横穴式石室の3形態がある。
- ③ 発掘調査の成果からは、甲斐での初源は6世紀前半（第2四半期）を遡るものはない。
- ④ 渡来人説を実証する遺物はこれまで確認されておらず、後の巨摩郡域にほとんど分布していない。
- ⑤ 積石塚の立地する環境から、環境自生説も成り立つ。

これらについて、①は盛土墳と積石塚との関係（3）や近在する寺本廃寺や瓦窯跡との関係が指摘されているが（4）、④との関係を含め、その特徴は見出しがたい。②については、盛土墳には見られない小規模な竪穴式石室が特徴であるが（5）、それぞれの主体部の前後関係は不明である。

また③について、かつて存在した桜井B号墳において採集された珠文鏡と瑪瑙製勾玉から、5世紀代の積石塚の可能性が指摘されているが（6）、古墳自体が既に消滅しており、宮澤公雄氏が指摘しているとおり、当時の記録からも横穴式石室であった可能性が高く（7）、5世紀代の積石塚である可能性はないであろう。⑤については、

④について、前節で取り上げた無袖石室を持つ横根・桜井古墳群横根支群39号墳からは馬歯が出土している。甲斐では既に4世紀代には甲府市の塩部遺跡や東山北遺跡の方形周溝墓から馬歯・馬骨の出土が確認されており（8）、列島内でも古い事例として知られており、5世紀代にはかんかん塚（茶塚）古墳に初期馬具が副葬されているが（9）、それ以降5世紀代の馬遺体や埋葬、積石塚、韓式系土器や渡来系の遺構・遺物は確認されていない。したがって、中期以降の馬匹生産は東日本の中では後出的であり、後期古墳の馬具の副葬状況から見れば、主体となるのは6世紀後半以降であろう。この背景について若狭徹氏は、「積石塚が馬匹生産集団の表徴として採用されたのだとすれば、6世紀後半以後に形成される甲斐の積石塚は、積石塚を墓制として保持している馬生産集団が他所から移住してきたことに由来するとみることできる」（10）と触れているが、いずれにしても甲斐におい

ては「積石塚」＝「渡来人」とは言えないであろう。

3. 甲斐の渡来人

甲斐の周辺地域では、積石塚の調査が進み、初原の時期や渡来人との関係、その背景にあるヤマト王権の介在まで言及できるようになり(11)、5世紀後半には各地に渡来人が定住している状況が明らかになっている。しかし、甲斐においては現状でその可能性が低いと言わざるを得ない。良馬の生産地として知られるようになるのは、6世紀後半以降、馬具の副葬状況からは7世紀まで待たなければならず、そこには新たな時代に向けて渡来人が関わることになるだろう。

註

- (1) 大塚初重ほか 1992『大室古墳群』(財)長野県埋蔵文化財センターほか
大塚初重・小林三郎・石川日出志編 1993『信濃大室 積石塚古墳群の研究Ⅰ―大室谷支群・村東単位支群の調査―』東京堂出版 ほか
黒田晃ほか 2002『剣崎長瀬西遺跡Ⅰ』高崎市教育委員会
土生田純之編著 2003『剣崎長瀬西5・27・35号墳―剣崎長瀬西遺跡2―』専修大学考古学研究室
- (2) 坂本美夫 2004「第4章 古墳時代の甲斐 第3節 群集墳の出現」『山梨県史』通史編1 原始・古代 山梨県
宮澤公雄 2017「3 甲斐」土生田純之編『積石塚大全』雄山閣
- (3) 坂本美夫 1986「大蔵経寺山無名墳の提起する問題」『山梨考古学論集Ⅰ』 山梨県考古学協会
- (4) 橋本博文 1991「後期古墳と積石塚」『甲府市史』通史編 第1巻 原始・古代・中世 甲府市役所
- (5) 宮澤公雄 1999「甲斐の積石塚」『東国の積石塚古墳』山梨県考古学協会
- (6) 橋本博文 1984「甲府盆地の古墳時代における政治過程」『甲府盆地―その歴史と地域性』雄山閣
- (7) 註(2) 宮澤文献に同じ。
- (8) 村石眞澄 1996『塩部遺跡』山梨県教育委員会
末木健ほか 1993『東山北遺跡』山梨県教育委員会
- (9) 小林広和・里村晃一 1979『甲斐茶塚古墳』山梨県教育委員会
- (10) 若狭徹 2021「3 馬と渡来文化―古墳時代東国の馬生産―」佐々木虔一・川尻秋生・黒済和彦編『馬と古代社会』八木書店
- (11) 土生田純之 2011『古墳』歴史文化ライブラリー319 吉川弘文館

終章
律令社会への展望

第1節 終末期古墳の変遷

1. 後期・終末期古墳研究の動向

近年、甲斐の後期・終末期古墳の研究は 埋葬施設、副葬品両面からの再検討及び再整理が精力的に行われ⁽¹⁾、総括的な論考も発表されるなど⁽²⁾、活況を呈している。そして、これら研究の進展に伴い、土器編年をもとに墳墓の変遷を通して見るという、筆者の当初の目的とともに、これをベースに筆者自身による編年・暦年代観の見直しはもちろんのこと、その後の活発な議論を期待するという、もう一つの目的が進められている状況にあり、甲斐地域における当該期の古墳研究は、新たな段階に入りつつある⁽³⁾。

終章ではこれらの動向を踏まえ、甲斐地域の終末期古墳の変遷を今一度整理した上で、律令社会への展望について考えてみたい。

2. 甲斐の終末期古墳の変遷

まず、第1章で設定した後期・終末期の土器編年(第40図)をもとに、終末期の古墳XI期とXII期である6世紀末から7世紀代の各古墳群の概要と古墳の変遷について、近年の研究成果に基づき、群集墳が集中的に分布する甲府盆地東部地域の笛吹市(一宮・御坂)と北西部地域の甲斐市(旧敷島町・竜王町・双葉町)を中心に、再度位置付けを確認する(第41図)。

盆地東部の四ツ塚古墳群(笛吹市一宮町)のうち、四ツ塚26号墳⁽⁴⁾は、象嵌大刀の縁金具⁽⁵⁾などの副葬品から、調査報告書記載のとおり古墳XI期前半(7世紀初頭)となり、改めて四ツ塚5号墳を出土土師器から古墳X期として上げている。

千米寺・石古墳群(同、一部甲州市勝沼町)では、盟主墳的存在の千米寺大塚古墳の築造時期を、出土した須恵器から古墳XI期(7世紀中葉)と位置付けていたが⁽⁶⁾、横穴式石室の構造などから7世紀前葉に遡るとの指摘があることから⁽⁷⁾、古墳XI期前半に引き上げている。また、編年図には入れていないが、鉄鏃32点の出土がある同古墳群の釈迦堂1号墳(直径16m)⁽⁸⁾は、これに続く時期とする。なお、須恵器・土師器も多数出土しており、これについては第2節で取り上げる。

国分古墳群(同)の築地4号墳は、3号墳(直径18m)に近接し、ともに両袖形の横穴式石室を持ち⁽⁹⁾、金銅製毛彫馬具が出土しているとされるが、両墳とも出土した須恵器から1号墳とそれほど時期を置かない古墳XI期前半(7世紀第1四半期)としている。

第4章で取り上げた盆地北西部の赤坂台古墳群(甲斐市:旧竜王町・双葉町)では、当初は出土須恵器から古墳XI期後半(7世紀第2四半期)としていた二ツ塚1号墳を、既に指摘があった土師器の年代から、古墳XI期初頭(7世紀初頭)に改めている。また、甲斐地域最後の古墳と位置付けていた双葉2号墳であるが、出土した素環鏡板付轡⁽¹⁰⁾等から築造年代を古墳XII期後半(7世紀末)から古墳XI期前半(7世紀第1四半期)に引き上げている。

この他、赤坂台古墳群の東側、荒川右岸の大庭遺跡(甲斐市:旧敷島町)で2015年(平成27)に行われた発掘調査で新たに発見された古墳を「大庭古墳」としたが、「大庭古墳」は既に存在していることから、「大庭無名墳」⁽¹¹⁾としている。

一方では、首肯しがたい見解もある。

同じく第4章で取り上げた盆地北東部地域の春日居古墳群(笛吹市)にある平林2号墳からは、豊富な副葬品が発掘されており、石室内から武器類(直刀・鞘尻、把頭・責金具・足金具・鉄鏃)、武具類(甲冑・小札類)、馬具類(轡・兵庫鎖・辻金具・鞍・鉸具)、装身具類(勾玉・管玉・丸玉・切子玉・トンボ玉・霽玉・ガラス小玉、

耳環・帯金具・飾金具)、小型仿製鏡2面が、主に石室外から土師器、湖西産とみられる多量の須恵器が出土している。近年では、未報告の鉄鏃・小札などの資料化⁽¹²⁾や、馬具類の中で「その他」とされている用途不明金具や同様の技法で製作された未報告の金銅製品について、金銅製冠立飾と関連する飾金具である可能性が指摘される⁽¹³⁾など再整理が行われており、改めて注目される古墳となっている。

これらの副葬品のうち、馬具類は特に顕著な存在であり、既に春日居古墳群における馬具の豊富さは以前から指摘されているところである。その歴史的背景について坂本美夫氏は、672年に起こった壬申の乱について『日本書紀』に登場する「甲斐の勇者」との関わりから、春日居古墳群、赤坂台古墳群、八代地域の古墳群での馬具の出土量の多さは、甲斐地域での豊富な騎馬・騎兵の存在を裏付けるものであり、東山道・東海道諸地域の中でも、多数の騎馬・騎兵が徴集された地域となった結果、「甲斐の勇者」などが存在したと考察している⁽¹⁴⁾。また、平林2号墳出土から出土した鉄鏃の分析からも、弓矢に長じた騎馬兵である「甲斐の勇者」との関連について考察が行われている⁽¹⁵⁾。

平林2号墳の出土品については、確かに7世紀前半頃に位置付けられる武器や馬具が顕著な存在として目を引く。これに金銅製冠立飾などが加われれば、さらに存在感は高まる。しかし、出土した須恵器にはTK43型式～209型式(≒遠江Ⅲ期中葉～後葉)をはじめ、100年を越える時間幅の製品が出土しており、調査報告書掲載以外にも相当量の須恵器が出土していることから、今後再整理する必要がある。さらに、丁字頭のヒスイ製勾玉は前期古墳の副葬品の可能性があり、何処かにあつて消滅した前期古墳の副葬品を再葬したことも考慮する必要がある。珠文鏡・重圈文鏡(櫛目文鏡)についても検討の余地がある。

それにもかかわらず、武器や馬具など、特徴的な副葬品をもって、多くを一括の副葬品として、平林2号墳を7世紀前半の「築造」とすることには問題があり、須恵器の年代からは、古墳Ⅹ期後半(6世紀第4四半期)であり、下つても古墳Ⅺ期初頭(7世紀初頭)であろう。そして、坂本氏が推測するように、春日居古墳群での武器や馬具の副葬は古墳の築造・初葬時ではなく、7世紀になってから一斉に始まる可能性がある。壬申の乱における「甲斐の勇者」の徴発については文献史学からも検証されており、この内乱が「甲斐の住民をも巻き込むものであった可能性は依然として大きい」⁽¹⁶⁾が、7世紀前半のある段階に「有数の軍事指導者」が埋葬された時期があったとしても、壬申の乱と時期も異なることを承知しながら「リアル甲斐の勇者」⁽¹⁷⁾などとするのは過大評価であろう。春日居古墳群の「盟主的な人物の墳墓」との想定についても、古墳の規模から見れば、詳細は不明であるが古墳Ⅹ期の天神塚古墳(35m)の可能性もあり、平林2号墳が盟主墳とはいいたい。

最終段階の毛彫馬具が副葬された赤坂台古墳群の竜王2号墳(甲斐市)についても同様であり、7世紀末段階の副葬が、後の巨麻郡設置に関わる人物(有力氏族)に伴うものであり、甲斐地域での最終段階の副葬品と考えられたとしても、出土した土師器の年代から見れば築造はこれまでどおり7世紀中葉頃であろう。

7世紀後半以降は、四ツ塚古墳群に見られるように、規模が縮小した横穴式石室へと推移していくと見られるが、千米寺・石古墳群や国分古墳群をはじめ、甲斐地域の当該期の古墳には未調査で実態が不明な古墳がまだまだ多いことは周知のとおりである。今後も様々な視点から検討していく必要があることは言うまでもない。

3. 甲斐の古墳時代終末期と終末期古墳

甲斐では、6世紀後半の古墳Ⅹ期から7世紀前半の古墳Ⅺ期にかけて仏教文化を受け入れ、甲府盆地北東部地域(春日居・山梨)と北縁部地域(石和・甲府)では、上述のとおり7世紀中葉の古墳Ⅺ期までに古墳の築造はほぼ終える。そして7世紀後半の古墳Ⅻ期に、甲斐最古の寺院である寺本廃寺が春日居に創建される。その造営に大きく関わったのが銅鏡を副葬する春日居古墳群の氏族であり、これまでの研究成果から寺本廃寺はその氏寺とする見解が現在では一般的となっている。その背景について坂本氏は、春日居古墳群における馬具の出土が盆地内の他の古墳群よりも多いことを挙げ、そこに騎馬・騎兵の存在を背景とした軍事氏族を想定し、この地域が後

の山梨郡の設定にも大きな影響を持つ地域となったと論じている⁽¹⁸⁾。寺本廃寺と春日居古墳群、さらには周辺古墳群や瓦を供給した甲府市川田瓦窯跡の立地も視野に入れたもので、支持すべきものである⁽¹⁹⁾。

一方、盆地北西部においては、天狗沢瓦の供給先である寺院は依然として発見されていないが、瓦の型式などからは寺本廃寺より先行して創建された寺院の存在が考えられている⁽²⁰⁾。そして近年、調査成果が著しい甲斐市の旧敷島地域では、松ノ尾遺跡が注目されている。これまで15次にわたる調査で発見された竪穴建物は135軒あり、そのうち6世紀末から7世紀初頭にかけてのものが30軒を越え最も多い⁽²¹⁾。敷島の周辺では、東側の荒川両岸には6世紀代の古墳が築かれ、西側の台地上には7世紀代の赤坂台古墳群がある。松ノ尾遺跡では、天狗沢瓦窯跡で焼かれたと見られる瓦片の他、円面硯、螺髪、平安時代の小金銅仏などが出土しており⁽²²⁾、今後の調査でこの一帯に巨麻郡の氏族が造営した寺院が発見されるのは、もはや時間の問題であろう。

7世紀初頭、関東各地では前方後円墳の築造が停止し、以後地域を限って大型の方(円)墳が営まれる。その分布は律令制の国に対応するのではなく、国造制の国に対応するものであり、中央集権的な政治・国家体制を目指す畿内政権(推古朝)による国造制の成立を示すものと理解されている⁽²³⁾。

関東各地より既に1世紀早く前方後円墳が築造されなくなった甲斐では、6世紀中葉から後半にかけて大型横穴式石室を備えた直径40m前後の円墳が相次いで築造される。7世紀に入ると墳丘規模は縮小するが、盆地内の新たな勢力が群集墳の造営を開始する。盆地東部地域の一宮では国分古墳群と千米寺・石古墳群が7世紀後半まで、盆地北西部地域の竜王・双葉では赤坂台古墳群において7世紀末まで造墓を続ける。そこに終末期の大型方(円)墳こそ存在しないが、それもまた畿内政権による地方支配の一端であり、地域の再編であったと考えたい⁽²⁴⁾。

註

- (1) 石神孝子 2016「山梨県笛吹市平林2号墳出土資料について」『研究紀要』32 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 一之瀬敬一 2018「山梨県域における横穴式石室の様相」『山梨県考古学協会誌』第26号 山梨県考古学協会
- 北澤宏明 2019「山梨県笛吹市平林2号墳出土資料の再検討—金銅製冠飾の可能性—」『研究紀要』35 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 北澤宏明 2019「山梨県における古墳時代の矢鏃分析の覚書—甲府市考古博物館構内古墳出土品を事例として—」『山梨県考古学論集Ⅶ』山梨県考古学協会
- 北澤宏明 2020「山梨県笛吹市平林2号墳出土金銅製品の装飾意匠」『研究紀要』36 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 熊谷晋祐 2016「笛吹市楽音寺古墳群の新資料から」『山梨県考古学協会誌』第24号 山梨県考古学協会
- 熊谷晋祐 2018「山梨県の横穴式石室における前庭の構造について」『研究紀要』34 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 熊谷晋祐 2018「甲斐の巨大横穴式石室—左片袖形石室に関する試論—」『山梨県考古学協会誌』第26号 山梨県考古学協会
- 熊谷晋祐 2019「立面形から探る山梨県の横穴式石室」『横穴式石室と用石技法 資料集』山梨県考古学協会
- 熊谷晋祐 2019「付編 山梨県の横穴式石室集成」『横穴式石室と用石技法 資料集』山梨県考古学協会
- 宮澤公雄 2017「笛吹市竹居1号墳出土象嵌刀装具の再検討」『山梨県考古学協会誌』第25号 山梨県考古学協会

- (2) 宮澤公雄 2017「山梨県における横穴式石室の受容」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第16集 帝京大学山梨文化財研究所
宮澤公雄 2017「3 甲斐」土生田純之編『積石塚大全』雄山閣
- (3) 研究史については、熊谷晋祐氏によりまとめられている。
熊谷晋祐 2019「付編 山梨県の横穴式石室集成」『横穴式石室と用石技法 資料集』山梨県考古学協会
熊谷晋祐 2019「甲斐の古墳時代研究最前線」『甲斐』第149号 山梨郷土研究会
- (4) 石神孝子 1999『南西田遺跡・西林遺跡・四ツ塚古墳群』山梨県教育委員会ほか
- (5) 註(1) 宮澤文献に同じ。
- (6) 山梨大学考古学研究会 1982「大塚古墳調査報告」『丘陵』第9号 甲斐丘陵考古学研究会
- (7) 註(1) 熊谷文献(熊谷 2018)に同じ。
- (8) 小野正文他 1986『釈迦堂Ⅰ』山梨県教育委員会他
- (9) 猪股喜彦 1998「国分古墳群」『山梨県史』資料編1 原始・古代1 考古(遺跡) 山梨県
- (10) 坂本美夫 2000「鉸具立開素環鏡板付轡の初現期の様相」『考古学論究』第7号 立正大学考古学会
坂本美夫 2007「春日居町鎮目某古墳出土の素環鏡板付轡」『研究紀要』23 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- (11) 長谷川哲也 2020「敷島大塚古墳周辺・赤坂台古墳群～古墳時代と飛鳥時代のはざま～」『シンポジウム 輝け!やまなし古墳めぐりグランプリ』資料集 山梨県埋蔵文化財センター
- (12) 註(1) 石神文献に同じ。
- (13) 註(1) 北澤文献に同じ。
- (14) 註(10) 坂本文献(坂本 2007)に同じ。
- (15) 岡安光彦 2013「壬申の乱における兵器と兵士」『土曜考古』第35号 土曜考古学会
藤村翔 2018「第4節 東平1号墳出土鉄鍔の評価と意義」『伝法 東平第1号墳』富士市教育委員会
- (16) 大隅清陽 2004「第5章 律令制と甲斐国の成立 第1節 甲斐の勇者」『山梨県史』通史編1 原始・古代 山梨県(のち、2018『古代甲斐国の交通と社会』六一書房 に所収)
- (17) 藤村翔 2020『東海の軍を發すー伝法 東平1号墳とヒミツの武器』富士山かぐや姫ミュージアム
- (18) 註(10) 坂本文献(坂本 2007)及び
坂本美夫 2004「第4章 古墳時代の甲斐 第3節 群集墳の出現」『山梨県史』通史編1 原始・古代 山梨県
- (19) ただし筆者は、坂本氏の論を全面的に首肯している訳ではない。氏は春日居古墳群被葬者の背景に「豊富な騎馬・騎兵の存在」を想定しているが、時期的に多量の副葬は少なくなる中で、馬具の副葬の多さは特筆すべきものであるが、現状での馬具をもつてのみ春日居古墳群の被葬者が「軍事の中心的役割を担っていた」とする意見には賛同できない。
- (20) 末木健 1986「甲斐巨麻郡の成立と展開」『研究紀要』3 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
末木健 1990「甲斐仏教文化の成立」『研究紀要』5 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- (21) 大寫正之 2016「松尾社領甲斐国志麻荘域における古代集落の実態」『山梨県考古学協会誌』第24号 山梨県考古学協会
- (22) 大寫正之 2002「巨麻郡における古代寺院造営の可能性ー甲府盆地北西部を注視してー」『山梨県考古学協会誌』第13号 山梨県考古学協会
- (23) 白石太一郎 2005「前方後円墳の終焉」『古代を考える 終末期古墳と古代国家』吉川文館

- 白石太一郎 2013 「考古学からみた推古朝」『考古学からみた推古朝』大阪府立近つ飛鳥博物館
- (24) 小林健二 2017 「甲斐の後期・終末期古墳」『山梨県考古学協会誌』第25号 山梨県考古学協会

第2節 古墳の終焉

1. 古墳出土の律令制成立期の土器

壬申の乱の後、天武朝は政治改革を推し進め、7世紀末には広域行政区画（七道制）の成立とともに、律令制の「甲斐国」が東海道の編入され、国境が確定するとされている⁽¹⁾。

全国各地の後期・終末期古墳には、様々な副葬品が納められているが、土器については須恵器が多く、土師器は少ない。これまで見てきた甲斐地域の後期・終末期古墳からも多くの須恵器・土師器が出土しているが、築造時（初葬）のものとともに、その後の追葬、あるいは追善供養の段階に使用された、時期の異なるものも多く確認することができる。甲斐地域では、横穴式石室内へ埋納される例はほとんどなく、前庭部を中心に閉塞部、墳丘上、墳丘裾から破砕された状態で出土する例が多いことが確認されており、四ツ塚古墳群の調査例などからは、集団（氏族）内での葬送儀礼に一定の共通性があったことが指摘されている⁽²⁾。しかし、築造時期より新しい型式の須恵器の出土をもって、多くは「追葬が行われた」と考えられているが、それが古墳築造後のいつの段階のものかは押さえておく必要があり、それが古墳時代の終焉を地域においてどう捉えるか⁽³⁾、重要な意味を持っていると思われる。

ここでは、甲斐地域の古墳において追葬（初葬からさほど時を経ていない連続的な埋葬を指し、連続的な埋葬が途切れてから100年以上を経て埋葬した「再利用」とは区別）⁽⁴⁾や追善供養の際に供された土器のうち、古墳Ⅻ期後半（7世紀末～8世紀初頭、一部8世紀前半頃を含む）と考えられる甕類を除く須恵器と土師器を抽出した（第94～96図）。なお、出土状況については、宮澤公雄氏が詳細に検討しているので、ここでは触れないが、地域によって出土状況は異なり、横穴式石室内からの出土や杯の点数、甕の有無など、いくつかのパターンがある地域もある⁽⁵⁾。

千米寺・石古墳群の釈迦堂1号墳では、須恵器杯蓋（1～10）・有台杯（高台杯：12～16）・長頸壺（19・20）、有台甕（17・18）、土師器杯（21～23）・有台杯（24）が報告されている。土師器はもう少し時期が下る可能性がある。

春日居古墳群の平林2号墳からは、須恵器杯蓋（25～29）・有台杯（30・32）、無台杯（31）長頸壺（33・34・40）、甕（35・36）、平瓶（39）、大型平瓶（37）、把手付平瓶（38）が確認できる。

四ツ塚古墳群では、1～7・10～14・25号墳からの出土が確認でき、須恵器杯蓋（42～45・55・56・59・79・82～87・96・97・120）、有台杯（40～50・57・58・60～68・88・98・99・109・116・121）、長頸壺（41・53・70～72・80・90～92・103・111・112・114・115・117～119）、フラスコ瓶（78）、広口壺（81）、短頸壺（113・123）、甕・有台甕（51・52・73～77・89・93・100～102）、高盤（69）、土師器盤状杯（54・59・94・104～107・124～128）、有台杯（108）、高盤（95）などが出土している。

国分古墳群では国分築地3・4号墳において須恵器杯蓋（129～132）、有台杯（133）、脚付長頸壺（134）が、赤坂台古墳群では中秣塚古墳で須恵器杯蓋（135・136）、竜王2号墳で須恵器杯蓋（137～139）、有台杯（140）、長頸壺（141・142）が確認できる。

この他、古墳Ⅺ期（7世紀前半）頃の築造と見られる水口1号古墳・一の沢3号墳（笛吹市境川町）においても、須恵器有台杯（154）、長頸壺（145～148・156・157）、広口壺（155）、甕（143・144）、平瓶（158）、土師器杯蓋（150）、盤状杯（151～153）などが甕とともに出土しており、同様の器種が確認できる。

これら須恵器の多くは湖西産と見られ、甕類を除いて最も多い器種は返りを持たない摘み蓋、有台杯であり、長頸壺、甕もこれらに次いで多い。

7世紀初頭、畿内政権が中国大陸、朝鮮半島との交渉を進め、先進文化も取り入れる中で、宮都では大陸式の

食事作法の導入とともに新しい土器食器が出現する。金属器（佐波里鈎）を模して作られた「金属器指向型」の土器を基調とし、多様な器種分化と法量の規格性、土師器・須恵器の互換性などの要素を取り込み、7世紀後半に「台付・平底」などを特徴とした「律令的土器様式」⁽⁶⁾が成立する。これに対し、7世紀前半は古墳時代以来の返りのある須恵器杯（杯H）など伝統的器種と、金属製食器を模倣した新器種である土師器杯（杯C）、椀形の須恵器杯（杯G）が併存する「飛鳥時代前半期土器様式」⁽⁷⁾が提唱されるなど、再検討が行われている。

これら陶邑・都城・湖西での須恵器編年を参考に、甲斐地域での須恵器各器種の消長について、おおよその併行関係とともに示した（第97図）⁽⁸⁾。この中で、畿内や湖西でTK217型式新段階≡飛鳥Ⅱ≡遠江Ⅳ期前葉に出現するセットになる椀形杯（杯G）とセットになる返りのある蓋は、甲斐の土器編年ではこの段階（古墳Ⅺ期末頃）に確認できず、次の古墳Ⅻ期（TK46型式≡飛鳥Ⅲ≡遠江Ⅳ期後葉）であり、返りのある蓋杯とセットになる有台杯（杯B）についても現状では出土例がなく、返りのない蓋とのセットで古墳Ⅻ期後半（TK48型式≡飛鳥Ⅳ≡遠江Ⅳ期末葉）に波及すると考えられる。

したがって、甲斐地域において上記の古墳から出土している返りのない須恵器の蓋や有台杯、土師器の（外面をへら磨きし、内面を暗文で飾る）皿や盤状杯は、台付・平底食器主体の食器構成による「律令的土器様式」の一部が律令支配の整備拡大に伴い、古墳Ⅻ期末（7世紀末～8世紀初頭）に甲斐地域へ波及したことが改めて確認でき、これに長頸壺や甕、甕などがセットになり儀礼や追善供養が実施されたと考えられる。

2. 甲斐における古墳の終焉

畿内では、7世紀後半になると横穴式石室（及び古墳）の小型化が急速に進む。その背景には、「氏族社会から律令社会への移行という社会体制の変化」とともに、「仏教の普及により古墳の役割の一部が寺院に移り、それまで古墳が持っていた社会的役割の喪失につながったこと」があると考えられている⁽⁹⁾。そして、「壬申の乱による天武政権の成立をもってその役割を終え」、「首長連合の政治秩序との関わりで営まれた古墳は、それに替わる中央集権的古代国家の完成とともに消えていった。」⁽¹⁰⁾。

信濃の松本平では、祖先に対する追善供養のため、律令期の土器⁽¹¹⁾が横穴式石室に納められ、そこには古墳時代の土器のみが出土するパターン、律令期土器ばかりが出土するパターン、古墳時代・律令期土器の双方が出土するパターンに分類されるとし、さらに甕の有無や参加人数、官衙との関わり、氏族から祖先への祭祀の対象の変化などが検証されている⁽¹²⁾。

甲府盆地においては、調査事例が未だ十分とは言えず、松本平のようなパターンの想定は難しいが、四ツ塚古墳群での出土状況からは、各古墳で出土しているのはここで言う律令制成立期の土器が中心である。春日居古墳群、赤坂台古墳群では不明な部分が多いが、古墳時代の須恵器と律令制成立期の土器が併存しているとも考えられる。甲府盆地では前庭部を中心とした出土であり、松本平での状況とは異なるが、後の八代郡、山梨郡、巨摩郡に分布する後期・終末期群集墳から律令制成立期の土器が出土する背景には、古墳が持っていた社会的役割を終わらせ、あるいは別のかたちで継承するため、国衙や郡衙の主導により盆地内の各古墳群で執り行われた祭祀があったことが想定される。それが古墳Ⅻ期後半（7世紀末～8世紀初頭）前後に行われた、氏族社会から律令社会への移行であり、甲斐地域における古墳の終焉であったと考えられる⁽¹³⁾。

3. おわりに

甲斐の終末期古墳について、近年の研究動向を踏まえた古墳の変遷の再確認とともに、前稿で検討できなかった律令社会への移行とその背景について検討を行った。あくまでも現時点での筆者の想定に過ぎないものであるが、その後の古代寺院の実態や渡来人の実像、郡の成立、国衙など、律令社会の変遷については、おおむね先学諸氏の研究成果のとおりであろう。一方では繰り返しになるが、古墳については実態が不明なものが依然として多

くあり、新たな発見により評価が再び変わる可能性もある。今後も引き続き議論を重ねていくことで、さらに精緻な地域社会像に迫ることを期待したい。

註

- (1) 大隅清陽 2004「第5章 律令制と甲斐国の成立 第1節 甲斐の勇者」『山梨県史』通史編1 原始・古代山梨県（のち、2018『古代甲斐国の交通と社会』六一書房 に所収）
- (2) 宮澤公雄 1999「甲斐における出現期の須恵器とその周辺」『山梨考古学論集』IV 山梨県考古学協会及び宮澤公雄 2017「山梨県における横穴式石室の受容」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第16集 帝京大学山梨文化財研究所
- (3) 出月洋文 2016「古墳研究にかかるもう一つの視点ー甲府盆地周辺の後期古墳調査事例をめぐってー」『研究紀要』32 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- (4) 土生田純之 2011『古墳』歴史文化ライブラリー319 吉川弘文館
- (5) 青木敬 2020「横穴式石室における土器祭祀の変容と特質ー松本平を中心にー」土生田純之編『横穴式石室の研究』同成社
- (6) 西弘海 1982「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会
- (7) 小田裕樹 2016「古代宮都とその周辺の土器様相ー『律令的土器様式』の再検討ー」『官衙・集落と土器2ー宮都・官衙・集落と土器ー』独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所
- (8) 大阪府立近つ飛鳥博物館 2006『年代のものさしー陶器の須恵器ー』
鈴木敏則 2001「湖西古窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』第5分冊 東海土器研究会
鈴木敏則 2011「2 年代の物差しと併行関係 須恵器の編年 ②東日本」『古墳時代の考古学 古墳時代史の枠組み』同成社
山田邦和 2011「2 年代の物差しと併行関係 須恵器の編年 ①西日本」『古墳時代の考古学 古墳時代史の枠組み』同成社
- (9) 土生田純之 2103「横穴式石室からみた古墳の終焉」小林三郎・佐々木憲一編『考古学リーダー22 古墳から寺院へー関東の7世紀を考えるー』六一書房
- (10) 白石太一郎 2005「10 古墳の終末と古代国家」『古代を考える 終末期古墳と古代国家』吉川弘文館
- (11) 青木敬氏は、「律令的土器様式」とは違う、藤原宮以降の時期と考えられる土器を「律令期土器」と呼んでいる（青木 2020）。
- (12) 註（6）に同じ。
- (13) 小林健二 2020「甲斐の終末期古墳ー律令社会への展望ー」『山梨県考古学協会誌』第27号 山梨県考古学協会